

青森県三戸郡三戸町

# 杉沢遺跡発掘調査報告書

—馬淵川流域における亀ヶ岡文化の遺跡—



頑張れ！亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告6)

青森県三戸郡三戸町

# 杉沢遺跡発掘調査報告書

—馬淵川流域における亀ヶ岡文化の遺跡—



頑張れ！亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

(弘前大学人文学部 日本考古学研究室研究報告6)



## 正誤表

### 青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書

—馬淵川流域における亀ヶ岡文化の遺跡—

頁	行	誤	正
132	14行目	アスファル	アスファルト
139	19行目	～大洞A' 式が	～大洞A' 式を
142	右上	中里・福田・工藤1997より	福田・工藤1997より
143	19行目	日本考学協会	日本考古学協会
200	16行目	大字貝森	大字貝守

## はじめに

弘前大学人文学部に藤沼が赴任したのが平成10年度で、今年3月で定年退職となる。人文学部に考古学ゼミナールが開講したのは平成12年度であるから、ゼミナールで学んだ学生は43名に達する。ゼミナールでは研究課題として専ら亀ヶ岡文化を取り上げてきた。

この間、発掘調査を実施したのは青森県外ヶ浜町今津遺跡と青森県三戸町杉沢遺跡の2件である。今津遺跡の発掘報告書は平成16年度に刊行した。

本書は、平成18年度に亀ヶ岡文化研究センター（調査担当は日本考古学研究室）が発掘調査した青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡の発掘調査報告書である。国民共有の財産である埋蔵文化財を発掘調査したならば、その内容を明らかにした報告書を公表するのは研究者の責務であると考えているので、定年を前にしてこの報告書を刊行できたことはきわめて嬉しい。これも、大学当局や三戸町教育委員会・地主の杉沢由見氏・写真家の小川忠博氏ご夫妻などのご協力とご指導のおかげであるが、最大の功労者は、発掘に参加し、出土品を整理してくれた考古学ゼミナールを中心とした学生たちである。関根達人先生の指導のもとによく頑張ってくれた。厚く御礼を述べたい。なお、発掘調査や報告書作成にあたって、ご協力・ご指導をいただいた機関や個人のお名前を下に記し、感謝の意を表したい。

本書は、日本考古学研究室研究報告としては第6冊目である。研究報告はすべて亀ヶ岡文化研究の基礎資料として役立つように工夫してきたつもりである。本書も亀ヶ岡文化研究そして縄文文化研究の資料として活用していただくことを願っている。

なお、杉沢遺跡の発掘調査や報告書刊行には、平成18年度・19年度の学部長裁量経費・学長指定重点研究費・地域社会研究科研究費などを使用した。

平成20年3月

弘前大学人文学部日本考古学研究室

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

弘前大学大学院地域社会研究科

藤沼 邦彦

### 【ご指導・ご協力をいただいた機関名・個人名（敬称略・順不同）】

青森県教育委員会文化財保護課（斎藤 正・小山浩平・永嶋 豊）、青森県立郷土館（福田友之・相馬信吉・斎藤 岳）、青森県埋蔵文化財調査センター（工藤 大・佐々木雅裕・中島友文・坂本真弓）、三戸町教育委員会（野田尚志・相馬英生）、三戸町役場（山口航生）、階上町教育委員会（森 淳）、田子町山川旅館（山川 栄）、杉沢由見（土地所有者）、泉 拓良（京都大学）、宮坂 朋（弘前大学）、小川忠博（東京、写真家）、境沢宏美・薦川貴祥・市川健夫・山田祐子（以上、卒業生）、小国隆男（弘前大学地域社会研究科学生）、柴田知二（二戸市教育委員会）、藤原弘明（五所川原市役所）、藤田直行（軽米町教育委員会）、山崎 武（十和田市役所）、大久保 学（十和田市教育委員会）、長尾正義（三沢市教育委員会）、山口義伸（青森県立浪岡高等学校）。

# 凡 例

- 1. 本報告書は、平成18年度に亀ヶ岡文化研究センター（調査担当、日本考古学研究室）が発掘調査した青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査や報告書作成には、藤沼邦彦（日本考古学研究室）・関根達人（文化財論研究室）・日本考古学ゼミナールに集う学生などが参加した。大学院人文社会科学研究科の修了生である蔦川貴祥氏は発掘調査に自費で参加し、後輩の指導にあたってくれた。また、三戸町教育委員会ははじめ多くの機関・個人から研究面で多大な援助があった。現地では地主の杉沢由見氏から多大な便宜を与えられた。卒業生や地域社会研究科学生などからの差し入れもあった。

発掘調査や遺物の整理・実測図作成に参加した学生は下記の通りである。

発掘調査に参加した学生（学年は平成18年度現在とした）	
	大学院人文社会科学研究科2年生（横山寛剛）、1年生（秋山真吾・澤田恭平）
	人文学部4年生（山田敏子）、3年生（赤坂朋美・槻木孝則・佐藤信人・須藤真由美・丸川優多・宮本明日香）
	人文学部2年生（五十嵐 愛・大和田麻未・桜田智恵・佐藤夏子・中村祐宇樹・長谷川 礼・立花晃一・富浦由佳・米谷圭太・若松 徹）
遺物の整理・実測図作成に参加した学生（学年は平成19年度現在）	
	平成18年度参加者（横山寛剛、磯前和己・山田敏子、大和田麻未・桜田智恵・富浦由佳・米谷圭太）
	平成18・19年度参加者（秋山真吾・澤田恭平、赤坂朋美・槻木孝則・佐藤信人・須藤真由美・丸川優多・宮本明日香、五十嵐 愛・佐藤夏子・中村祐宇樹・長谷川 礼・立花晃一・若松 徹）
	平成19年度参加者（菅野七瀬・菊地咲江・本間大揮・奈良美穂・三浦倫子・葛西早津紀・渡辺信彦。以上2年生で考古学実習生）。佐藤千絵（1年生、自主参加）。

- 3. 報告書作成の中心は、藤沼邦彦、人文社会科学研究科の秋山真吾・澤田恭平、学部4年生の赤坂朋美・須藤真由美・宮本明日香・槻木孝則・佐藤信人・**丸川優多**であるが、3年生以下の五十嵐 愛・佐藤夏子・中村祐宇樹・長谷川 礼・立花晃一・若松 徹・佐藤千絵が補佐した。  
学部学生がおこなう遺物の実測図作成は、秋山と澤田が指導した。編集は主として藤沼と秋山・赤坂・宮本がおこなった。
- 4. 報告書の土器の実測図・拓本図の縮尺は3分の1が基本であるが、拓本やそれをトレースした模式図などは縮尺不同である。石製品・土製品の実測図の縮尺は2分の1を原則としたが、石皿や礫石器は3分の1である。
- 5. 石器・石製品の材質同定は、青森県立浪岡高等学校の山口義伸氏の肉眼鑑定による。石器の実測図作成は、青森県埋蔵文化財調査センターの中島友文・佐々木雅裕両氏の指導を得た。
- 6. 遺物の写真については小川忠博氏に展開写真その他の撮影を依頼した。学生が撮影したものが少数あるが、それには\*印を付した。



# 目 次

はじめに

凡 例

第1章	調査の目的（藤沼）	1 頁
第2章	杉沢遺跡の位置と環境（藤沼・五十嵐）	
	第1節 杉沢遺跡の位置	1 頁
	第2節 杉沢遺跡周辺の環境	1 頁
第3章	杉沢遺跡とは（藤沼・槻木）	
	第1節 杉沢遺跡の立地と遺跡の範囲	3 頁
	第2節 杉沢遺跡に於ける過去の調査	5 頁
第4章	杉沢遺跡の発掘調査の内容（藤沼・澤田・宮本）	
	第1節 調査区の選定・区名（グリット名）	6 頁
	第2節 発掘調査の期間・調査体制	6 頁
	第3節 層位と遺物の出土状況	9 頁
第5章	出土品	
	第1節 縄文晩期の土器（藤沼・秋山・澤田・赤坂・須藤・槻木・丸川・宮本）	
	(1) 晩期土器の出土層位	12 頁
	(2) 無地という用語について	12 頁
	(3) 青森県立郷土館の発掘資料の利用	13 頁
	(4) 晩期土器の器種分類	63 頁
	(5) 深鉢について	63 頁
	(6) 鉢について	71 頁
	(7) 浅鉢について	78 頁
	(8) 皿について	91 頁
	(9) 壺について	95 頁
	(10) 注口について	107 頁
	第2節 縄文後期の土器（立花・佐藤（千））	118 頁
	第3節 土製品・石製品・石器（藤沼・澤田・佐藤（信）・中村・若松）	121 頁
第6章	縄文晩期の土器のまとめと考察（藤沼・秋山・澤田・赤坂・宮本）	
	第1節 各区の主要な層と出土土器（型式）の関係	134 頁
	第2節 大洞 BC 式土器群と大洞 C1 式土器群の設定	137 頁
	第3節 大洞 BC 式・大洞 C1 式土器の器種組成とその割合	139 頁
	引用・参考文献目録	143 頁

## 第1章 調査の目的

今回の発掘調査は、弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター（発掘調査担当、日本考古学研究室）が主体となり、平成18年8月5日から8月15日まで実施したものである。調査面積は51㎡であるが、青森県立郷土館の調査区と重複したため、実質的な調査面積は42㎡となる。

調査の目的は、亀ヶ岡文化の研究のためである。今回の調査地点は、青森県立郷土館の調査で縄文時代晩期のいわゆる大洞 BC 式と大洞 C1 式土器が出土することが分かっていたので、具体的には、①層位学的に調査し、大洞 BC 式と大洞 C1 式土器の違いが層位的に区別できるのかを検証する。②まとまりある土器群の土器組成（器種の組み合わせ）とその組成比を明らかにすること、③器種ごとの文様構成を明らかにし、描く手順を分析する材料を得ること、④馬淵川流域の晩期前半の土器群の特徴を具体的にとらえること、それに加えて⑤日本考古学実習や同ゼミナールの発掘実習を兼ね、整理研究して報告書作成を实践すること、⑥修士論文や卒業論文、研究論文の材料を得ること。⑦亀ヶ岡文化研究センターの研究資料と基礎的な展示資料を収集すること、などを主要な調査目的とした。

幸いなことに優秀な出土品に恵まれ、上記にあげた目的をほぼ達成することができた。出土した土器は、完全な形に近いものや接合でほぼ復元できたものが多く、しかも工芸的に見て優秀なものが多かった。これらは、研究資料としてのみならず、亀ヶ岡文化研究センターの展示資料としておおいに役立つものである。

## 第2章 杉沢遺跡の位置と環境

### 第1節 杉沢遺跡の位置

杉沢遺跡は、青森県三戸郡三戸町大字貝守字杉沢54-1にある。三戸町の中心部から直線距離で西に14kmほど行ったところにあるが、車で路なりにたどれば約20kmの距離となる。この地点からさらに10kmほど山道をたどると十和田湖国立公園の迷ヶ平キャンプ場に出るという山深いところである。三戸郡（八戸市も旧三戸郡域）は青森県の東南部に位置し、北は青森県十和田市・上北郡に、東は太平洋に、西は秋田県（鹿角市）に、南は岩手県（二戸市・二戸郡・九戸郡）に接する。三戸町は三戸郡の南西部にあり、平面形は東西に細長く、「つ」の字のような形をしている。町の東端に近い部分を馬淵川が南流し、北側に猿辺川が西側の奥羽山脈から東に向かって流れ馬淵川に合流する。また南側に田子町方面から東流する熊原川があり馬淵川に合流する。全体的にみると、西側は奥羽山脈から派生する山地・丘陵地という地形であるが、東部は馬淵川とそれに合流する猿辺川・熊原川の河谷にあたり、やや平坦な地形となっている。杉沢遺跡周辺は、地形分類図の地形区分にしたがうと田子台地にふくまれる。遺跡の位置する面は背後の軽石流台地（低位）と前方の猿辺川にはさまれた面積のせまい砂礫台地（低位）すなわち猿辺川のもっとも低位の河岸段丘面に相当する。



第1図 杉沢遺跡の位置

### 第2節 杉沢遺跡周辺の環境

#### (1)気候

三戸町は、奥羽山脈を境とすれば、太平洋側に属し、気候の区分も太平洋気候区に属し、概括的にいえば日本海側よりも、夏季の降水量が多く、冬季の降雪量は少なく晴れの日が多い。しかし三戸町は、朝晩や冬季の冷え込みが大きいいため、沿岸部の八戸市と比べ、気温の年較差（8月と1月の平均

気温の差)や日較差(日最高気温と日最低気温の差)が大きく、内陸性気候の特徴が顕れているという。これは三戸町が山地に近いことと関係があり、積雪が多いのも特徴で、沿岸部にくらべヤマセの影響も少ないという。杉沢遺跡のある杉沢集落の地は、三戸町の中心部からわずか14km奥にあるに過ぎないが、十和田火山地・大黒森山地の山麓に刻まれた狭い谷間にあるため、三戸町の中心部と比べれば冬季の積雪量も多く、根雪の存在する期間も長い(青森県農林部農村計画課1998)。

#### (2)植物相(植生)

三戸地方の自然植生は落葉広葉樹林が中心となるが、自然植生が残っている地域は山地などの地域に限られており、遺跡周辺の林はミズナラ・クリに代表される二次林、スギ・アカマツ・ヒノキなどの二次林や植栽林などが目立つ。また、あれた山林も多い。またこの地域(馬淵川流域)の潜在自然植生はすべてブナクラス域にふくまれ、もっとも広範囲に分布するのはミズナラ林で、それに加えてコナラ・クリ・アカイタヤ・ハウノキ・オオバクロモジ・ミヤマガマズミ・ヤマウルシ・ツノハシバミなどがみられるような植生であるという。縄文時代晩期の気候はやや寒冷であるといわれるが、馬淵川の支流である猿辺川の上流にある杉沢遺跡の地域も、上記のような潜在自然植生と同じような植生であったと推定される。そして縄文集落に近い里山にはコナラ・クリ・トチノミなどの食料となる樹木が茂り、沢地などにはサワクルミなどが群生していたのであろう。

#### (3)動物相

現在の青森県に棲息する陸棲の哺乳類は、大型のものとしてツキノワグマ・ニホンカモシカ・ニホンザル、中型のものとしてノウサギ・ムササビ・タヌキ・キツネ・テン・イタチ・アナグマなどである(青森県史編さん自然部会編2003)。地主の杉沢氏のお話では、かつて発掘地点の畑までクマがでてきたことがあったという。大型獣であるシカとイノシシの名がないが、江戸時代の記録によるとシカもイノシシも棲息していた。八戸藩では大量に発生したシカ・イノシシが田畑を荒らし、飢饉がおこったこともあり、これをイノシシ飢渴とよんだ。縄文時代の貝塚からはイノシシ・シカの骨などが出土しており、少数ながらイノシシ形土製品も県内各地で発見されているので、縄文時代にイノシシ・シカが棲息し、縄文人の狩りの対象となったことは間違いない。

三戸町の主要河川である馬淵川とその支流である熊原川・猿辺川にすむ魚類は多種類あるが、流域によって種類がことなる。中・上流域で人間にとって重要な資源となる代表的な魚類はシロザケ・サクラマス・アユなどである。工藤 大氏の作成した産卵区域によると、シロザケの産卵区域は主として中流以上の馬淵川本流に限られ、支流では熊原川の下流に存在するだけである。アユも馬淵川本流の中流域に限られる。サクラマスの産卵区域のみが、大小の支流に及んでいる。杉沢遺跡の近くを流れる猿辺川には、現在はシロザケもアユも遡らないが、サクラマスだけは多数遡り、戦前までは「サクラマスの川」とよばれるほど捕獲されたという(福田・工藤1997)。縄文時代晩期は現在よりやや寒冷であったといわれるので、馬淵川を遡るシロザケは現在より量が多かったと考えられるが、杉沢遺跡の立地する猿辺川の上流までどれだけシロザケが遡ったかは不明である。猿辺川でシロザケの漁獲が少量しか期待できないとすれば、杉沢遺跡の縄文人が保存食料としてシロザケを確保するためには、馬淵川本流近くまで出かけて直接漁獲するか、その地域の縄文人が漁獲したものを分けてもらう必要があったであろう。

#### (4)地形

杉沢遺跡は、馬淵川本流から南部町門前付近で分岐する猿辺川を、約16km遡った上流域の左岸段丘上に位置している。遺跡周辺は、地形分類図の地形区分にしたがうと田子台地にふくまれ、遺跡の所在地は背後の軽石流台地(低位)と前方の谷底平野にはさまれた面積のせまい砂礫台地(低位)となっている。

#### (5)馬淵川・猿辺川と杉沢遺跡



馬淵川流域の遺跡群については、これまで同様、好著『馬淵川流域の遺跡調査報告書』の中から引用させていただくことにする。

馬淵川は、北上高地の袖平高原付近に源を発し、岩手県北部を北流して青森県南部に入り、八戸市で太平洋に注ぐ。幹川流路延長142km、全流域面積2050km<sup>2</sup>で、流域面積のうち92%は山地が占めるといふ。上流は山地を流れる溪流であるが、中流になると谷も開け、下流になるとさらに大きな支流も合流し谷底平野を発達させる。この馬淵川水系は縄文時代の遺跡が1416カ所知られており、濃密な分布を示す。そのうち晩期の遺跡は366カ所といい、縄文時代の全遺跡数の約4分の1を占める。遺跡は馬淵川本流や支流との合流点近くに密集する傾向があるが、密度は上流域のほうが濃いようである。遺跡の分布・集落の大きさ・集落の継続期間などは、流域が生み出す有益な生物量・気候風土、地形などに関連するものであろう。遺跡の分布が多いということは、縄文人にとって馬淵川流域は住みやすい環境であったと推定される。

杉沢遺跡も馬淵川流域の縄文晩期の遺跡群の一つであり、支流の猿辺川の上流に位置する。猿辺川は流路24.7kmで、三戸町西部のドコノ森付近に源を発し、南部町門前付近で馬淵川に合流する。山地・丘陵を浸食して狭い谷を形成しながら流れる。流域には、本流などと比べれば遺跡の数は少ないが、『青森県遺跡地図（平成10年3月版）』によると、晩期の遺跡として上流から三戸町①北大平遺跡・②杉沢遺跡・③南太鼓森遺跡・④二次平遺跡・⑤蜂ヶ崎遺跡（大洞A・A'式）・⑥中北向遺跡・⑦上屋敷遺跡、南部町⑧鱒沢遺跡・⑨村中遺跡が、また猿辺川から分岐する小遠辺川の上流に三戸町⑩萩場遺跡・⑪荒田遺跡が分布する。しかし杉沢遺跡を除くと発掘調査された遺跡はなく、出土品の内容も不明な遺跡が多い。遺跡を踏査しても北大平遺跡・南太鼓森遺跡・二次平遺跡・蜂ヶ崎遺跡などは、水田などになっており、遺物の分布や遺跡の範囲などは確認できなかった。

### 第3章 杉沢遺跡とは

#### 第1節 杉沢遺跡の立地と遺跡の範囲

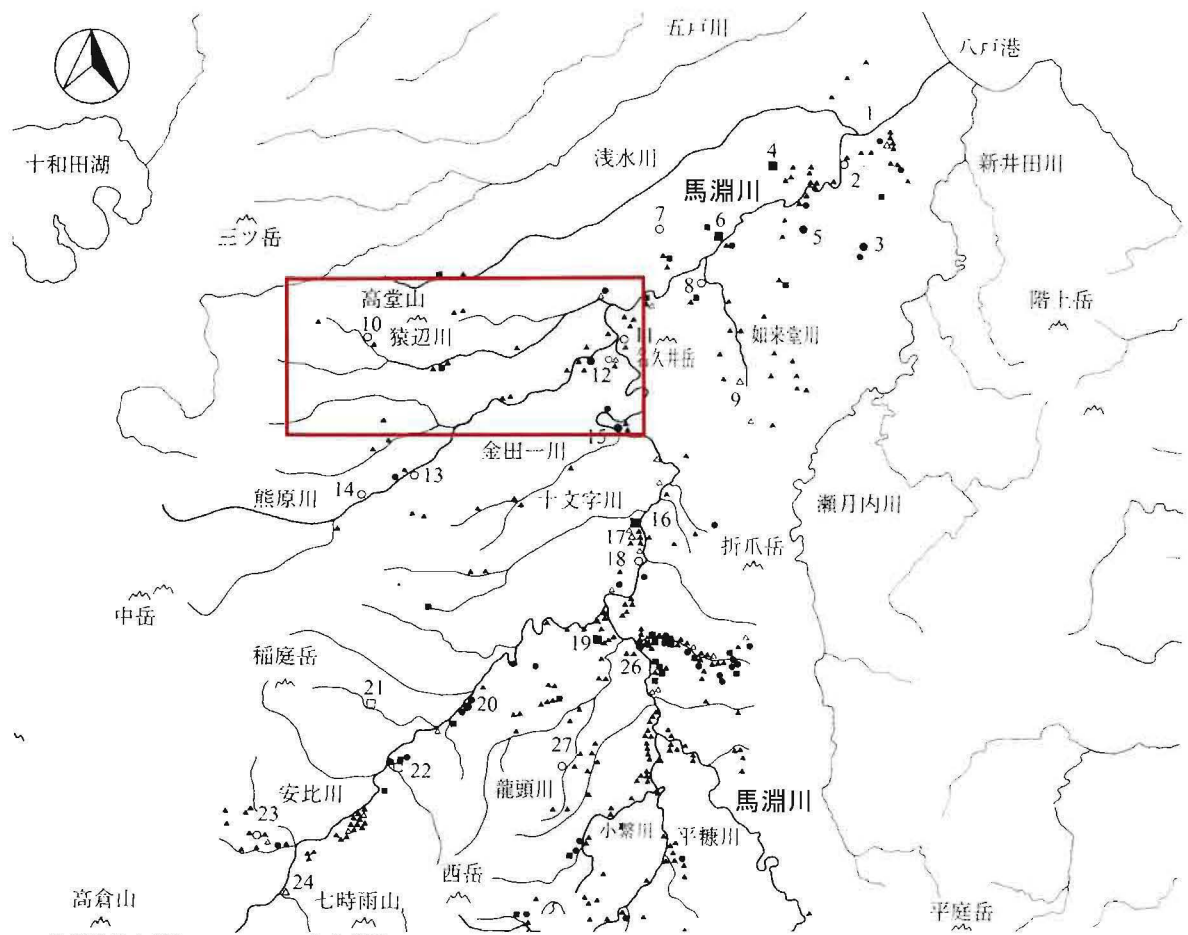
##### (1)杉沢遺跡の立地

遺跡は、猿辺川が荒川と合流する地点に近い左岸（北側）の砂礫台地の奥に位置し、前面に猿辺川に向かって緩やかに傾斜する平坦な土地が広がるが、背後はすぐに軽石流台地（低位）からの急な傾斜地となっている。標高は、遺跡が立地する砂礫台地で約170m、背後の軽石流台地で約230mである。遺跡のある面（砂礫台地）は、背後の軽石流台地（低位）と前方の谷底平野にはさまれた面積のせまい低位の河岸段丘で、遺跡から猿辺川までの距離はわずか150mほどで、猿辺川との比高も約2から4mほどである。なお付近の川岸はコンクリートなどで護岸されているところが多い。

遺跡からの眺望は人家のためよくないが、猿辺川沿いの道路（県道216号）まででると、川の両側に山々が連なるのがみえ、この付近が谷間にある小さな平坦地であることが分かる。また遺跡の背後の斜面を登って軽石流台地（低位）にでると、そこは平坦な地形が広がり水田やタバコ畑として利用されている。

##### (2)杉沢遺跡の範囲

遺跡は、発掘資料や表面採集資料によると、縄文時代中期から晩期におよび、面積も広範囲にわたり、その範囲は東西約150m×南北約40mと推定される。とくに名久井文明氏がかつて発掘調査した地点に近いといわれるタバコハウス付近に土器片が多かった。しかし、土地が削られたり、屋敷地・作業場・水田と化しているところが多く、遺跡の範囲を明確にとらえることはできなかった。現在、良好な形で遺跡が残っている部分は、今回、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターが発掘した調査区付近で、縄文時代晩期の遺物包含層となっている。この包含層は、斜面に形成されたいわゆる「捨て場」である。地表面は整地され平坦な畑地となっていたが、土盛り整地の下の遺物包含層は南に向



● 晩期前半の遺跡

○ 晩期前半～後半の遺跡（前半主体）

▲ 晩期前半～後半の遺跡

○ 晩期前半～後半の遺跡（後半主体）

■ 晩期後半の遺跡

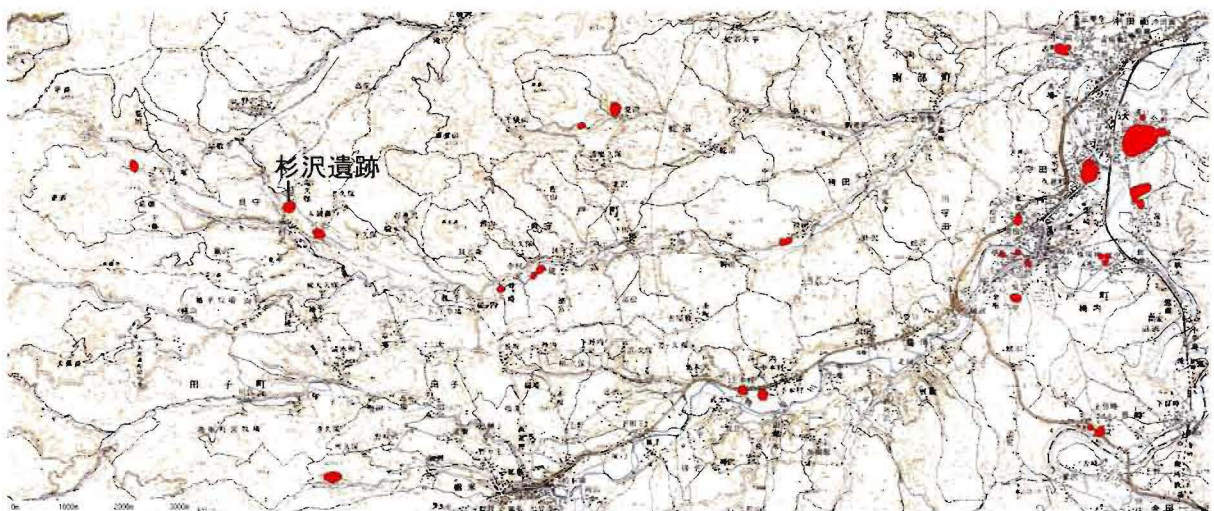
▲ 晩期の遺跡（時期不明）

（\_）は主体となる時期

主な遺跡

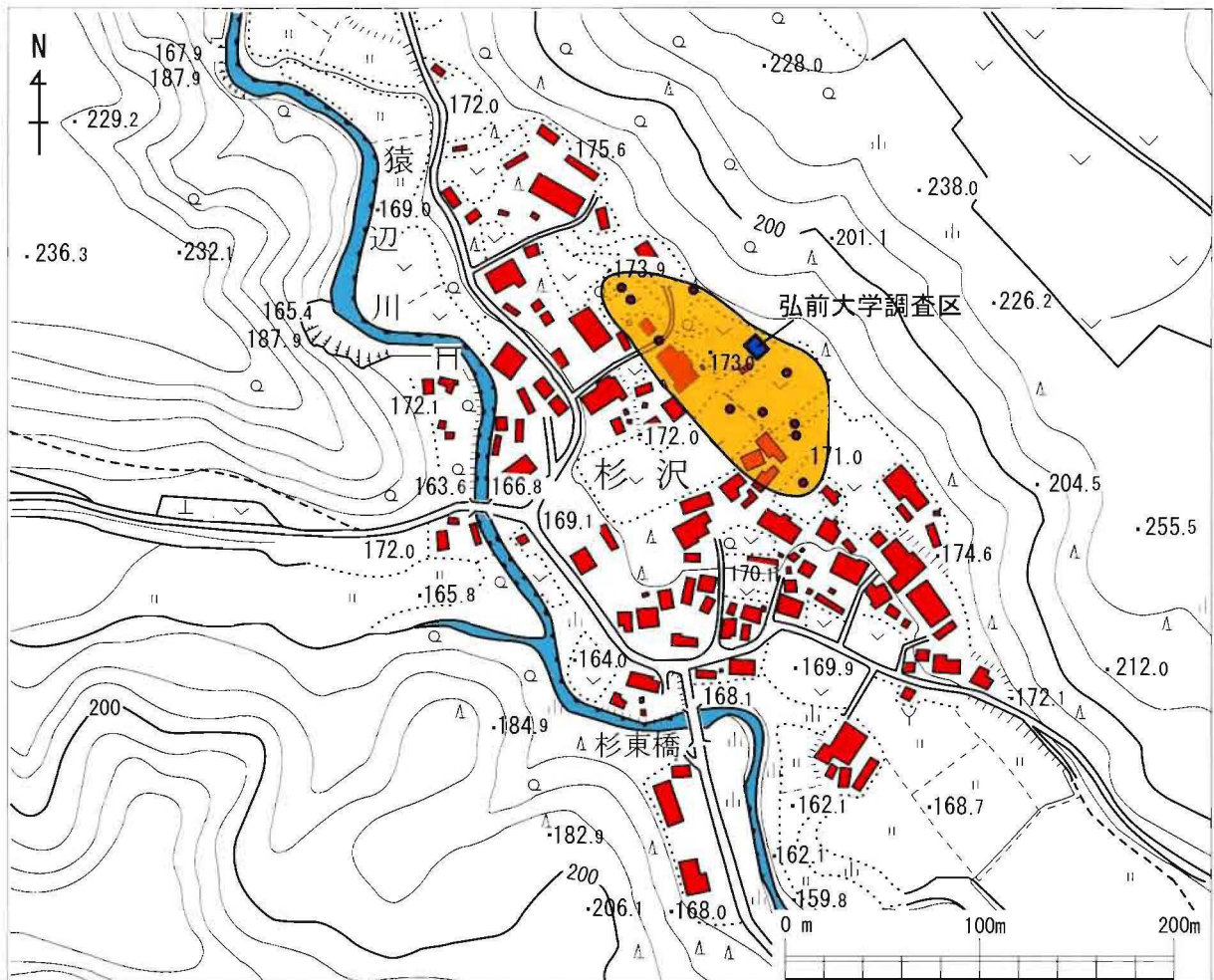
- |   |  |   |
|---|--|---|
| 1 八戸市牛ヶ沢 (3) (大洞 C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                                   | 10 三戸町杉沢 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> )                 | 19 一戸町堀切 (大洞 C <sub>1</sub> )   |
| 2 八戸市八幡 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> )   | 11 三戸町泉山 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ) | 20 浄法寺町飛鳥台地 I (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> )   |
| 3 八戸市鴨平 (2) (大洞 B・BC)   | 12 三戸町八日町 (大洞 B・BC)  | 21 浄法寺町上杉沢 (大洞 B・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ) |
| 4 福地村西山 (大洞 A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> )  | 13 田子町野面平 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                                | 22 浄法寺町五竜 I (大洞 BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> )               |
| 5 福地村統茂 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> )   | 14 田子町石亀 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                                 | 23 安代町曲田 I (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                              |
| 6 名川町剣吉芝町 (大洞 A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> )                                      | 15 二戸市雨滝 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> )   | 24 安代町荒屋 I (中葉)   |
| 7 名川町寺下 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                                   | 16 二戸市長瀬 D (大洞 A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> )                                    | 25 安代町赤坂田 I・II (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> )          |
| 8 名川町虚空蔵 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> )  | 17 二戸市沢内 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ) | 26 一戸町前 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> )   |
| 9 名川町青鹿長根 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ) | 18 二戸市中曾根 I (B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> ・A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ) | 27 一戸町山井 (大洞 B・BC・C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub> )                                |

第2図 馬淵川流域の縄文晩期の遺跡分布（福田・工藤1997を改変）



第3図 猿辺川流域の縄文晩期の遺跡分布（国土地理院 1：50,000 三戸・田子を利用）





第4図 遺跡付近の地形と遺跡の範囲（三戸町提供の地図を利用）

ってかなり傾斜していた。なお、この捨て場を利用した人々の住居跡がどの位置に存在したのか確認することができなかった。背後の急な傾斜地に住居跡が存在することも予想されたが、そこには土器片など遺物の散布は確認できなかった。おそらく住居跡は、捨て場より高い位置にあったのではなく、「捨て場」と同じように、背後の急な傾斜地の裾部にそった付近に存在したと考えたほうがよからう。

## 第2節 杉沢遺跡に於ける過去の調査

杉沢遺跡はこれまでに2回の発掘調査が行われている。

(1)第1回目は、1970年の三戸高等学校（担当、名久井文明）の調査である。春山氏所有の畑地を2m四方を発掘調査し、リング箱1ばい程度の遺物を得て、概略を報告している。それによると第7層から大洞B式が1点、第5層から大洞BC式が2点、大洞C1式土器が多数、第4層から大洞C2式と大洞A式が混在して多数、第3層から大洞A式が多数出土したという。大洞C1式から大洞A式にいたる土器群が層位的に出土しており、興味深い成果であるが、発掘面積が狭いため、土器の全体量も少なく、層位ごとの器種組成（比率）などは明らかにされていない。この発掘資料は現在、三戸町教育委員会で保管しており、私たちも平成19年度に土器や岩偶について再調査させていただいた。なお、この報告書を入手するのは困難であるが、出土品の図面は、『三戸町史』の中巻（三戸町史編集委員会1997）に再録されているので参照して欲しい。

(2)第2回目は、1994年の青森県立郷土館（担当、福田友之・工藤 大・岩淵宏子）の調査である。A・B・C区、合わせて約20㎡を発掘調査し、ダンボールで11箱分の遺物を得て、『馬淵川流域の遺跡調査報



告書』の中で報告している。A区は2 m掘り下げてもほとんど遺物が出土せずに中止している。B区は背後の山際に設定したが遺物はほとんど出土しなかった。C区は、C－1区が表土直下が地山で遺物は出土しなかったが、C－2区は良好な遺物包含層で多数の遺物が出土した。

C－2区は、縄文後期後半から晩期後半にかけての土器が出土しているが、中心になるのは晩期前半の大洞BC式と大洞C1式の土器で、他の型式は少ない。とくにC－2区のV層は上・中・下に細分され、V層下層が大洞BC式、V層中層が大洞BC式と大洞C1式、V層上層が大洞C1式の土器を包含していたという。

今回報告する弘前大学の発掘区は、調査の目的で述べたように、県立郷土館の発掘区（C－2区）を含むので、県立郷土館で調査した発掘区の層位や出土土器も併せて検討するつもりである。そのため報告書の図版を活用させてもらった。

## 第4章 杉沢遺跡の発掘調査の内容

### 第1節 調査区の選定・区名（グリット名）

#### (1)調査区の選定

発掘調査を実施した地点は、杉沢遺跡のうち、背後の斜面に近い部分で、杉沢由見氏の所有する畑地である。周囲は整地などを目的に掘削されているが、この部分は良好な遺物包含層が保存されていた。この地点を選定した理由は、①青森県立郷土館の発掘調査（C－2区に相当）で多数の晩期前半の遺物が出土しており（福田・工藤1997）、調査の目的を果たすことができそうであったこと、②県立郷土館の発掘・遺物整理を担当した工藤大氏から「大丈夫、沢山の出土品が期待できるよ」と調査を勧められたこと、③県立郷土館の調査区に接した地点を調査すれば、県立郷土館の発掘資料も利用できると考えたこと、④地主の杉沢由見氏と三戸町教育委員会から発掘調査に対し協力が得られたことなどによる。

#### (2)区名（グリット名）・層位を記録した壁面の位置

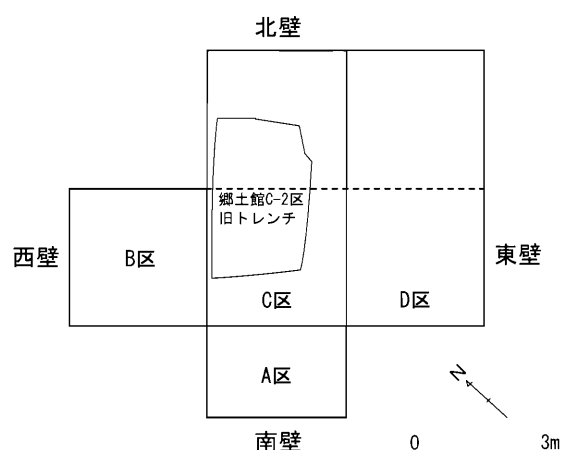
調査区は、畑地の平面にそって東西9 m×南北9 mの範囲に設定し、内部を一辺3 mの方眼（区）に区画し、それぞれに区名をつけ、そのうちA区、B区、C区（C1・C2）、D区（D1・D2）を発掘した。ただしA区は2 m×3 mのみ調査した。

各区の発掘の開始の順はC区→B区→D区→A区となる。発掘は晩期の最下層の下に厚く堆積する中振浮石層を掘り込んだ段階で中止した。層位を記録した壁面はB区（南壁）、A区（東壁）、C区（西壁と南壁）、D区（西壁と南壁）である。

### 第2節 発掘調査の期間・調査体制

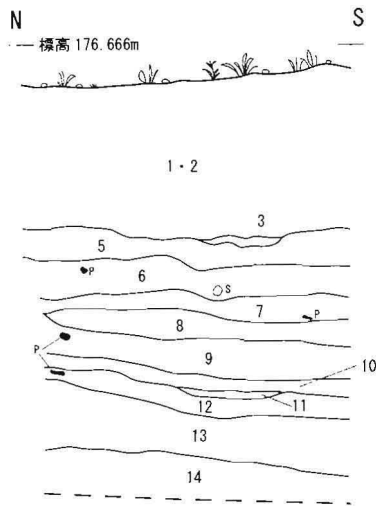
#### (1)調査期間

発掘調査は平成18年8月5日から始め、8月14・15日の埋め戻しで完了した。最初に発掘調査を開始したC区の中央に、平成6年に青森県立郷土館が発掘調査した発掘区（C－2区）が検出され、その埋め土を排除するのに丸二日かかった。そのためその後の調査日程がきびしくなり、忙しい調査となってしまった。発掘調査中は、地主の杉沢氏宅の皆さん・三戸町教育委員会の野田尚志氏・杉沢地区の皆さんから、地域に関するさまざまな情報を収集した。

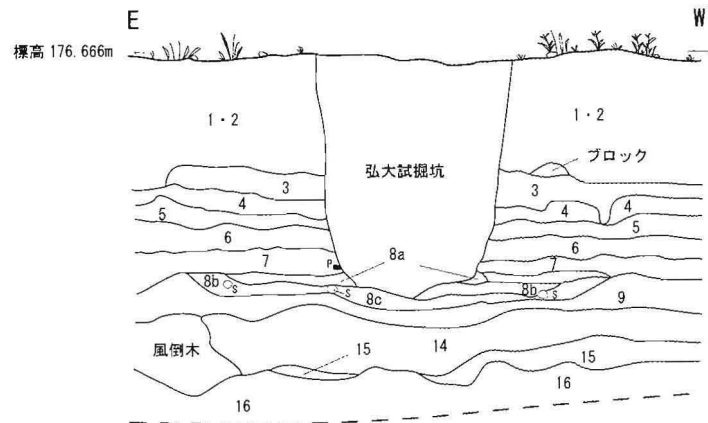


第5図 調査区の設定

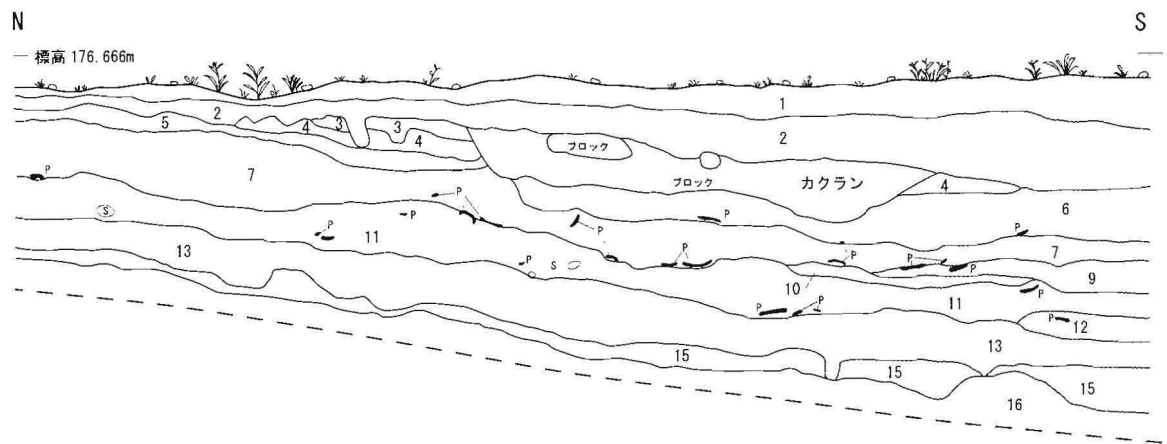
A区(東壁)



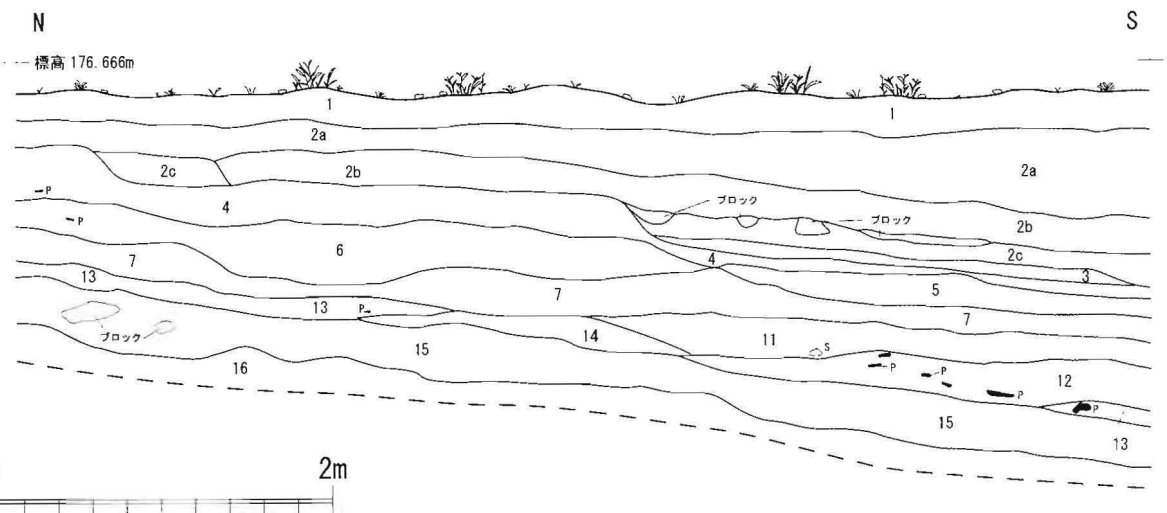
B区(南壁)



C区(東壁)



D区(東壁)



第6図 各調査区の層位図

## (2)調査体制

発掘調査の主体は弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センターで、調査担当は日本考古学研究室である。藤沼邦彦（日本考古学担当）・関根達人（文化財論担当）が調査指導し、日本考古学ゼミナールに集まる学生（人文社会科学研究科の院生、学部4年生・3年生、考古学実習を受講する2年生）が参加した。人文社会科学研究科を修了した蔦川貴祥氏が自費で参加し、後輩の指導にあった。調査中、三戸町教育委員会の野田尚志氏から有益な指導を得た。

## (3)調査日誌抄

調 査 日 誌 抄（平成18年8月）		
5	土	朝、レンタカー・自家用車などで弘前大学を出発。10時頃杉沢遺跡に到着。三戸町教育委員会から借用した TENT を設置。午後から発掘予定地域周辺の環境を整備。調査区を設定する。C 区を発掘。中央に大きな攪乱部分を検出、これが青森県立郷土館の旧トレンチ（C－2 区）であることを確認し、その排土を始める。
6	日	C 区内の旧トレンチの埋め土をほぼ排除し、底面の中振浮石層を出す。調査完了時に壁に刺さっていた土器を抜いたとみえ、旧トレンチの壁は凸凹が著しく、崩れも見られた。旧トレンチの東側付近から小型の完形の壺や一括土器の破片などが出土する。
		B 区の調査を開始する。
		京都大学の泉拓良氏と弘前大学人文学部の宮坂朋氏が発掘現場を視察。卒業生の境沢宏美氏が応援に駆けつけてくれた。地域社会研究科学生の小国隆男氏が差し入れ。
7	月	C 区の西壁付近（旧トレンチの西側）は中振浮石層まで浅く、遺物も少なかったので分層しながら中振浮石層まで掘り下げた。
		B 区は5 層～7 層まで調査。南壁周辺に遺物が多いが、一括土器の出土は少なかった。
		三戸町総務課の山口航生氏が「広報さんのへ」の取材にくる。
8	火	C 区の東壁に近い部分（旧トレンチの東側）を掘り下げる。注口・深鉢・台付鉢などの破片が一括して出土。
		B 区の精査。土器とともに石匙などの石器が出土。
9	水	C 区の南東隅から深鉢の破片が多数出土。
		D 区の調査を開始。
		B 区の精査。土器とともに石匙などの石器が出土。
10	木	C 区の全域を中振浮石層まで掘り下げ、この区が発掘は完了。
		B 区は中振浮石層まで掘り下げ、この区が発掘は完了。
		D 区を掘り下げる。
		岩手県軽米町教育委員会の藤田直行氏、二戸市教育委員会の柴田知二氏、青森県埋蔵文化財調査センターの工藤大氏・坂本真弓氏が見学にくる。地元のおばさん達も見学に来て、学生相手に郷土館の発掘の様子、農作業のことなどを話してくれた。
11	金	A 区の表土剥ぎを行い、さらに下層を調査。良好な岩偶が出土。
		D 区から有文の浅鉢など一括土器が多数出土するようになる。
		今日から考古学実習の2 年生が新たに参加。階上町教育委員会の森淳氏が見学。
12	土	午後になると雨が降り出したので、午後3 時ころ発掘を中止。
		A 区はさらに下層を精査し、赤彩された小型の壺が完形で出土。
		D 区から多数の完形に近い皿・鉢、一括の土器破片などが多数出土。



		五所川原市教育委員会の藤原弘明氏が奥さんと一緒に見学。十和田市の山崎武氏・教育委員会大久保学氏、青森県埋蔵文化財調査センターの永嶋豊氏が見学。地元の方々も見学に来る。
		C区の埋め戻し作業を開始する。
13	日	A区で遮光器土偶の足の破片が出土（のち体部破片に接合）。
		D区の最下層から完形に近い大型注口が出土。最後に中振浮石層をやや掘りこみ、D区も発掘作業は完了する。
		B区の埋め戻しを開始する。
		三沢市教育委員会の長尾正義氏が見学。
14	月	D区とC区の間壁（ベルト）を掘りながら、D区の埋め戻しを開始する。このベルトから完形の注口が倒立した状態で出土する。
		A区とC区の間壁（ベルト）を調査。
15	火	A区とC区の間壁（ベルト）を引き続き調査する。土器が多数出土。
		午後3時ごろ調査区全体の埋め戻しを完了する。機材や出土品を車に積み、大学に向け出発。夕方おそく大学に着く。

### 第3節 層位と遺物の出土状況

調査区の軸の方向は、磁北より東に45°傾いているが、便宜上、山に近い部分を北側、猿辺川の方を南側とする。地層図を作成するための標高は、BM＝標高176.666mの地点のものを利用した。なお、調査区の表面は、畑地として利用されているためほぼ平坦であるが、南側にいくほど整地のための盛土が厚く堆積している。この盛土を除くと、区全体の地層（堆積層）は南東方向にむかって緩やかに傾斜している。

発掘地点は捨て場＝遺物包含層であったので、発掘は層位的に行い、報告書では出土品を層位ごとに提示することに努めた。

#### (1) A区の層位

第1層は表土で、耕作土である。

第2層も耕作土で、黒褐色土層である。第1・2層をあわせると、耕作土は厚さが約80cmに及んでいる。土器破片などが少数出土している。

第3層は褐灰色土層である。攪乱がおよんでおり、レンズ状に部分的に堆積している。厚さは約5cmである。粘性は無く、粒が細かくシルト質で、十和田b火山灰層と考えられている。

第4層は黄橙色の浮石層で、部分的に薄く堆積しており（東壁には見られない）、これも十和田b火山灰層と考えられている。

第5層は黒褐色土層である。約20cmの厚さで、黄橙色の浮石の混入がみられる。土器破片などが出土した（A28）。

第6層は黒褐色土層である。約20cmの厚さで、黄橙色の浮石が少量混入している。粘性や湿り気がある。壺（A132）や台付鉢（A86）、浅鉢（A110）などまとまった土器が出土している。

第7層は黒褐色土層である。厚い所で約15cmとなる。浮石が微量に混入している。しまりが無く、炭化物が混入している。台付鉢（A151）や浅鉢（A154）、皿（A159）、壺（A163）などが出土している。

第8層は暗褐色土層である。厚い所で約15cmとなり、北側で薄くなっている。しまりが無く、砂利が混入している。浮石が微量に混入している。炭化物が混入し、第7層よりもやや黄色味が強い。土器破片などが少量出土している。

第9層は黒褐色土層である。厚い所で約20cmとなる。しまりがなく、砂利が微量に混入している。

深鉢（A217など）や浅鉢（A241など）、皿（A248など）などが多数出土している。

第10層は黒褐色土層である。厚い所で約10cmとなる。砂利が混入している。台付鉢（A281.A282など）や浅鉢（A287）の土器破片などが出土している。

第11層は黒褐色土層である。部分的にレンズ状に入り、厚さは4～5cmと薄く見られる。第10層よりもやや黒色である。土器破片が少量出土している。

第12層は黒褐色土層である。厚い所で約10cmあるが、北側でやや薄くなっている。14層から浮き上がった浮石が混入している。遺物は出土していない。

第13層は黒褐色土層である。厚い所で約35cmとなる。14層由来の浮石が混入している。深鉢の破片（A295.A301など）や無地の浅鉢（A304など）などが出土している。

第14層は厚い中振浮石層である。遺物は出土していない。

## （2）B区の層位（層位名はC区と共通）

第1層から第4層まではA区と同じである。

第5層は黒色土層である。厚い所で約10cmとなる。粘性が無く、ややしまりがある。深鉢や鉢の破片などが少量出土している。

第6層は黒褐色土層である。厚い所で10cmとなる。浮石が少量混入し、やや大粒のものも見られる。遺物は南東側に集中して出土した。台付鉢（B36）や徳利形の壺（B66）などが出土している。

第7層は黒褐色土層である。厚い所で約15cmとなる。ややしまりがある。遺物は東壁に沿って深鉢の大型の破片（B71.B75）や赤彩された浅鉢（B122）などがまとまって出土した。

第8層は土質によって3つに分層（a～c）された。各層ともに厚さは4～6cm程と薄い。8a層はにぶい黄橙色の砂層、8b層は粘性・湿り気がある黒色土層、8c層は黄褐色の浮石が少量混入した灰黄褐色の砂層で、水の流れや地すべりによる自然堆積層と考えられた。8c層からごく少量の破片が出土した。

第9層は黒褐色土層である。約10～20cmの厚さで、粘性や湿り気があり、浮石が少量混入している。風倒木によって一部攪乱されている。浅鉢（B153）や赤彩の壺（B156）などが出土している。

第10層～13層は、B区にはない。

第14層は黒色土層である。厚い所で約30cmとなる。やや暗く、大粒の浮石が混入する。南東側には風倒木と考えられる痕が確認できる。遺物は出土していない。

第15層は灰黄褐色土層である。厚さは約20cmで、薄くレンズ状にみられる。風倒木と考えられる痕が見られる。深鉢や台付鉢などの破片が少量出土している。

第16層は中振浮石層である。遺物は出土していない。

## （3）C区の層位（層位名はB区と共通）

C区は面積3m×6mで、1994年に発掘調査した青森県立郷土館のC-2区トレンチ（旧トレンチと呼ぶ）と重複している。

第1層から第4層まではA区・B区と同じである。

第5層は黒色土層である。厚い所では約10cmとなる。大粒の浮石が混入している。深鉢・鉢の小破片などが出土している。東壁近くでは攪乱を受けた部分が多い（攪乱層は2層の一部として扱った）。

第6層は黒褐色土層である。南東側へ行くほど厚く堆積し、約40cmもある。粘性がなく、やや湿り気があり、大粒の浮石が混入している。深鉢（C57.C60）や皿の破片（C82）などが出土している。

第7層は黒褐色土層である。安定した層でC区からB区全体に広がっている。粘性や湿り気があり、少量の浮石が混入している。深鉢（C99）、壺（C121～C126）や大型の台付鉢（C110）の破片などが

多数出土している。また、南側で7層上面から掘ったと見られる土坑1が検出され、内部から深鉢(C247)などが発見された。平面的に発掘することができなかったので詳細は不明である。

第8層はC区におよんでいないが、西壁付近で8層として取り上げられた遺物が若干ある。

第9層は黒褐色土層である。南側に見られ、厚い所で約20cmとなる。やや粘性があり、小礫や砂利が混入している。旧トレンチによる攪乱をまぬがれた部分(東壁の南側付近や南壁付近)から復元すると完形になるような一括の深鉢が出土した(C177.C181.C184など)が、そのなかにはC184のような三叉文をもつものが含まれている。そのほか、台付鉢(C199.C208)や鉢(C205)、浅鉢(C213.C217)、壺(C224)など多数の土器が出土している。

第10層は黒色土層である。東側にレンズ状に約5～7cm薄く堆積する。台付鉢(C234)や小破片が少量出土している。

第11層は黒褐色土層である。C区全体におよんでいるが、東壁近くでは約30cmの厚さがある。小礫・砂利が混入している。土器の量はあまり多くないにも関わらず、深鉢の大型破片(C236など)や注口(C239～C241)が出土している。

第12層は暗褐色土層である。厚い所で約20cmとなり、南東隅にレンズ状に見られる。第9～11層と似た土質だが、他よりも色合いが明るく、粒も大きい。遺物のごく少量である。

第13層は黒色土層である。厚い所で約30cmとなる。粘性や湿り気がある。第11・12層よりも色合いがやや暗い。深鉢の大型破片(C243)や有文の鉢(C244)など少量の遺物が出土している。

第14層はB区にないが、第13層と同じ可能性がある。

第15層は黒褐色土層である。薄く見られるが、南東側でやや厚い所がある。厚い所で約20cmとなる。中掬浮石層に由来すると考えられる大粒の浮石が混入している。遺物は出土していない。

第16層は中掬浮石層である。遺物は出土していない。

#### (4) D区の層位

この調査区は、もっとも遺物が出土した地区で、他の区より細かく分層されている。層全体が北側から南側に向かって傾斜しており、南東側が最も低くなっている。南側には第4層から第9層上部に至る現代のゴミ穴が見られる。

第1層と第2層は耕作土で、整地の盛土を含むため南壁近くでは1mをこす深さとなる。

第3層は褐灰色の層である。薄く堆積しているが、西側ではやや厚くなる。厚い所で約20cmとなる。しまりがあるが、粘性は無く、粒が細かいシルト質の層で、十和田b火山灰層と考えられている。攪乱をうけた部分が多い。遺物の出土は認められない。

第4層は黒褐色土層である。厚い所で約20cmとなるが、南西側では薄くみられる。しまりや粘性はなく、一部に黄橙色や褐灰色の砂状のブロック(十和田b火山灰層)が混じる。攪乱をうけた部分が多い。深鉢や浅鉢の破片などが出土している。

第5層は黒褐色土層である。厚さ5～15cmの厚さをもち南側から西側にかけて見られるが、粘性やしまりがあり浮石が若干混入している。比較的新しい変形工字文の台付浅鉢(D98)や工字文の鉢・浅鉢(D90.D93)が出土しているのが注目される。

第6層は黒褐色土層である。北側に見られ、北へ行くほど厚く堆積している。厚さ約20cmとなる。粘性やしまりがあり、浮石や小礫が混入している。深鉢(D133.D134)・壺(D146)・徳利形の壺(D145)などが出土している。

第7層は黒褐色土層である。厚い所で約20cmとなる。粘性・しまりがあり、小粒の浮石が混入している。鉢の大型破片(D165)などが出土している。

第8層は黒褐色土層である。西側で厚く堆積し、約30cmの厚さがある。深鉢(D183)・台付鉢(D215)・

壺 (D252.D253)・注口 (D259) などまとまった土器が出土している。

第9層は黒褐色土層である。南西隅に見られ、厚い所で約30cmとなる。粘性やしまりが若干ある。大型の台付鉢破片 (D280など) や浅鉢 (D288)・皿 (D296) の破片など多数出土している。

第10層は黒色土層である。厚い所で約20cmとなり、西側に見られる。浮石が少量混入する。有文深鉢 (D305)・皿 (D345)・注口 (D360) など多数出土している。

第11層は黒色土層である。厚い所で約20cmとなり、南東側に見られる。粘性やしまりがあり、浮石が少量混入する。深鉢 (D364) や台付鉢 (D403.D405)・浅鉢 (D424.D430)・壺 (D444)・徳利形の壺 (D451) など大量の土器が出土している。

第12層は黒色土層である。南側に約20cmの厚さでレンズ状に堆積している。粘性やしまりがあり、浮石が少量混入している。小型の深鉢 (D463.D487)・台付鉢 (D491.D492)・浅鉢 (D493)・壺 (D499～502)・注口 (D511) など大量の土器が出土している。

第13層は黒色土層である。厚い所で約10cmとなり、東側に薄くレンズ状に堆積している。深鉢の大型破片 (D521など) や完形に近い深鉢 (D529)・台付鉢 (D547など)・台付皿 (D555)・赤彩の大型壺 (D557)・壺 (D562.D564) など、残りのよい土器が多く出土している。

第14層は黒色土層である。東側に厚さ約15cmで薄くレンズ状に堆積する。第11層とよく似る。赤彩の壺 (D574) などが出土しているが、出土量は少ない。

第15層は黒褐色土層で、厚い所で約30cmの厚さをもつ。中振浮石が混入している。大型の有文深鉢 (D575)・台付鉢 (D592.D595)・ほぼ完形の大型注口 (D612) などまとまった土器が出土している。

第16層は中振浮石層である。遺物は出土していない。

## 第5章 出土品

### 第1節 縄文晩期の土器

今回の発掘調査では、多数の縄文晩期の土器と少数の後期の土器が出土した。後期の土器は、量が少なく、しかも大部分が小破片であり（例外として3個体の注口土器の大型破片がある）、各層から晩期の土器に伴って出土している。すなわち後期の土器は、原位置を保っているものではなく、晩期の層に混入したものであるもので、層位と関係なく一括して説明することにする。ここでは専ら晩期の土器を取り上げる。

#### (1) 晩期土器の出土層位 (第8～56図)

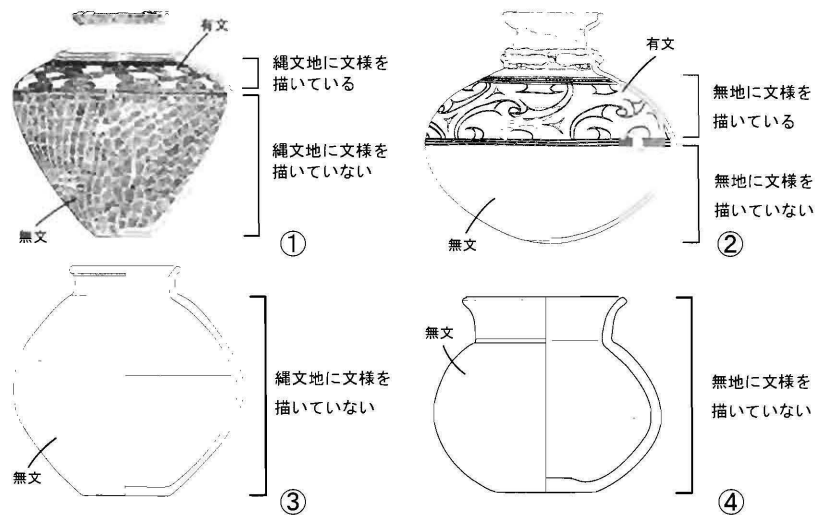
晩期の土器は、各区の各層から大量に出土した。そこで、層位的な検討ができる資料とするため、区ごとに層位別の出土土器を示すことにする。ただし、個体識別の可能な口縁部を有する土器（余りにも小さな破片は除いている）を中心に、特徴的な形・文様をもつ破片を取り上げた。全部で約1800点掲載した。層ごとに並べる順序は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口である。この報告書のもっとも重要な部分である。

#### (2) 無地という用語について (第7図)

右にあげた壺①、②は、体部上半には文様が施されるが、下半には文様がないといってよいであろう。すなわち、体部上半はいわゆる有文で、下半はいわゆる無文ということになる。しかし壺①の体部下半には縄文があり、壺②の体部下半には縄文はなく磨かれた滑沢な面となっている。この磨かれた面を無文とよぶと、文様のないいわゆる無文との区別が難しくなる。文様を考えると、この磨かれた面（あまり磨かれていないものも含めたい）の呼び名が欲しいものである。有文の部分に縄文があると、地文の縄文とよぶことがある。無文の部分に縄文があると、やはり地文は縄文であるということがある。そこで、この磨かれた面（あまり磨かれていないものも含める）を「無地」の面とよんでみたい。広辞苑によると、無



地は「全体が一色で模様の  
ないこと、またそのもの」と  
ある。「無地の布」などの使  
い方をするという。地文・  
地紋は「①各種製作品の地  
紋様。②布地に織り出した  
模様」とある。どうやら無  
地は地文もない場合をさす  
ようである。しかし、亀ヶ岡  
式土器の文様について考え  
るときは、無地も地文に含  
めて使用することにしたい。  
有文・無文・地文、縄文地・  
無地の使い方は次のように  
なる。



第7図 無地という用語の使用例

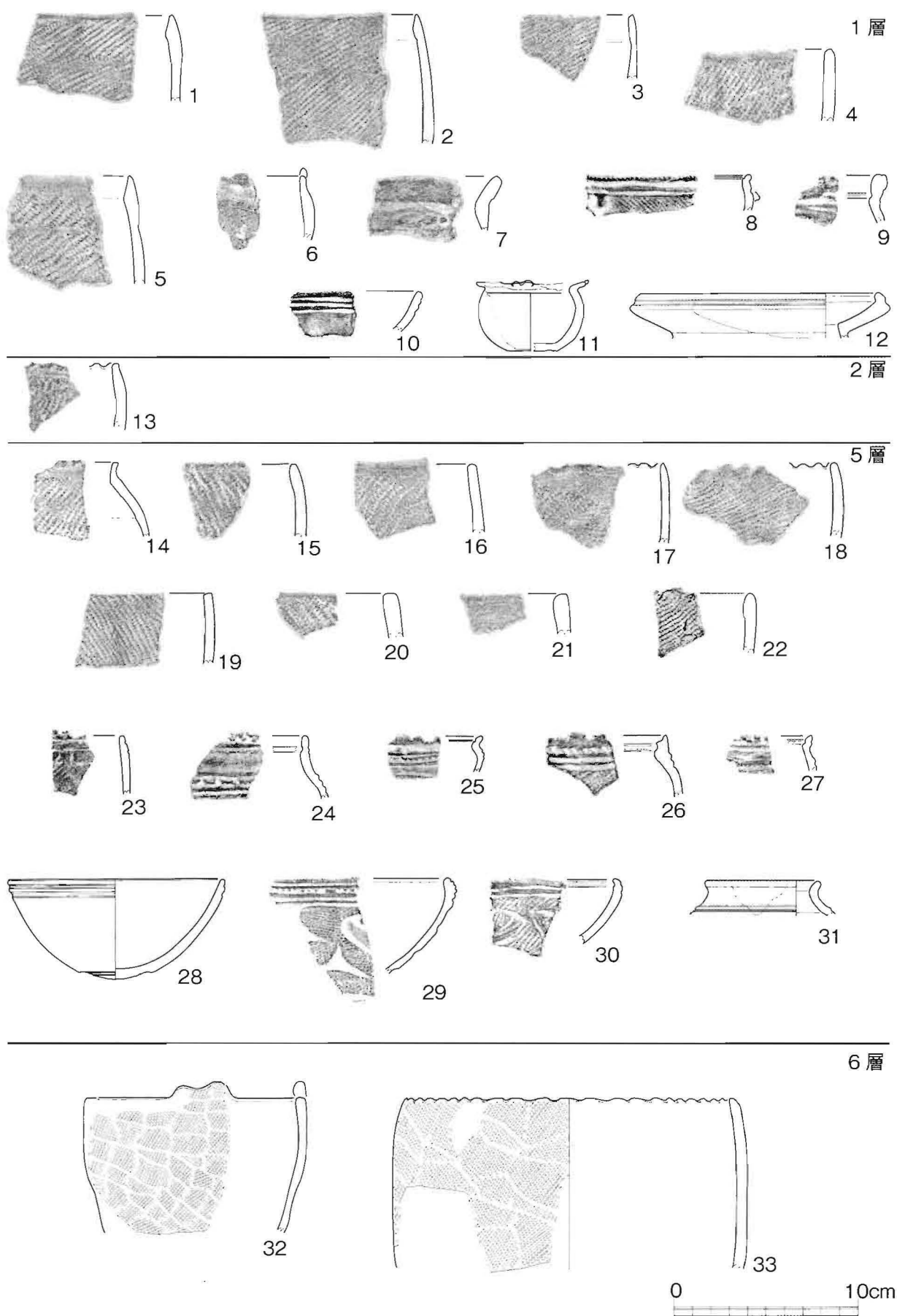
- 1) 有文－具体的な文様である。三叉文・羊歯状文・雲形文・工字文などをさす。
- 2) 無文－具体的な文様が描かれていないことをさす。地文だけの部分も無文ということがある。
- 3) 地文－いわゆる地の文様で、縄文地・条痕文地などをさすが、無地も含めることにする。そして①地文だけのものを無文と呼んだり、地文だけの部分を無文の部分とよぶことがある。また、②地文の部分に文様を描く、というような使い方をすることがある。たとえば縄文地に文様を描く、などである。磨消縄文の手法による雲形文の場合、地文が縄文地なのか無地なのかは難しい問題であるが、ここでは縄文地とする。

無地は本来、地としての文様をもたないことをさすが、ここでは、上述したように地文の種類に含めて考えることにする。具体的には、磨かれた面・ナデ調整の面・ケズリ調整の面などをさすが、文様との関係でいえば、磨かれた面の状態をさすことが多い。

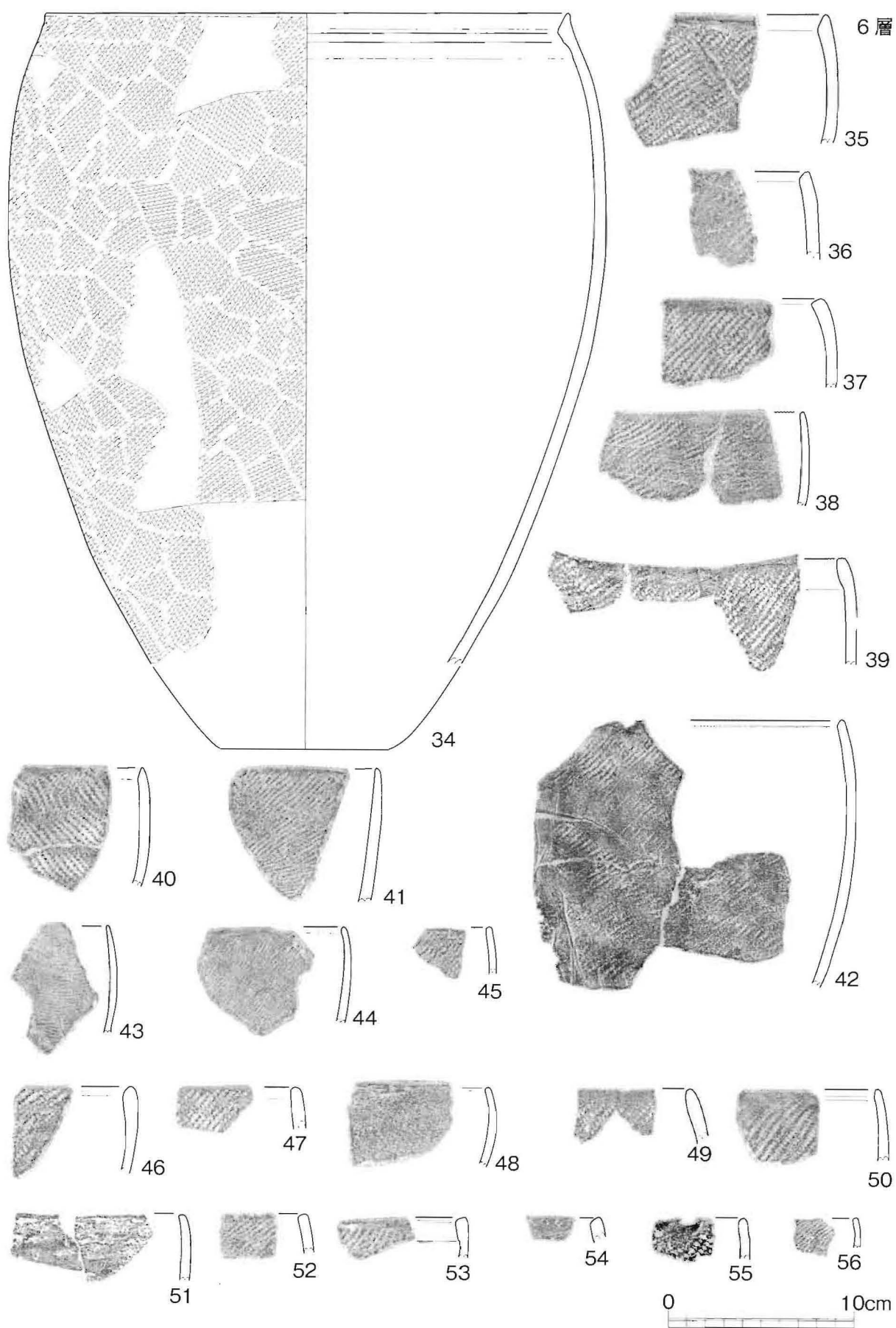
(3)青森県立郷土館（以下、郷土館とする）の発掘資料の利用

青森県立郷土館が1994年に調査した旧トレンチ（福田・工藤1997）は、弘前大学調査のC区と完全に重複したので、郷土館の発掘資料についても調査を行った（福田・工藤1997）。その結果、両者の発掘資料が接合して完全な形に復元できたものもあった(C199)。本報告書に利用した郷土館の資料は、「郷土館○」（○は数字）という形で示したが、弘前大学の口縁部資料と接合し出土層位の分かるものは、弘前大学の発掘品と同じ扱いをした。

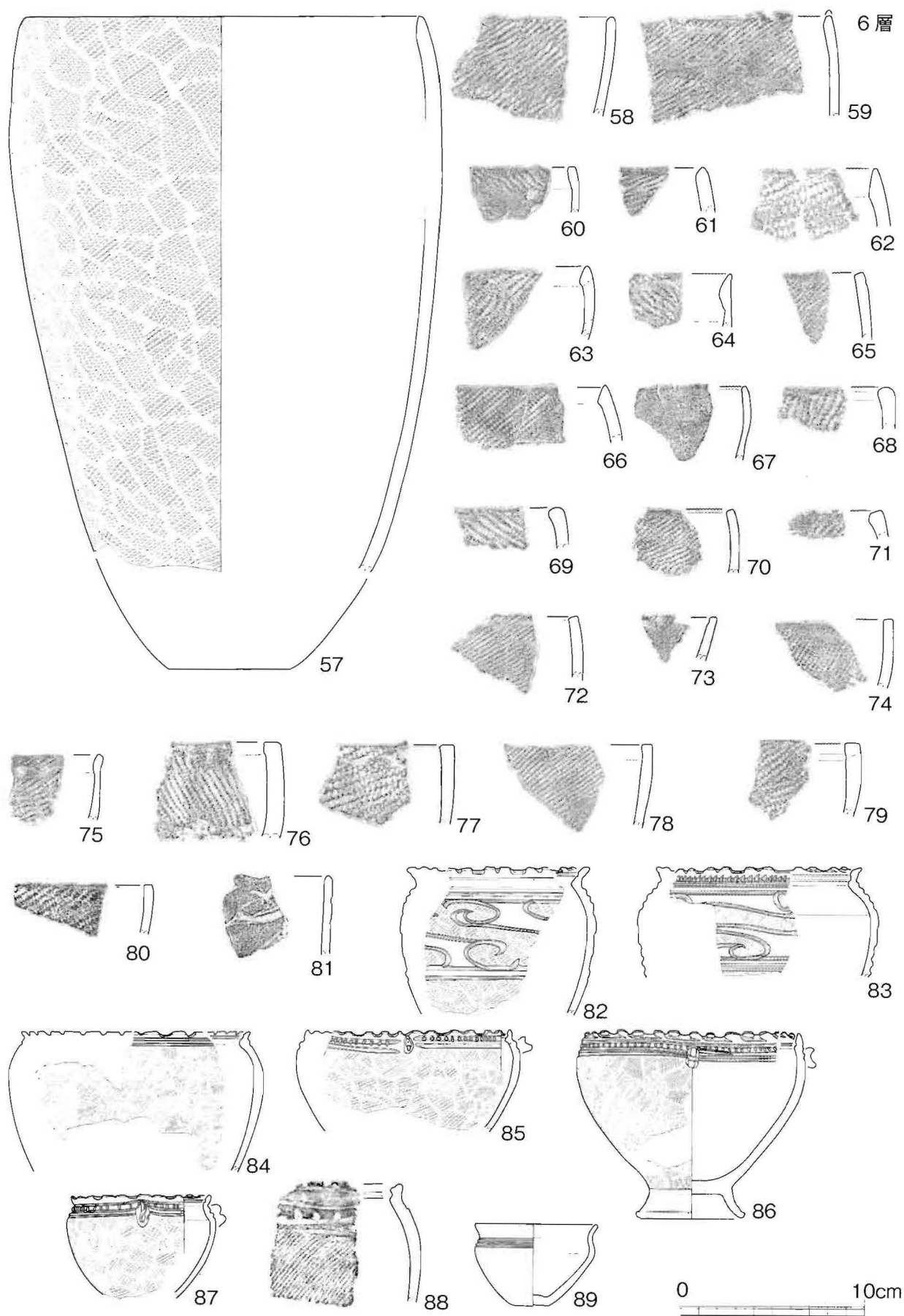
本報告書で利用した郷土館 1～19の資料（図・区・層位は福田・工藤1997による）					
	図版番号・区・層位	7	図16-26.C2. V 中	14	図19-54.C2. V 中
1	図14-12.C2. V・V 中	8	図16-29.C2. V 下	15	図19-58.C2. V 中
2	図14-13.C2. V 中	9	図16-31.C2. V・中／VI	16	図19-64.C2. V 下
3	図14-14.C2. V	10	図17-34.C2. V 中	17	図22-119.C2. V 下
4	図14-17.C2. V	11	図17-42.C2. V 上・中	18	図21-99.C2. V
5	図15-21.C2. V 中	12	図18-46.C2. V・上・中	19	図17-44.C2. V 上
6	図15-24.C2. V 中	13	図18-51.C2. V 上・中		



第8図 A区出土土器 1～33



第9図 A区出土土器34~56

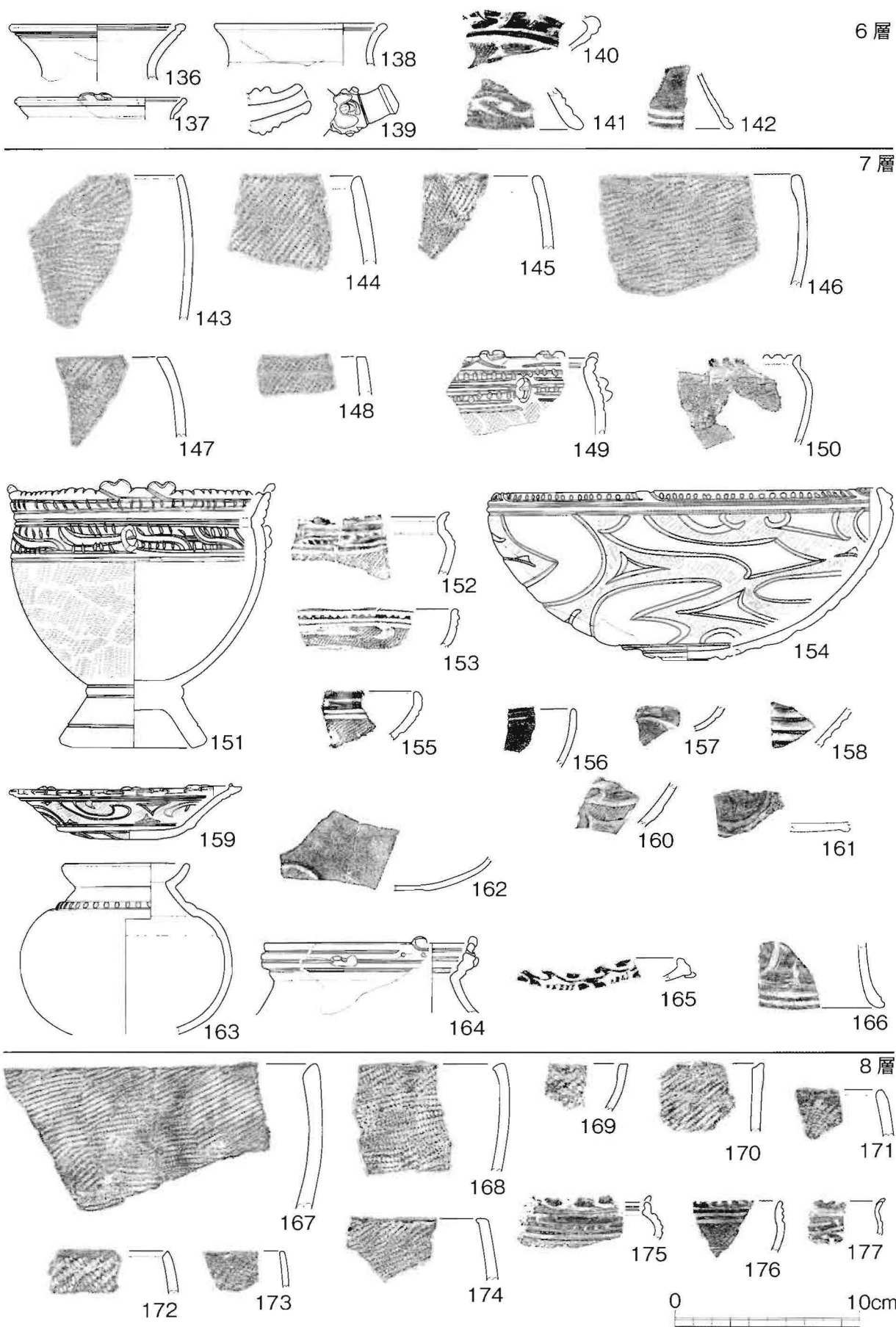


第10図 A区出土土器57~89

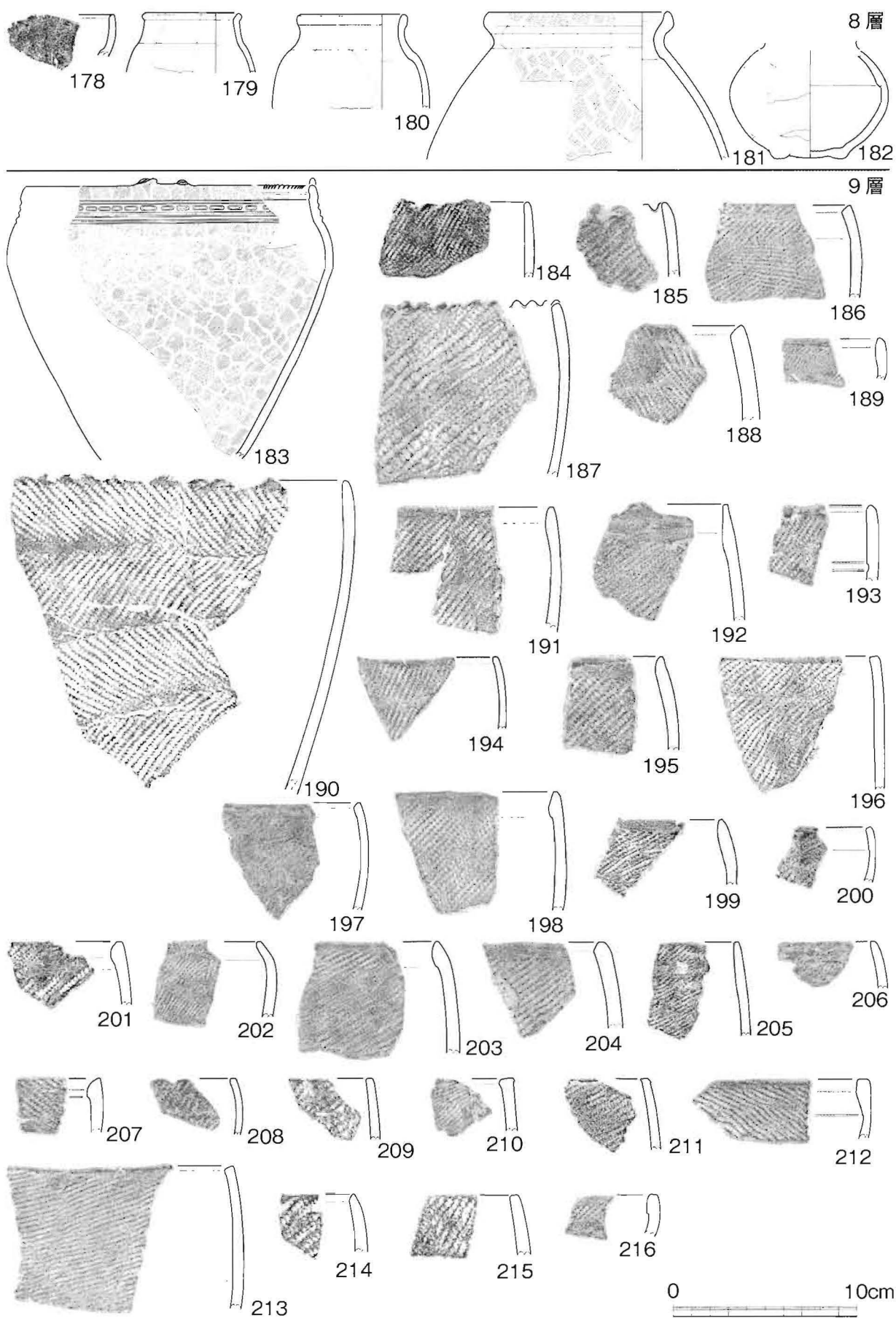




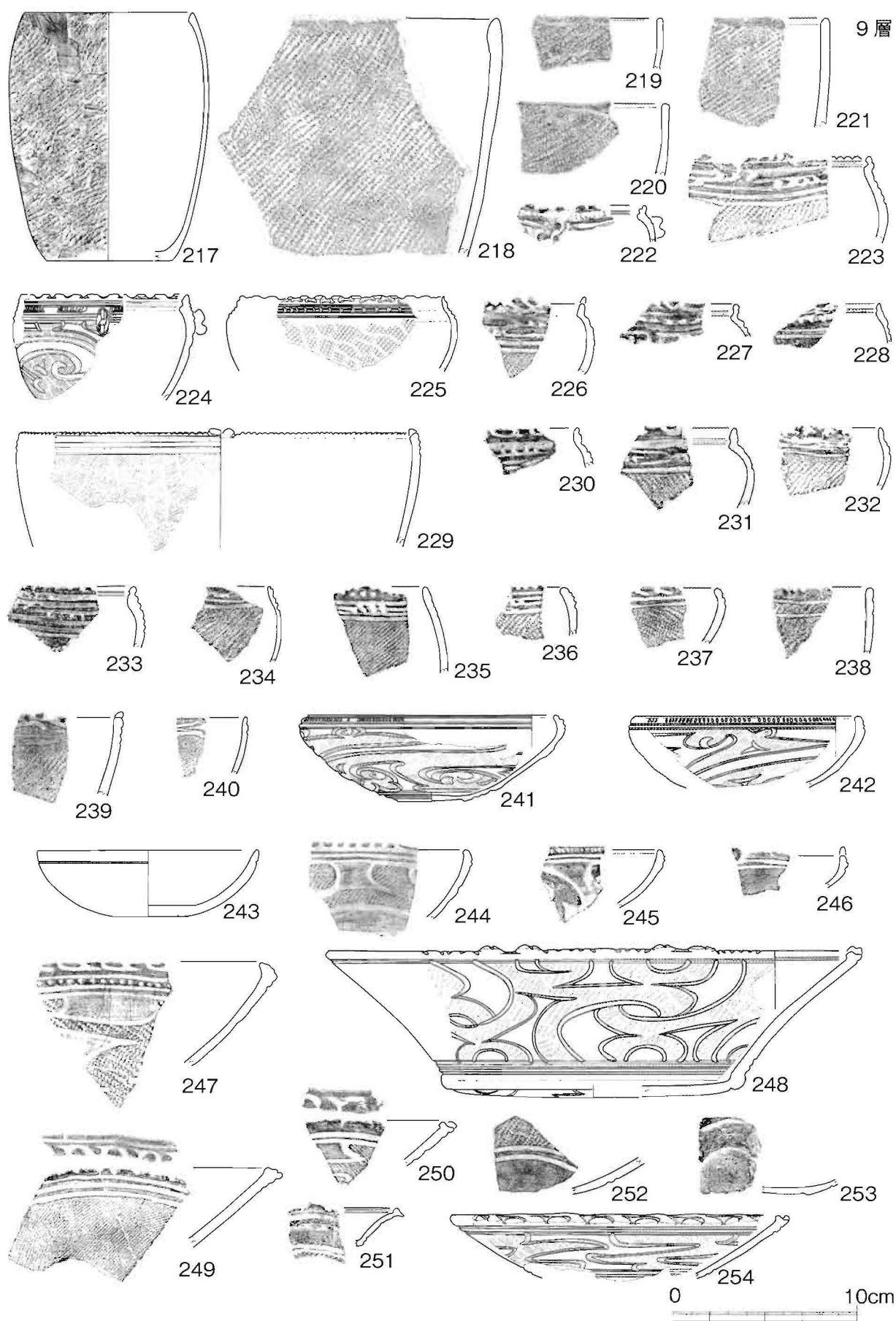
第11図 A区出土土器90~135



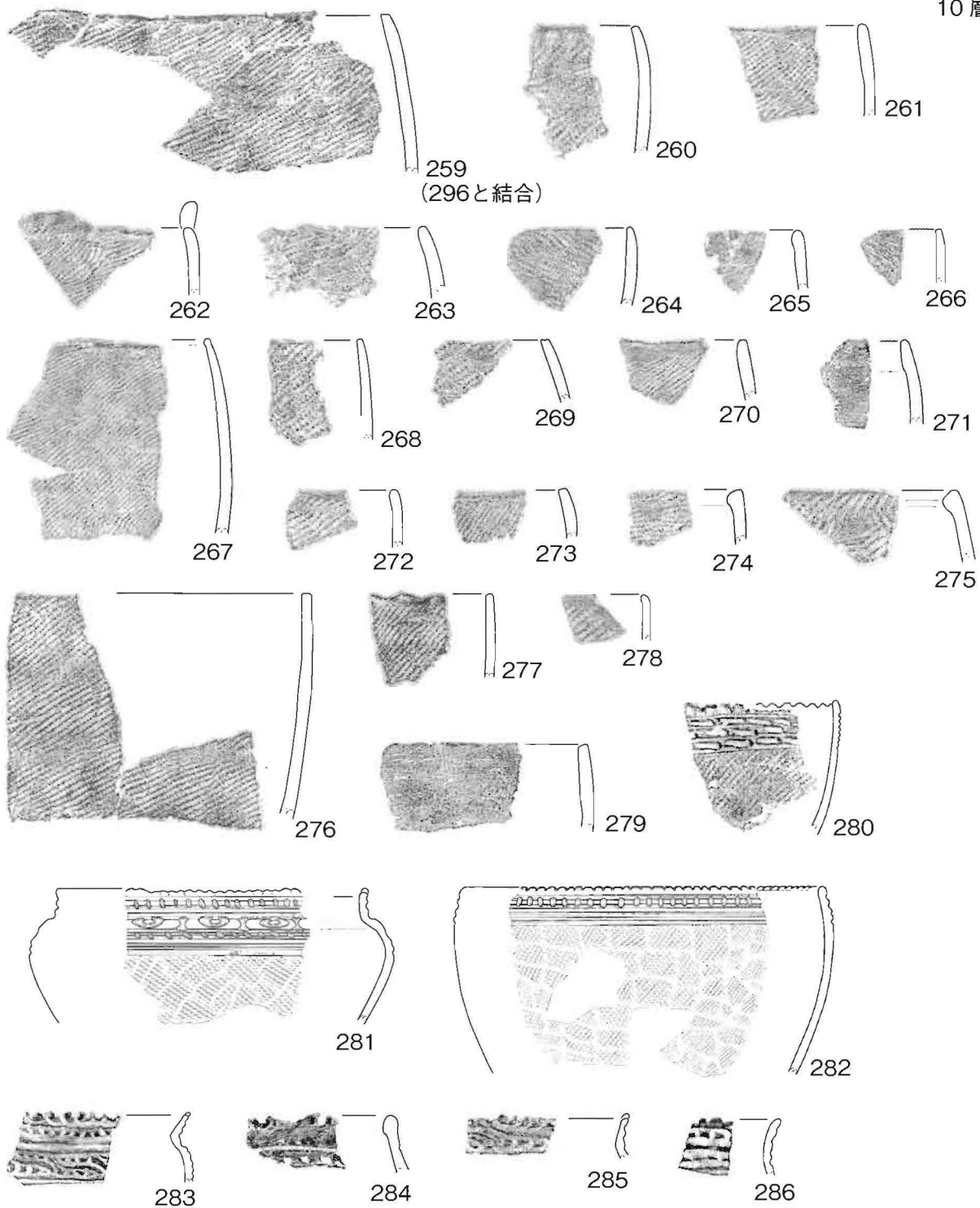
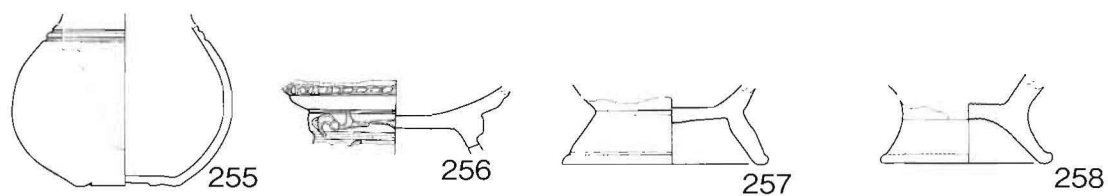
第12図 A区出土土器136~177



第13図 A区出土土器178~216

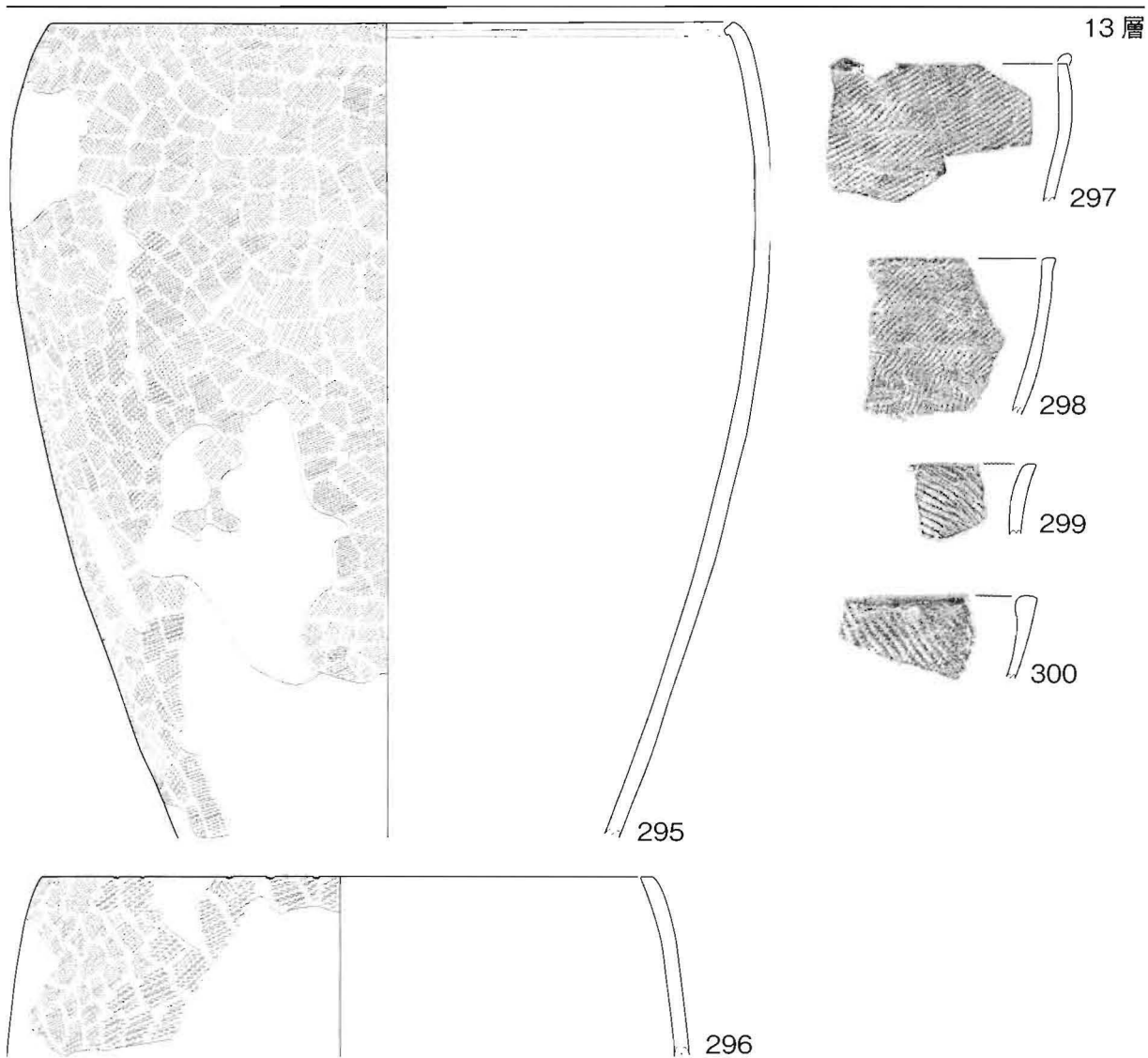
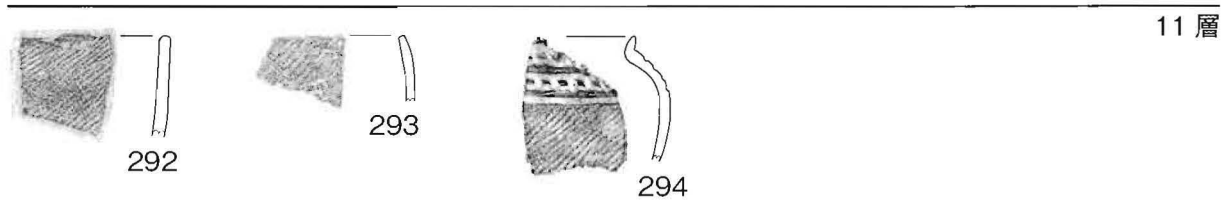
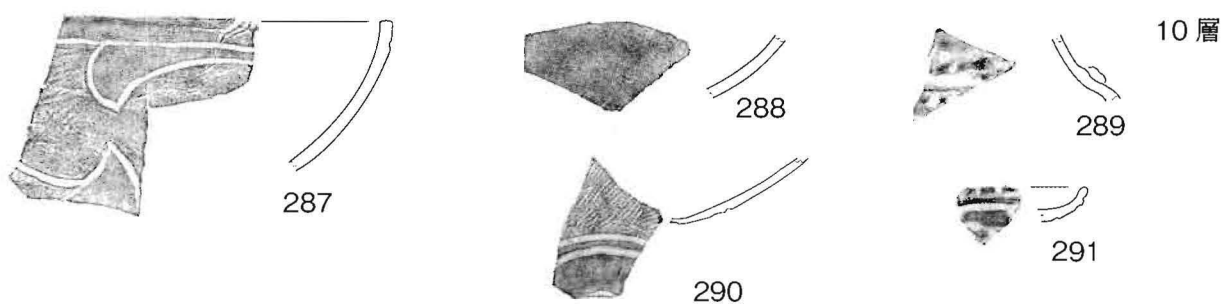


第14図 A区出土土器217~254



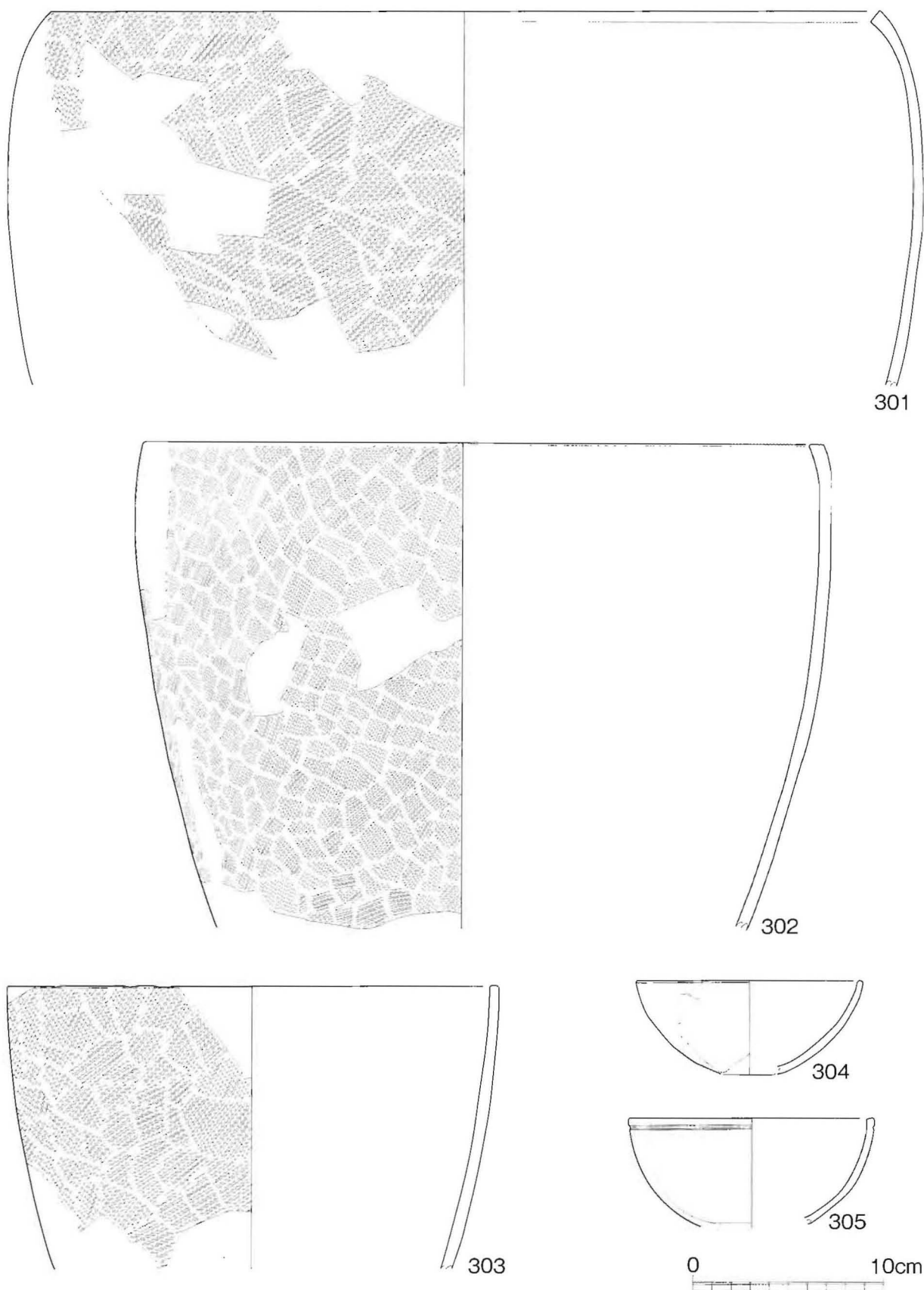
第15図 A区出土土器255～286





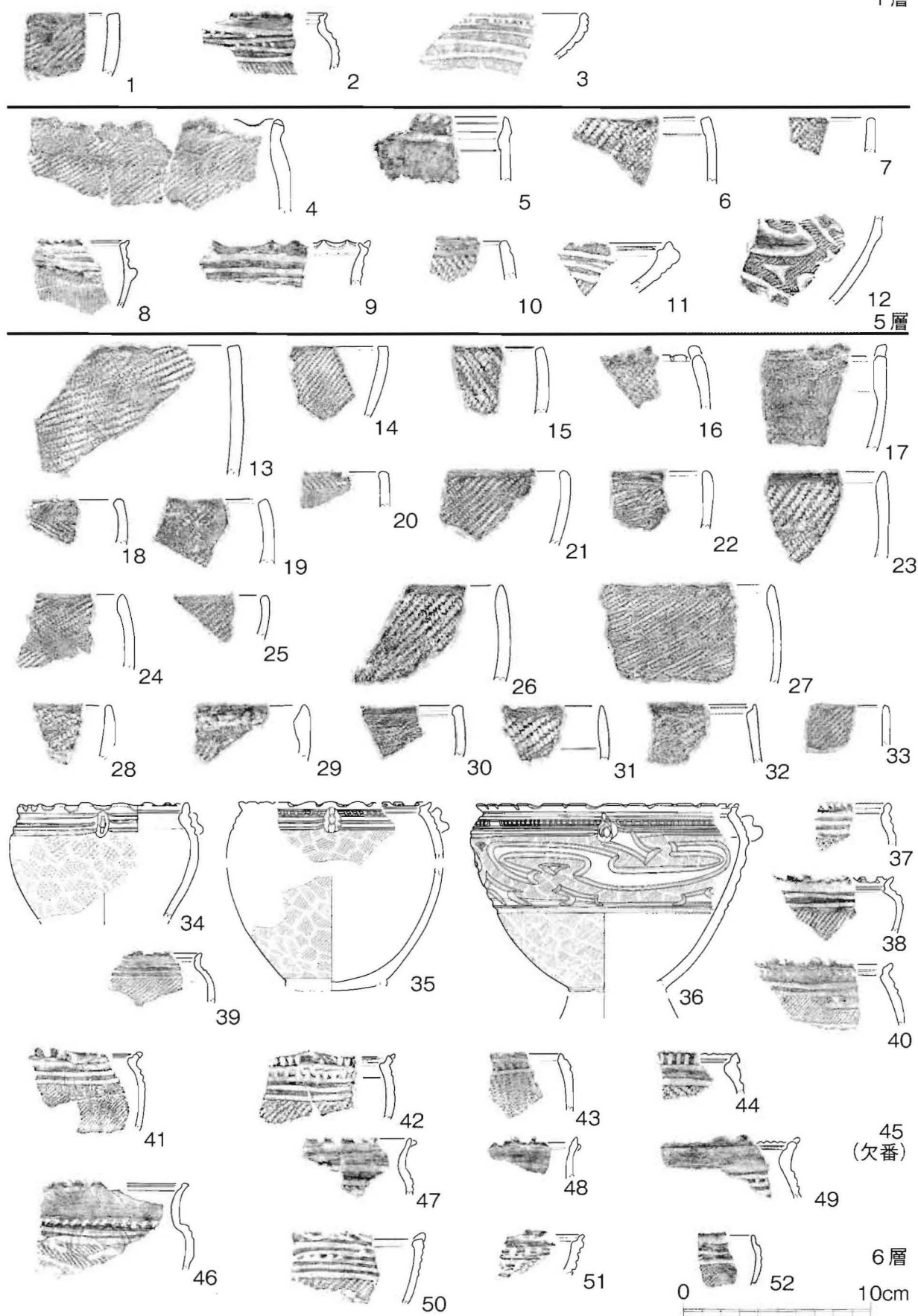
0 10cm

第16図 A区出土土器287～300

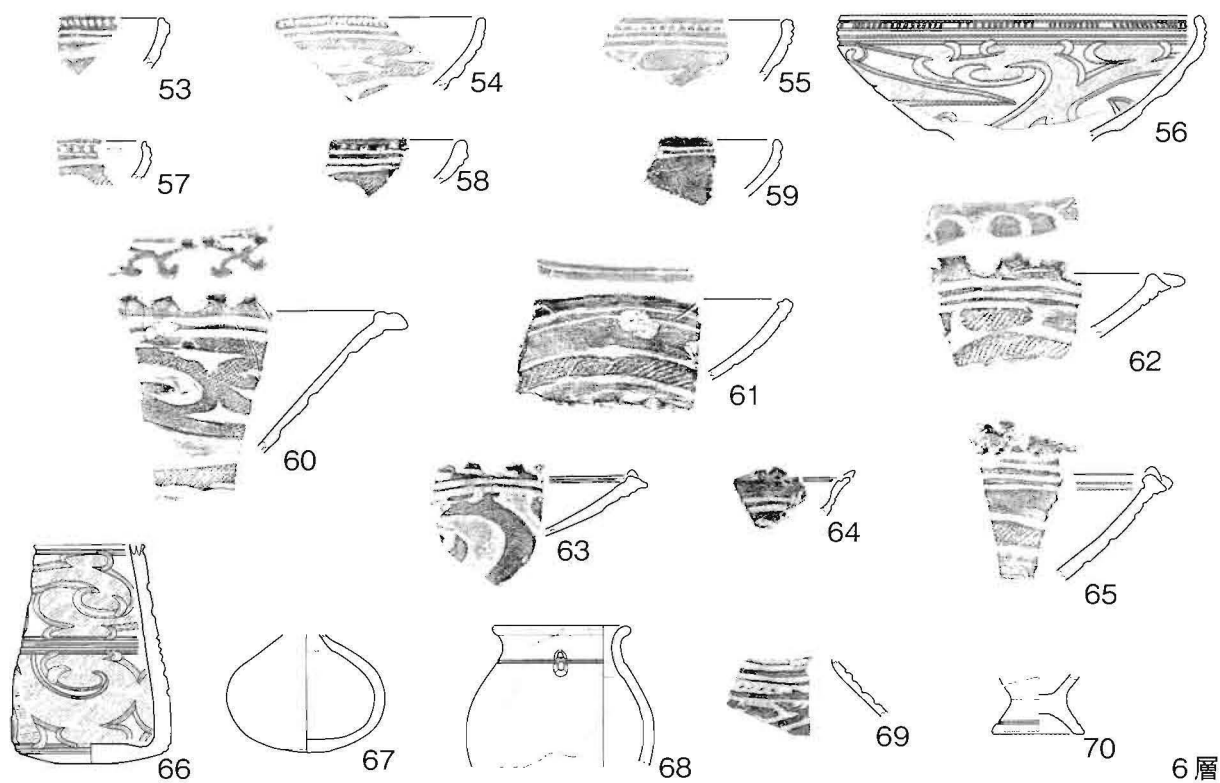


第17図 A区出土土器301～305

1層



第18図 B区出土土器 1～52



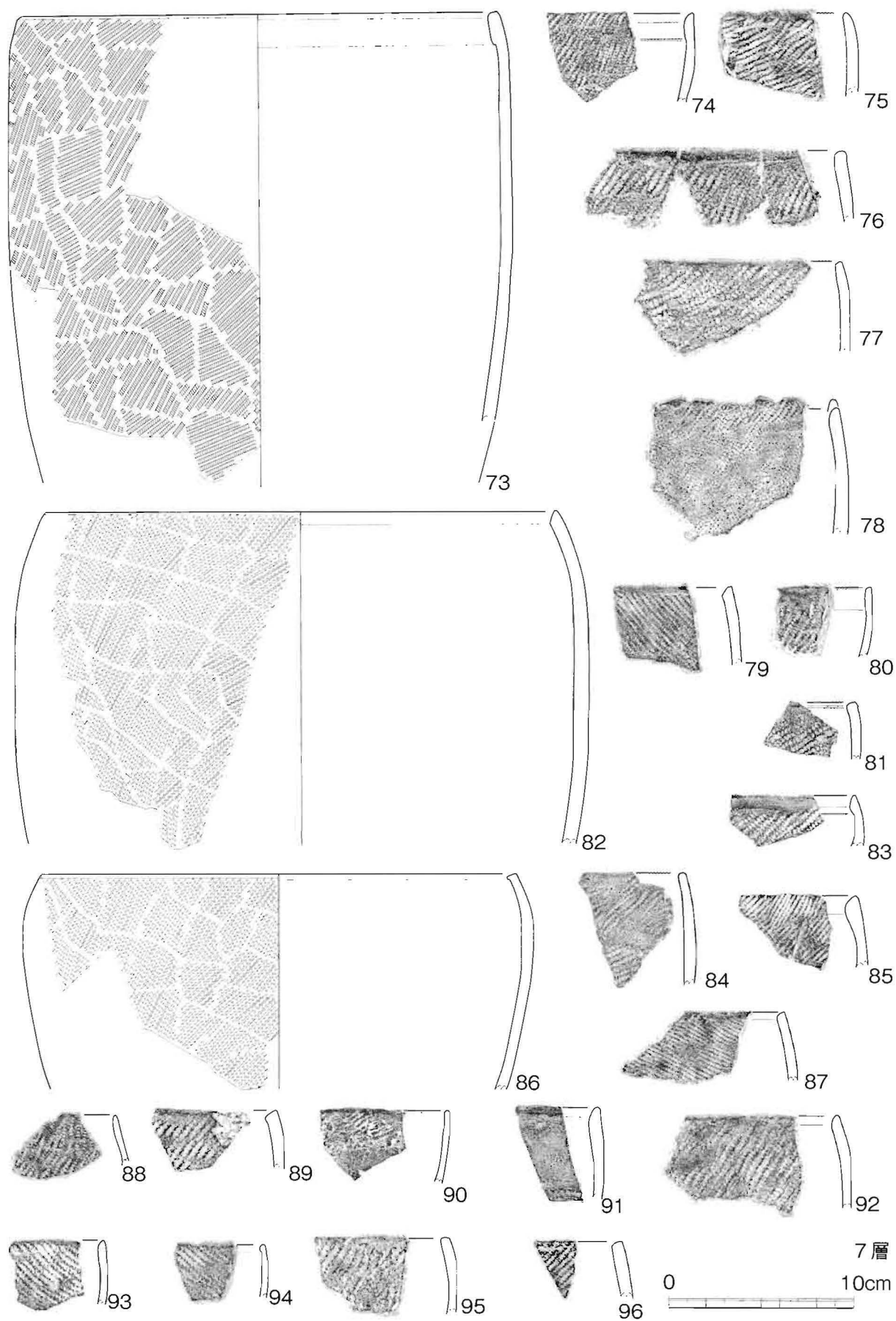
6層



7層

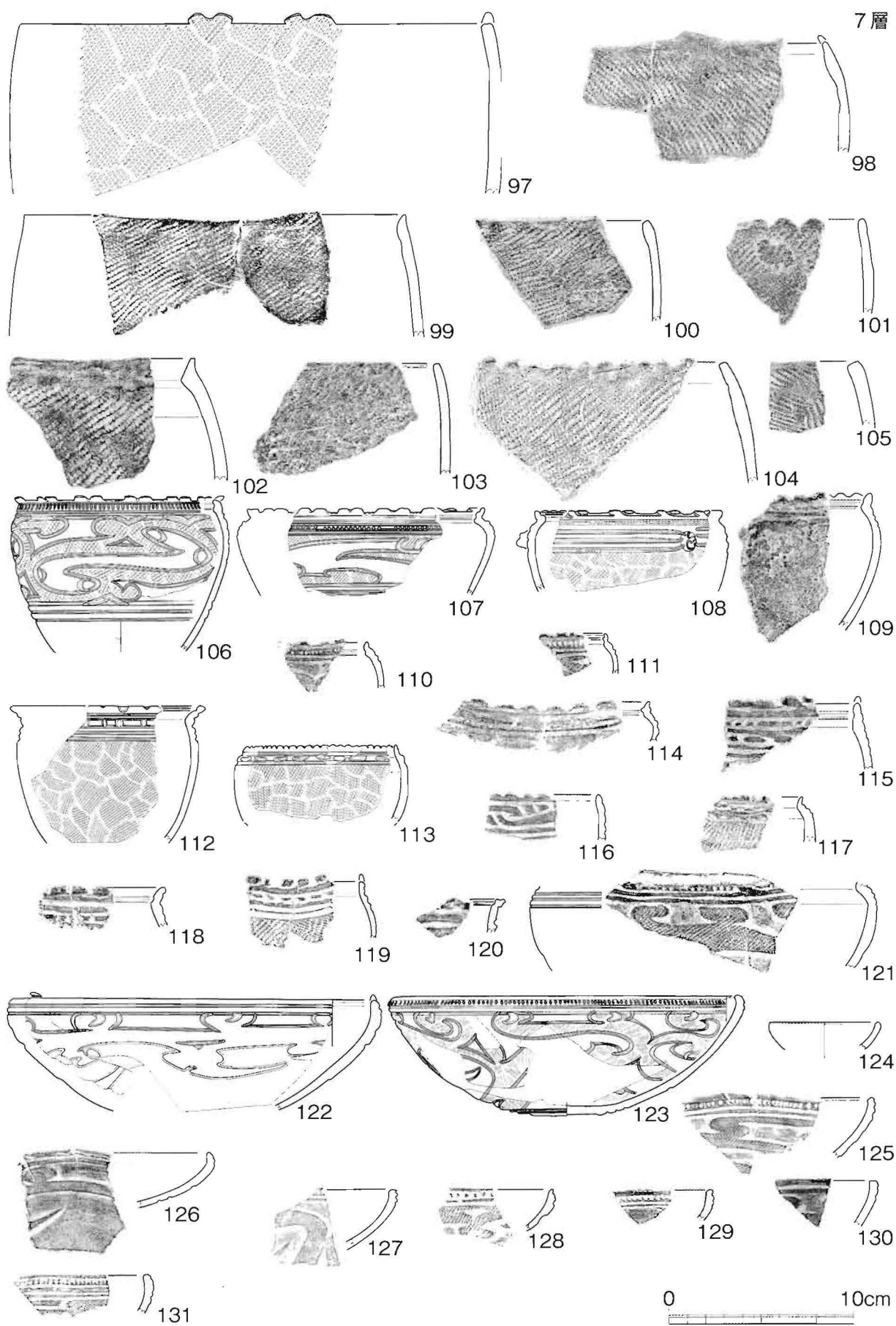
0 10cm

第19図 B区出土土器53~72

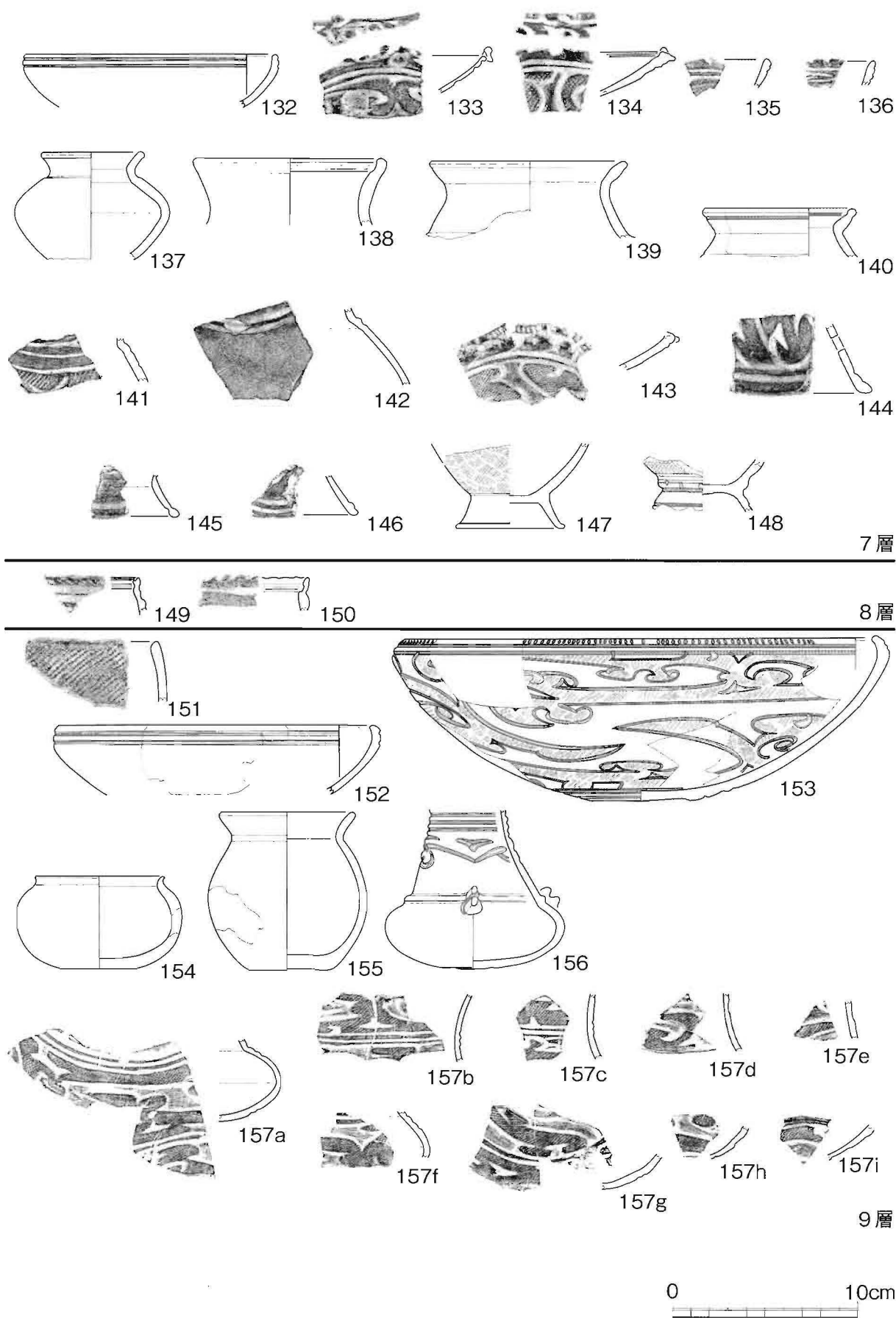


第20図 B区出土土器73~96

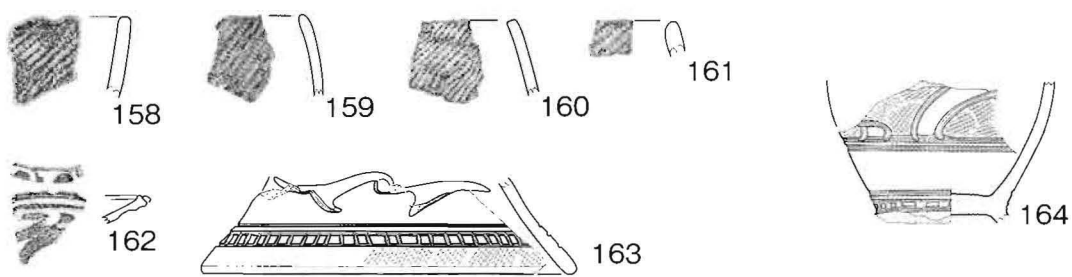




第21図 B区出土土器97~131

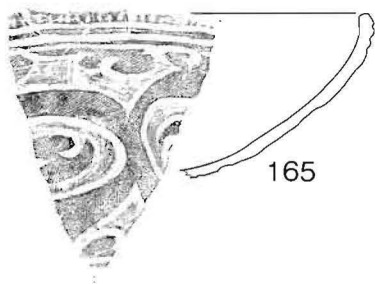


第22図 B区出土土器132~157

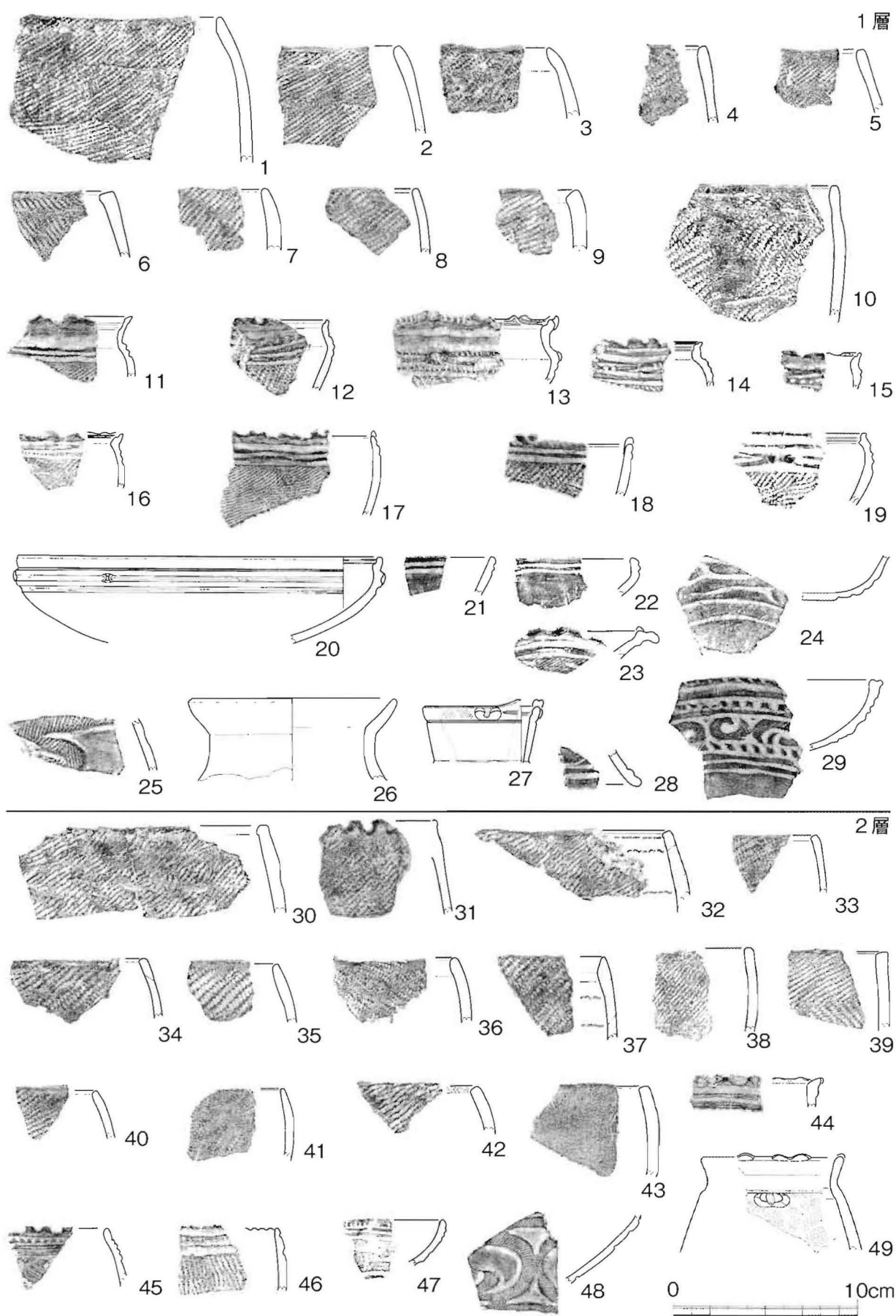


15層

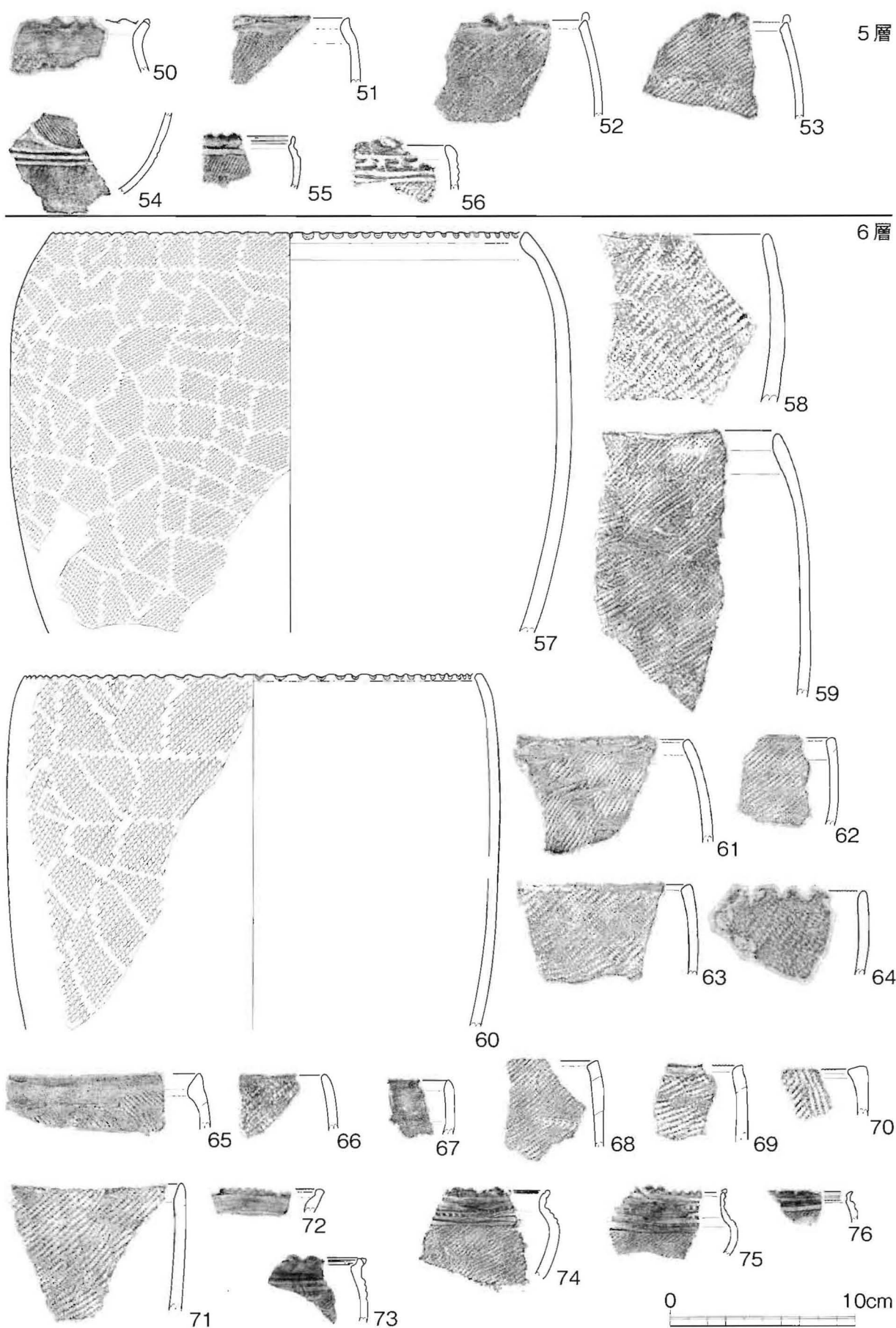
試掘



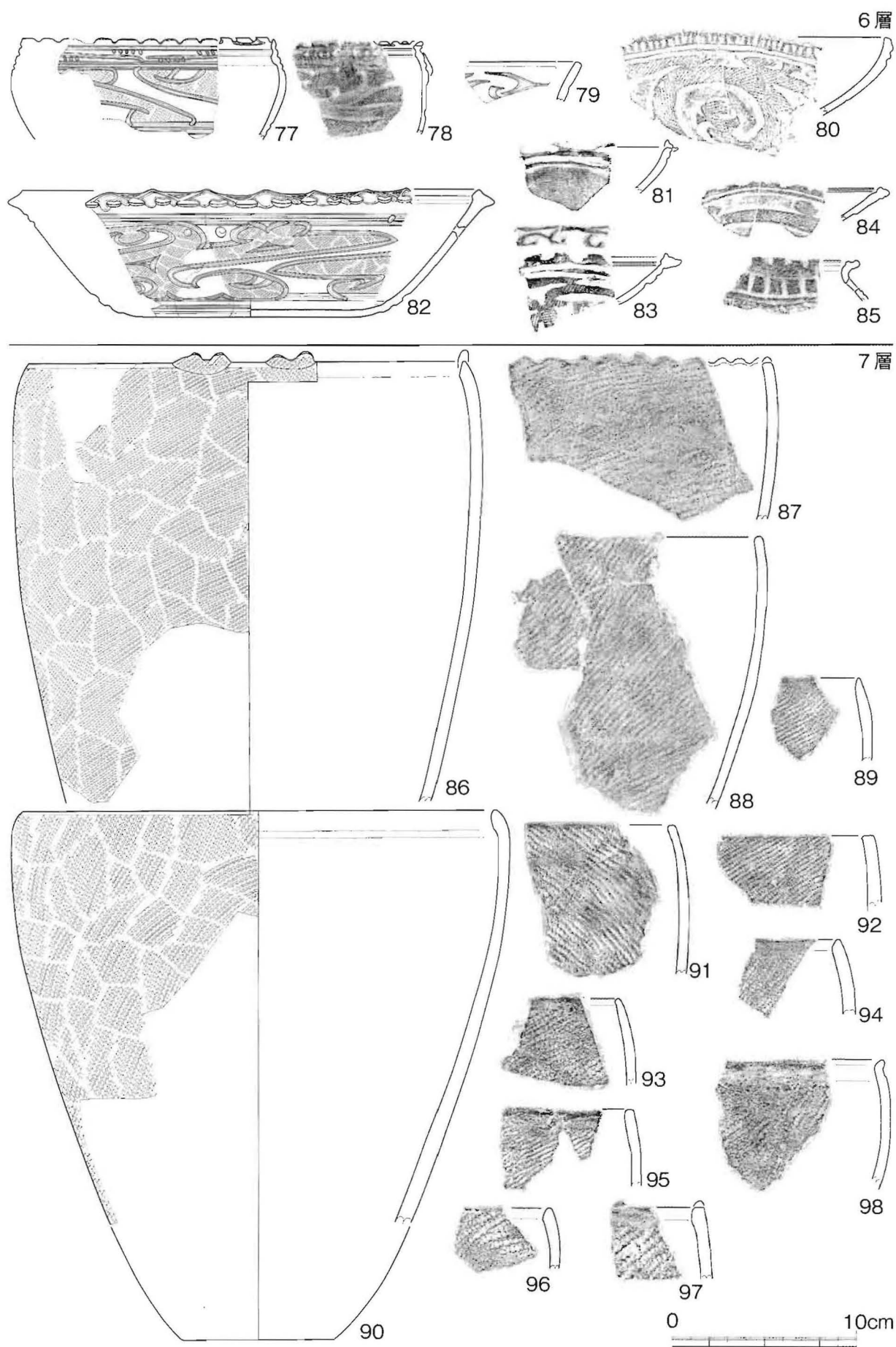
第23図 B区出土土器158～165



第24図 C区出土土器 1～49

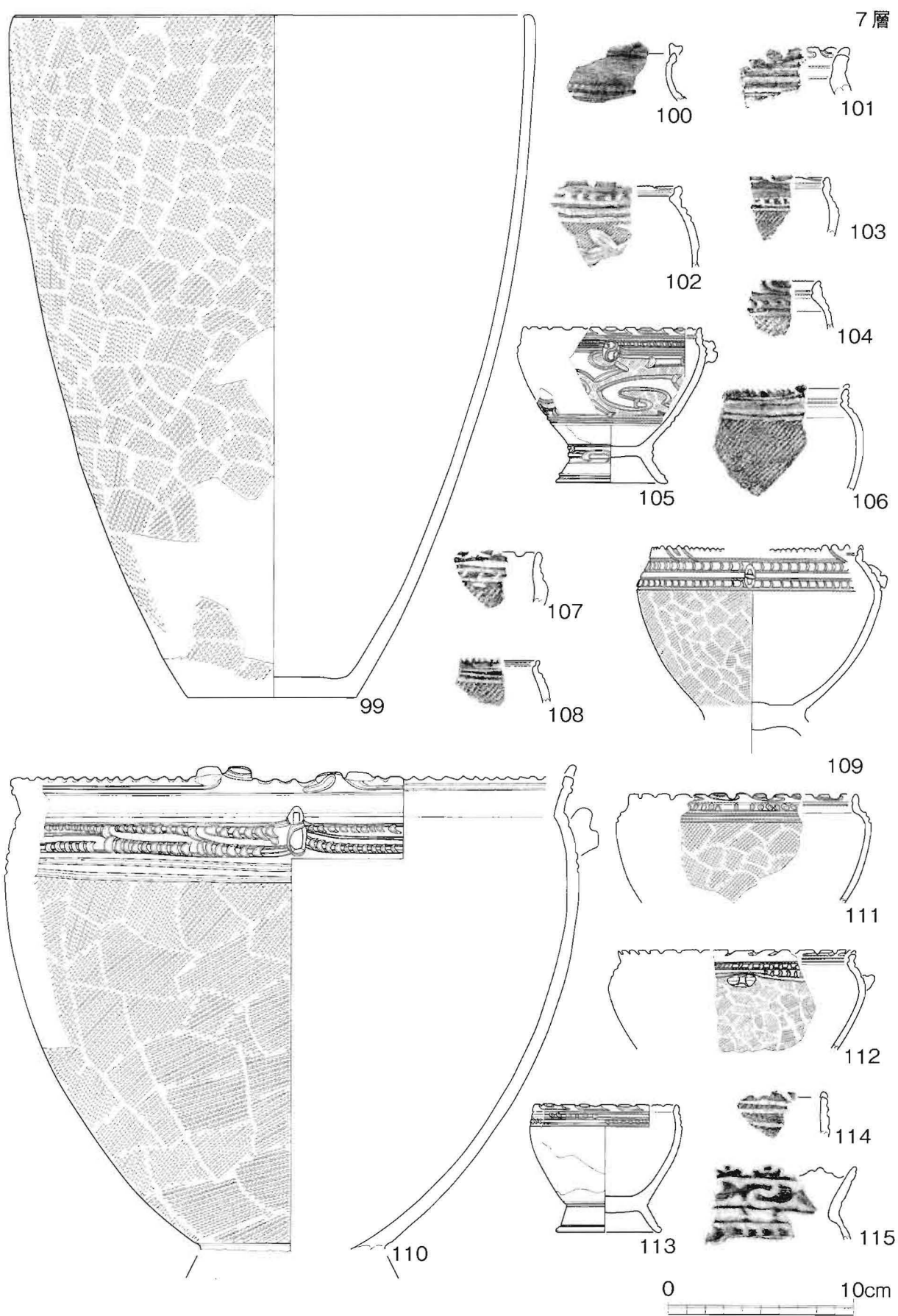


第25図 C区出土土器50~76

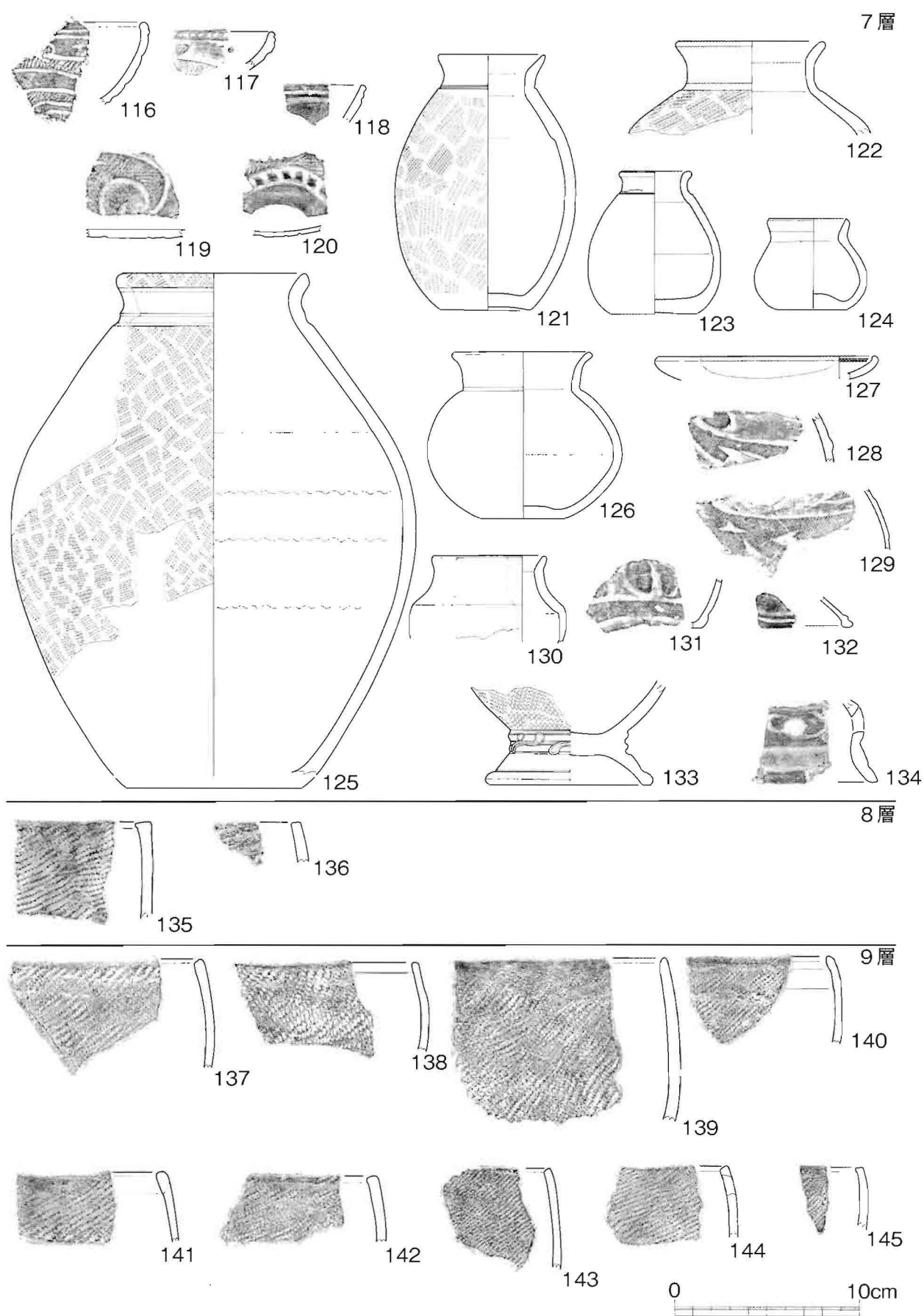


第26図 C区出土土器77~98



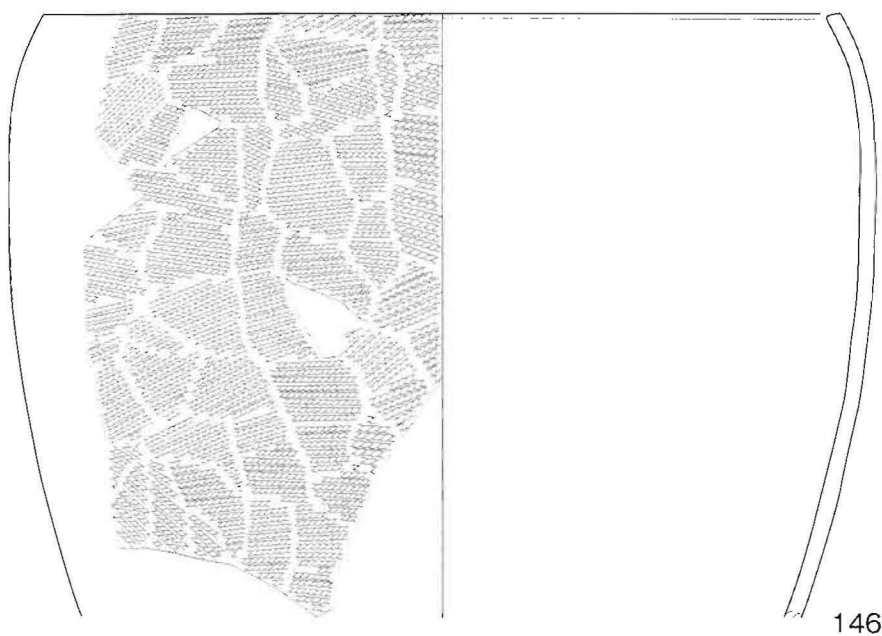


第27図 C区出土土器99~115

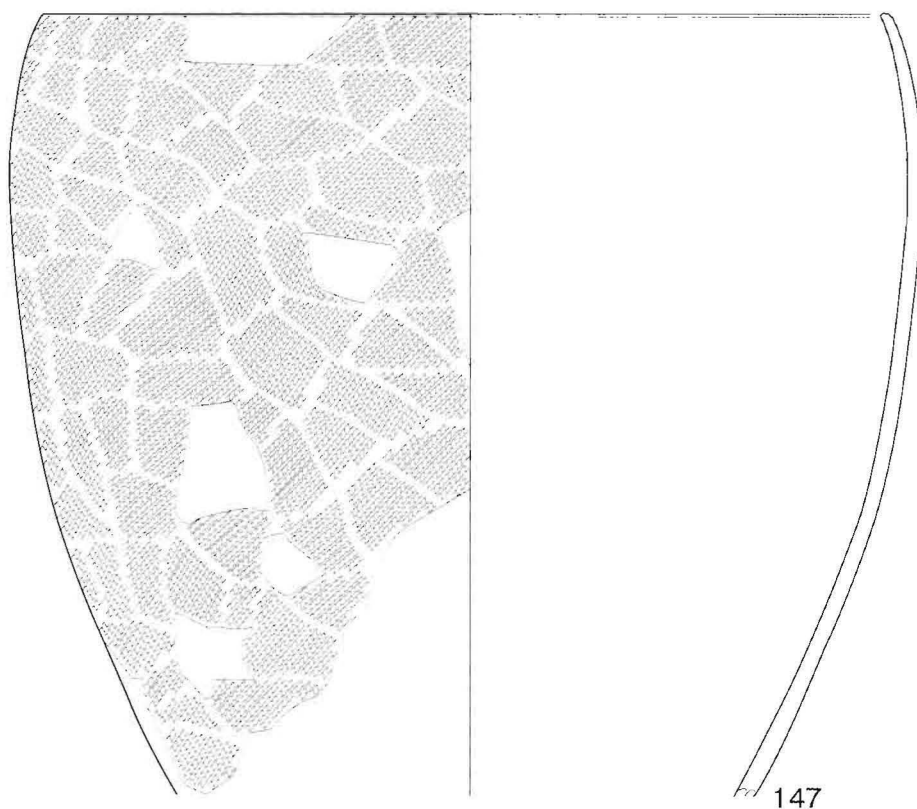


第28図 C区出土土器116~145

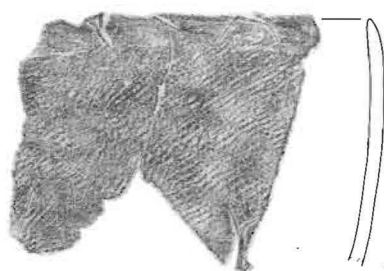
9層



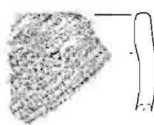
146



147



148



149

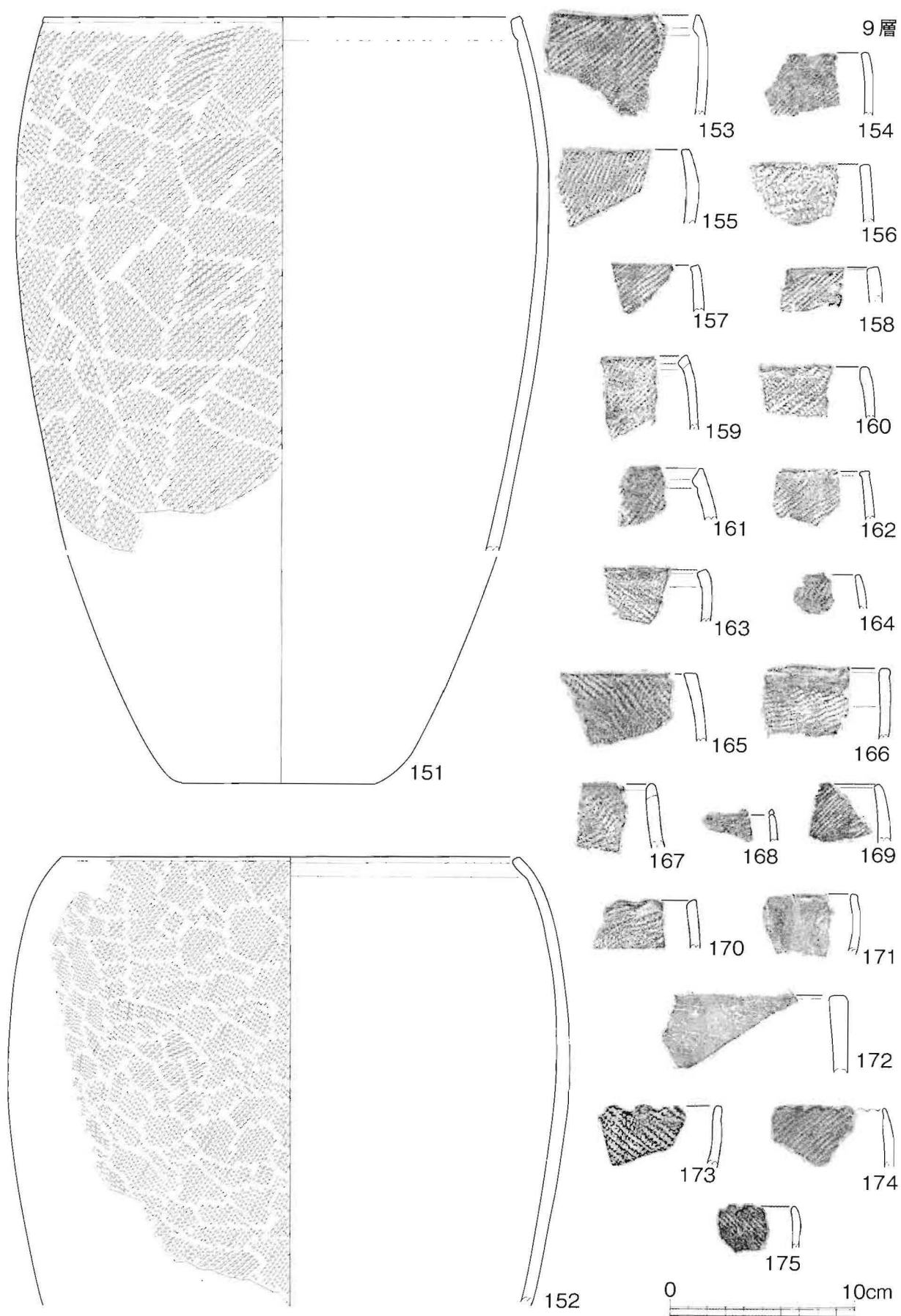


150

0 10cm

第29図

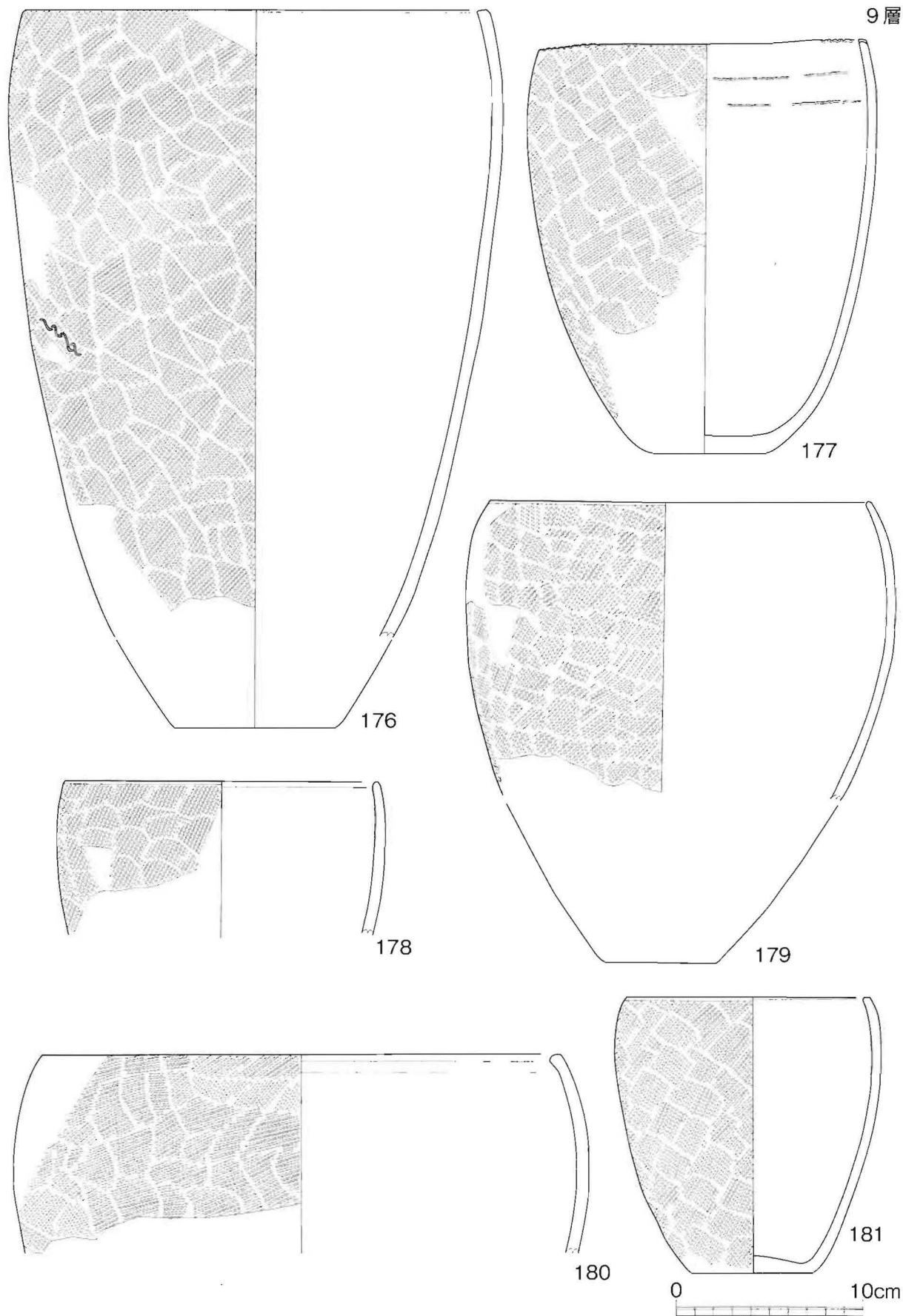
C区出土土器146～150



第30図

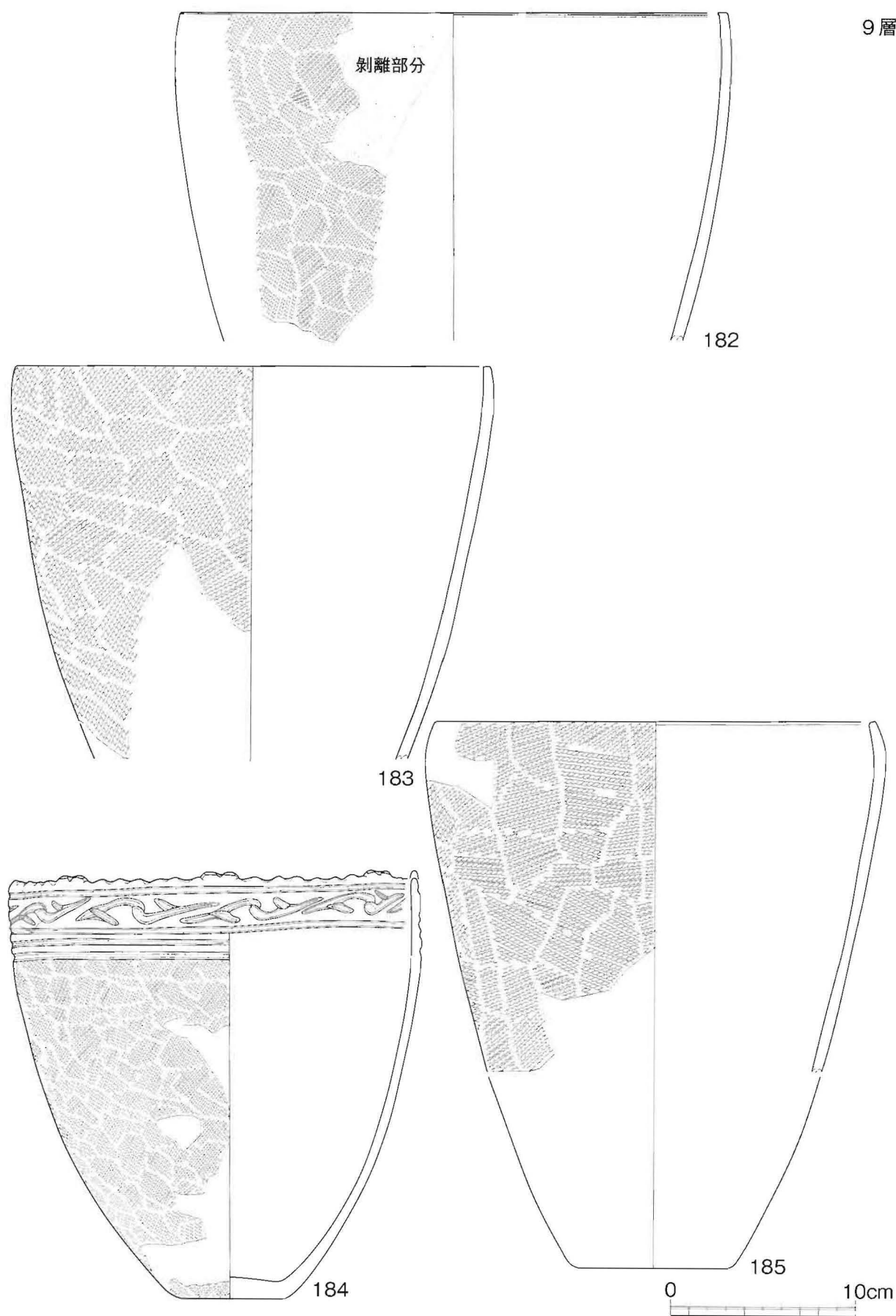
C区出土土器151~175

9層



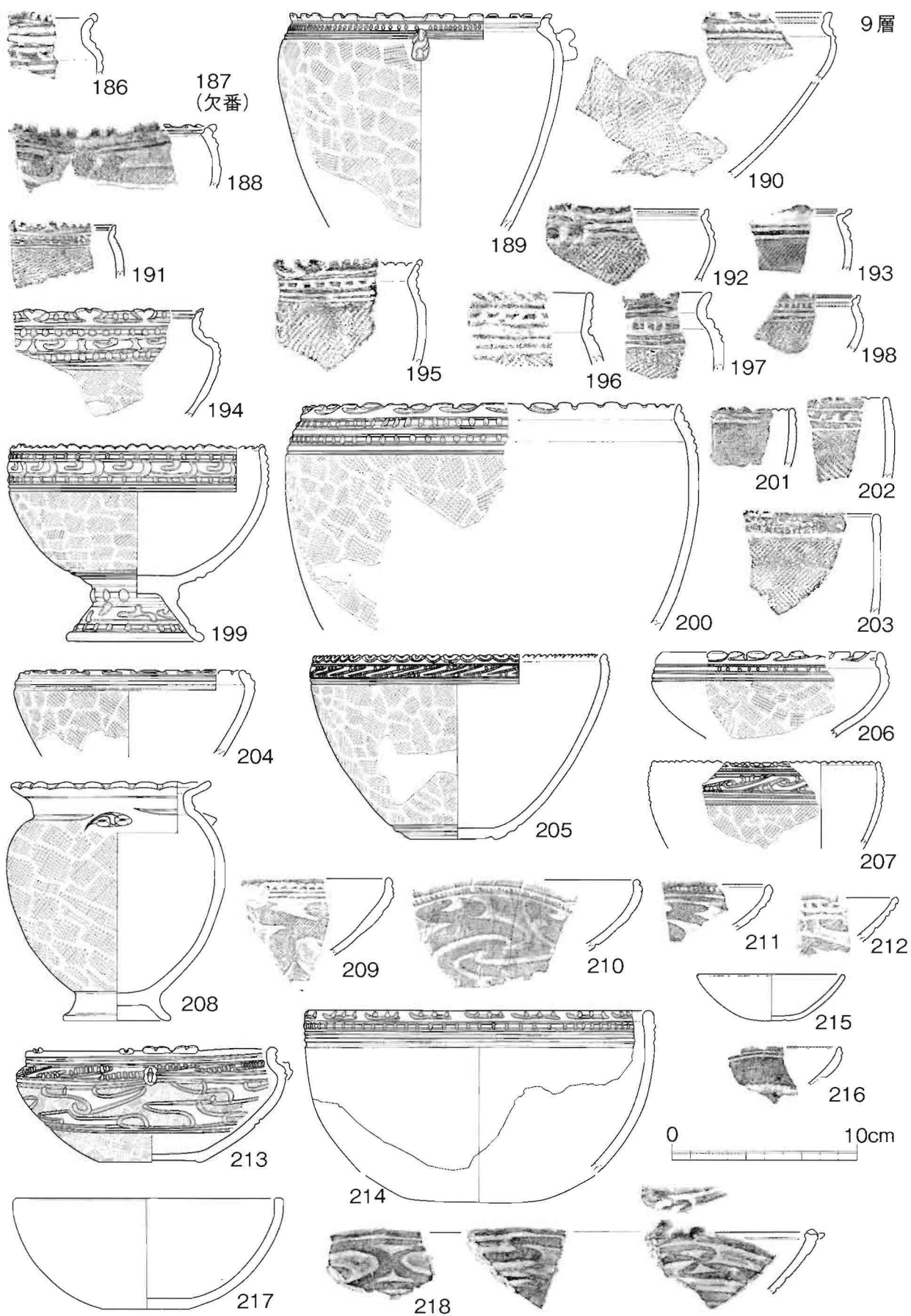
第31図 C区出土土器176~181

9層

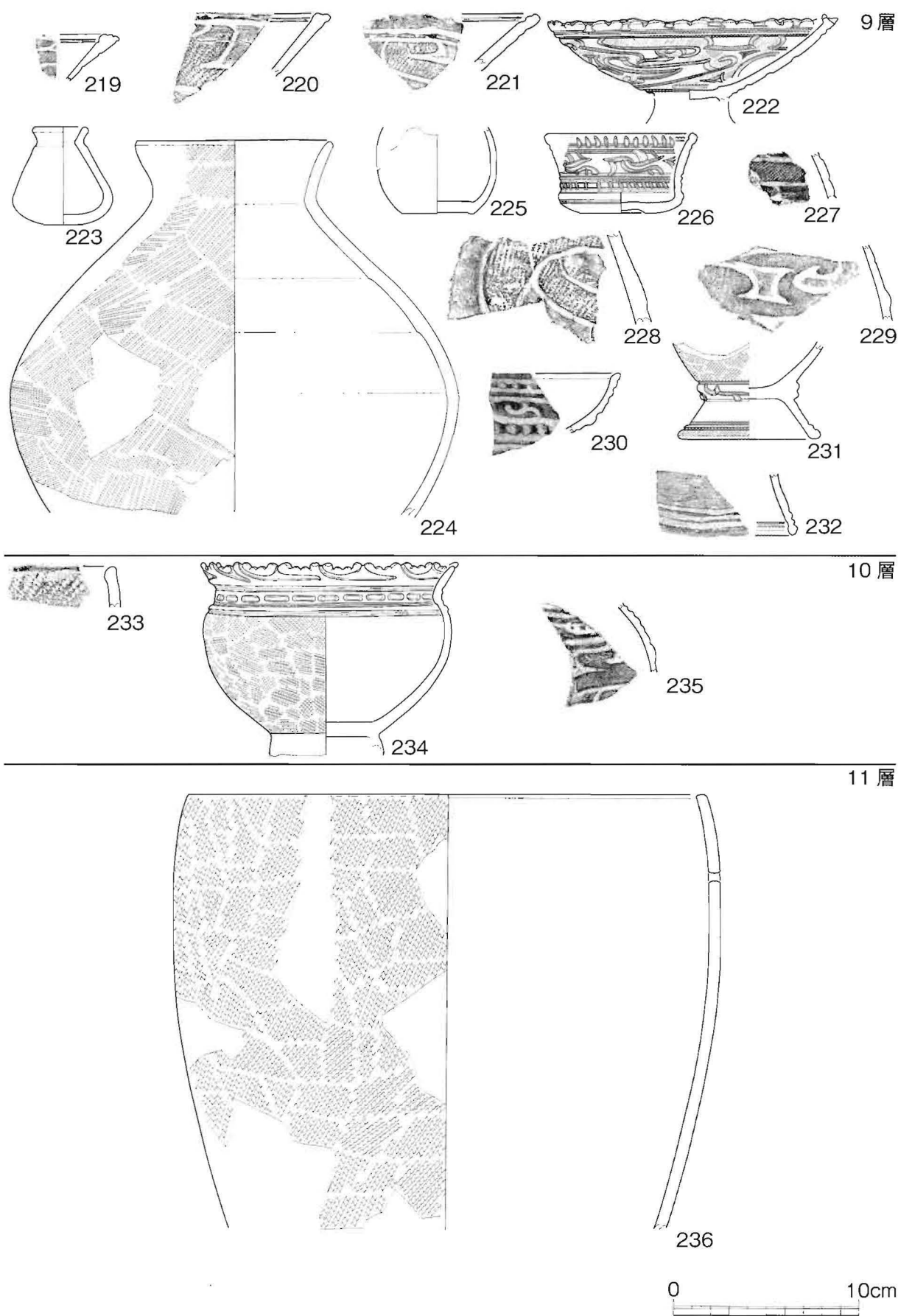


第32図 C区出土土器182～185

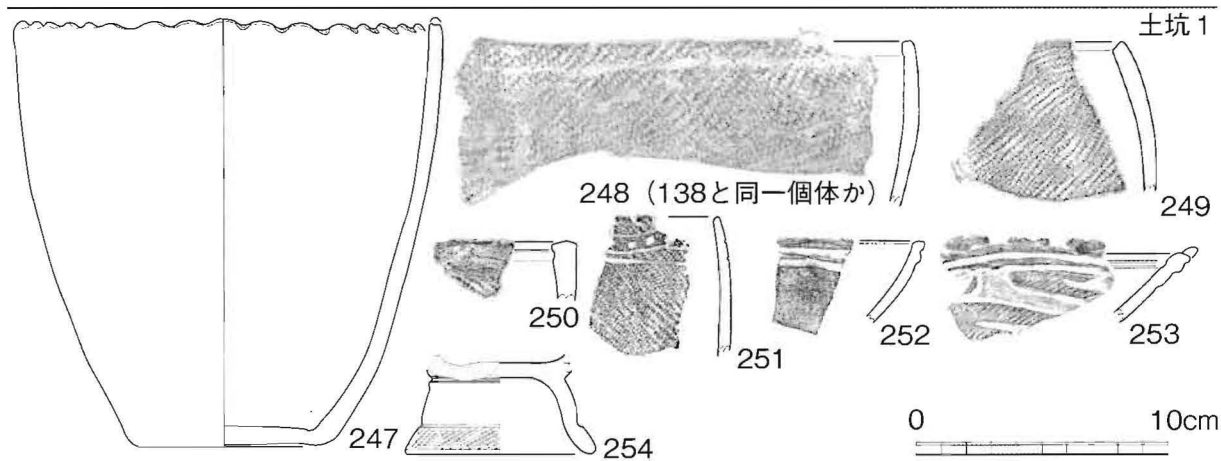
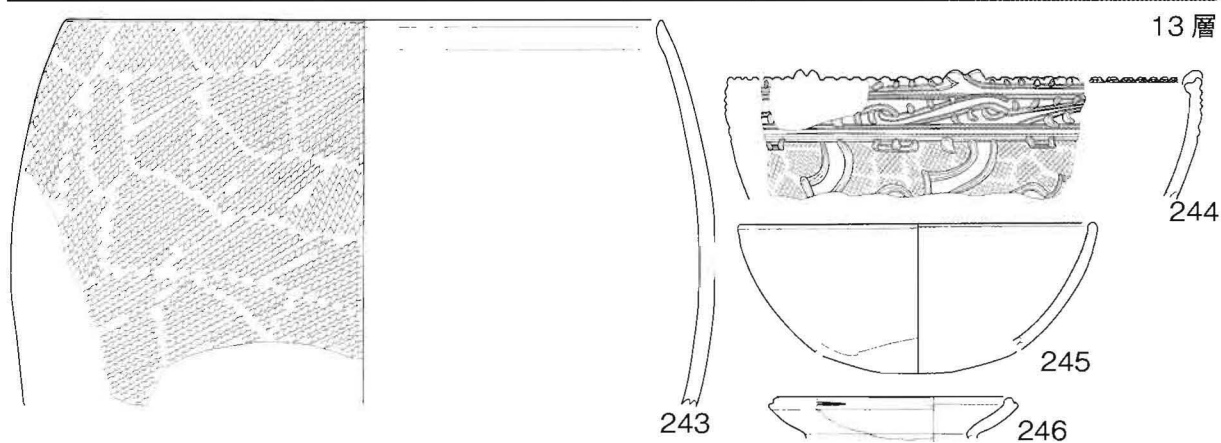
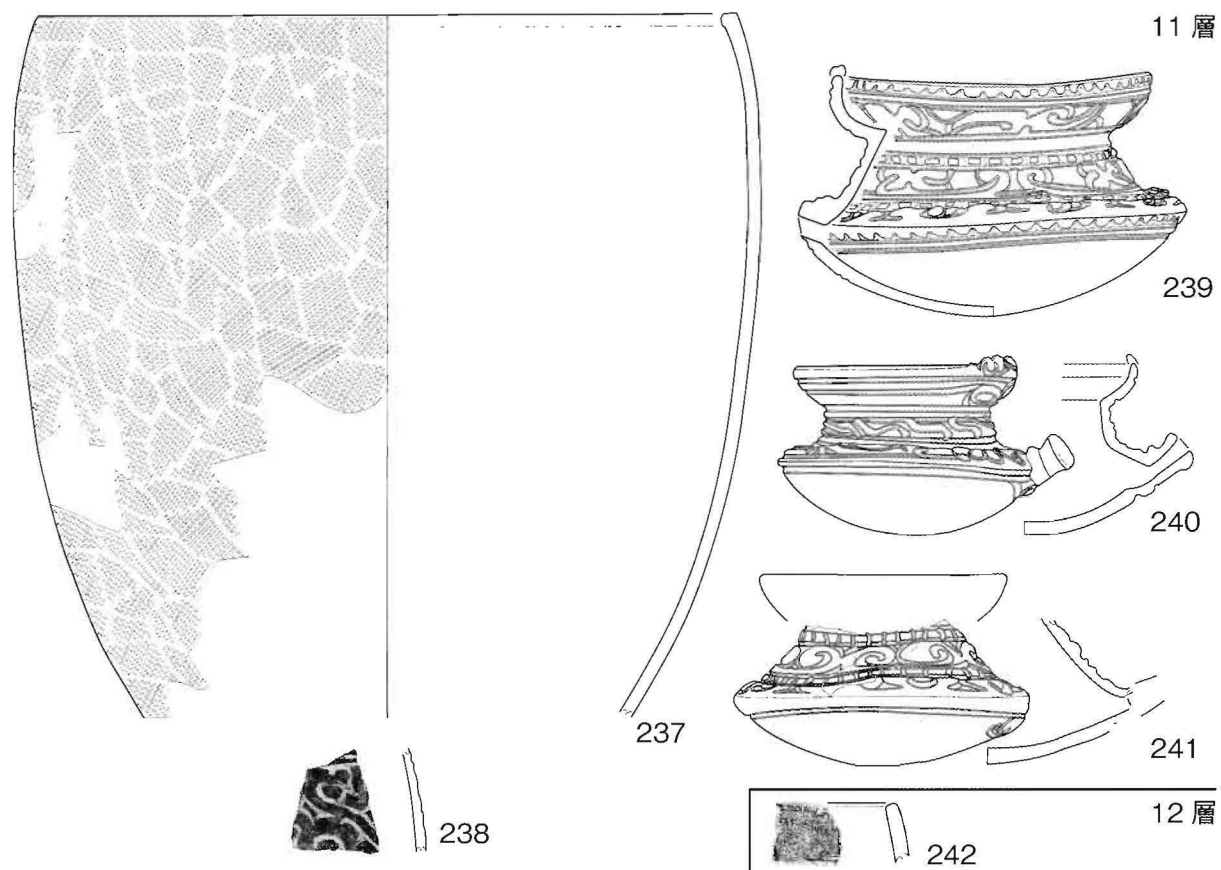




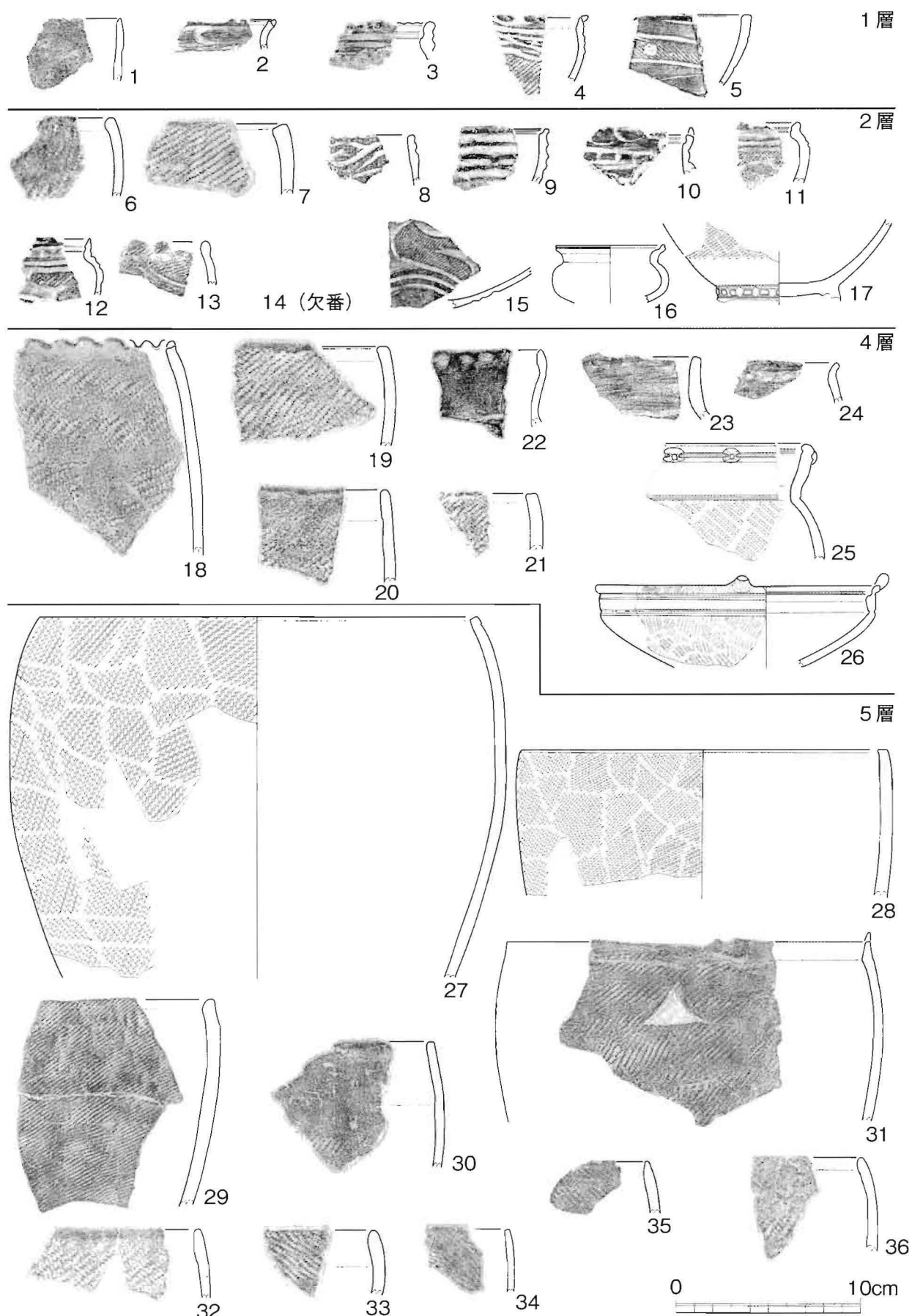
第33図 C区出土土器186~218



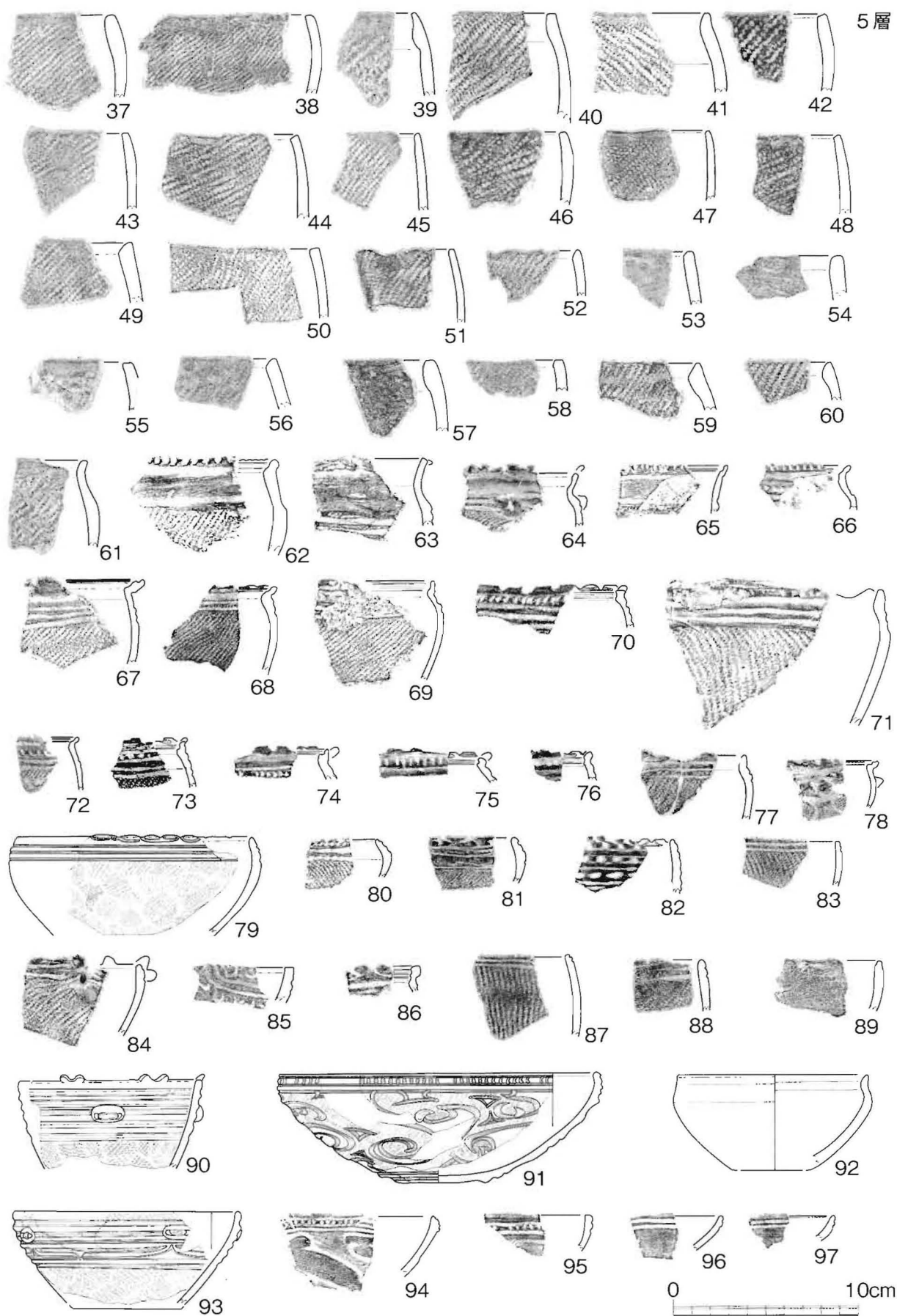
第34図 C区出土土器219~236



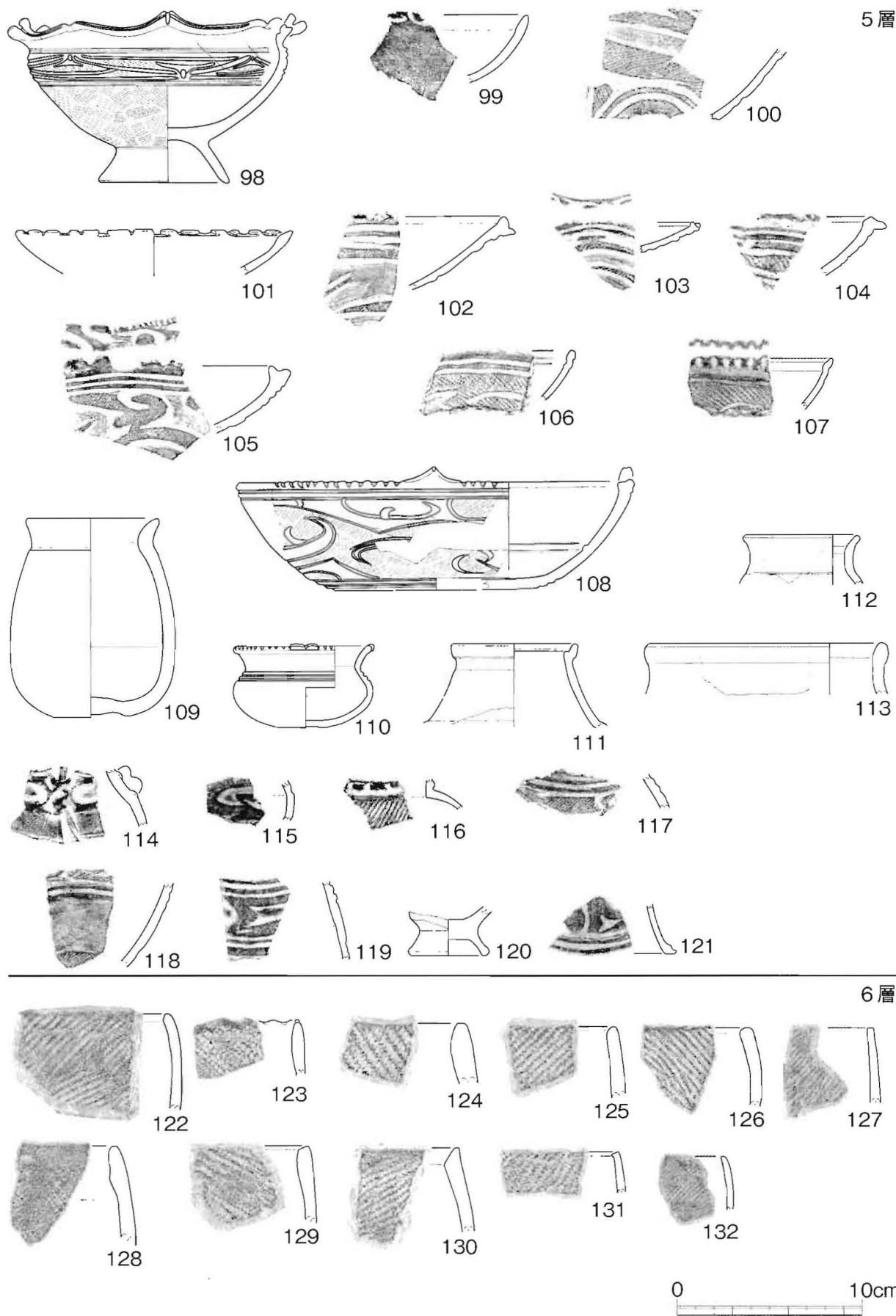
第35図 C区出土土器237～254



第36図 D区出土土器 1～36

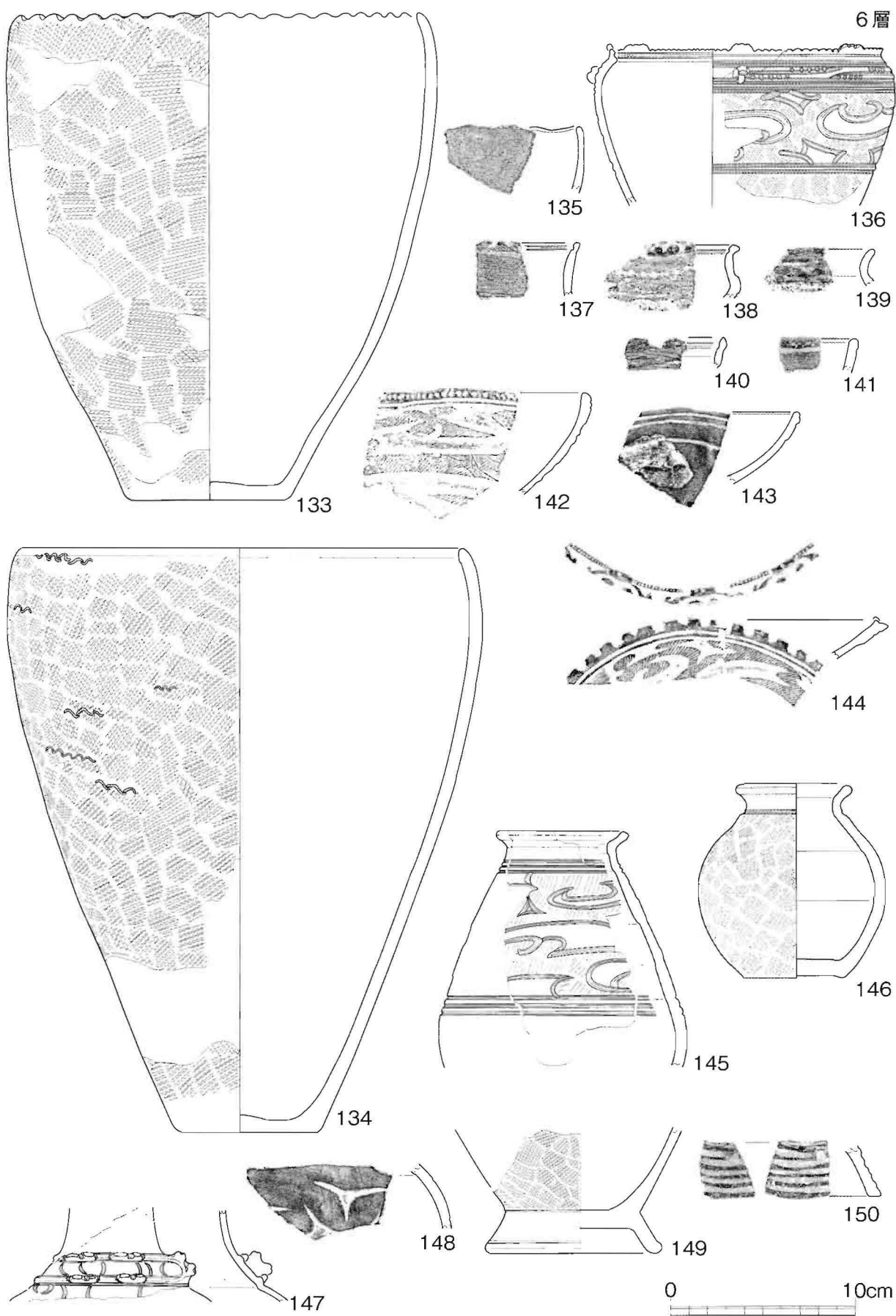


第37図 D区出土土器37~97

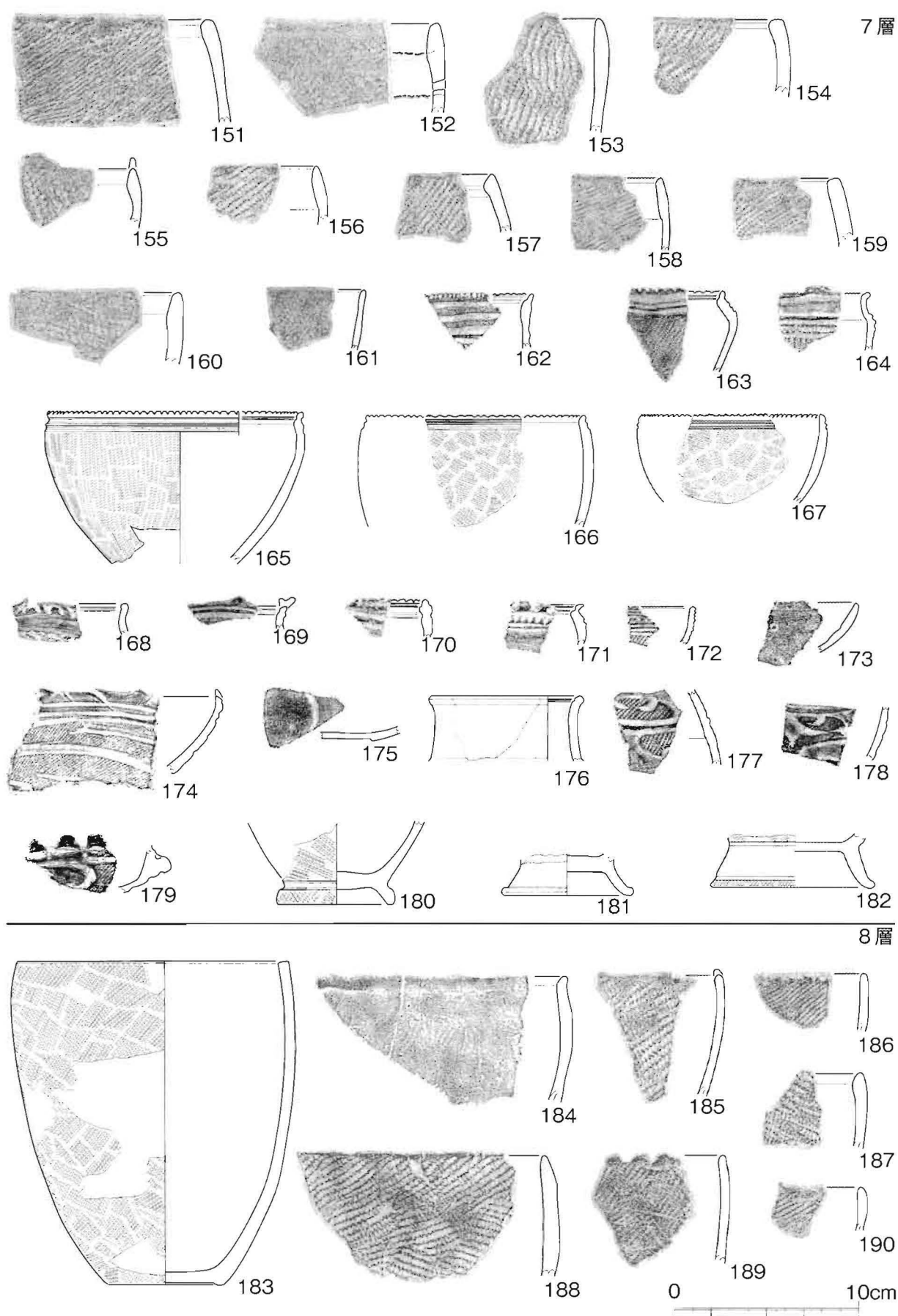


第38図 D区出土土器98~132

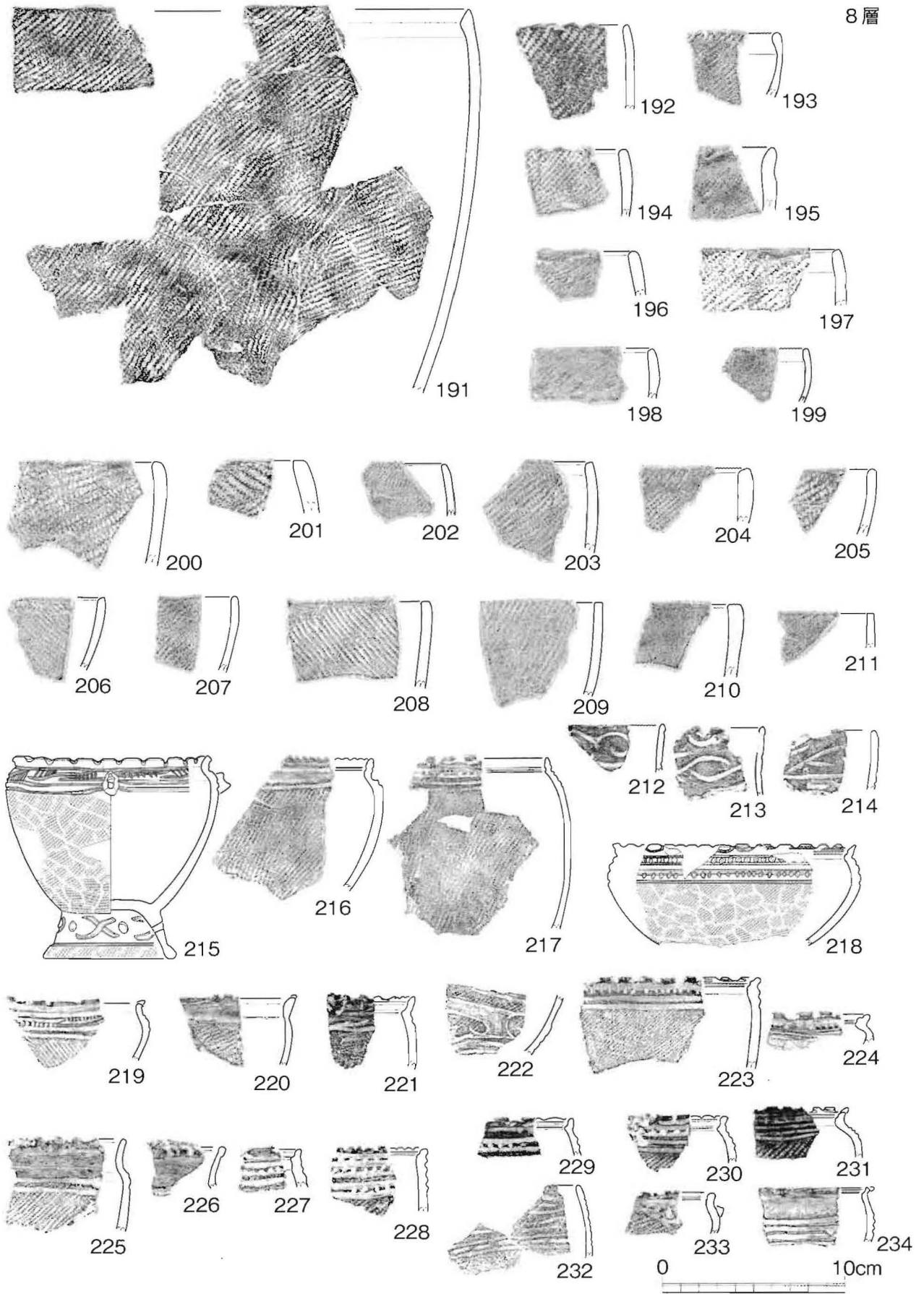




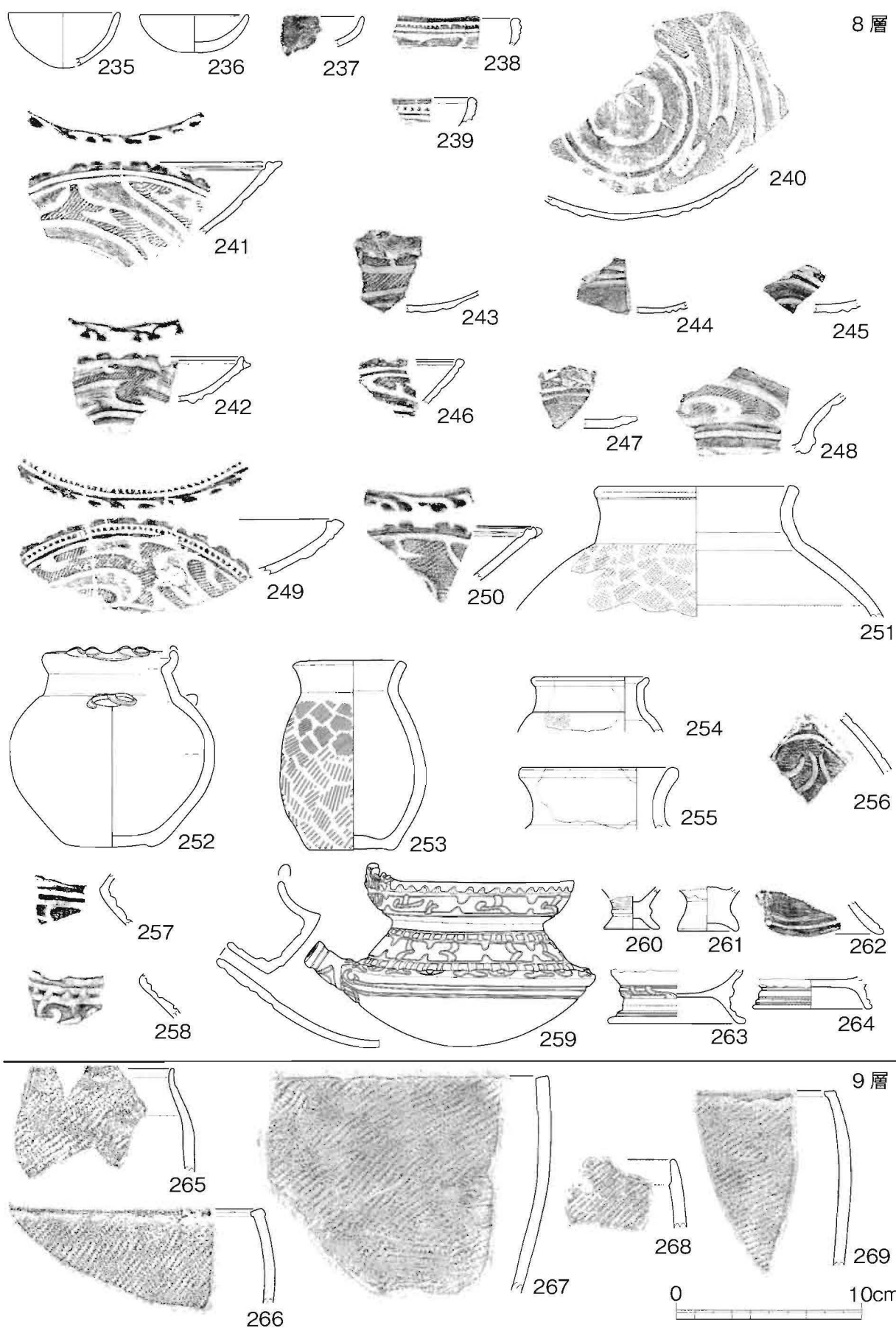
第39図 D区出土土器133～150



第40図 D区出土土器151～190

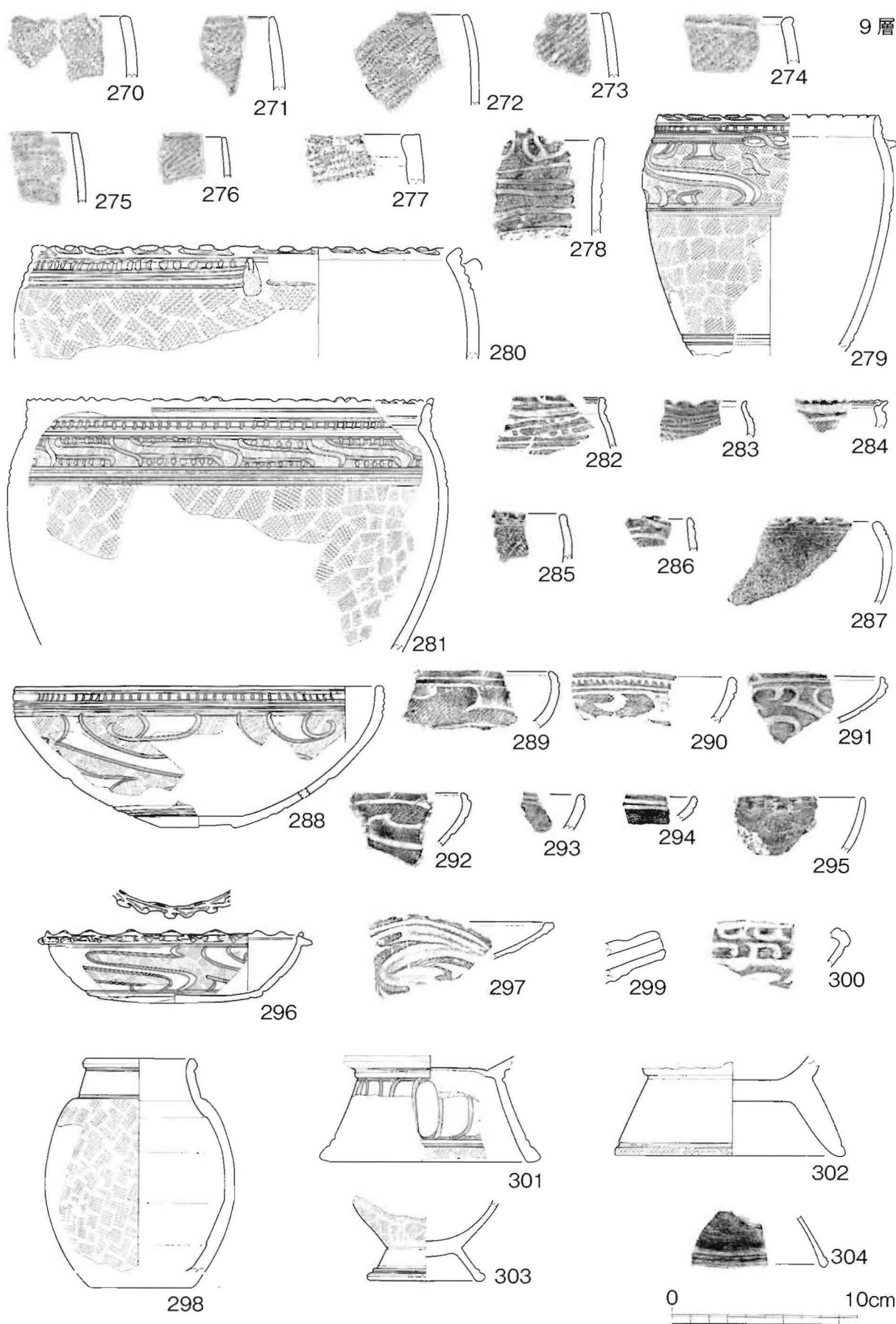


第41圖 D区出土土器191~234

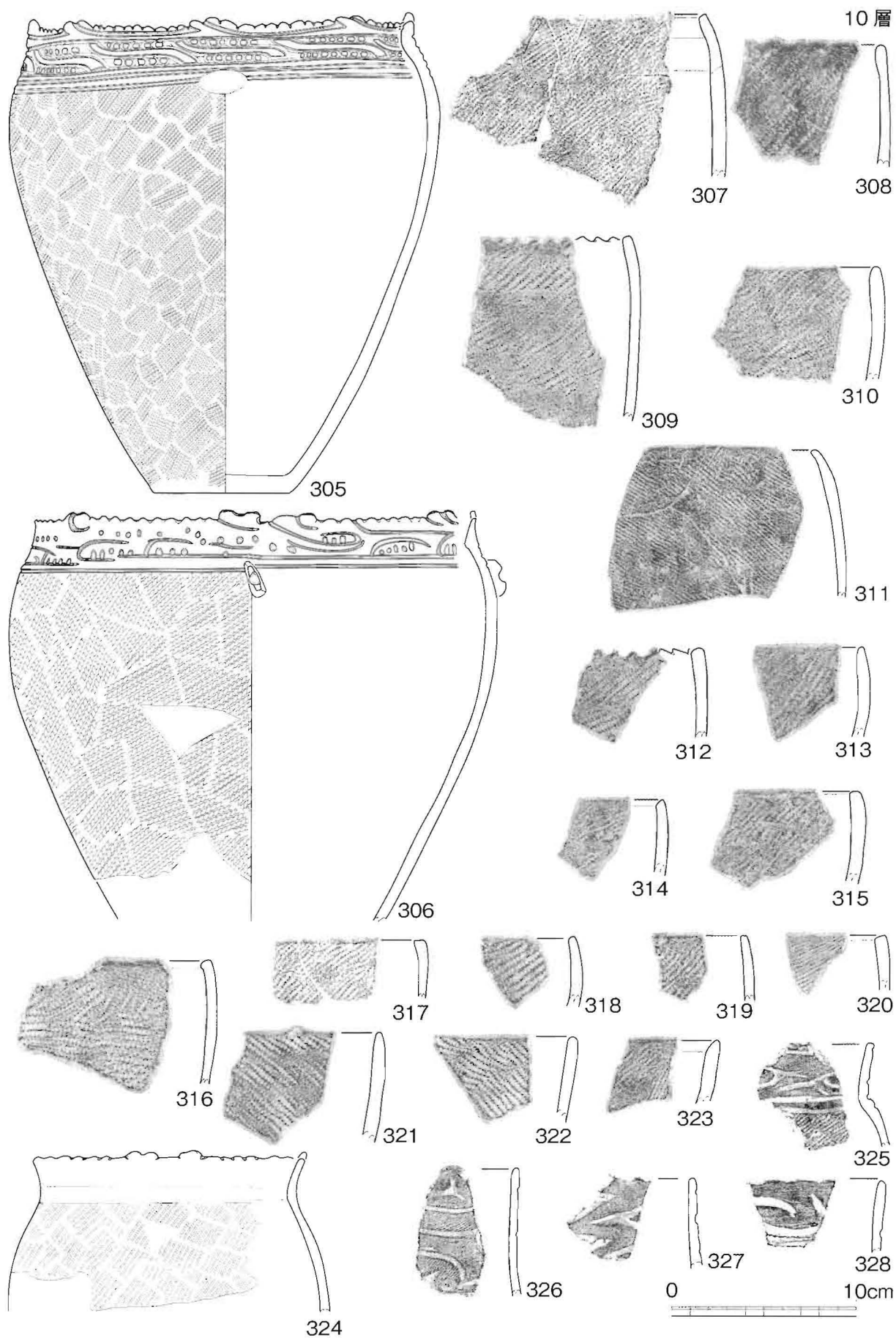


第42図 D区出土土器235～269

9層



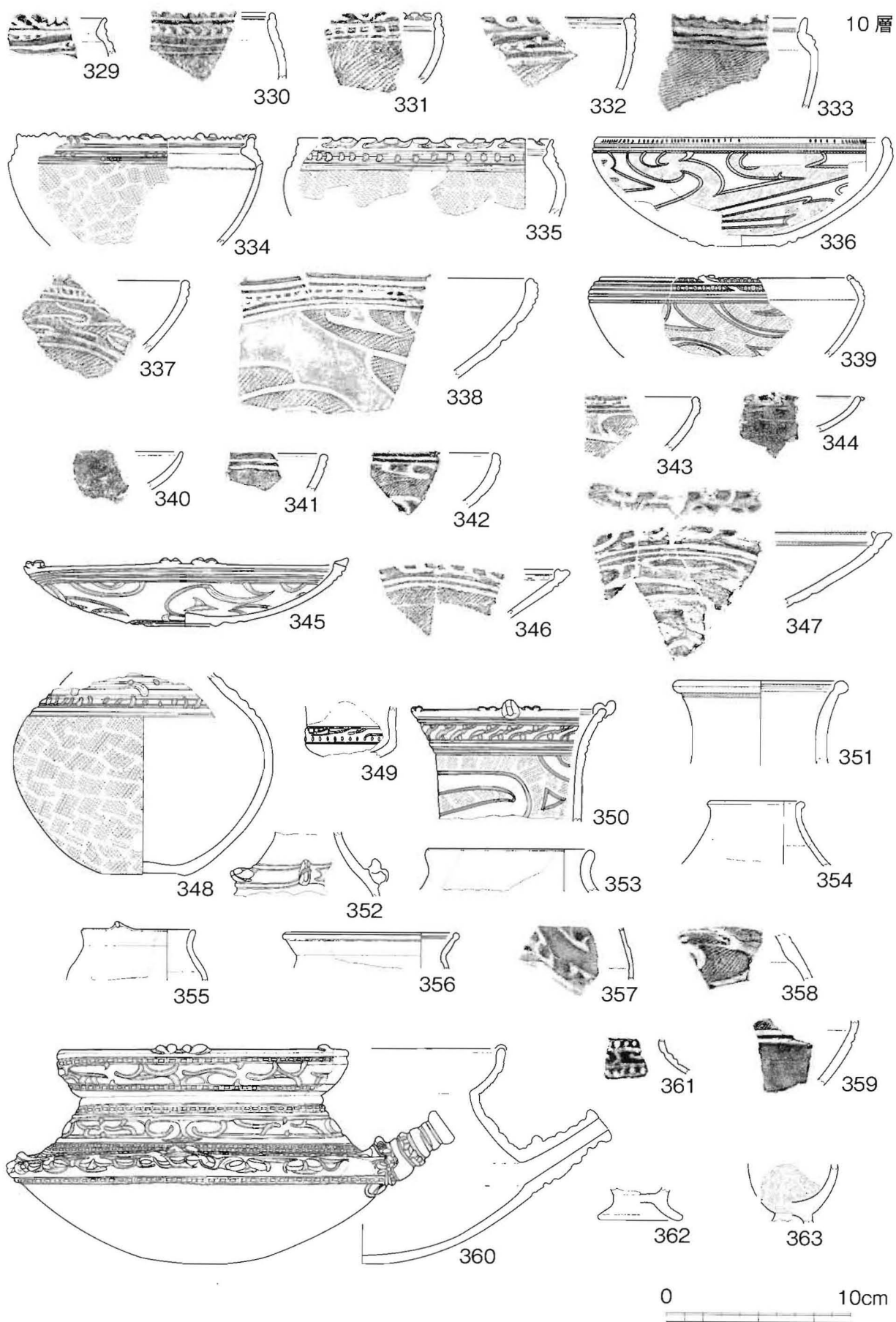
第43図 D区出土土器270~304



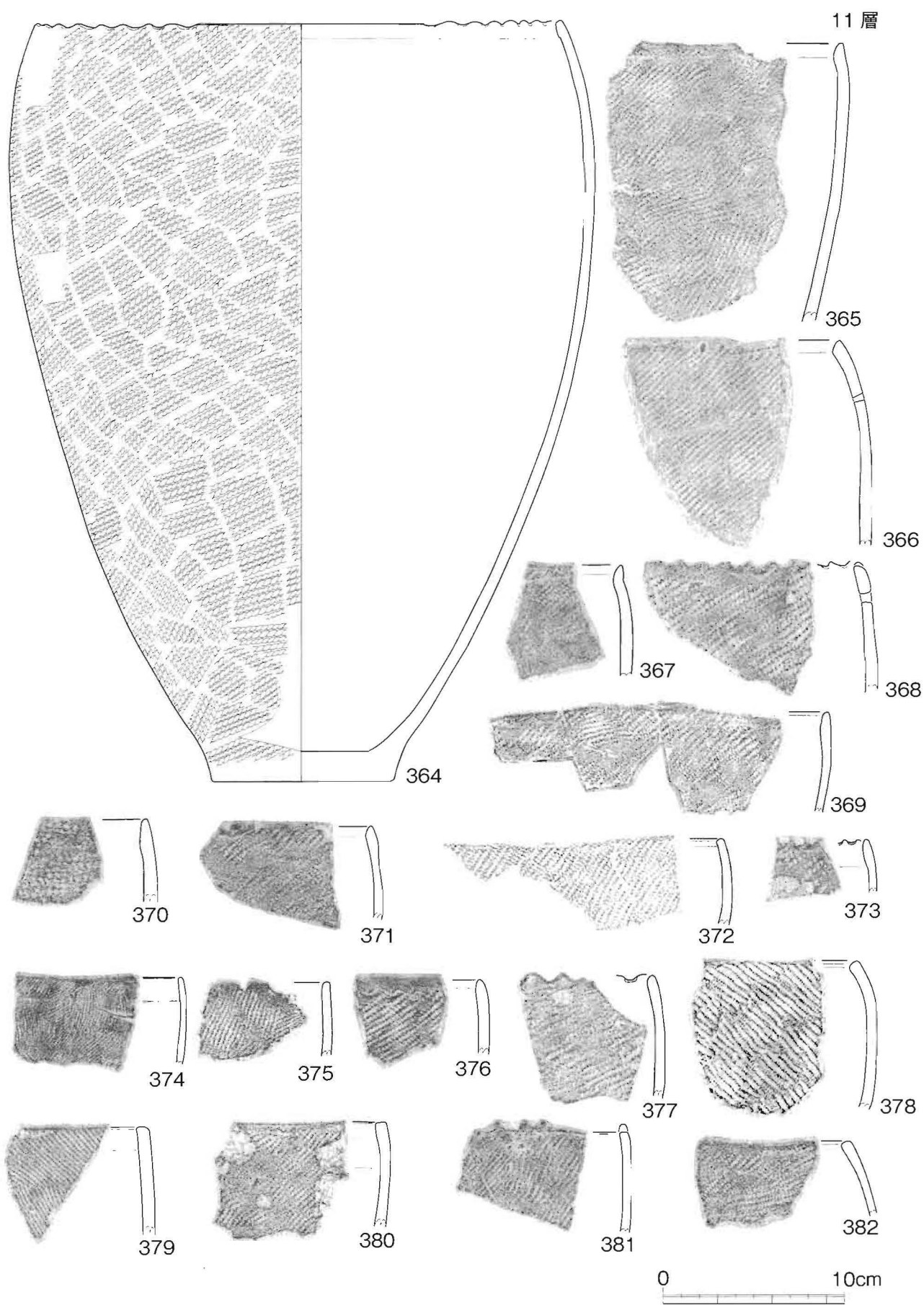
第44図

D区出土土器305~328

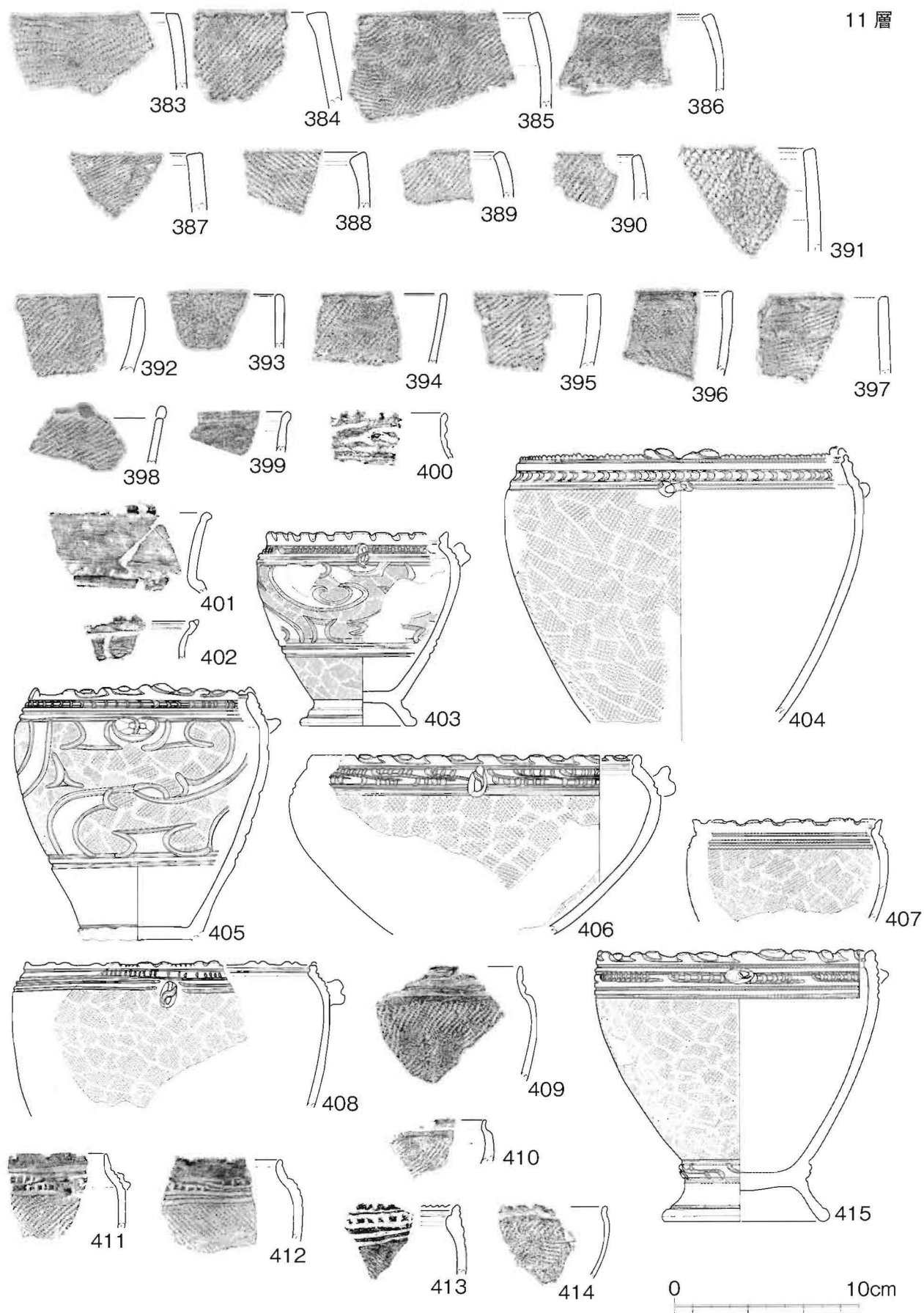




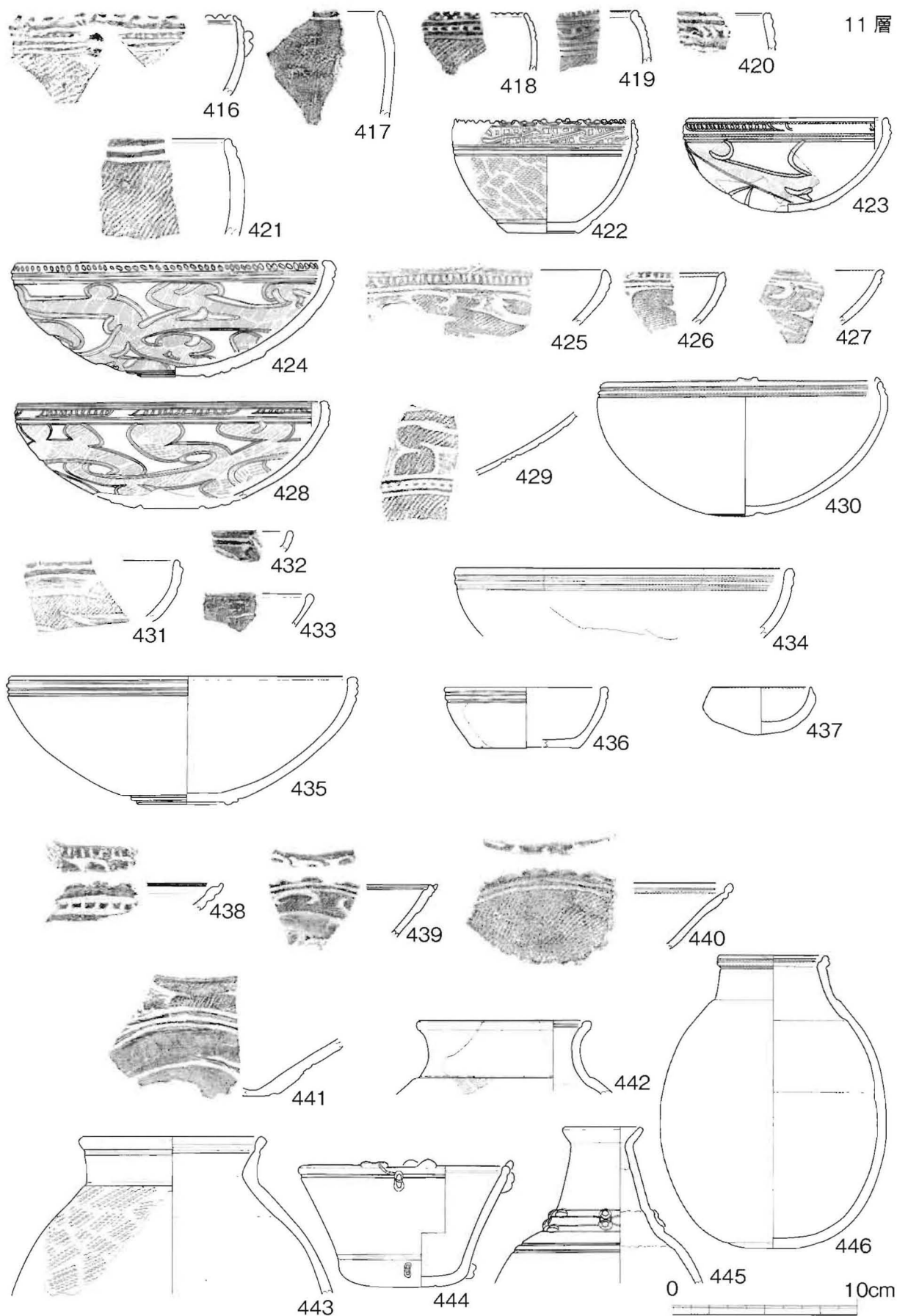
第45図 D区出土土器329～363



第46図 D区出土土器364～382

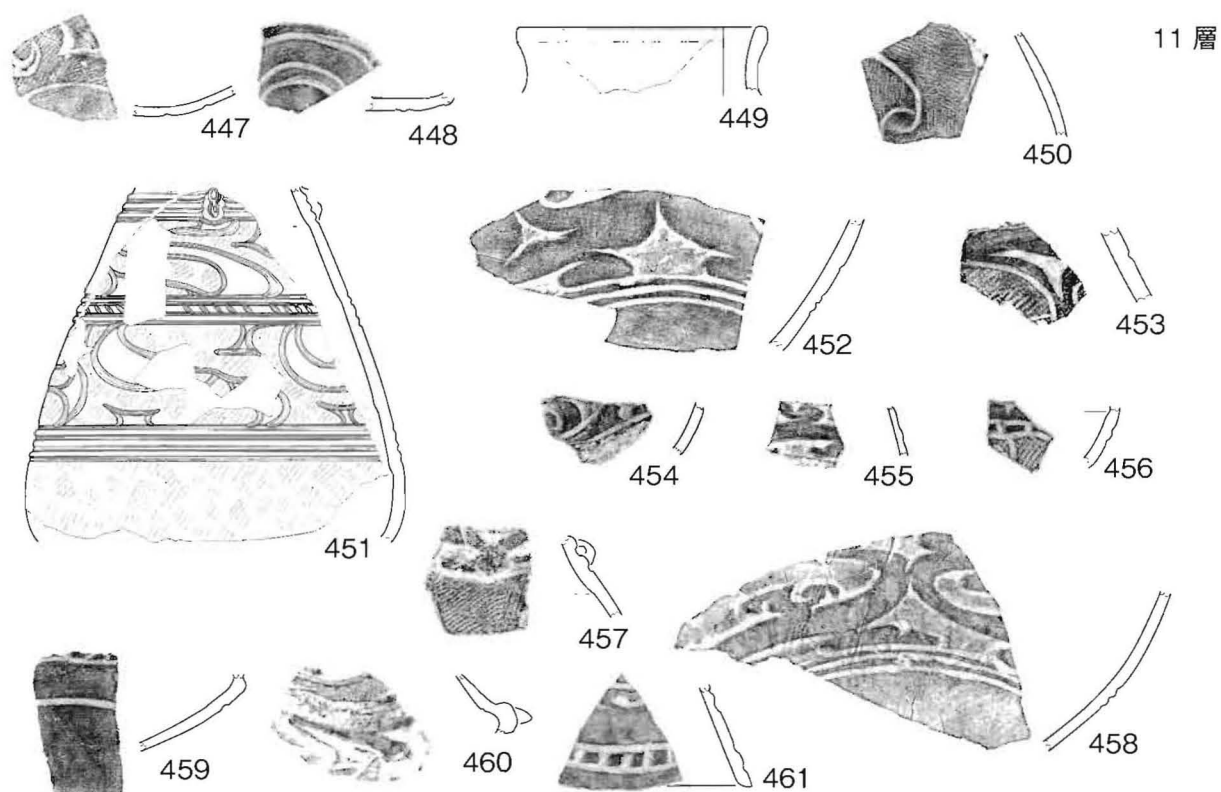


第47図 D区出土土器383~415

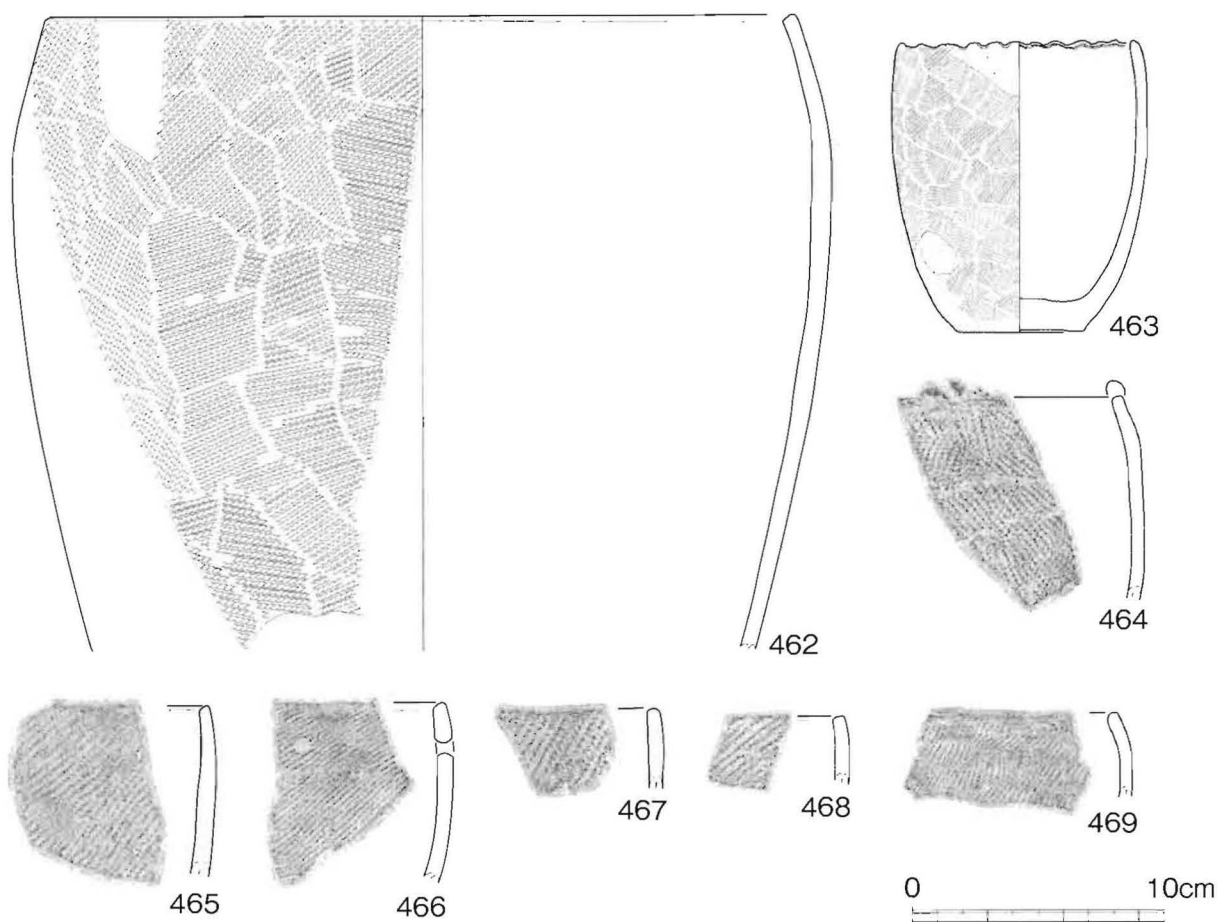


第48図

D区出土土器416~446



12 層



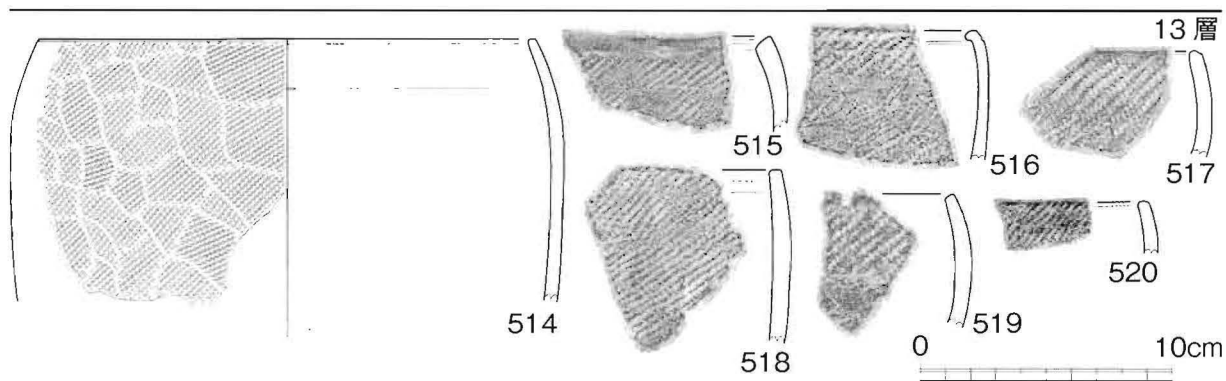
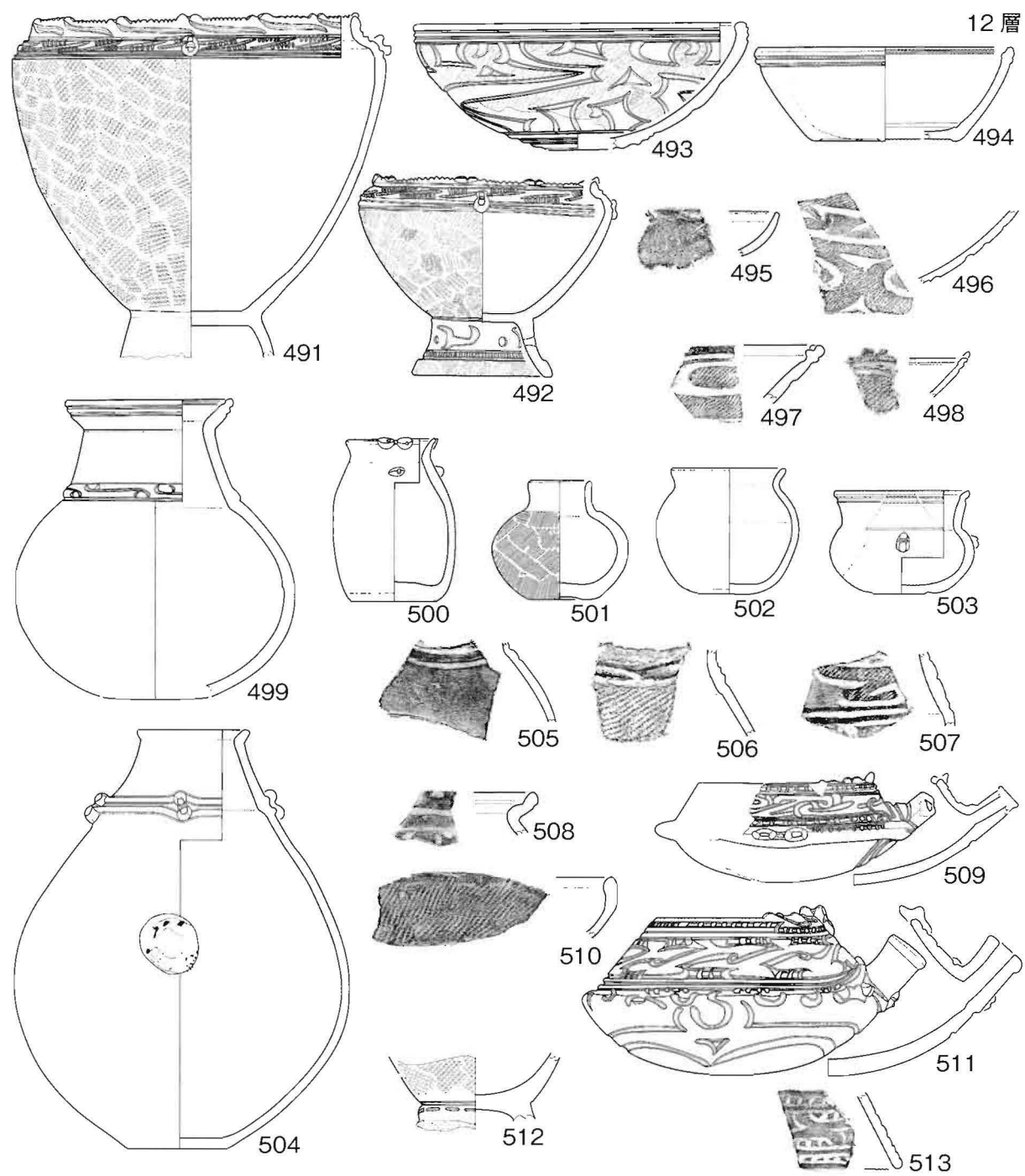
第49図 D区出土土器447~469



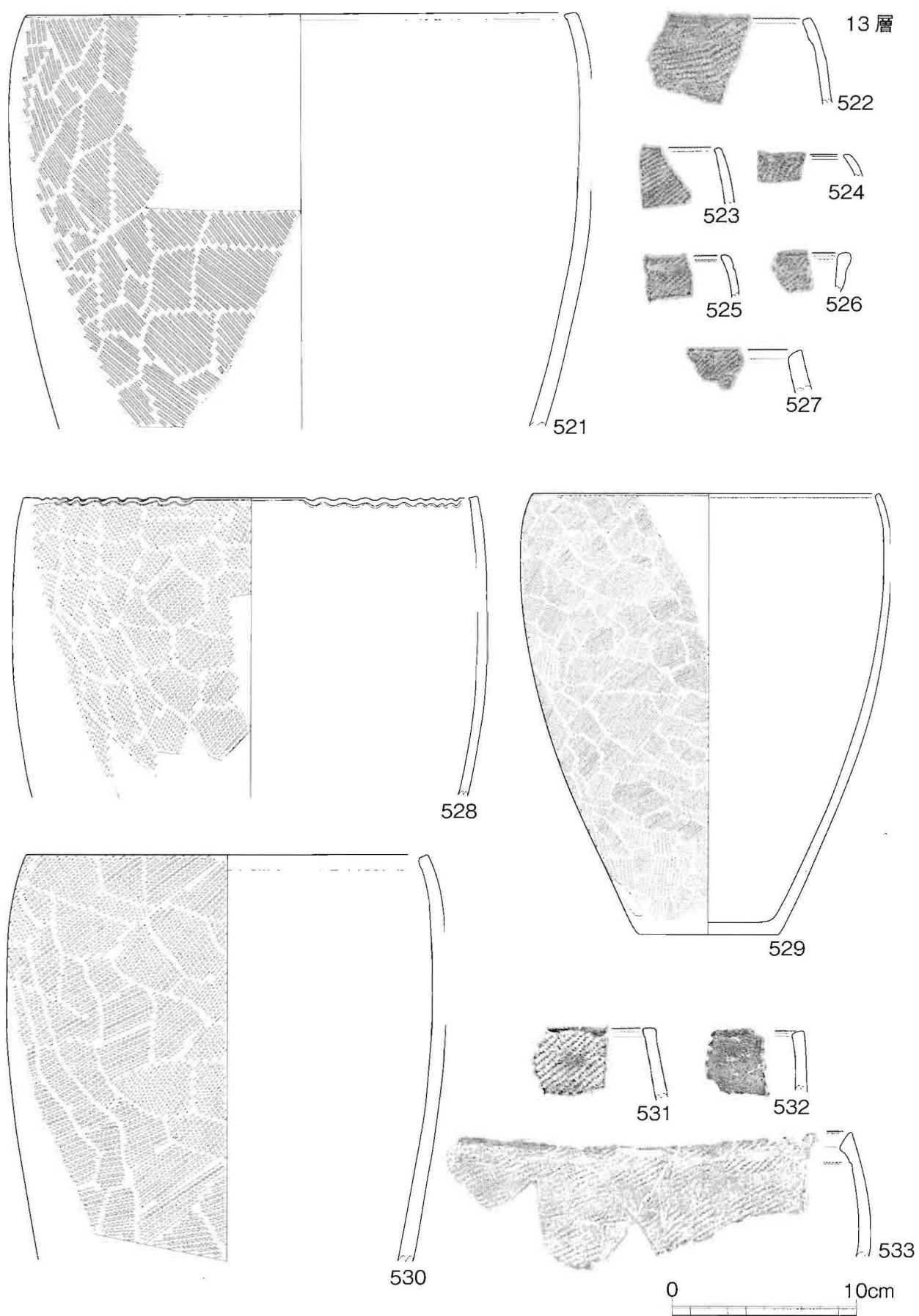
第50図

D区出土土器470~490

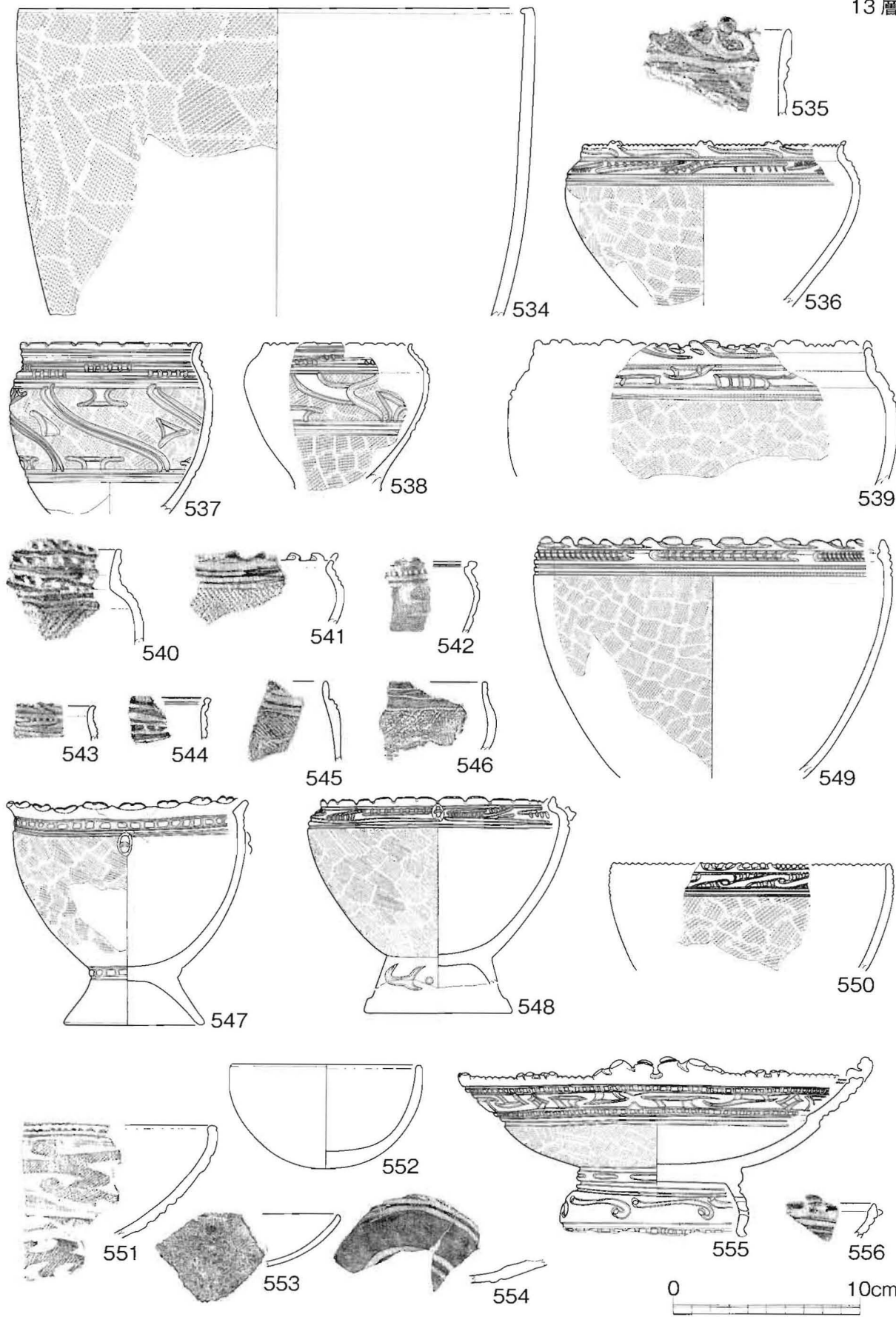




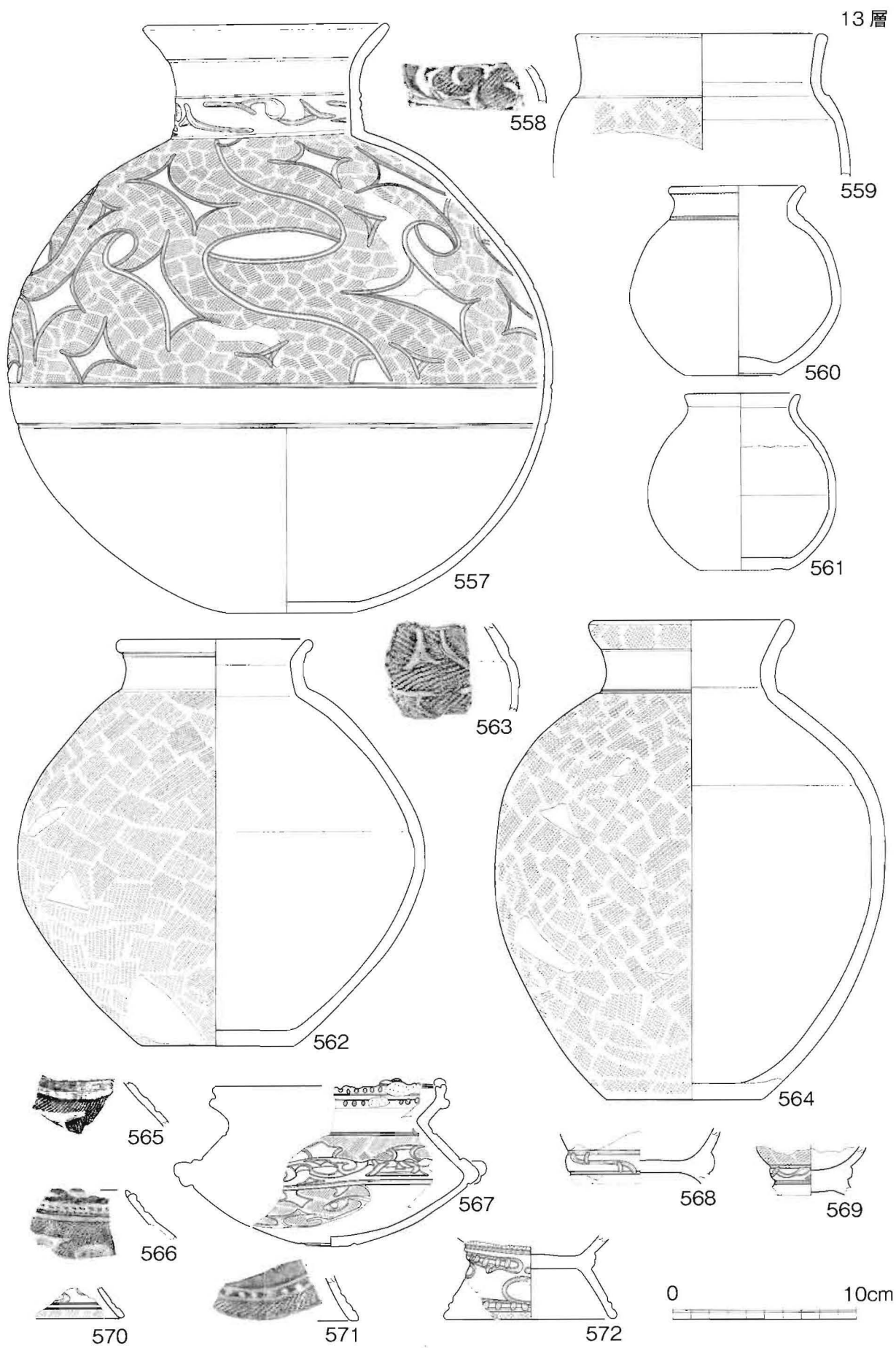
第51図 D区出土土器491～520



第52図 D区出土土器521～533



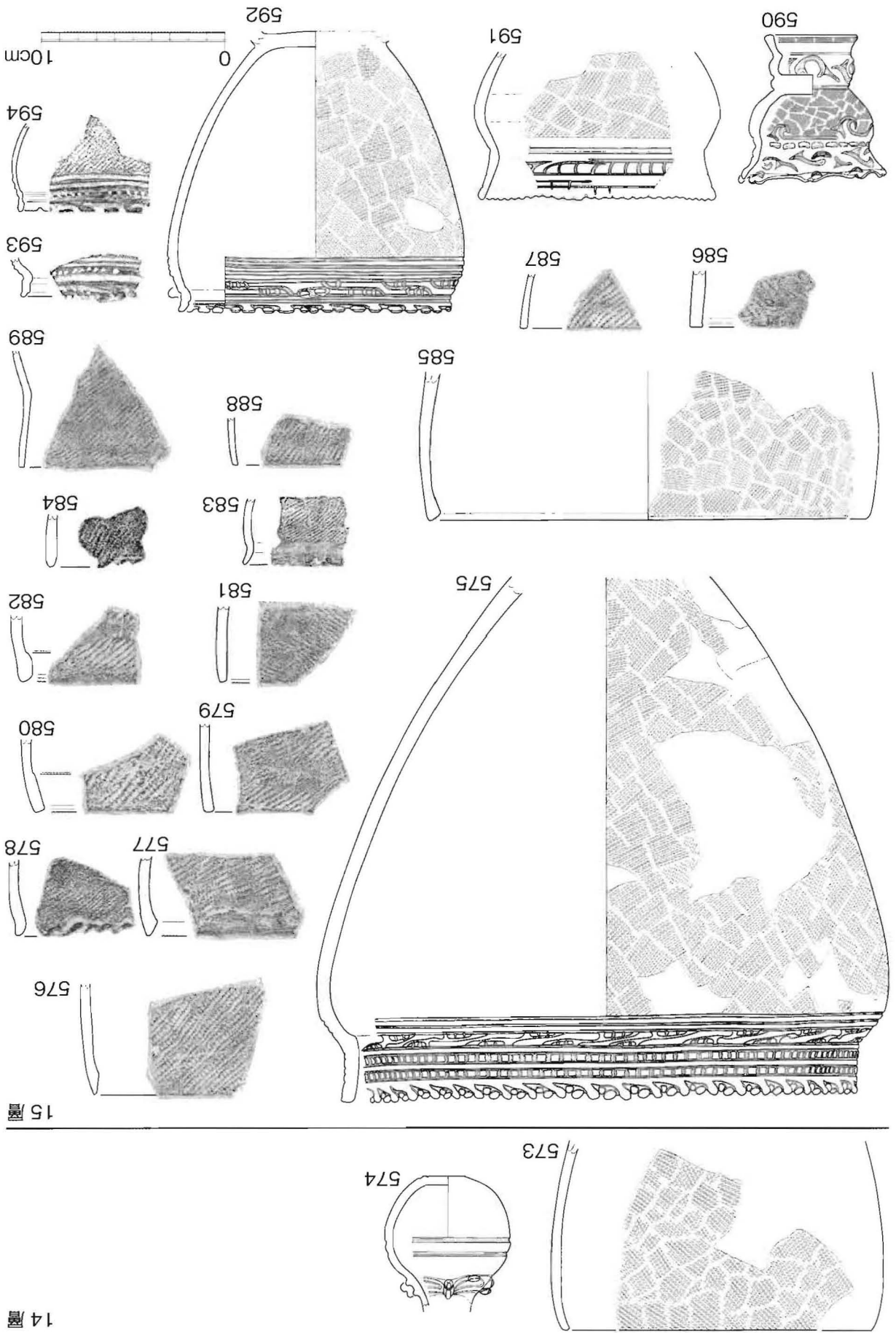
第53図 D区出土土器534～556

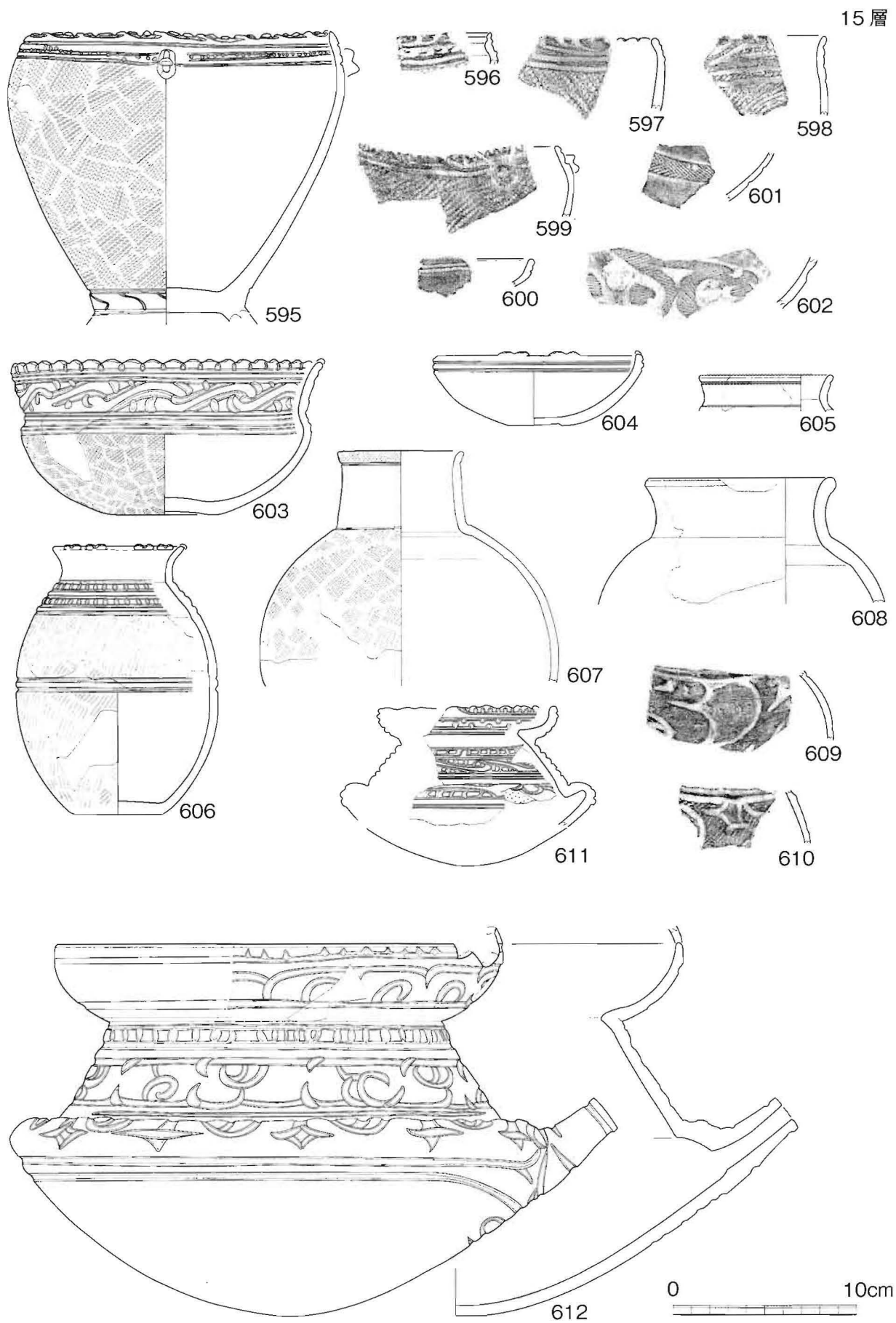


第54図

D区出土土器557~572

第55図 D区出土土器573~594





第56図 D区出土土器595～612



#### (4) 晩期土器の器種分類 (第57図)

晩期の土器は大量に出土した。個体数でいうと約1900個出土している。亀ヶ岡式土器の器種は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口・香炉形などがあり、バラエティに富むのが特色であるが、時期によってその組成や組成比などが異なる。ここで使用する器種という用語は、形・大きさ・容量・装飾などの違いによって、用途が異なっていると想定される土器の種類である(佐原2002)。ここでは、生活の場での土器使用を考える基礎的な材料の一つとして、器種の種類(組成)とその組成比を明らかにしたい。

器種を大別する基準として、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺については長谷部言人の「正方形九等分法」を用いたが、甕や高杯の用語は使用せず、鉢を追加するなどの改変を行っている。注口と香炉形は別の基準を設けた。その結果、今回の晩期土器は、下記のように深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口に分類することができた。深鉢・鉢・浅鉢・皿には台が付くものがあり、とくに鉢に多い。壺や注口には台はつかない。香炉形(体部上半に透かし文様をもつもの)はなかった。なお、器高と口径の比や頸部径と体部最大径の比などは数字で示した。分類の基準に用いた器高は身部の高さであって台部を含めていない。分類基準の数値に近いもの(中間的なもの)には、分類が難しいものがあるが、全体的に見て、よりふさわしいと思われる器種の方にあえて分類した。

- ① 深鉢 - 身部の器高(台部を含めない)と口径の比が、約1.0以上のもの。台付が少量ある。
- ② 鉢 - 身部の器高(台部を含めない)と口径の比が、約1/2~1.0のもの。台付が多い。
- ③ 浅鉢 - 身部の器高(台部を含めない)と口径の比が、約1/3~1/2のもの。台付がある。
- ④ 皿 - 身部の器高(台部を含めない)と口径の比が、約1/3以下のもの。台付が少量ある。
- ⑤ 壺 - 頸部径と体部最大径の比が、約2/3以下のもの(ただし、約2/3以上のものでも壺に含めたものがある。壺の器形分類を参照のこと)。
- ⑥ 注口 - 注口部をもつもの。

#### (5) 深鉢について

深鉢の基本形は逆台形を縦長にした形で、器高と口径の比が、1以上すなわち器高が口径より大きいものを指す。

晩期の深鉢の器形は単純で、口頸部に屈曲などの変化が見られる程度である。また文様のあるものも少なく、あっても口頸部に幅の狭い文様帯がめぐる程度で、幅の広い文様帯を持つものはない。

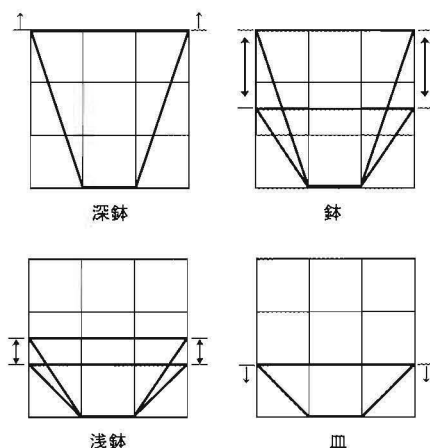
深鉢の個体数は1037点(うち郷土館資料は216点)である。算定には個体が識別しやすい口縁部資料(破片・完形品)を用いた。

##### 1) 深鉢の細別の基準 (第58図)

深鉢は、全体の形を参考に口頸部の形状・文様の有無などを基準にして行い、6類型に分類した。なお底部を欠損する資料が多いため、台部の有無は分類の基準に使用しなかった。

##### 分類の基準 1 - 口頸部の形状

- I. 口頸部が弱く屈曲し、やや「く」の字形に近いもの。
- II. 口頸部が弱く屈曲し、口縁が短く外反気味となるもの。
- III. 口縁部が緩やかに内湾するもの。



第57図 正方形九等分法による深鉢・鉢・浅鉢・皿の分類

IV. 口縁部が緩やかに立ち上がるもの。  
分類の基準 2 - いわゆる文様の有無で、  
地文は含めない。

- a. いわゆる有文のもの。
- b. いわゆる無文のもの。

2) 深鉢の細別の結果と特徴（例は代表的なものにとどめた）（第59～63図）

第1類（I a） - 4個体ある。口頸部が弱く屈曲し、頸部にいわゆる羊歯状文や列点文・短沈線文がめぐるものである。口縁は装飾的な突起列などで飾られるものが目立つ（D575など）。体部は縄文地となる。A183・D575は体部の傾きなどから明らかに台が付くものと推定される。例 - D305など。

第2類（I b） - 20個体ある。口頸部が弱く屈曲し、やや「く」の字形に近いものとなる。頸部は無地で研磨されており、体部は縄文地となる。口縁は平縁が多いが、小波状口縁もある。すべて破片で、全体形が分かるものはない。例 - D324.C50など。

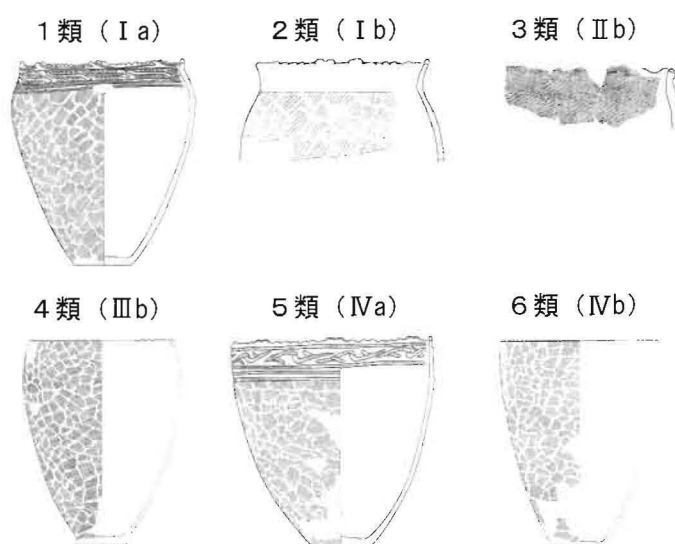
第3類（II b） - 10個体ある。口頸部が弱く屈曲し、口縁が短く外反気味となるものである。体部は縄文地のものが多いが、中には無地のものがある（D184）。すべて破片で、全体形が分かるものはない。例 - B4など。

第4類（III b） - 787個体ある。もっとも数の多い類型で、深鉢の76%を占める。口縁部が緩やかに内湾するもので、口縁から底部まで縄文地となるが、中には無地のものがある（A51など）。口縁は平縁のもの（D134など）・小波状口縁のもの（D133など）・平縁と小波状口縁が組み合うもの（D364など）などがある。口縁端部は、面取りしたように四角張るもの（D183など）・丸みを帯びるもの（D134など）・内側を斜めに削ぎ取ったように三角形に尖り、内側が肥厚するもの（A34など）がある。例 - D134.D364など。

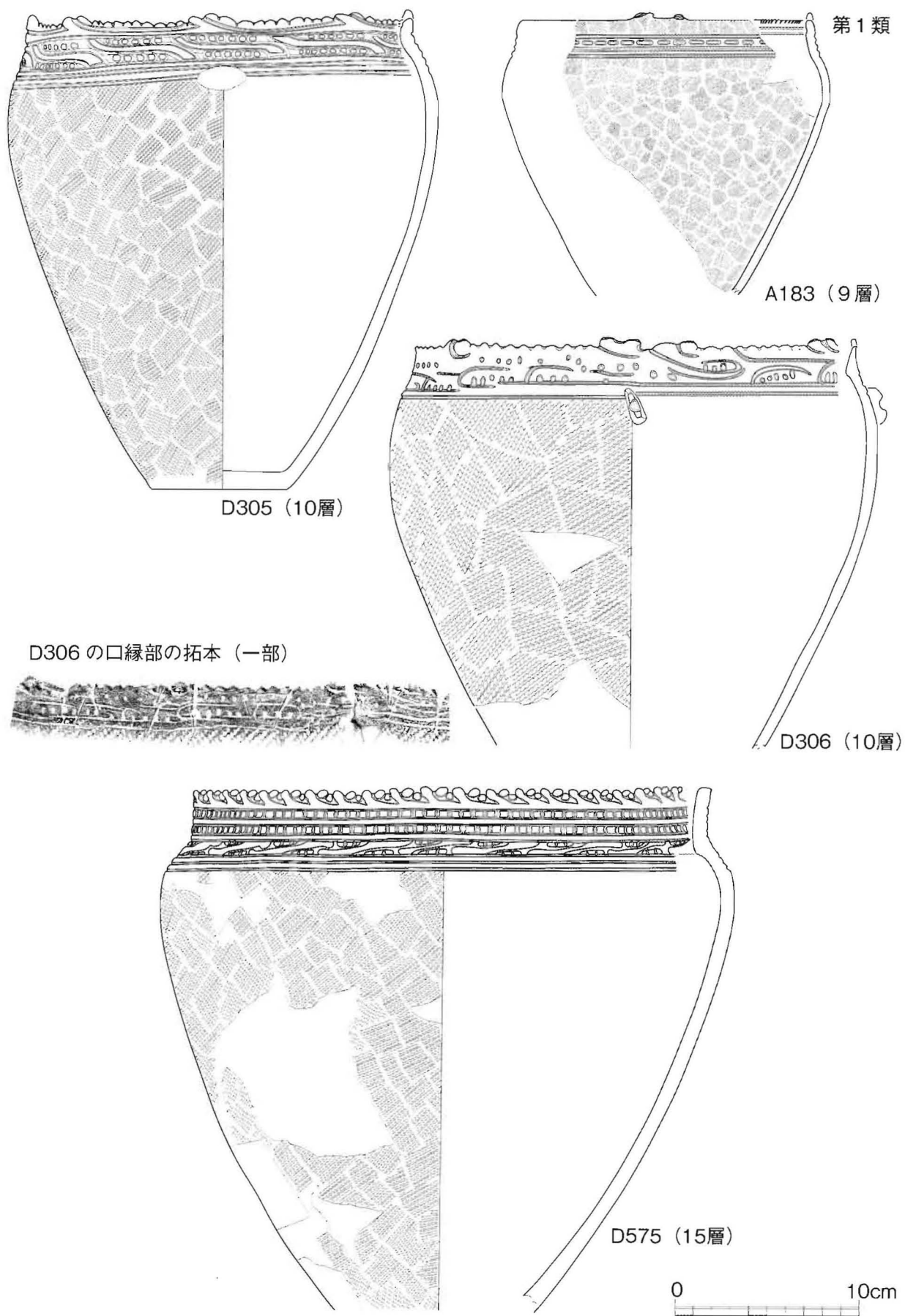
第5類（IV a） - 1個体ある（C184）。口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁部に三叉文がめぐるのである。体部は縄文地となる。

第6類（IV b） - 171個体ある。口縁部が緩やかに立ち上がるものであるが、やや開き気味のものもある。口縁から底部まで縄文地となるものが多いが、中には無地のもの（C247など）もある。口縁端部は、面取りしたように四角張るもの（D534.C182など）と丸みを帯びるもの（C99など）がある。また、中には口縁に1条の沈線がめぐるものがある（郷土館17）。

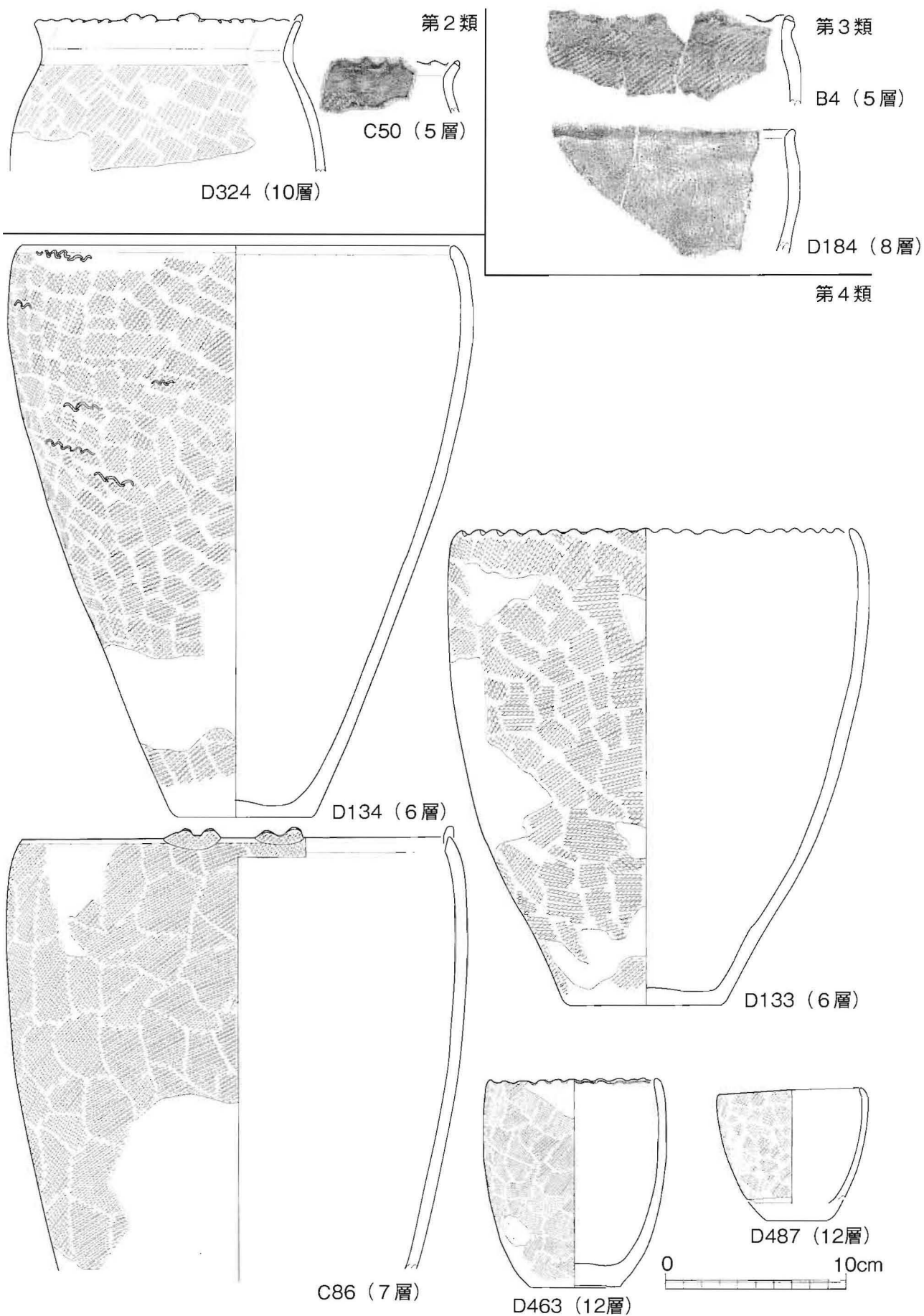
その他 - 第1類から第6類に当てはまらない口縁部の小破片を一括した。全体の形を推測できるものはない。三叉状の文様や磨消縄文などがある（A81.D212～D214など）。頸部が緩やかに屈曲し、口縁から体部にかけて縄文地のみのもの（D589）などがある。



第58図 深鉢の細別模式図

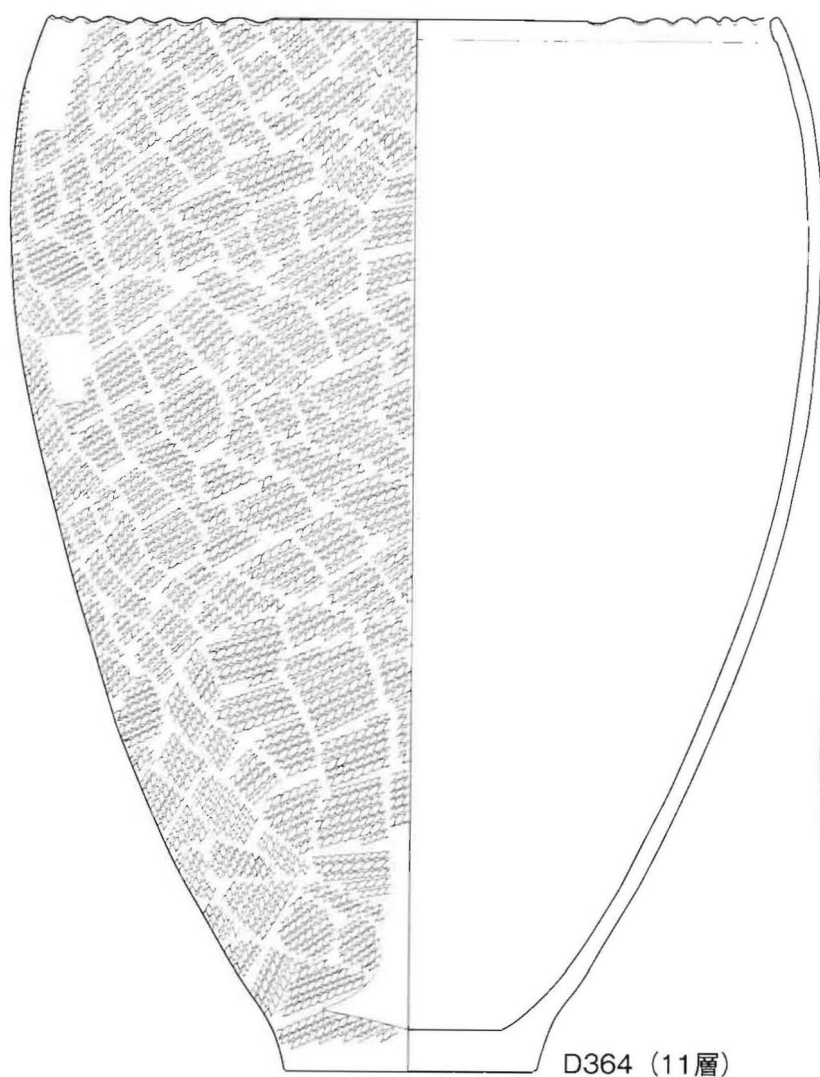


第59図 深鉢第1類

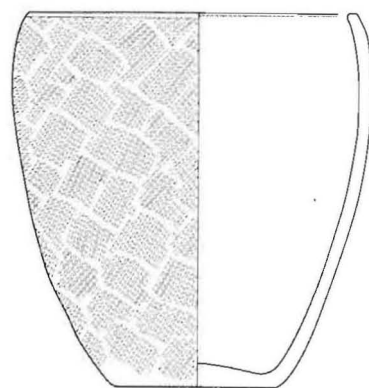


第60図 深鉢第2～4類

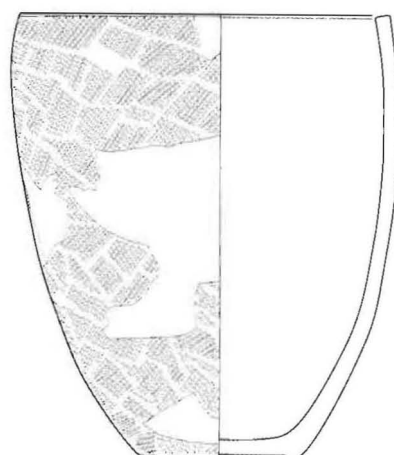
第4類



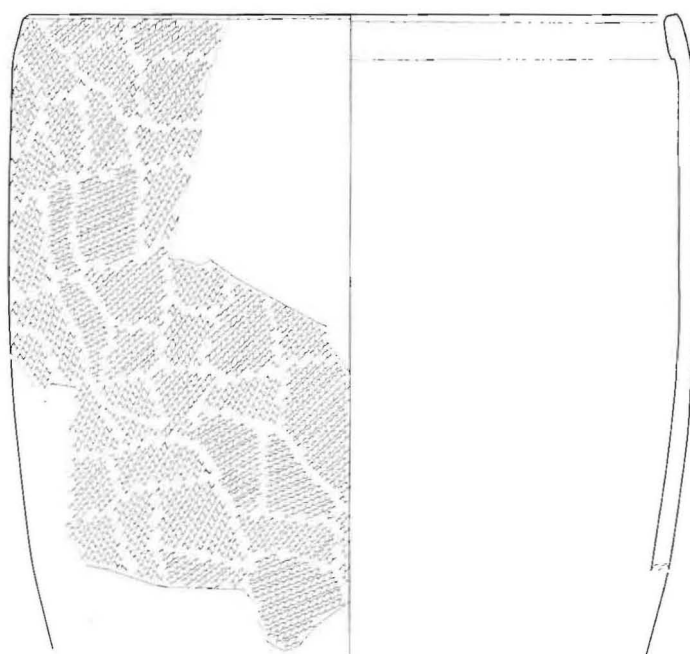
D364 (11層)



C181 (9層)



D183 (8層)

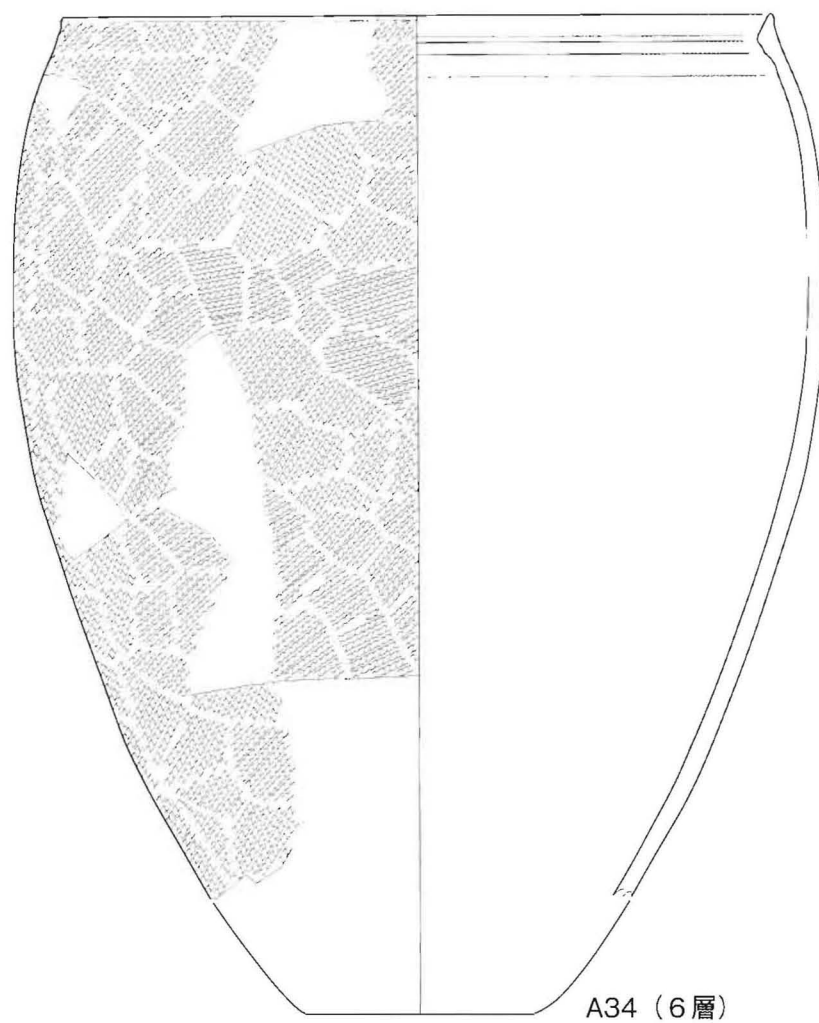


B73 (7層)



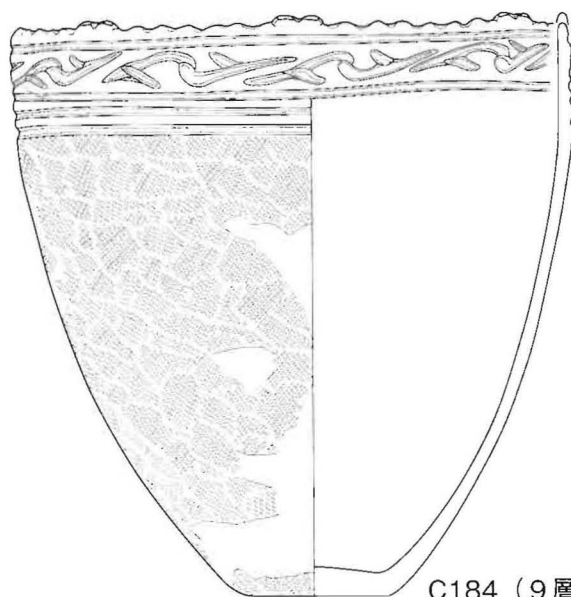
第61図 深鉢第4類

第4類



A34 (6層)

第5類

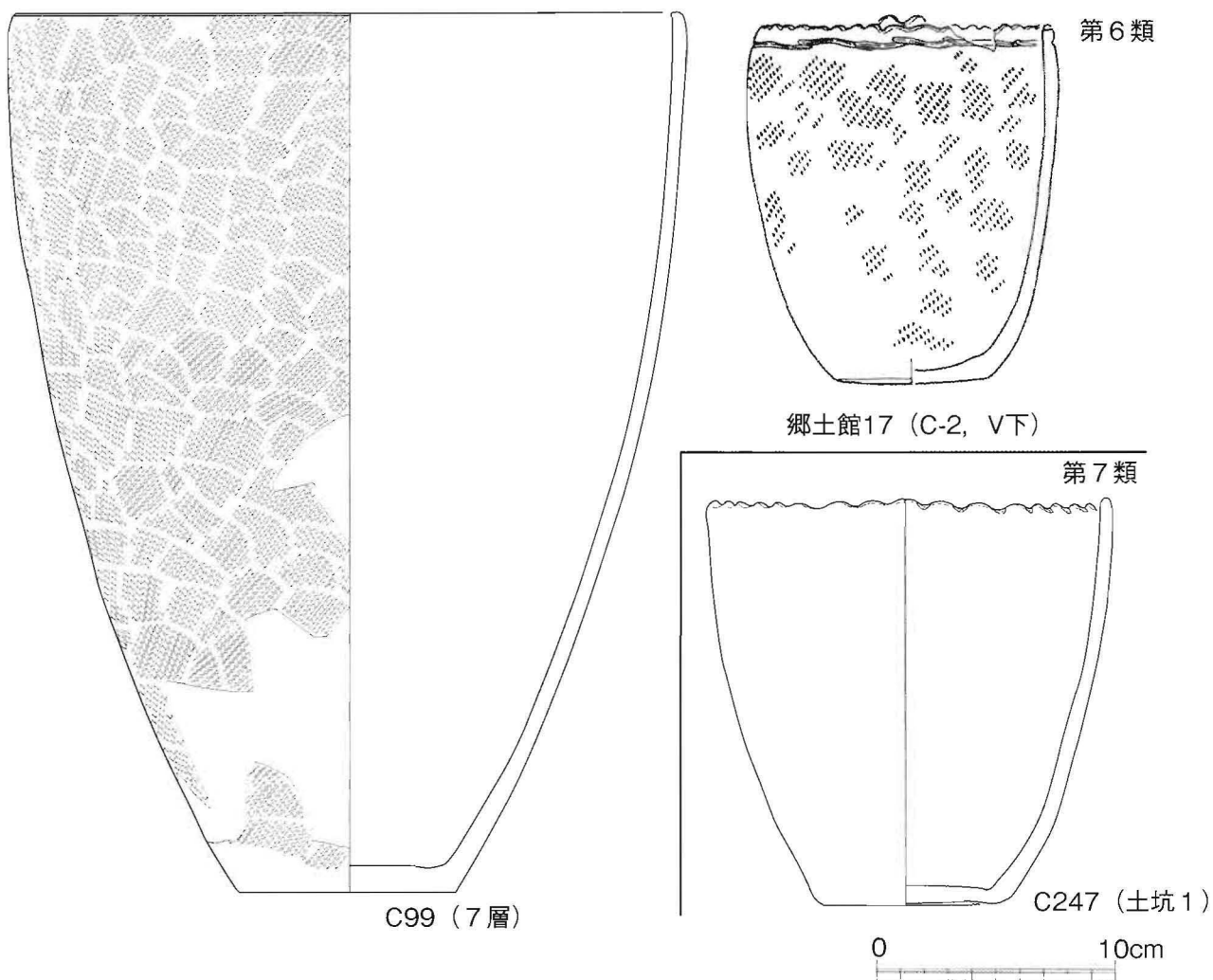


C184 (9層)



第62図 深鉢第4・5類

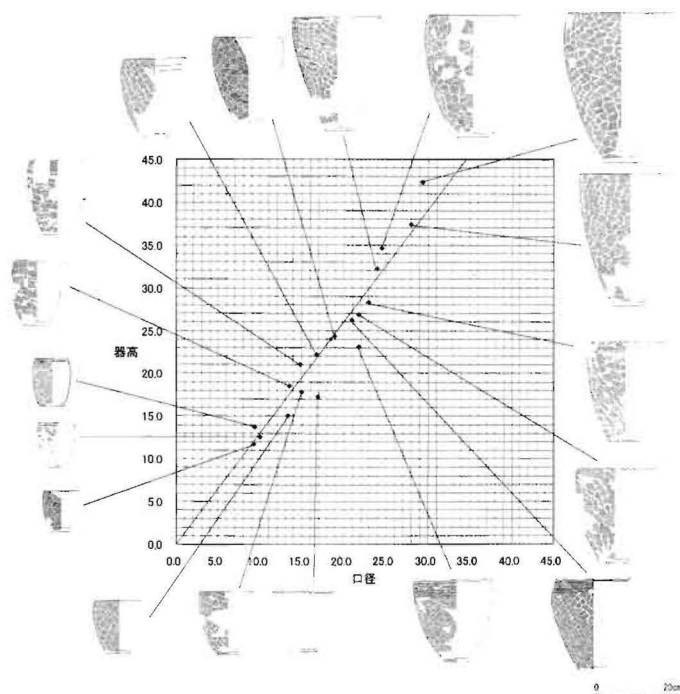




第63図 深鉢第6・7類

### 3) 深鉢のまとめ

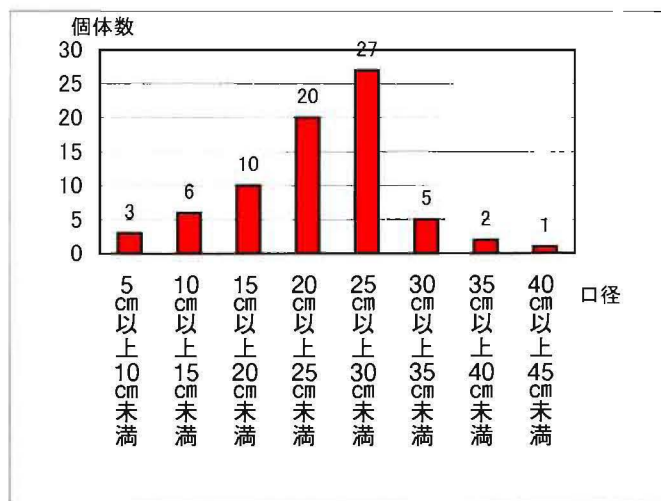
① 深鉢の大きな特色は、形が単純で、文様や突起など装飾が少ないことであるが、大きさには変化が見られる。器高（台部を除く）と口径が分かるもの（たとえば完形品など）18個体を利用して、その平均的な器高（台部を除く）と口径の比を求めると9対7となる（第64図）。これによって口径しか分からないものの器高を算出すると、最も大きなものは口径44.0cm、推定器高57.2cmとなる（A301、平底であろう）。最も小さいものは口径8.0cm、器高約7.4cmである（D487、平底の部分が剥がれたもので、完形に近い）。その差は大きい。そこで深鉢の大きさを見るため、復元可能な74個体の口径を調べると、口径



第64図 深鉢の器高と口径の比

が24.0cm～30.0cmに集中し、大型品が多いことが分る。しかし、口径が30.0cmを超えるものは少ない（第65図）。

②文様を持つものは第1類と第5類のみで数が少ない。ほとんどすべての深鉢が縄文地だけのものといってもよい。文様は羊歯状文や列点文・短沈線文がめぐるもの（第1類）と三叉文がめぐるもの（第5類）がある。文様から単純に山内編年にあわせれば、三叉文は大洞B式に、羊歯状文は大洞C1式に同定したいところであるが、層位的に問題があり、所属時期については共伴した他の器種の在り方も検討することが必要であろう。



第65図 深鉢の口径の分布

③杉沢遺跡の深鉢の地文は縄文が大部分で、無地は少ない。ただし、縄文地のものでも口縁部などが部分的に研磨され、その部分だけが無地となっているものがある。条痕文は体部破片に少数見られる（写真8参照）。

縄文地の縄文原体は、圧倒的に単節LRが多く全体の約7～8割となり、次いで単節RL、無節Lの順となる。中には撚り戻しによって無節となるもの（A217）や付加条縄文も見られた。しかし、どんな原体か分らないものもある。

④深鉢の口縁にも若干の違いが見られる。大別すると、(1)平縁のもの（C181.B73など）、(2)刻み目などにより小波状口縁となるもの（D324.D133など）、(3)平縁の部分と小波状の部分が交互にある口縁となるもの（D364など）、(4)装飾的な彫り込みによって小波状口縁となるもの（D575）の4種類となる。破片では(1)と(3)、(2)と(3)の区別が難しいことがある。大型破片、完形品に近いもので見る限り、(1)が多く、次いで(2)となる。(4)は第1類のうち口頸部に羊歯状文が施文されるものに限られる。

なお、突起が肩部に付くものがあるが、ほぼ第1類に限定される。

⑤口縁部から底部まで残る完形品あるいは完形に近い深鉢はすべて平底であり、深鉢の底部が基本的に平底であることが分かる。しかし、器形の傾きなどから台付と判断されるものがあり、それはすべて口頸部に文様を有する第1類に限定される可能性が高い。しかし、底部や台部の破片では、深鉢と鉢との区別が困難で、より大きいものが深鉢、より小さいものが鉢であろうと推定されるのみである。

⑥割れ目に近い部分に径6mm程度の孔をあけた深鉢の破片が6個体ある。中には割れ目を境に2個1対となるものもある。土器が破損した際、割れ目の両側に孔をあけ、紐などで緊縛し、補修したものと考えられる。ただし紐などで補修した深鉢は、補修した部位によっては、火にかけることが難しいので、専らものの保存・収納に使用されたのかもしれない。

⑦深鉢の主な用途は、形態や使用痕跡から煮沸であることが分るが、大型品のなかには炭化物の付着や火を受けた痕が見られないもの（D364など）があり、煮沸以外の用途を示すものと考えられる。おそらく貯蔵容器であろう。

使用痕跡のうち顕著なものは、(a)底部付近が二次加熱を受け橙～赤化しているもの、(b)底部付近が二次加熱を受け橙～赤化し、かつ内外面に炭化物が付着しているもの、(c)内面に赤色顔料が付着しているものなどである。

(a)は食物を調理するための煮沸や木の実のアク抜きなどの加工のための煮沸などによると思われる。大型品は(a)の痕跡を持つが、(b)の痕跡を持つものは少ないので、大型品は木の実などのアク抜き

に使われ、澱粉質の食物を調理することは少なかったかもしれない。

(b)は澱粉質の食物を調理するために煮沸した結果と思われる。内面に付着した炭化物は、いわゆるお焦げで、内部の底面よりも上の部分にしばしばリング状の痕跡を示すことが多い。外面の付着は吹きこぼれたものが炭化したものである。深鉢は文様のあるものが少ないが、文様を有するものであっても、文様のないものと同じように(b)の痕跡を持つ。

(c)は赤色顔料を製作する時に、原料の酸化鉄などを石皿で砕いた粉末を深鉢に入れ攪拌・沈澱させるため、すなわち水簸に使用したことによると思われる（兄玉2005）。水簸に用いられた痕跡を持つ深鉢は、すべて小破片であるが、少なくとも5個体ある。また、杉沢遺跡内でも赤色顔料が約400g検出されている。

⑧なお、文様などで明らかに後期に含まれる深鉢は、後期の土器としてここでは除外しているが、無文のものについては区別が難しいので、若干、後期のものが含まれている可能性が高い。

## (6) 鉢について

鉢の基本形は逆台形で、身部の器高（台部を除く）と口径の比が1対1から1対2、すなわち器高と口径がほぼ同じくらいのものから器高が口径の2分の1となるものまでを含む。簡単にいえば、深鉢と浅鉢の中間ほどの高さをもつものということになる。

鉢の個体数は414点（うち郷土館資料は53点）である。個体数の算出は個体が識別しやすい口縁部資料（破片・完形品）を用いた。晩期の鉢の基本形は比較的単純であるが、口頸部の屈曲などに変化が見られる。また口頸部や肩部に幅の狭い文様帯をもつもの、体部上半に幅の広い文様帯をもつものも多くある。口頸部が一周して残っている破片の肩や頸部には縦長の小突起が付いているものが多い。また底部付近が残っている資料を見ると、台をもつものが圧倒的に多い。

### 1) 鉢の細別の基準（第66図）

鉢の細別（器形分類）は、全体の形が分るもの・推定できるものを中心に、全体の形を参考にしながら口頸部の形状・文様の有無・施文部の位置などを基準にして行った。全部で14類型あるが、中間にくるようなものも多数あり、分類は難しかった。また底部を欠損する資料が多いため、台部の有無は分類の基準に使用しなかった。

#### 分類の基準(1)－口頸部の形状

- I. 口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するもの。
- II. 口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するもので、明確な頸部を形成するもの。
- III. 口頸部が屈曲し、口縁部が短く外反するもの。
- IV. 口頸部が屈曲し、口縁部が外反するもの。
- V. 口頸部が屈曲し、口縁部が短く立ち上がるもの。
- VI. 口縁部がゆるやかに内湾するもの。

#### 分類の基準(2)－文様の有無・施文部の位置

- a. 体部上半に幅の広い文様帯がめぐるもの。
- b. 口縁部に幅の狭い文様帯がめぐるもの。
- c. 口縁部に幅の狭い文様帯がめぐり、体部に幅の広い文様帯がめぐるもの。
- d. 幅の広い口縁部に文様がめぐるもの。
- e. 口頸部に幅の狭い文様帯がめぐるもの。
- f. 口頸部・肩に幅の狭い文様帯がめぐるもの。
- g. 口頸部・肩に幅の狭い文様帯がめぐり、体部全体に文様があるもの。
- h. 頸部に沈線がめぐるもの。



第66図 鉢の細別分類模式図

i. 肩に幅の狭い文様帯がめぐるもの。

j. 肩に平行沈線がめぐり、無地のもの。

2) 鉢の細別の結果と特徴（例は代表的なものにとどめた）（第68～71図）

第1類（I a）－16個体ある。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するものである。体部上半に幅の広い文様帯があり、雲形文が配される。肩の上段の部分に刺突文がならぶ。しかし小破片しかいないため、全体の形・文様構成は不明であるが、台付と推定される。例－B46.C100など。

第2類（V a）－36個体ある。口頸部が屈曲し、口縁部が短く立ち上がるものであるが、なかには屈曲が弱く、口頸部がやや内湾気味になるものがある（A224.D405など）。体部上半に幅の広い文様帯がめぐり、磨消縄文による雲形文が展開する。第1類と異なるのは、幅の広い文様帯の上に幅の狭い列点文・羊歯状文による文様帯がめぐることである。肩には突起が1個配置されるものがある。体部下半は、無文で地文は縄文地のものが多いが、研磨された無地のものもある。なお、全体形の分るものや器形の傾きなどから第2類はすべて台付と考えられる。例－B36.D403など。

第3類（III i）－11個体ある。口頸部が屈曲し、口縁部が短く外反するものである。肩にある幅の狭い文様帯に列点文や平行沈線がめぐり。全体形の分るものや器形の傾きなどから第3類はすべて台付と考えられる。例－D165.D547など。

第4類（IV e）－3個体ある。口頸部が屈曲し、口縁部が外反するものである。口頸部に幅の狭い文様帯がめぐり。全体形の分るものや器形の傾きなどから第4類はすべて台付と考えられる。例－B112.C234.D591。

第5類（IV f）－22個体ある。口頸部が屈曲し、口縁部が外反するものである。口頸部・肩に幅の狭い文様帯がめぐり、列点文や羊歯状文が施文される。肩に突起が1個配置されるものがある。全体形の分るものや器形の傾きなどから第5類はすべて台付と考えられる。例－A151.C110など。

第6類（I d）－1個体ある（D590）。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するものである。幅の広い口縁部にいわゆる三叉文がめぐり。体部上端にも文様があるが、いわゆる文様帯は形成され



ない。

第7類（Ⅱ h）－1 個体ある（C208）。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するもので、明確な頸部を形成し、そこに沈線が一条めぐっている。肩に突起が1 個付く。台付である。広口の壺の形態に類似する。

第8類（Ⅰ g）－1 個体ある（郷土館9）。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するものである。口頸部・肩に幅の狭い文様帯がめぐる。体部は、列点文を挟んだ縦方向の沈線で区画され、その内部に磨消縄文の手法によって一種の雲形文（四葉文的）が表現される。

第9類（Ⅰ f）－2 個体ある。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するものである。口頸部・肩に幅の狭い文様帯がめぐる。第8類と似るが、体部は無文で縄文地である。例－A281.C194。

第10類（Ⅴ i）－171 個体ある。口頸部が屈曲し、口縁部が短く立ち上がるものである。やや肩が張る器形である。肩の幅の狭い文様帯に列点文や羊歯状文がめぐる。肩には突起が配されるものが多い。例－C109.D215など。

第11類（Ⅵ b）－108 個体ある。口縁部がゆるやかに内湾するものである。口縁部に幅の狭い文様帯があり、列点文・羊歯状文がめぐる。体部は無文で縄文地のものが多いが無地のもの（C113など）もある。例－C199.D415など。

第12類（Ⅵ c）－4 個体ある。口縁部がゆるやかに内湾するもので、口縁部に幅の狭い文様帯が、体部に幅の広い文様帯がめぐる。小破片のため、体部の文様構成は不明である。例－C244.A105など。

第13類（Ⅰ j）－1 個体ある（A89）。口頸部が屈曲し、やや幅の広い口縁部が外反するもので肩に平行沈線がめぐり、体部は無文（無地）である。他のものに比べ小型である。

第14類－14 個体ある。分類の基準とは関係なく、口頸部に平行沈線や横長の長楕円形の浮文をもつものを集めた。大洞 C2～A 式土器の特徴をもつものである。例－C19.D90など。

その他－23 個体ある。第1 類～14 類に当てはまらない小破片を一括した。

### 3) 鉢の文様

鉢の細分（器形分類）の基準のところでも述べたように、大部分の鉢の頸部や肩部には幅の狭い文様帯がめぐる。なかには口縁部に文様があるものも少数ある。また第1・2 類のように、体部の幅の広い文様帯に雲形文などが表現されるものもある。

#### ①頸部や肩部の文様

この部分の文様帯は幅が狭いもので、ほとんどのものに見られる。いわゆる羊歯状文や列点文・ノ字文・短沈線文などが見られる。羊歯状文は整然としたもの（D422.C244など）とくずれたもの（D492.C205など）とがある。ところどころに空間をはさむ列点文も羊歯状文のくずれであろう（D537.D334など）。また羊歯状文は右上がりのものが多いが（D422.C244など）、左上がりも見られる（C110）。

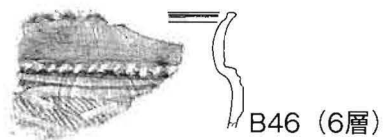
#### ②体部の雲形文

文様の構成・描き方の手順を観察するために、区画文・配置文という考え方（藤沼1983・1989）を用いた。区画文で割りつけられた文様帯に充填文を埋めると、おのずと単位雲形文が成立する。また配置文を配置した文様帯に充填文を埋めると、おのずと連続雲形文が出来上がる。区画文や配置文は、弧線を用いた点対称的な文様で、簡単な図形のものが多く、それぞれ3 大別することができた（第67図）。第8 類の体部文様は一種の

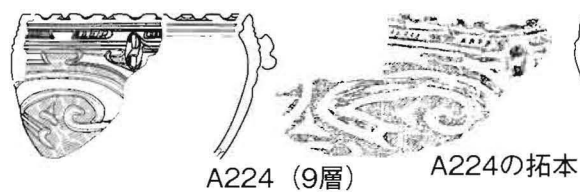
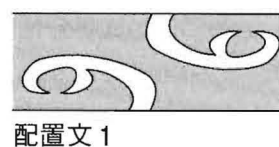
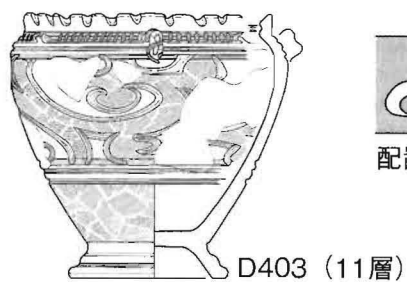
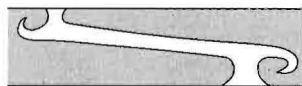
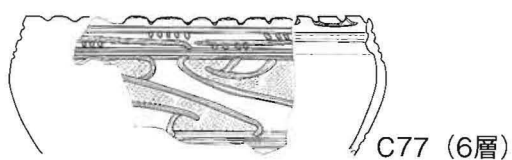
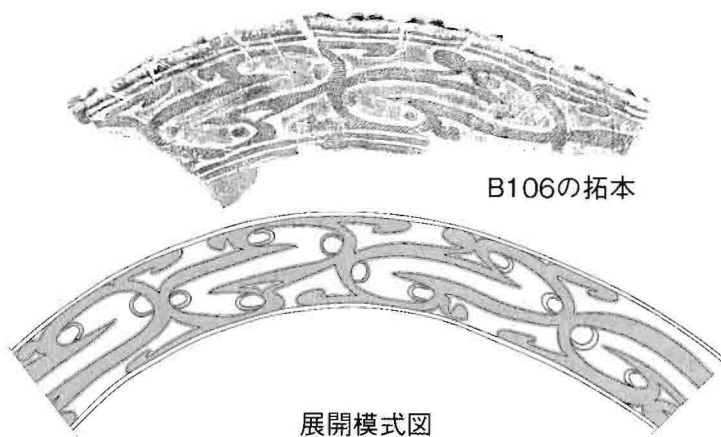
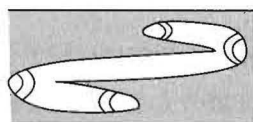
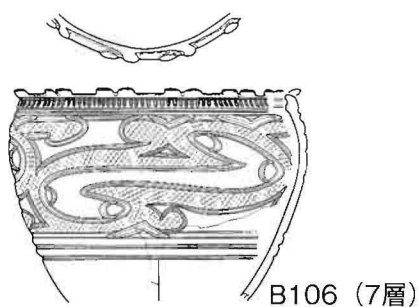
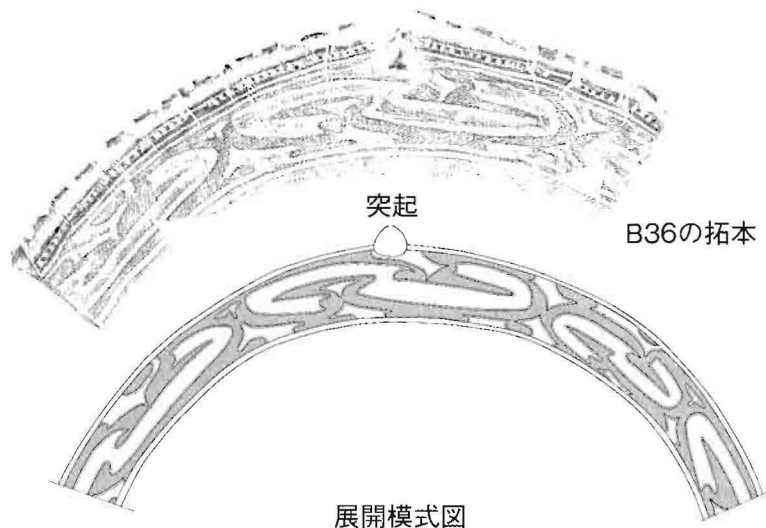
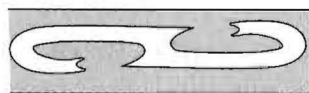
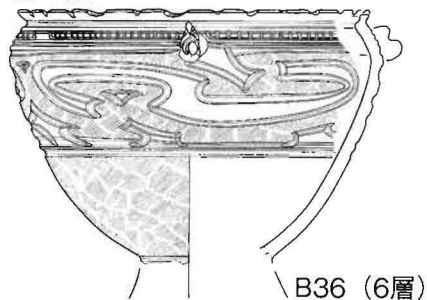
区画文1	
区画文2	
区画文3	
配置文1	
配置文2	
配置文3	

第67図 鉢の区画文・配置文

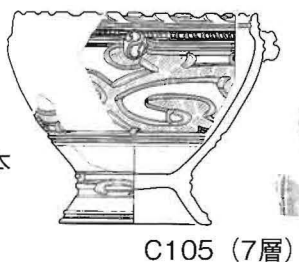
第1類



第2類



A224の拓本



C105の拓本

拓本・展開模式図の縮尺は不同である。

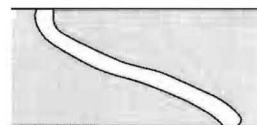


第68図 鉢第1・2類

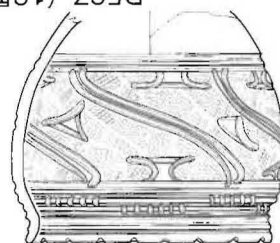


第69図 鉢第2類

区画文 1



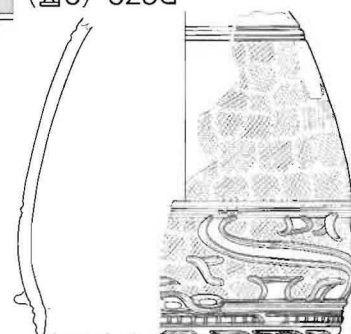
D537 (13層)



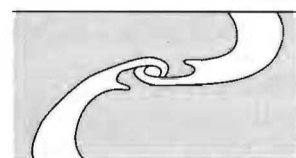
区画文 1



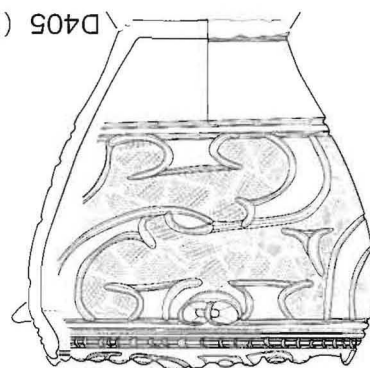
D279 (9層)



区画文 2

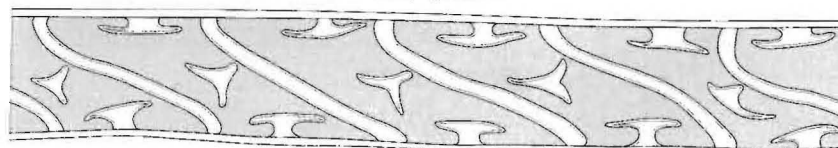


D405 (11層)

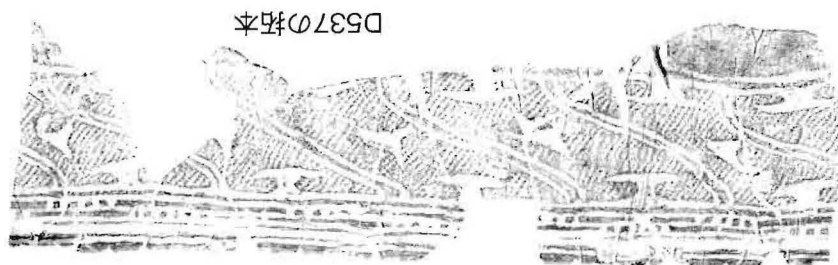


第2類

展開模式図



D537の拓本

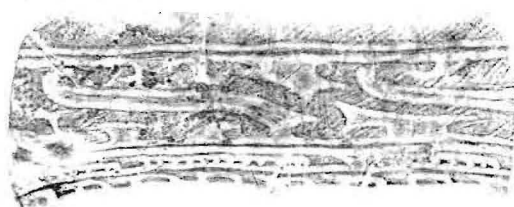


展開模式図



突起

D279の拓本



展開模式図

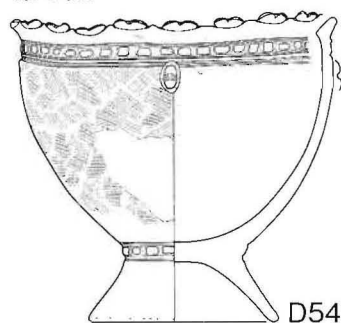


突起

D405の拓本

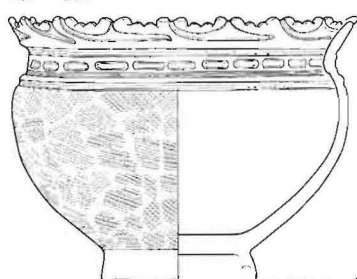


第3類



D547 (13層)

第4類



C234 (10層)

第6類



口縁部の  
文様拓本

D590 (15層)

第5類



郷土館16 (C-2, V下)

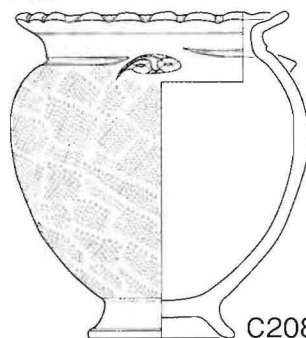


体部の文様拓本

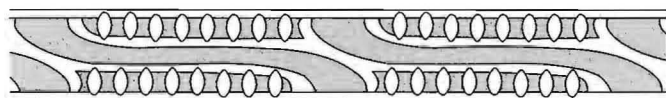


台部の文様拓本

第7類



C208 (9層)



口縁部の文様模式図

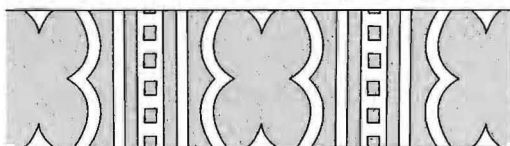
第8類



D区8層・郷土館9 (C-2, V中・VI)

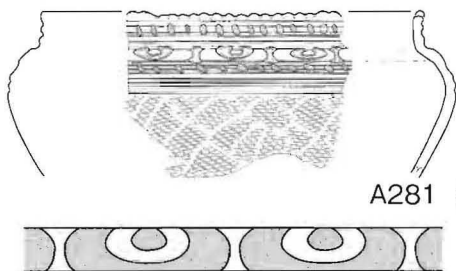


肩部の文様模式図



体部の文様 (区画文3)

第9類



A281 (10層)

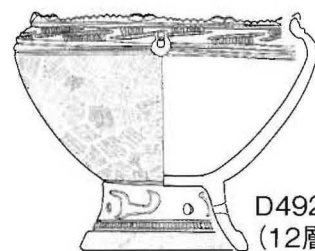


肩部の文様模式図

第10類



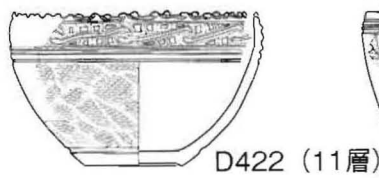
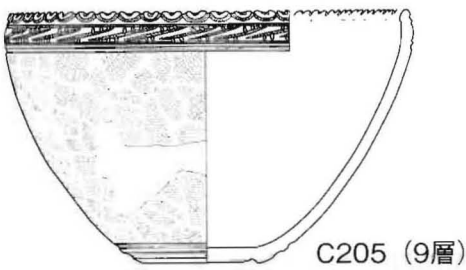
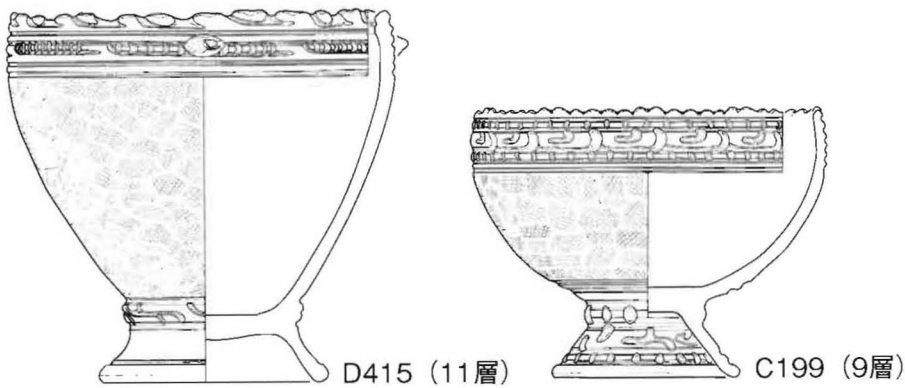
D215 (8層)



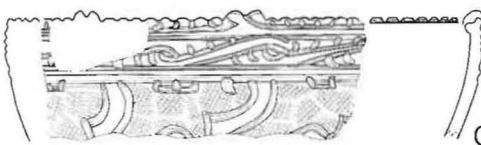
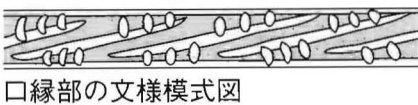
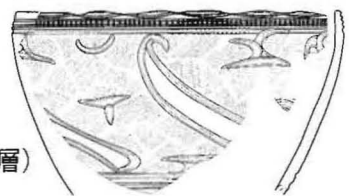
D492  
(12層)



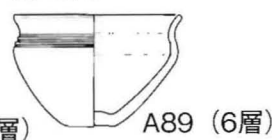
# 第11類



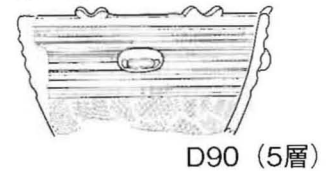
# 第12類



# 第13類



# 第14類



第71図 鉢第11～14類

単位雲形文としたが、縦の沈線を区画文とすべきか、あるいは点对称的な弧線の組み合わせを区画文とよぶべきかは難しい。

## ③地文

有文のものにも無文のものにも地文がある。地文の多くは縄文地で無地は少ない (A89.C113など)。縄文の種類は、単節 LR が圧倒的に多く、次いで単節 RL となるが、無節縄文・結節回転文などもごく少量見られる。

## 4) 鉢のまとめ

①鉢の器形は、基本形が単純であるにもかかわらず、口頭部の形態に微妙な変化が多い。底部を観察すると平底と台付があるが、個体数の少ない第8・13類、新しい要素をもつ第14類を除くと、殆どの鉢が台付であるといっていよいであろう。

②大きさは、台部が付いているものでは、器高(台部を含む)が7cm (C113) から33cm (C110. 推定器高) までであるが、10cmから15cmあたりのものが多い。もっとも小さいのは平底の第13類である。

③大小にかかわらず内外面に炭化物が付着しているものが大部分である。また文様の有無にかかわらず内外面に炭化物が付着している。ただし全面に文様をもつ第8類と小型の第13類には炭化物が付着していない。この2個体はともに平底である。また台部の破片を観察すると二次加熱をうけ橙～赤化しているものが多い。

こうして見ると、鉢は台付鉢が大部分を占め、大きさや文様の有無にかかわらず、澱粉質の食物の煮炊きに使用されていることが分る。とくに大きさは中型・小型のものが多い。こうした傾向は同時期の三沢市野口貝塚や十和山市明戸遺跡でも同じであるが、晩期後半に引き継がれてゆく要素でもある(工藤2002、藤沼・葛川ほか2005)。これらは調理や食事形態の実態にかかわることであるが、具体的な状況はあまりみえて来ない。

④大部分の鉢の頸部や肩部には幅の狭い文様帯があり、いわゆる羊歯状文や列点文・ノ字文・短沈線文などが見られる。例外に近いが口縁部に三叉文をもつものがある。

体部の幅広の文様帯には磨消縄文による雲形文が描かれる。描く手順などを考えると、壺や浅鉢・皿などにみられる雲形文と共通する内容となっている。

⑤三叉文・羊歯状文・雲形文などを型式学的に考慮すれば、鉢は、第6類・4類⇨第5類・8類・10類・11類・12類⇨第2類の順に変遷しそうであるが、層位的には入り混じって出土しており、簡単ではない。これらは、型式差でない可能性が強い。

⑥口縁部の内側にアルファルトが固く付着している破片と底部に漆塊が付着したほぼ完形(台部が欠損している)の鉢がある。ともに鉢が保存容器として用いられた例である。漆を入れたものは、内外面に炭化物が付着しており、煮沸容器を転用したものであることが分るが、炭化物が付着したまま利用しているのが不思議である。

#### (7) 浅鉢について

浅鉢の基本形は、逆台形であり、口径と器高(台部を除く)の割合が3分の1以上2分の1以下となるものである。鉢と皿の間に位置する器形であるが、機能的には皿に近い。大きさにバラツキがあるが、全体的に装飾的である。

浅鉢は、口縁部を有する完形品および破片で算出すると、167個体である(うち郷土館発掘20個体である)。

##### 1) 浅鉢の細別の基準(第72図)

浅鉢は、全体形が推定できるものを中心に、口縁部の傾きなどの全体形・口縁部の形態・文様の種類に注目して行い、13類型に細別した。

##### 分類の基準(1)－口縁部の傾きなどの全体形

- A. 口縁部が緩やかに内湾し、体部に膨らみがあるもの。
- B. 口縁部が外側に開き、体部に膨らみがあるもの。
- C. 口縁部が大きく外側に開き、体部が直線的なもの。
- D. 口縁部が緩やかに屈曲し外側に開くもの。体部に膨らみがある。
- E. 口縁部が立ち上がり、体部に膨らみがあるもの。
- F. 口縁部が屈曲してから立ち上がり、肩が丸みを持ち、張るもの。
- G. 口縁部が立ち上がり、体部は直線的であるもの。
- H. 口縁部が「く」の字に屈曲し、体部に膨らみがあるもの。
- I. 口縁部が外側に開くもの。



第72図 浅鉢の細別模式図

#### 分類の基準(2)－口縁部の形態

- a. 平縁のもの。なかには突起がつくものもある。
- b. 平縁であり、口唇部に装飾的な彫り込みが施されるもの。
- c. 刻み目があり、小波状になっているもの。
- d. 波状口縁のもの。

#### 分類の基準(3)－文様の種類

- ①. 口縁部に平行沈線がめぐり、体部文様帯に、磨消縄文による雲形文が施されるもの。口縁部の平行沈線には刺突を伴うものと、伴わないものがある。
- ②. 口縁部に平行沈線がめぐり、無地の体部に浮彫的手法による雲形文が施されるもの。
- ③. 口縁部に1条あるいは2条以上の平行沈線が施され、体部に文様がないもの。
- ④. 口縁部から底部にかけて無文のもの（いわゆる文様のないもの）。
- ⑤. 口頸部にいわゆる羊歯状文が施され、体部は無文のもの。
- ⑥. 口縁部に平行沈線に伴う列点が施され、体部は無文のもの。
- ⑦. 肩部に羊歯状文が施され、体部上半に雲形文が施されるもの。
- ⑧. 肩部にいわゆる変形工字文が施されるもの。
- ⑨. 体部上半にいわゆる工字文が施されるもの。

#### 2) 浅鉢の細別の結果と特徴（例は代表的なものにとどめた）（第75～84図）

第1類（A a ①）－82個体ある。口縁部が緩やかに内湾し、体部に膨らみがある。口縁部は平縁で、なかには突起が配置されるものもある（D339）。口縁部には平行沈線がめぐり、体部文様帯に磨消縄文による雲形文が施されている。口縁部の平行沈線に刺突が伴うものと、伴わないものがあるが、前者が多い。底部は円形にやや窪んだ上げ底である。また、丸底の部分まで雲形文が施文されたものが1点ある（D423）。例－B153.D424など。

第2類（A a ②）－7個体ある。口縁部が内湾し、体部に膨らみがある。口縁部は平縁で、なかには突起が配置されるものがある。口縁部には平行沈線がめぐり、丁寧に磨かれた無地の体部に、浮彫

的手法によって雲形文が施されている。7個体中6個体が赤彩されている。例－ B122.B126.B130など。

第3類（A a ③）－34個体ある。口縁部が内湾し、体部に膨らみがある。例外的に、口縁部が外側に開くものも含めている。平縁であり、なかには突起が配置されるものもある。口縁部に平行沈線がめぐり、体部は無地で丁寧に磨かれているものである。底部は円形にやや窪んだ上げ底が多い。平底で細い沈線で円を描いたものが1点ある（A243）。なお34個体中13個体が赤彩されている。例－ A28.D430.D435など。

第4類（A a ④）－24個体ある。口縁部が内湾し、体部に膨らみがある。平縁である。口縁部から底部まで文様がなく、無地である。底部は平底と丸底がある。磨かれているが、どれも3類ほど丁寧ではない。赤彩は小型のものに1点ある（C215）。小型品が含まれているのが特徴である。例－ C217.D552。

第5類（B a ③）－2個体ある。口縁部が外側に開き、体部に膨らみがある。平縁である。口縁部には平行沈線がめぐり、体部は無地で丁寧に磨かれている。底部に内側が窪んだ4ヶの瘤状脚を持つ。赤彩されている。例－ D436.D494。

第6類（C b ①）－4個体ある。口縁部が大きく外側に開き、体部が直線的に外傾する。平縁であり、口唇部に装飾的な彫り込みが施されている。口縁部に平行沈線がめぐり、刺突が加えられているものもある。体部には磨消縄文による雲形文が施されている。区画文で形成された単位雲形文である。底部は円で囲まれた平底である。口径約40cmの大型のものが1点ある（郷土館12）。他のものは破片であるが、口径が16cmから30cm位のものであると推定される。例－ A129.D241など。

第7類（D c ⑤）－1個体ある（D603）。口縁部が緩やかに屈曲し、外側に開くもので、体部に膨らみがある。口唇部に刻み目があり、小波状になっている。口頸部にはいわゆる羊歯状文が施され、光沢を持つ。体部は文様が無く、縄文地である。底部は上げ底気味の平底である。

第8類（E a ⑥）－1個体ある（C214）。体部から口縁部にかけて立ち上がり、体部に膨らみがある。平縁であり、口縁部には平行沈線に伴う列点が施されている。体部の無地の部分は、磨かれて光沢を持つ。底部は欠損しているが、平底と推定した。

第9類（F a ⑦）－1個体ある（C213）。口縁部が屈曲してから立ち上がり、肩が丸みを持ち、張る。平縁であり、突起が配置されている。肩部の文様帯には羊歯状文が施され、突起を持つ。体部上半に区画文による単位雲形文が施され、体部下半は縄文地である。平底である。

第10類（G a ③）－1個体ある（D26）。口縁部が立ち上がり、体部が直線的なものである。平縁で、突起が配置されている。口頸部の平行沈線間が磨かれ、無地となっている。体部は縄文地である。底部は欠損しているが、平底であると推定した。

第11類（H d ⑧）－1個体ある（D98）。口縁部が「く」の字に屈曲し、体部に膨らみがある。波状口縁であり、口縁部は磨かれて無地である。肩部の文様帯に変形工字文が施されている。体部下半は縄文地である。台部がつく。赤彩されている。

第12類（F a ④）－1個体ある（D92）。口縁部が屈曲してから立ち上がり、肩が丸みを持ち、張る。平縁である。口縁部から底部まで、文様が無く、無地である。底部は欠損しているが、平底であると推定した。

第13類（I a ⑨）－4個体ある。体部が外側に広がり、口縁部が立ち上がる。平縁である。体部上半にいわゆる工字文が施されている。全て底部が欠損しているが、D93は平底、A125は台付であろう。

その他－4個体ある。以上の分類に当てはまらないものや、小破片のため全体形が推測できないものである。

### 3）浅鉢の文様（構成・描く手順）

浅鉢は体部に幅の広い文様帯を持つものが多い。幅の広い文様帯には流麗な雲形文がふさわし



い。そのため区画文や配置文（藤沼1983・1989）を利用し、充填文を加えて、それぞれ単位雲形文や連続雲形文を生み出している。区画文と配置文は同じ程度に利用されている。このことについては器形や層位で比較して見てもあまり変わらない。

次に幅の広い文様帯に施文された雲形文を描く手順を示す区画文・配置文の種類をあげてみよう。

区画文は、第73図に示したように、4種類（区画文①～④）ある。配置文は7種類（配置文①～⑦）ある。配置文③・⑦は基本形は簡単な図形であるが、それに部分的に変化させて、いかにも複雑であるかのように見せている。雲形文を描く手順については、代表的な文様（浅鉢）ごとに、模式図を用いて解説してある（第75～83図）。

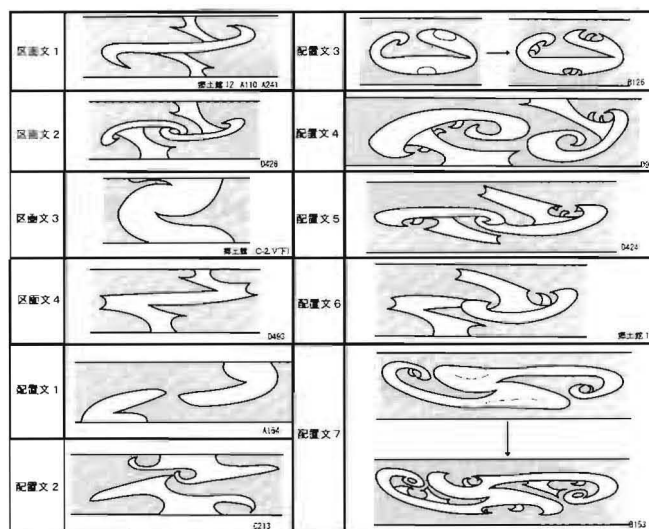
#### 4）浅鉢のまとめ

①浅鉢の製作方法について－浅鉢は文様やミガキによって装飾されているため、成形時の粘土紐積み上げ痕などはみることができない。また、割れ面（破損面）が器面に対し垂直に近い角度で割れるものが多いが、これは器壁が薄いためであろう。深鉢などとはちがって、浅鉢は粘土紐接合面で剥離しているものはきわめて少ない。

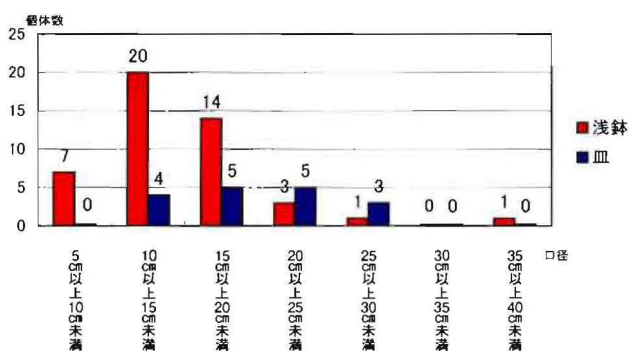
②浅鉢の用途－浅鉢の内外面に煮こぼれなどによる炭化物が付着しているものはない。また底部などに二次的な加熱をうけた痕跡を示すものもない。浅鉢は食物を煮炊きすることに使用されていないことは明白である。口が大きく底が浅い特徴は皿と同じであり、皿と同じように食べ物を盛りつける食器であったことが推定される。装飾されているものが多いのも食器であったからであろう。

③浅鉢は口径が5 cm～20 cmに集中する（第74図）。最大のものは口径38.7 cm（郷土館12）、次に大きいものは口径26.0 cm（B153）である。この二つは例外的な大きさといってよいであろう。次はずっと小さくなって口径21.0 cmとなる（A154）。最小のものは口径5.4 cm（D437）である。大型品は大勢の分の食物を盛り付け、それ以外のものは各個人が食物を取り分ける食器として用いられたのであろう。

④赤彩された痕跡をもつ浅鉢は、167個体のうち23個体で、全浅鉢の約14%にあたる。その痕跡は浅鉢の内外面に及ぶものが多いので、当時は外面も内面も赤く塗られていたことが分る。しかし、小さな破片を接合して復元した浅鉢をみると、一個の土器であるにもかかわらず、口縁部・体部上部・体部下部・底部・内面・外面など部分部分によって赤彩痕跡の残存状況が異なっているものがある。また一つの破片であっても、赤色顔料がよく残っている部分・点々と粒状に残存している部分・かすかにしか残っていない部分・まったく残っていない部分などがあることが観察される。このような残存状況の違いは、この土器が廃棄された後の条件で生じたものであろう。こうした例は、赤彩された土器であっても、完形品に近いものや大型破片であれば、どこかに顔料の痕跡を残す確率が高いが、小

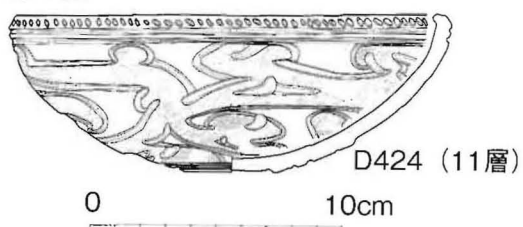


第73図 浅鉢の区画文・配置文

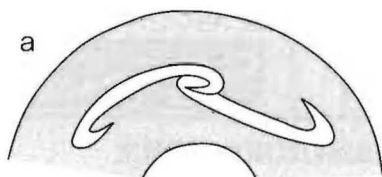


第74図 浅鉢・皿の口径の分布

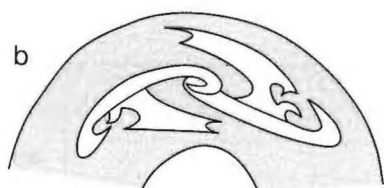
第1類



配置文の描き方



C字のモチーフを  
施す。

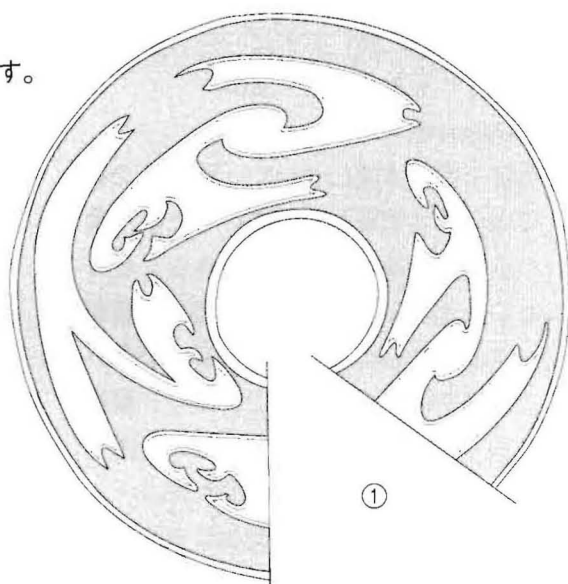


付加的要素を施す。

- ①配置文を2単位配置し、充填文と  
しての役割をする配置文を1単位施す。
- ②充填文。
- ③配置文と充填文を組み合わせたもの。



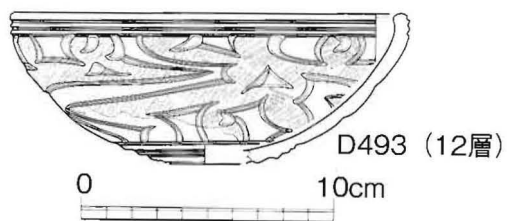
文様の展開拓本図



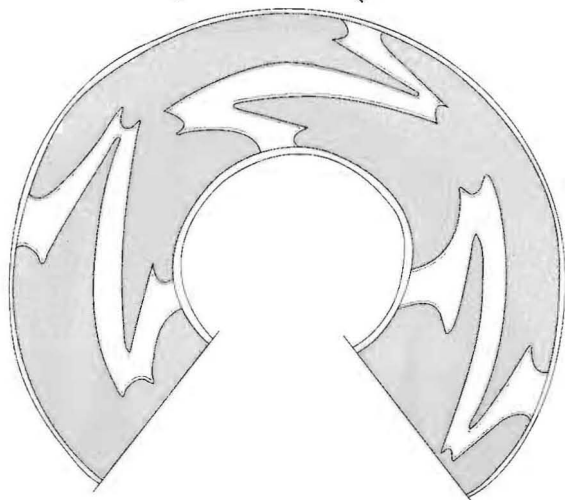
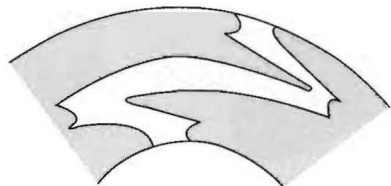
(拓本と展開図トレースは縮尺不同)  
浅鉢第1類

第75図

第1類



区画文模式図



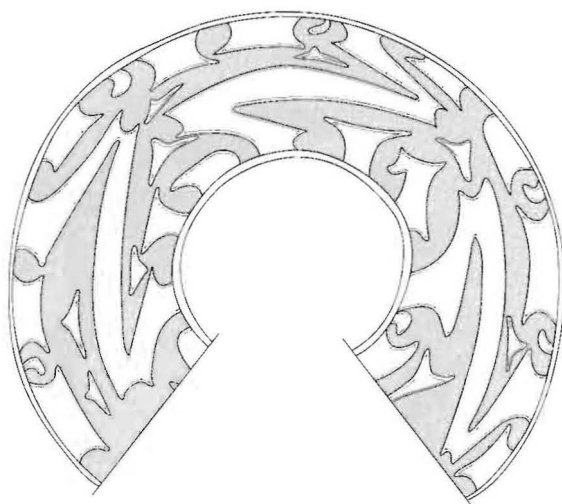
① Z形の区画文を3単位施す。



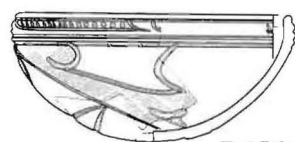
文様の展開拓本図



② 充填文。

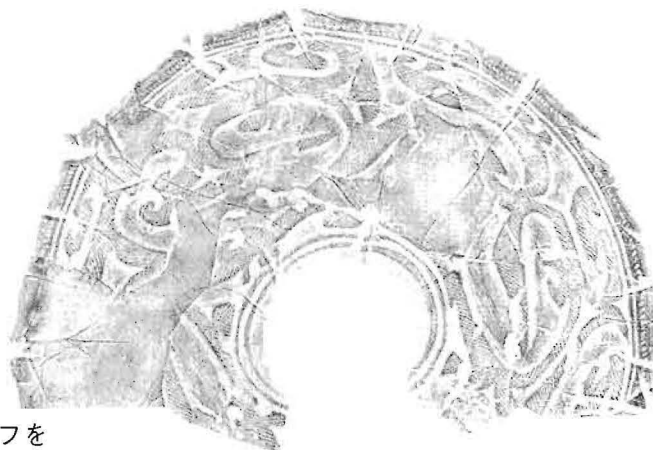
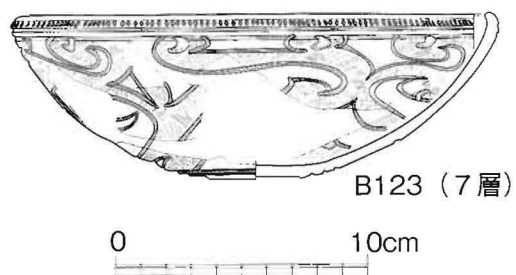


③ 区画文と充填文を組み合わせたもの。

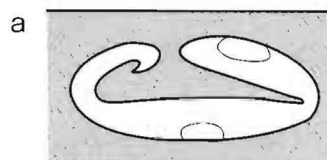


底部から見た図

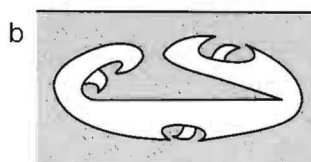
第1類



配置文の描き方

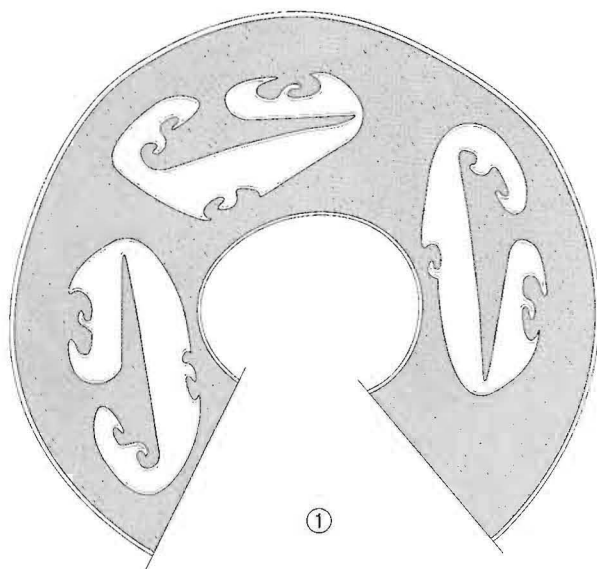


C字のモチーフを  
施す。



付加的要素を  
施す。

文様の展開拓本図



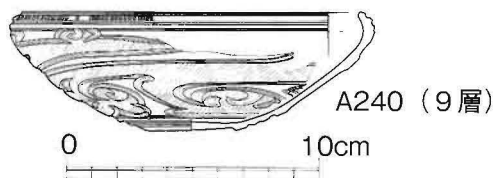
- ①配置文を3単位施す。
- ②充填文。
- ③配置文と充填文を組み合わせたもの。



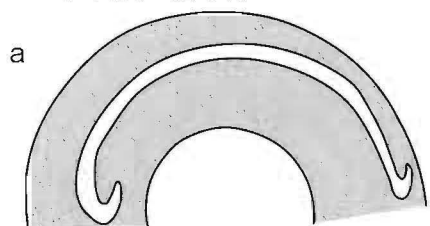
第77図 浅鉢第1類



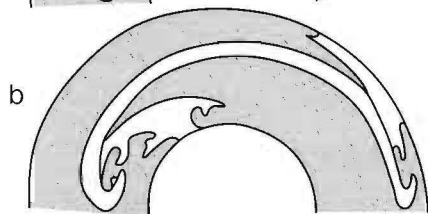
第1類



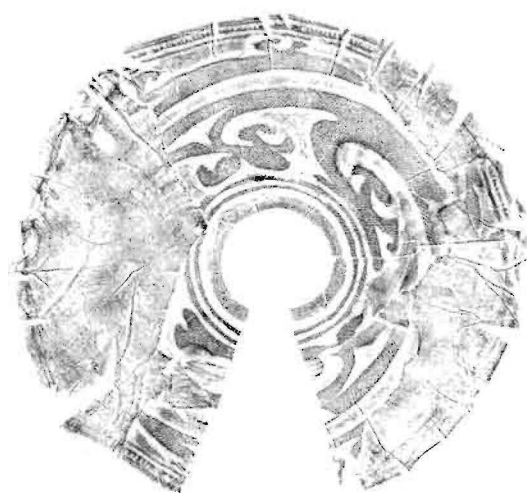
区画文の描き方



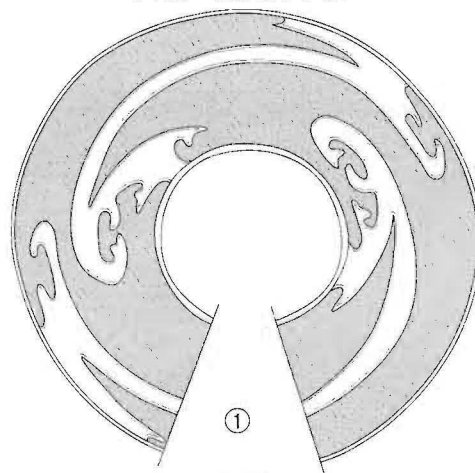
横S字の  
モチーフを  
施す。



付加的文様  
を施す。



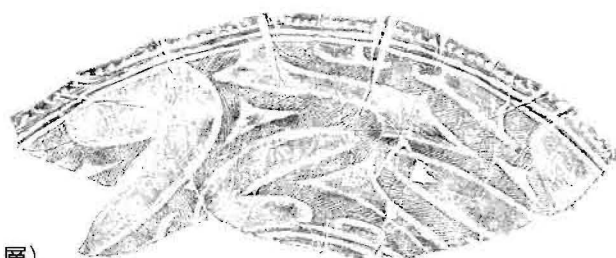
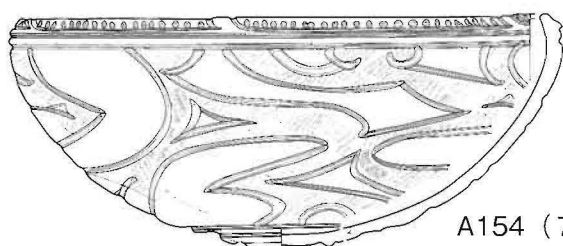
文様の展開拓本図



①区画文を2単位配置する。

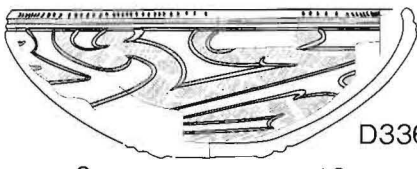
②充填文。

③区画文と充填文を組み合わせたもの。



第78図 浅鉢第1類

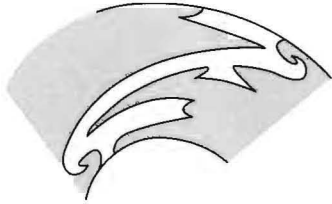
第1類



D336 (10層)



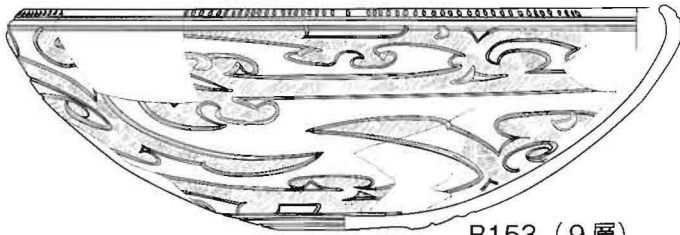
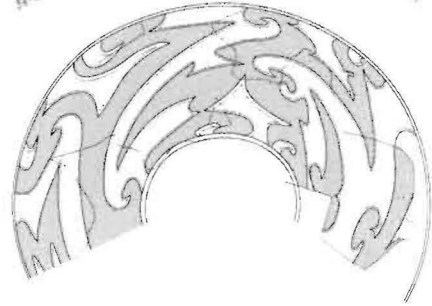
区画文の模式図



区画文の形は微妙に変化しているが、  
これが区画文の基本形だと思われる。



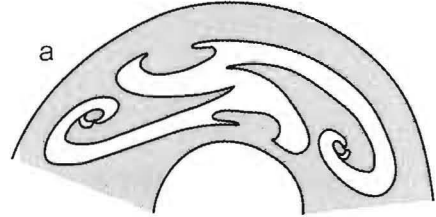
文様の展開拓本図



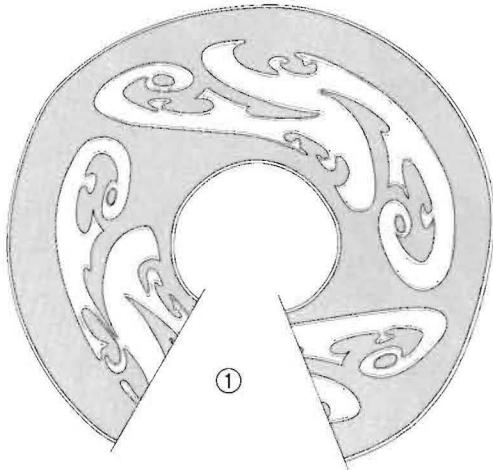
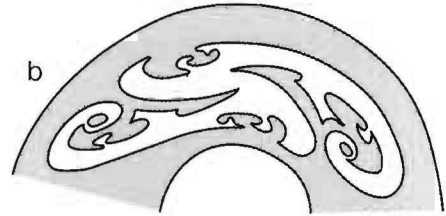
B153 (9層)

配置文の描き方

a



b



①

①配置文を2単位施す。

②充填文。

③配置文と充填文を組み合わせたもの。



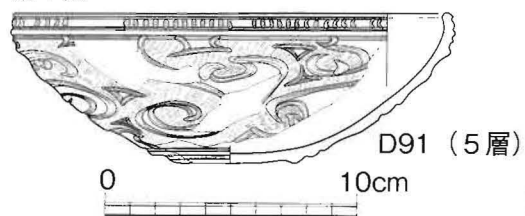
②



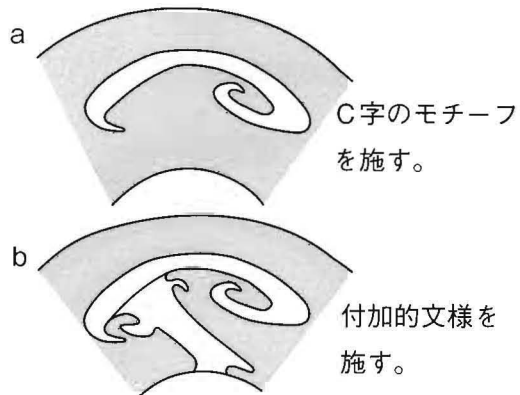
③



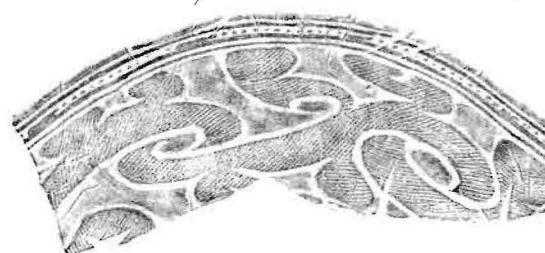
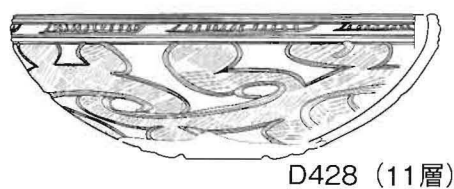
第1類



配置文の描き方

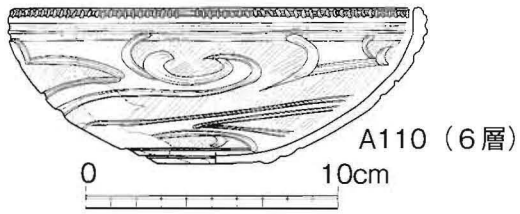


- ①配置文を点対称に4単位施す。
- ②充填文。
- ③配置文と充填文を組み合わせたもの。

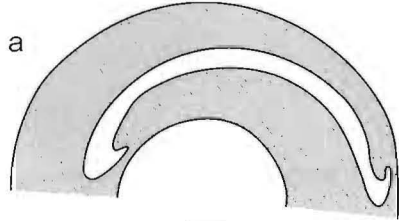


第80図 浅鉢第1類

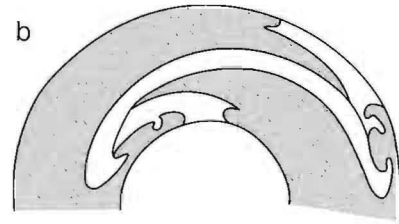
第1類



区画文の描き方

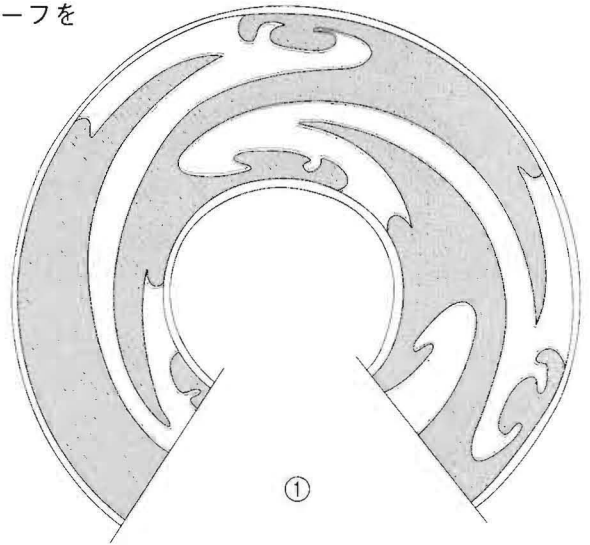


横S字のモチーフを  
施す。



付加的要素を  
施す。

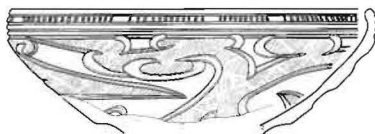
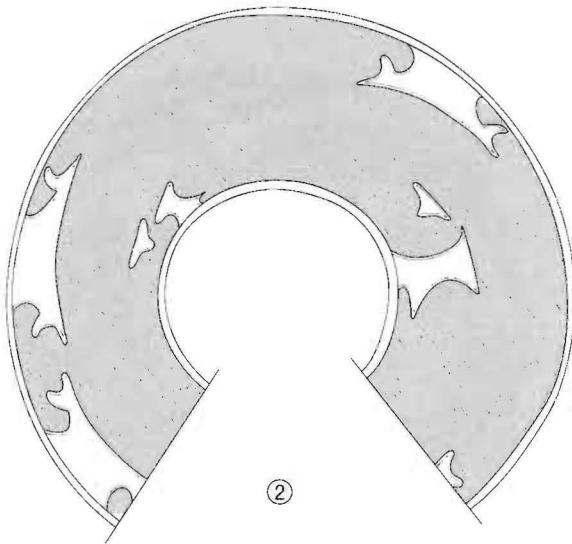
文様の展開拓本図



①区画文を2単位施す。

②充填文。

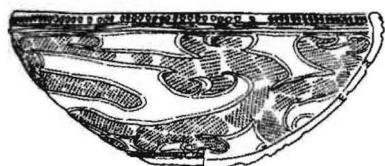
③区画文と充填文を組み合わせたもの。



B56 (6層)



第1類

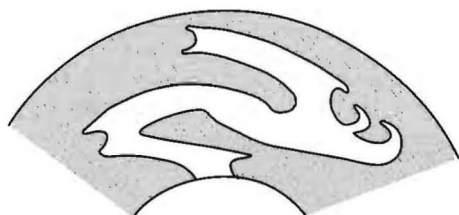


郷土館10 (C-2, V中)

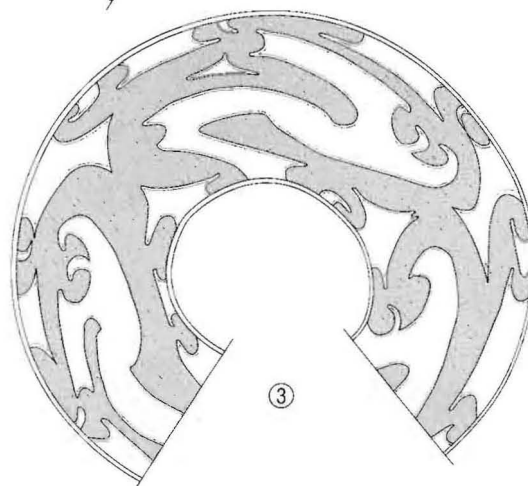
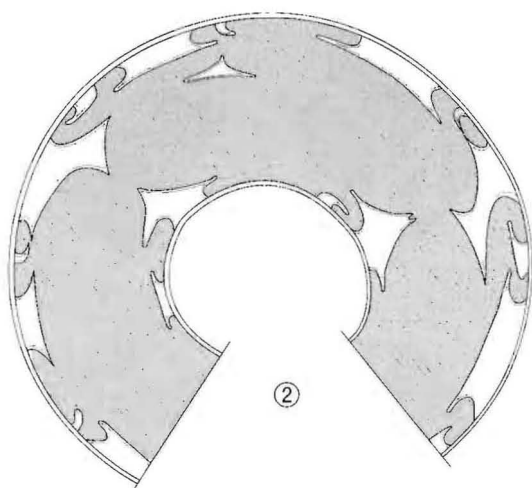
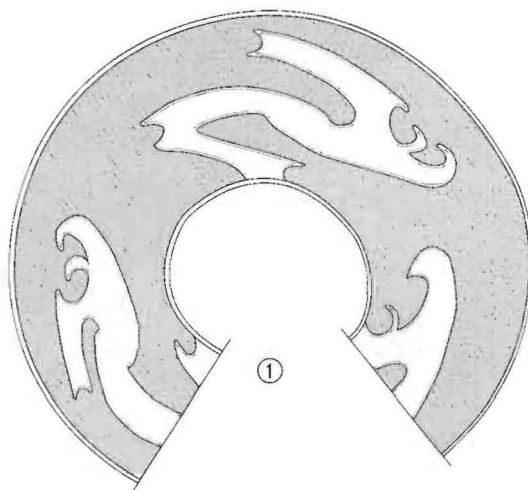


文様の展開拓本図

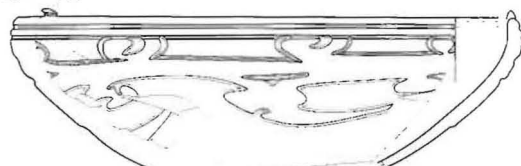
配置文の模式図



- ①配置文を2単位施す。
- ②充填文。
- ③区画文と充填文を組み合わせたもの。



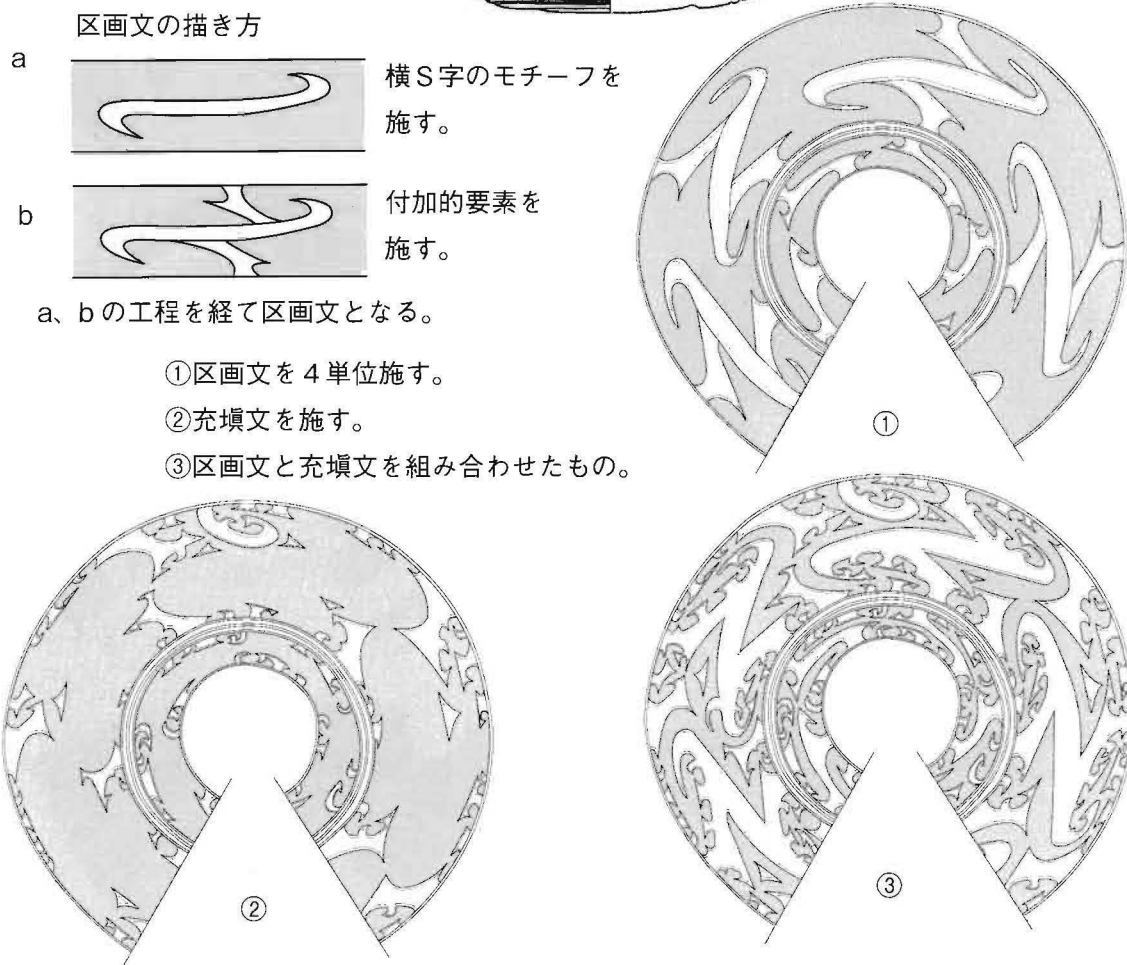
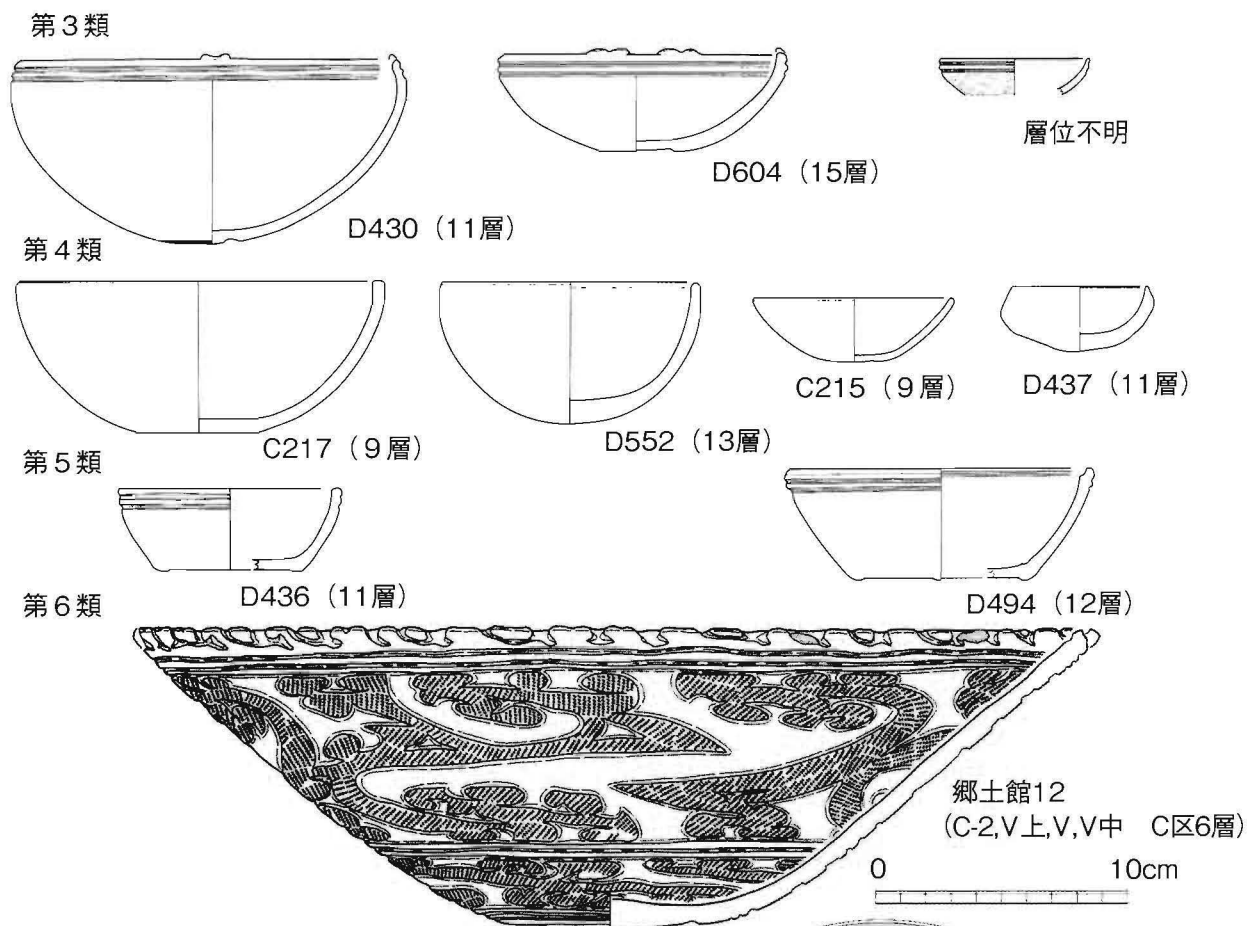
第2類



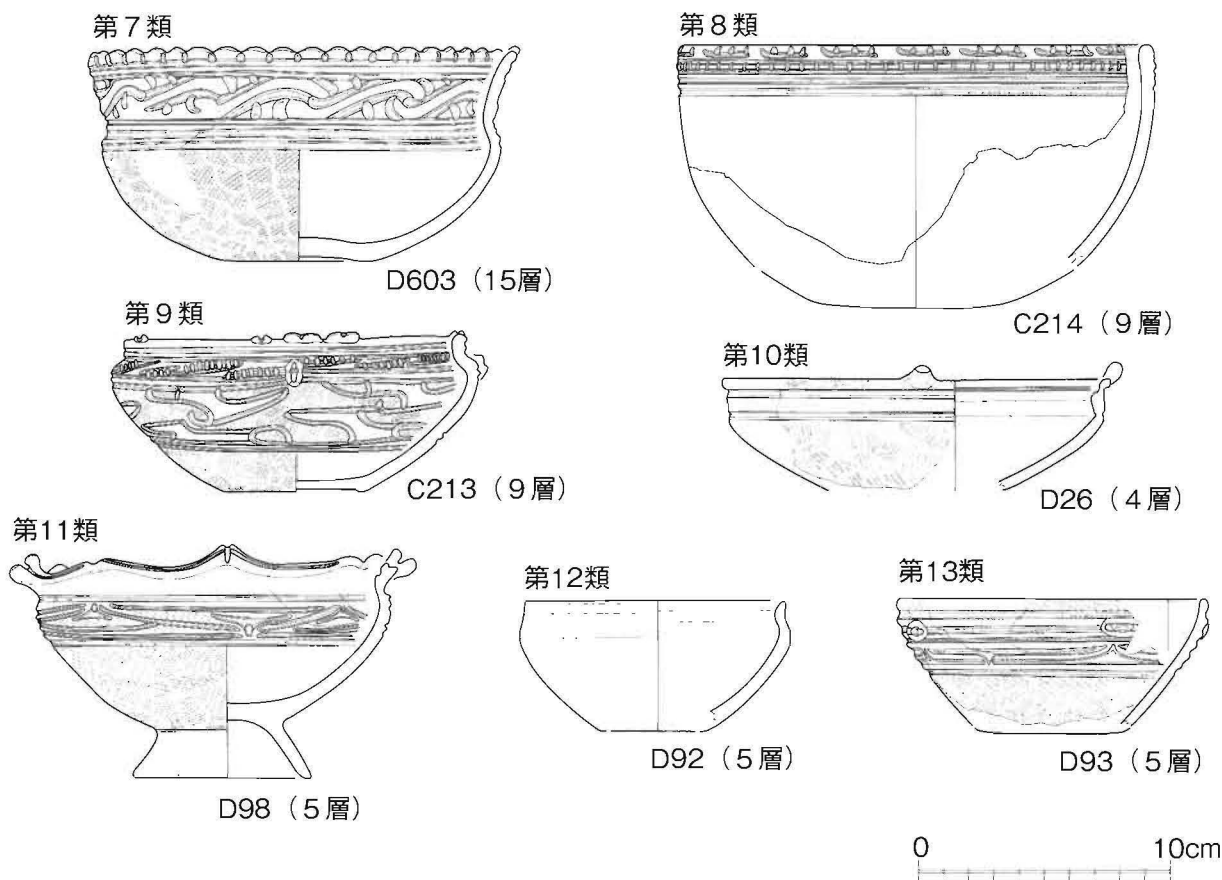
B122 (7層)



第82図 浅鉢第1・2類



第83図 浅鉢第3～6類



第84図 浅鉢第7～13類

型の破片であればその痕跡が消えてしまうものがあることを教えてくれる。

⑤浅鉢のなかには、赤彩の顔料とは少し違う感じの付着物がある。面的に観察されるものもあり塗布したものであることは間違いない。しかし赤色顔料ほど明瞭ではない。赤色顔料の色調は赤（Hue7.5R4/8・Hue10R4/8・Hue10R5/8）を基本とするが、これらの色調はにぶい赤褐（Hue2.5YR5/3・Hue10R4/6）、浅黄橙（Hue7.5YR8/4）、黄橙（Hue7.5YR8/8）、極暗赤褐（Hue2.5YR2/3）などである（『新版標準土色帖1988年版』を利用）。この付着物も漆そのものか漆に混ぜ合わせた顔料の痕跡であろう。肉眼で塗料の有無や種類を観察するのは不可能に近い。

⑥補修孔がある浅鉢の体部破片が1点ある。補修孔の断面は臼形で、両面から孔を開けたことを示している。また口縁部破片（D292と同一破片）の破損面に修理のためのアスファルトが付いているものがある。

⑦胎土に海綿（状）骨針が混入しているものがある。混入している量に多い少ないはあるものの、かなりのものに混入しているようである。土器製作の粘土の産出地が問題になるであろう。

⑧浅鉢の所属年代について大まかに、文様や出土層位や出土状況から検討してみよう。もっとも新しいのは第11類で、大洞 A' 式である。第13類は大洞 A 式である。第10類は大洞 C2式であろう。第12類も大洞 C2式以降である可能性が高い。問題になるのは第1類～9類で、大洞 BC 式から大洞 C1式あたりに相当するが、第7類は大洞 BC 式である可能性が高い。

#### (8) 皿について

皿の基本形は、底よりも口が大きく開いた逆台形である。底が浅く、器高（台部を除く）と口径との比が3分の1以下となるものである。全体的に加飾されたものが多いのが特徴である。

皿は75個体である（うち郷土館資料は9個体）。個体数は口縁部を有するもので算定した。全体形を推測できるものは17個体ある。

#### 1) 皿の細別の基準（第85図）

全体形を推定できる資料を基に、75個体を口縁部から体部の傾き・底部の形状・文様の種類・口縁の形状に基準を設けて11類型に分類した。破片が小さくて分類できないものもある。

##### 分類の基準(1)－口縁部から体部の傾き

- I. 口縁部から体部にかけて外湾するもの。
- II. 口縁部から体部にかけて外側へ直線的に開くもの。
- III. 口縁部から体部にかけて内湾しているもの。
- IV. 口縁部から体部にかけて緩やかに内湾しているもの。
- V. 頸部が屈曲し、広い口縁部を形成するもの。
- VI. 体部が内湾し、口縁部が短く直立するもの。

##### 分類の基準(2)－底部の形状

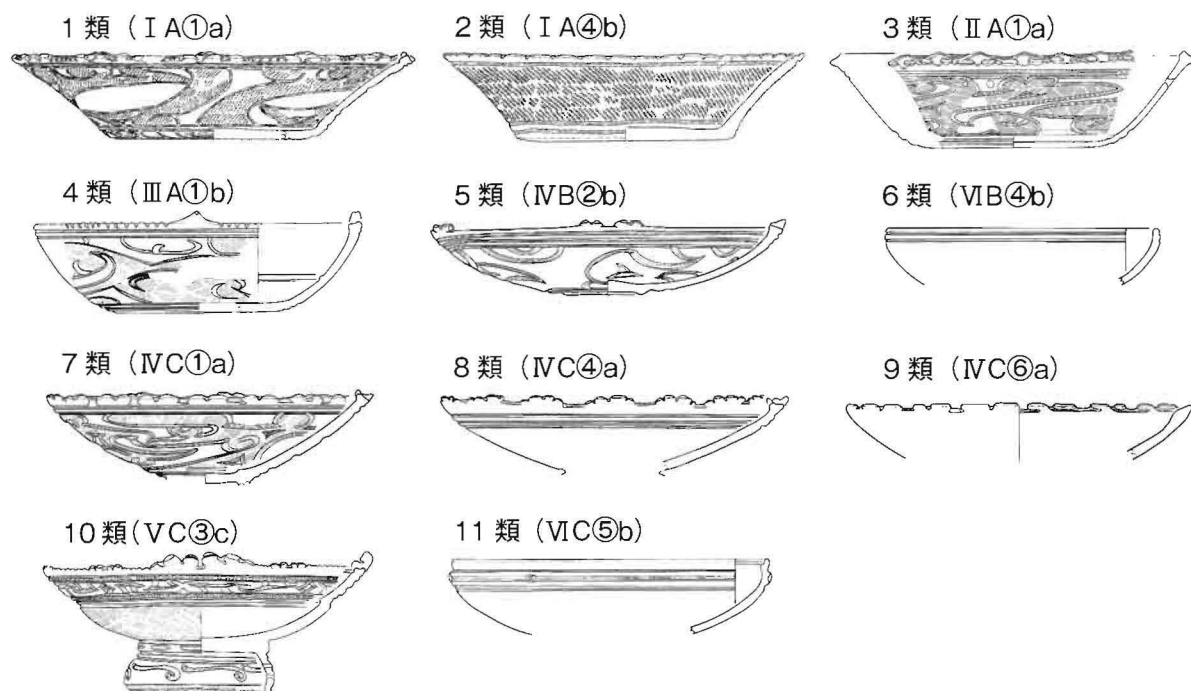
- A. 底部が大きく、平底を持つもの。
- B. 底部が小さく、平底を持つもの。
- C. 台部を持つもの。

##### 分類の基準(3)－文様の種類

- ①. 体部文様帯に磨消縄文の手法でいわゆる雲形文を描いたもの。
- ②. 磨かれた器面に沈線でいわゆる雲形文を描いたもの。
- ③. 頸部の文様帯にいわゆる羊歯状文を描いたもの。
- ④. 口縁部に1条、あるいは2条以上の平行沈線が巡るもの。
- ⑤. 口縁部に1条、あるいは2条以上の平行沈線が巡り、突起が配置されるもの。
- ⑥. 無文のもの。

##### 分類の基準(4)－口縁の形状

- a. 装飾的な彫り込みが施され、突起が複数配置されるもの。



第85図 皿の細別模式図



b. 平縁のもの。突起が4箇所配置されるものもある。

c. 装飾的な彫り込みにより小波状となっているもの。

## 2) 皿の細別の結果と特徴(例は代表的なものにとどめた)(第86~90図)

第1類(I A①a) - 8個体ある。口縁部から体部にかけて外湾し、大きな平底を持つ。体部文様帯に磨消縄文の手法でいわゆる雲形文が描かれる。口縁の形状は装飾的な彫り込みが施され、複数の突起が配置される。底部にも文様が描かれている。大型(A248)と小型(A159)があり、器高では約3倍の差がある。赤彩されているものは小型のA159のみである。例-郷土館11。

第2類(I A④b) - 3個体ある。口縁部から体部にかけて外湾し、大きな平底を持つ。体部は無文で縄文地であるが、口縁に近い部分と底部に近い部分に1~2条の沈線がめぐり、口縁の形状は平縁である。底部に文様は描かれず、赤彩の痕跡も見られない。例-郷土館15。

第3類(II A①a) - 20個体ある。口縁部から体部にかけて外側へ直線的に開き、大きな平底を持つ。体部文様帯に磨消縄文の手法でいわゆる雲形文が描かれる。口縁の形状は装飾的な彫り込みが施され、複数の突起が配置される。体部文様については区画文が多いが、中には無文の縄文地のものもある(A249)。赤彩の痕跡は見られない。底部に文様は描かれない。大型と小型があり、器高で約2倍の差がある。例-C82.D296。

第4類(III A①b) - 8個体ある。口縁部から体部にかけて内湾し、大きな平底を持つ。体部文様帯に磨消縄文の手法でいわゆる雲形文が描かれる。口縁の形状は平縁で突起が付くものもある(D108)。体部文様については横に伸びる配置文が多い。底部に文様は施されない。赤彩の痕跡があるものもある(C218.D107)。

第5類(IV B②b) - 1個体ある(D345)。口縁部から体部にかけて緩やかに内湾し、底部は小さい平底を持つ。磨かれた器面に沈線でいわゆる雲形文を描いている。口縁の形状は平縁で、4箇所に突起が配置される。文様は沈線を点対称に引き、区画文を描いている。両面に褐色の付着物が残存している。

第6類(VI B④b) - 2個体ある。体部が内湾し、口縁部が短く直立する。底部は小さい平底である。口縁部には2条以上の平行沈線がめぐり、口縁の形状は平縁である。体部は丁寧に研磨された無地となり、全てに赤彩の痕跡が残っている。例-B132.B152。

第7類(IV C①a) - 25個体ある。口縁部から体部にかけて緩やかに内湾し、台部を持つ。体部文様帯に磨消縄文の手法でいわゆる雲形文が描かれる。口縁の形状は装飾的な彫り込みが施され、複数の突起が配置される。体部文様については配置文が多いようである。赤彩の痕跡は3点にみられる(郷土館13)。例-A254.C222など。

第8類(IV C④a) - 1個体ある(郷土館14)。口縁部から体部にかけて緩やかに内湾し、台部を持つと思われる。口縁部には3条の平行沈線がめぐり、口縁の形状は装飾的な彫り込みが施され、複数の突起が配置される。体部は無地で、赤彩の痕跡は見られない。

第9類(IV C⑥a) - 1個体ある(D101)。口縁部から体部にかけて緩やかに内湾し、台部を持つと思われる。文様が施されない、いわゆる無地である。口縁の形状は装飾的な彫り込みが施されている。赤彩の痕跡は見られない。

第10類(V C③c) - 1個体ある(D555)。頸部が屈曲し、広い口縁部を形成している。体部は緩やかに内湾し、台部を持つ。台部の下端は破損しているが、破損面を丁寧に研磨した痕跡が見られる。頸部文様帯にいわゆる羊歯状文が描かれ、体部は無文で縄文地となる。口縁の形状は平縁で1箇所に装飾的な突起が施されている。台部には沈線で文様が描かれ、また穿孔による透かしが入っている。赤彩の痕跡は見られない。

第11類(VI C⑤b) - 1個体ある(C20)。体部が内湾し、口縁部が短く直立する。台部を持つ。口

縁部に2条の平行沈線が巡り、その一部に2個1対の粘土粒が施されると推測される。体部は丁寧に研磨された無地である。口縁の形状は平縁である。赤彩の痕跡は見られない。

その他－以上の分類に当てはまらないものや小破片のため分類できなかったものが4点ある。

### 3) 皿のまとめ

①皿の特色は器高が低く、底部よりも口縁部が広い器形であることと、全体的に加飾されていることである。全体形を推測できる17点の資料をもとに口径の大きさを調べると、径10～15cm未満のものが4個体、15～20cm未満のものが5個体、20～25cm未満のものが5個体、25～30cm未満のものが3個体あり、極端な不揃いはみられないが、20cm以下のものが多い傾向がある（第74図参照）。なお、最も大きいものは推定口径が28.8cm、器高が8.2cm（A248）で、最も小さいものは口径が11.9cm、器高が2.6cm（A159）である。

装飾は大小に関わらず施されており、口縁部の装飾が無く無地・無文のものでも、丁寧に研磨されているものがある（第6類など）。赤彩の痕跡は小型のものや丁寧に研磨された無地のものに多い。

②文様を持つものは、75個体のうち61個体あり、その割合は全体の約80%を占める。文様帯は体部から底部直上にかけて区切られた幅の広い文様帯に、雲形文が描かれるものが圧倒的に多い。雲形文を描く時に使用される区画文と配置文は同じ割合で施されるようである。配置文の中には、横に長く伸びるものも見られる（第4類）。無地に沈線で描いた雲形文もある（第5類）。また第10類の頸部の文様帯は一見すると羊歯状文のようにみえるが、無地に点対称となる2個一組の配置文を並べ、充填文を加えて作り出した浮彫風の連続雲形文である。地が無地であること・文様帯が狭く、列点文に挟まれていることなどが、羊歯状文にみえる効果を高めているのであろうが、雲形文と羊歯状文が近い文様であることも示している。

③皿は、型式学的（文様や形など）に見て、第10類⇨第1～3・5～9類⇨第4類⇨第11類の順に変遷しそうである。第10類は層位的にみても古そうである。第4類（D108）は大洞C2式に近いものであろう。第11類（C20）は大洞A式である。

④皿は、炭化物の付着や底部に二次加熱を受けた痕が見られない。広口で底が浅いため、専ら食器として使用されたのであろう。皿の中にも大小の違いがあるので、大型皿は大勢の食物を入れる共用の皿、小型の皿は取り分けた食物を入れる取り皿といったように、使い分けがなされていたのであろう。

⑤補修孔を持つ皿は3点出土している。ひび割れした部分に沿って両側に孔をあけ、紐で縛り固定したものである（C82）。孔の直径は平均5.9mmで、両側穿孔によって断面が臼形となっている。弥生時代の例であるが、登呂遺跡では桜の樹皮で補修孔を緊縛したものが出土している。またD555は、台部の下端の破損した部分を平らに研磨して安定するように再加工されている。縄文人は土器の一部が壊れることがあっても修理して再び使用している例である。

⑥皿は底が浅く大きいので、壺や深鉢に比べて底部から口縁部まで作るのが容易だったと考えられる。底部の縁に一定の幅の粘土紐を積み上げて成形したことが痕跡から分るものもある。また、身の底部が台部とともに抜けるように破損しているもの（D555）があり、底部と台部が一体化して作られていることを示している。おそらく円形の粘土板を下にし、その上に粘土紐を巻き上げて台部を作り、次にそれをひっくり返して円形の粘土板を上にし、そこを底部として周囲に粘土紐を巻き上げて身部すなわち皿の部分を作り上げたのであろう。台部の身部と接する内面に整形時の爪痕がたくさん付いているものがある（D555.写真28）。

⑦胎土に海綿（状）骨針が混入しているものが見られる。多い少ないはあるものの、殆どのものに混入しているようである。土器製作の粘土の産出地が問題になるであろう。

(9) 壺について

壺は、口頸部が細くすぼまり体部が膨らんだ形態の器種である。口頸部のすぼまる部分の径（多くは頸部径）と体部の最大径の比が、おおむね3分の2以下のものが多いが、広口壺などに分類したものには3分の2以上のものも含めた。

壺は、他の器種と比べても、器形も大きさも種類が多いのが特色である。個体数は、口縁部を有するものに限定して算出し、163個体あった。

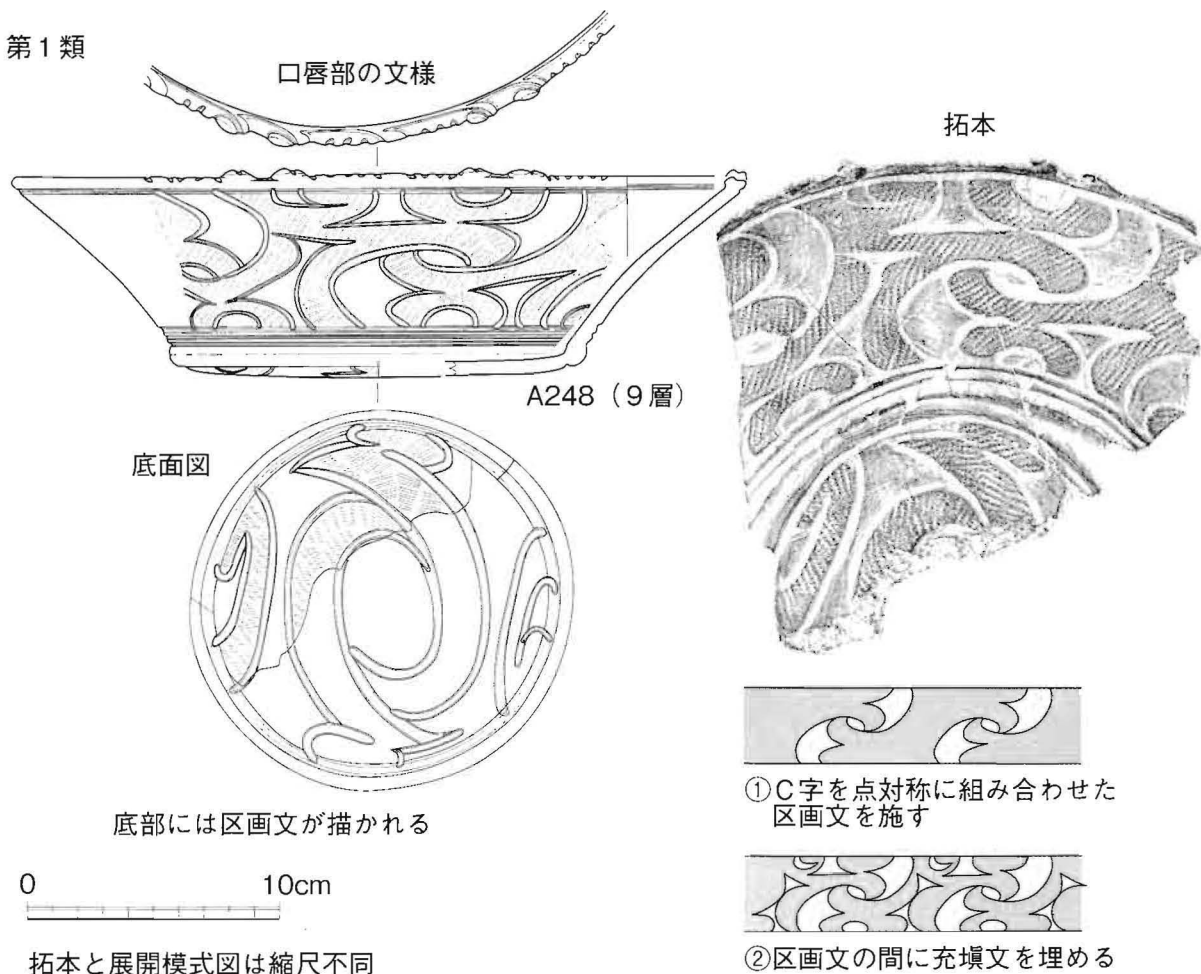
1) 壺の細別の基準（第91図）

壺は器形も大きさも種類が多いのが特色である。装飾のあり方も変化に富んでいる。口縁部の破片だけでは、全体形や体部の文様の有無などは分らないので、全体の形・口頸部の形状・体部の形状・文様の有無・地文の種類などに基準をおいて分類し、20類型に分けることができた。

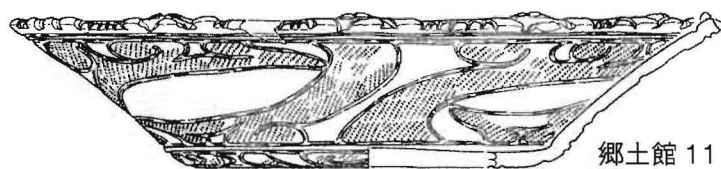
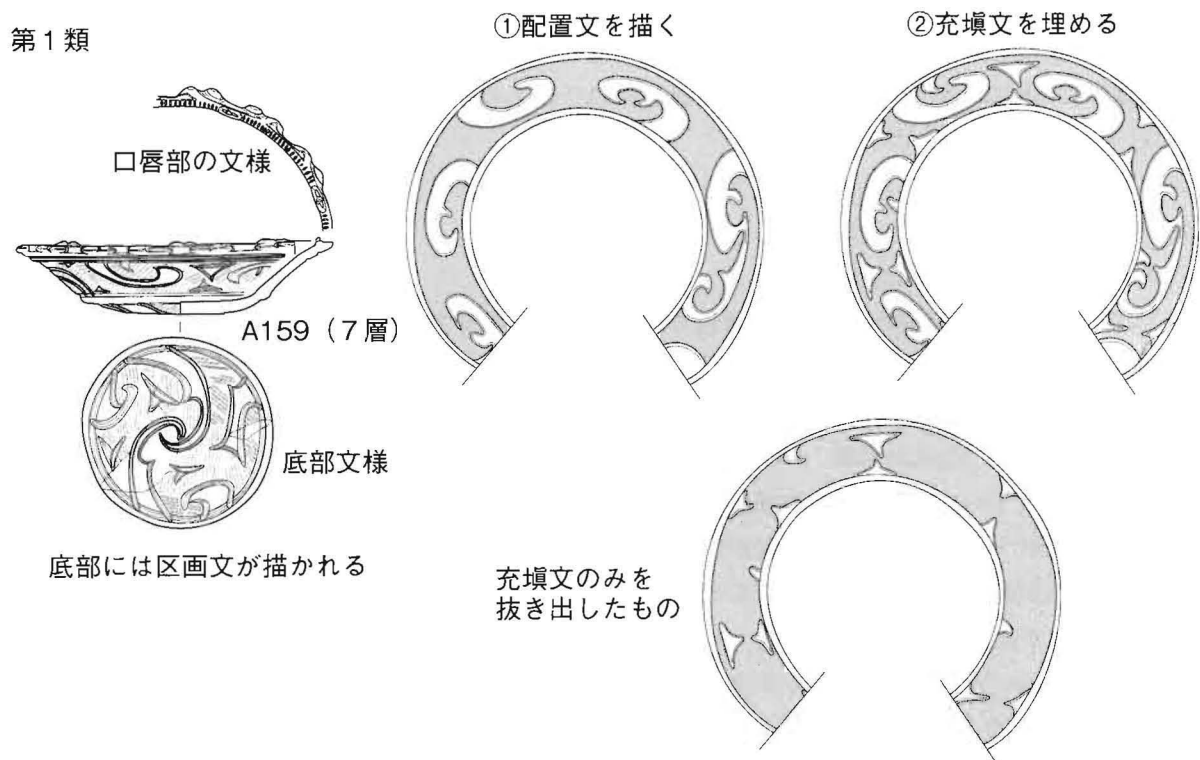
分類の基準(1)－口頸部の形状

- I. 頸部が「ハ」の字形で、口縁がいわゆる受け口状となるもの。
- II. 頸部が「ハ」の字形で、口縁が短く外反するもの。
- III. 頸部が直立気味に立ち上がるもので、口縁が外反するもの。
- IV. 頸部が直立気味に立ち上がるもので、口縁が短く外反するもの。
- V. 口頸部が肩の付け根で、やや丸みを持ちながら強く屈曲し、口縁が外反するもの。
- VI. 口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反するもの。
- VII. 口頸部が大きく太いもので、外反するもの。

第1類

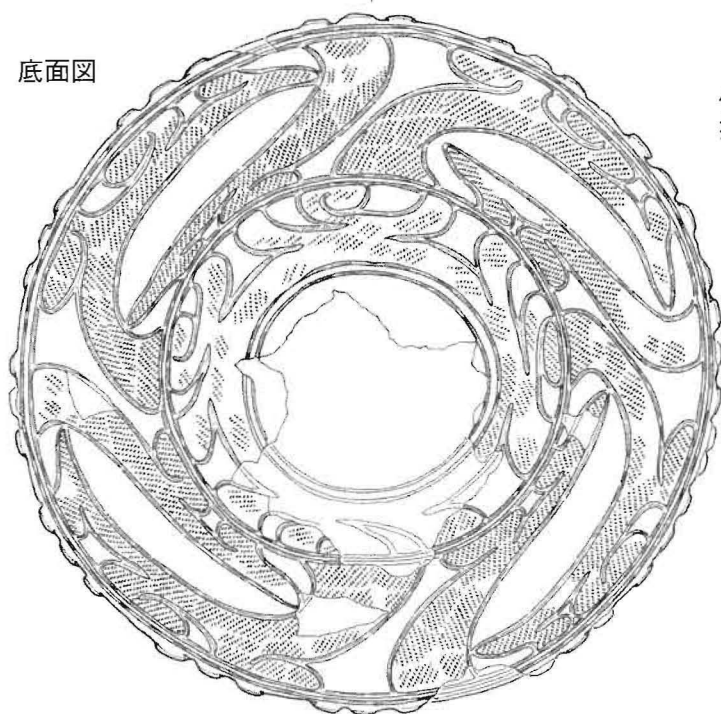


第1類



郷土館 11 (C-2, V上・V中)

底面図



体部には区画文と思われる文様が2種類描かれている



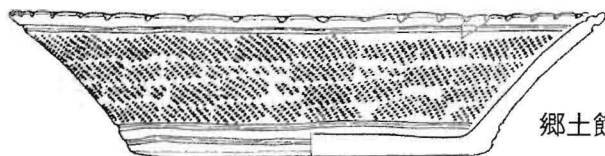
①C字を点対称に組み合わせた  
区画文



②点対称の弧線の組み合わせによる  
区画文

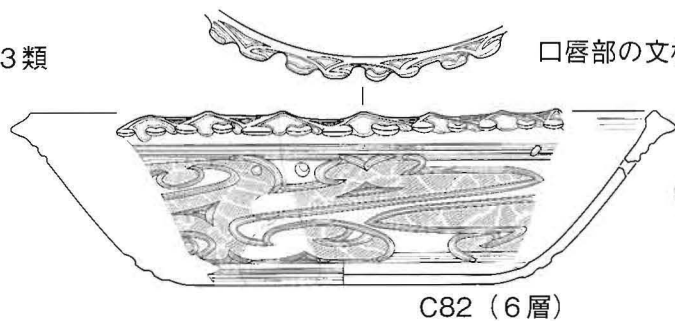
0 10cm

第2類



郷土館 15 (C-2, V 中)

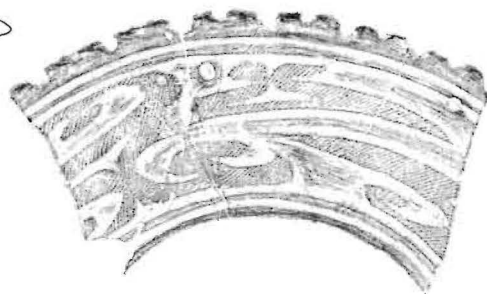
第3類



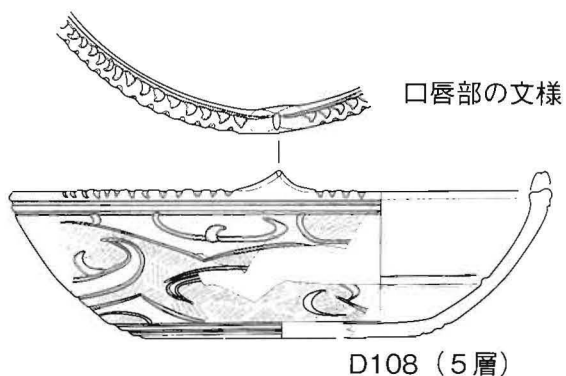
口唇部の文様

C82 (6層)

拓本



第4類



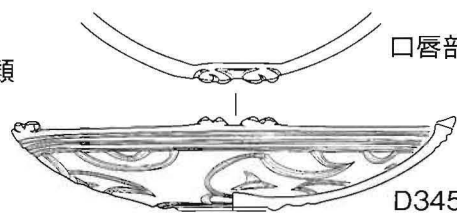
口唇部の文様

D108 (5層)

拓本



第5類



口唇部の文様

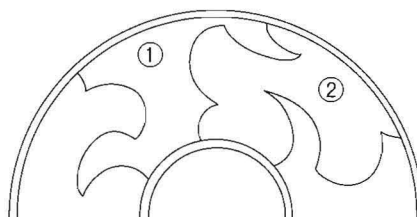
D345 (10層)

点対称の弧線の組み合わせによって  
文様が描かれている

底面図



区画文によって文様は描かれているが、区画  
文は①であるか②であるかは不明である



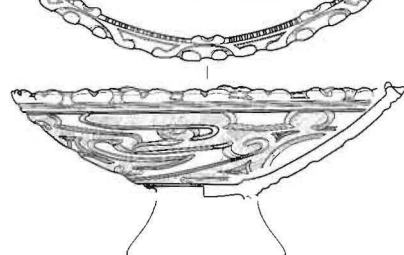
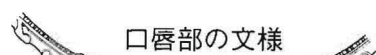
第88図 皿第2～5類

第6類



B132 (7層)

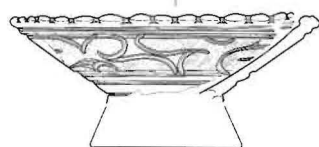
第7類



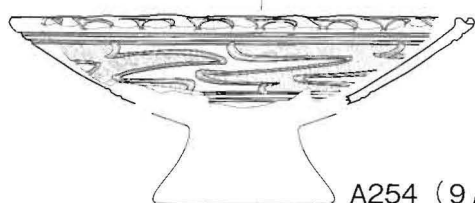
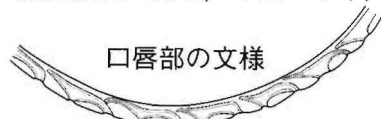
C222 (9層)



C222の拓本



郷土館13 (C-2, V上・V中)

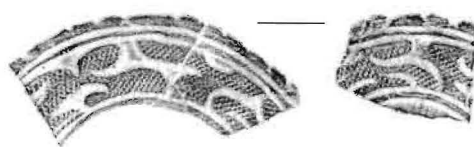


A254 (9層)



点対称の弧線の組み合わせによって単位文様が描かれる。充填文は描かれていない。

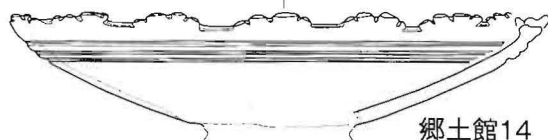
郷土館 13 の拓本



A254 の文様復元図

4 単位の単位文様が描かれている

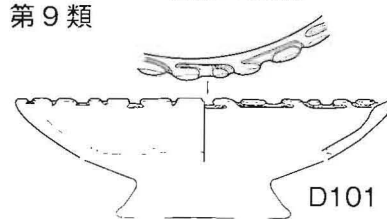
第8類



郷土館14 (C-2, V中)

第9類

口唇部の文様

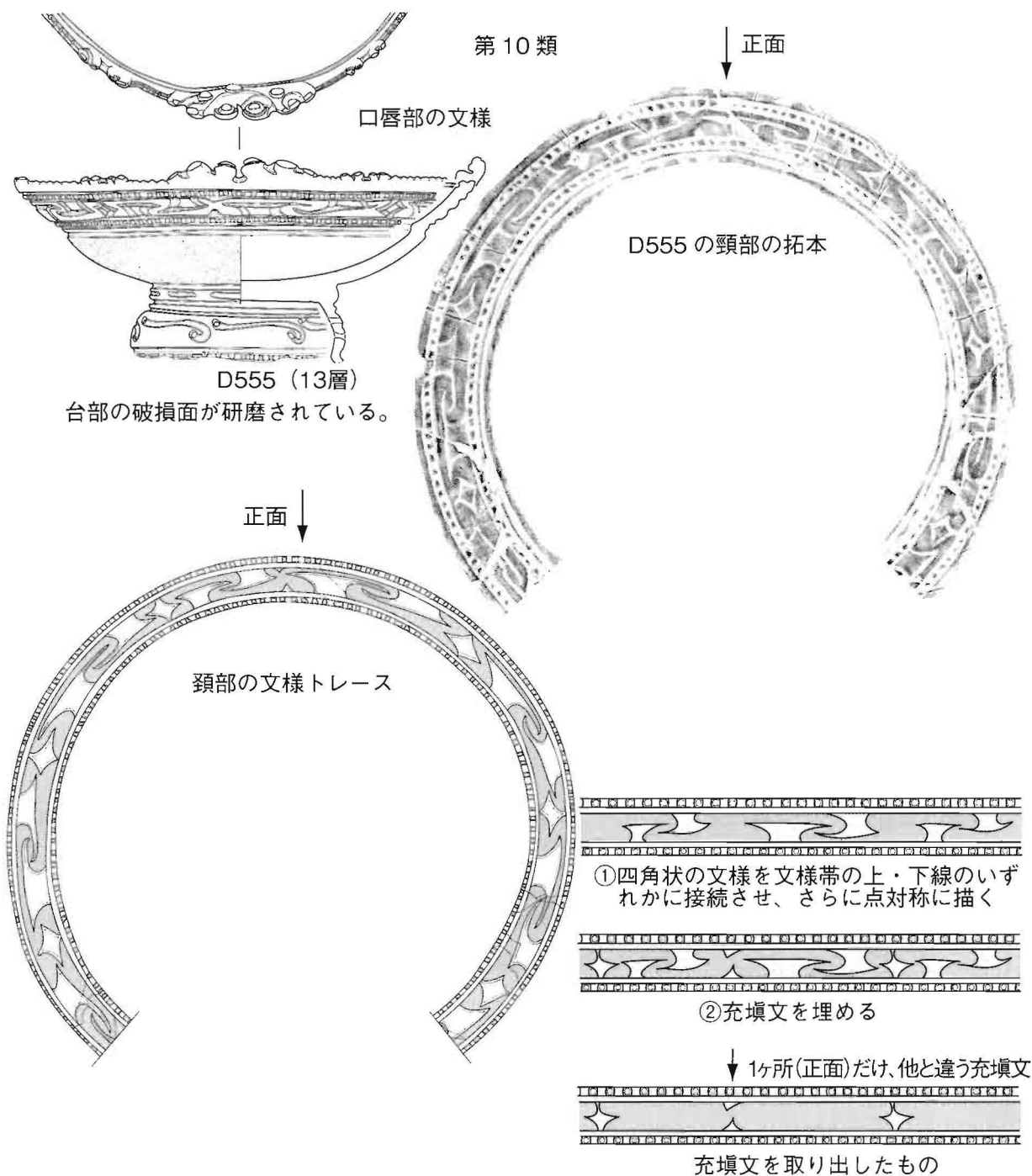


D101 (5層)

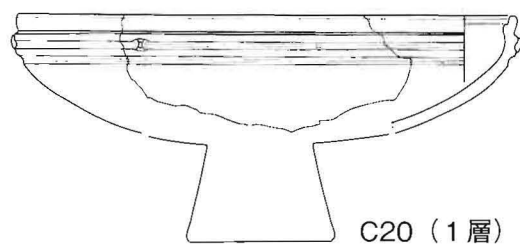


第89図 皿第6～9類



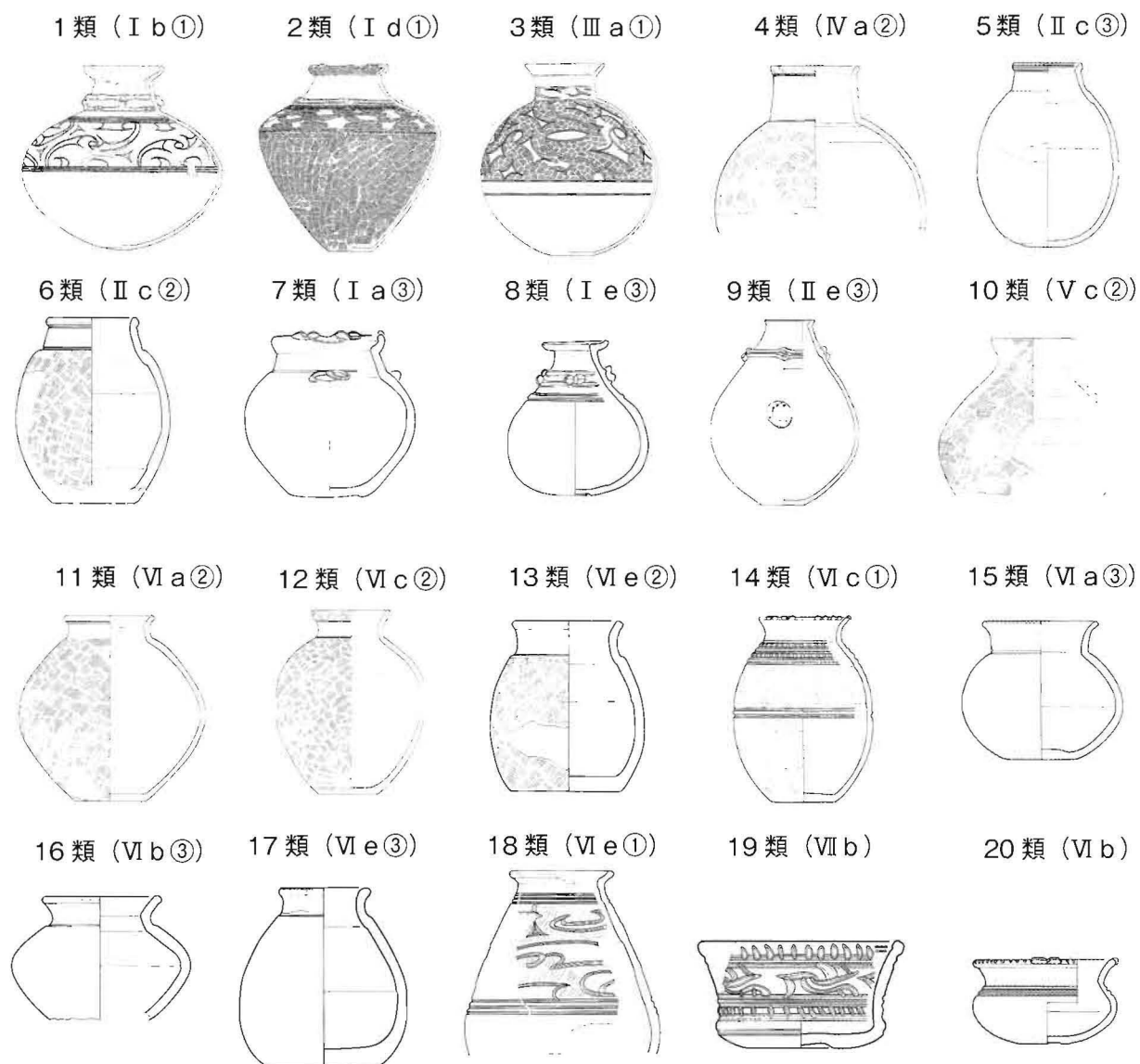


第11類



第90図 皿第10類・11類

## 壺の器形分類模式図



第91図 壺の細別模式図

### 分類の基準(2)－体部の形状

- 体部の最大径が中央部にあり、体部は球形に近いもの。
- 体部の最大径が中央部にあり、体部は横に長い（横楕円形）もの。
- 体部の最大径が中央部にあり、体部は縦に長い（縦楕円形）もの。
- 体部の最大径が上半部にあり、肩が強く張るもの。
- 体部の最大径が下半部にあり、下膨れの形になるもの。

### 分類の基準(3)－文様の有無、地文の種類

- いわゆる有文のもの。
- いわゆる無文のもので、縄文地のもの。
- いわゆる無文のもので、無地のもの。

### 2) 壺の細別の結果と特徴（例は代表的なものにとどめた）（第93～97図）

第1類（I b①）－1個体ある（郷土館4）。頸部が「ハ」の字形で、口縁がいわゆる受け口状となる。

かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は横に長いものである。いわゆる有文で、体部上半が大きな文様帯となる。頸部の付け根に橋状突起を持つ2条の隆帯がめぐる。大型品である。

第2類（Ⅰd①）－1個体ある（郷土館5）。頸部が「ハ」の字形で、口縁がいわゆる受け口状となる。かつ体部の最大径が上半部にあり、肩が強く張るものである。いわゆる有文で、肩部に文様帯がめぐる。頸部の付け根に橋状突起を持つ2条の隆帯がめぐる。大型品である。

第3類（Ⅲa①）－1個体ある（D557）。頸部が直立ぎみに立ち上がり、口縁が外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は球形に近いものである。いわゆる有文で、頸部の付け根に幅の狭い文様帯がめぐる。体部上半が大きな文様帯となる。大型品である。

第4類（Ⅳa②）－2個体ある。頸部が直立ぎみに立ち上がり、口縁が短く外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は球形に近いものである。体部は縄文地となる。例－D607.D501。

第5類（Ⅱc③）－1個体ある（D298）。頸部が「ハ」の字形で、口縁が短く外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は縦に長いものである。体部は無地となる。

第6類（Ⅱc②）－1個体ある（D446）。頸部が「ハ」の字形で、口縁が短く外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は縦に長いものである。体部は縄文地となる。

第7類（Ⅰa③）－2個体ある。頸部が「ハ」の字形で、口縁部が受け口状となる。かつ体部の最大径が中央にあり、球形に近いものである。全体が無地となる。例－D252.A163。

第8類（Ⅰe③）－2個体ある。頸部が「ハ」の字形で、口縁部が受け口状となる。かつ体部の最大径が下半部にあるものである。全体が無地で研磨された面となっている。頸部の付け根に橋状突起をもつ2条の隆帯がめぐるもの（A132）と頸部に幅の狭い文様帯がめぐるもの（D499）とがある。

第9類（Ⅱe③）－1個体ある（D504）。頸部が「ハ」の字形で、口縁部が短く外反する。かつ体部の最大径が下半部にあり、下膨れの形になるものである。全体が無地で、頸部の付け根に橋状突起を持つ2条の隆帯がめぐる。

第10類（Ⅴc②）－1個体ある（C224）。口頸部が肩の付け根で、やや丸みを持ちながら強く屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、体部は横に長いものである。頸部から体部まで縄文が施文されている（縄文地）。

第11類（Ⅵa②）－2個体ある（D562・D146）。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、球形に近いものである。文様を持つものではなく、すべて地文は縄文である。大型品は口縁端部が帯状に肥厚する。

第12類（Ⅵc②）－3個体ある。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径が中央にあり、縦長のものである。文様を持つものではなく、体部はすべて縄文地である。例－D564.C125.C121。

第13類（Ⅵe②）－2個体ある。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径が下半部にくるものである。文様を持つものではなく、体部はすべて縄文地である。例－D253.A133。

第14類（Ⅵc①）－1個体ある（D606）。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径が中央部にあり、縦長の形となる。いわゆる有文で、口縁や肩部などに小突起や文様が見られる。第12類と比べると薄手で光沢があり、装飾も目立つ。

第15類（Ⅵa③）－5個体ある。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反するもので、かつ体部の最大径が中央部にあり、球形に近いものである。文様のない無地のものである。器面の研磨は丁寧なもの、それほどでないもの、研磨がないものなどがある。比較的小型のものが多い。例－C126.D502.D561.B155.D560。

第16類（Ⅵb③）－1個体ある（B137）。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外

反するもので、かつ体部の最大径が中央部にあり、横に長いものである。文様のない無地のものである。比較的小型である。

第17類（Ⅵc③）－5個体ある。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反するもので、かつ体部の最大径が下半部にあり、下膨れとなる。文様のない無地のものである。器面の研磨は丁寧なもの、それほどでないもの、研磨がないものなどがある。比較的小型のものが多い。例－C123.D109。

第18類（Ⅵe①）－2個体ある。口頸部が肩の付け根で、「く」の字形に屈曲し、口縁が外反する。かつ体部の最大径は下半部にあり、縦長に下膨れになるもので、いわゆる徳利形に属する。体部の全面に文様が描かれているもの（D451）と上半部にのみ描かれるもの（D145）とがある。

第19類（Ⅶb）－2個体ある。口頸部が大きく太いもので、外側に外反するもの。かつ体部は小さく横に長いものを一括した。口頸部の文様を持つものと持たないもの（無地）がある。C226は羊歯状文、D350は羊歯状文と雲形文を持つ。

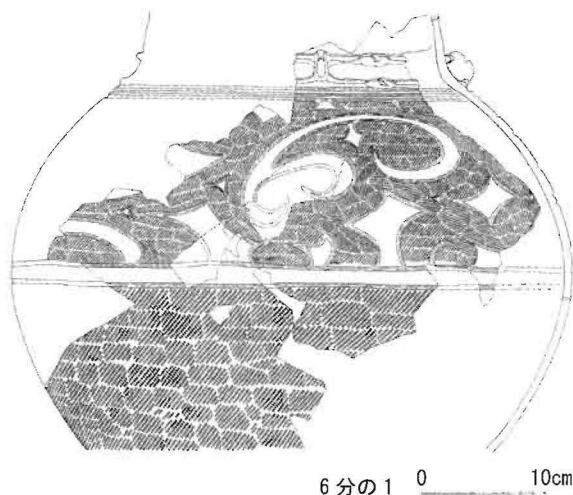
第20類（Ⅵb）－4個体ある。口頸部が肩の付け根で「く」の字形に屈曲し、広口壺となるものを一括したもので、比較的小型のものが多い。すべて地文は無地である。体部に雲形文をもつもの（層位不明）が1点があるが、他のものは文様を持たない。やや粗雑に作られたB154以外はすべて赤彩されている。例－D110.D503。

その他－全体の形が推測できない小さな口縁部破片が125個体ある。また口縁部の形状が分からない体部破片はさらに数が多い。このうち特色あるものを図や写真で示した（第97図、写真37）。

### 3) 壺のまとめ

①出土した縄文晩期の壺は、上器の文様から見る限り、羊歯状文と雲形文を持つものにほぼ限定され、大洞BC式～大洞C1式の時期のものと推定される。しかし、果たしてこの2型式に集約できるのか、あるいはできないのかは他の器種を含めて検討したい。

②壺の最大の特色は、器形の変化に富んでいるのに加え、大きさも大小さまざまあることである。もっとも大きいものは最大径45cm、推定復元高約50cm（第92図）で、もっとも小さいものは最大径約5.5cm、器高5.3cm（D501）で、その差が大きい。大型品は丁寧につくられ、体部上半などに文様をもつものが多い。破片でみると赤彩されたものも多い。



第92図 大型壺（郷土館7）

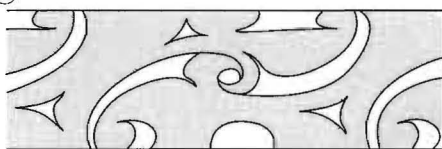
型式学的には、D557⇨郷土館7⇨郷土館4⇨郷土館5と変遷がたどれるようである。その変遷を層位的に証明するのは困難である。中型品は文様をもたない縄文地のものが多い。小型品は形・大きさに変化が多く、無地であるがよく研磨されて光沢をもつもの・赤彩されたものなどが多いが目立つ。

③壺には煮こぼれなどの炭化物の付着が見られない。また二次加熱によって底部などが橙～赤色に変化したものもない。壺は煮炊きに使用されることのなかった器種の一つである。壺は大小にかかわらず、物を保存あるいは収納する器と考えられる。口頸部がすぼまる形態は液体や粒状のもの・粉状のものを入れるのに便利である。大型品・中型品は専ら保存容器・収納容器であろう。しかし小型品は浅鉢や皿と同じように食器として使われることも多かったと推察される。

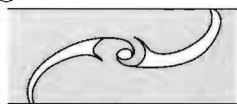
④口縁部を有する壺の完形品や破片のうち文様をもつものは8点で、数が少ない。分類でいうと大型品に属する第1類～3類、徳利形の18類、特殊な形のコップ形の19類で、大型のものや特殊な器形

第1類

②

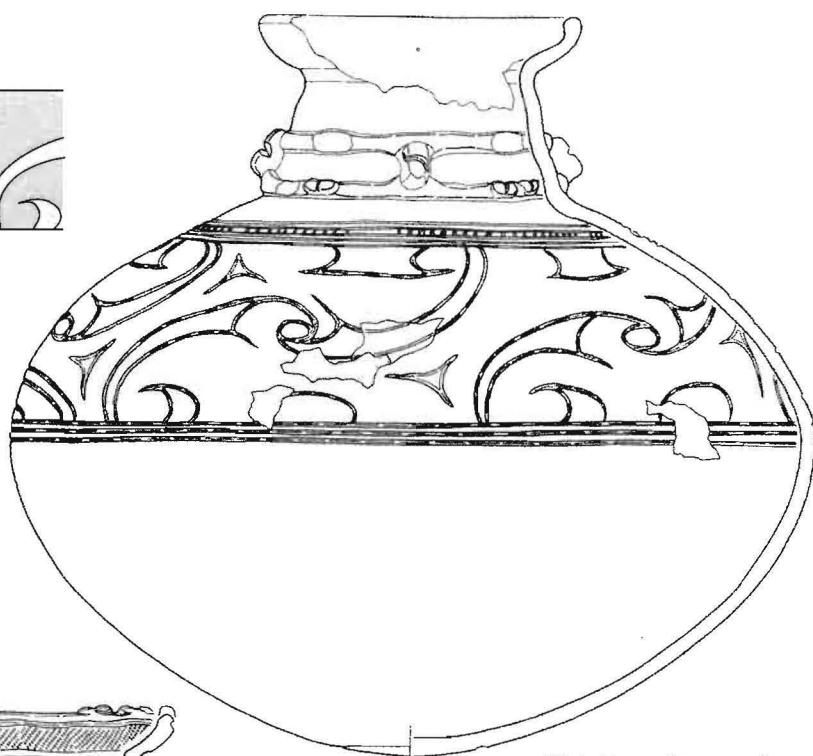


①



区画文

①に充填文を加えて②が完成する。



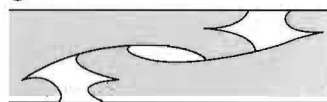
郷土館4 (C-2, V)

0 10cm

第2類



①



区画文

①に充填文を加えて②が完成する。

0 10cm

郷土館5 (C-2, V中)

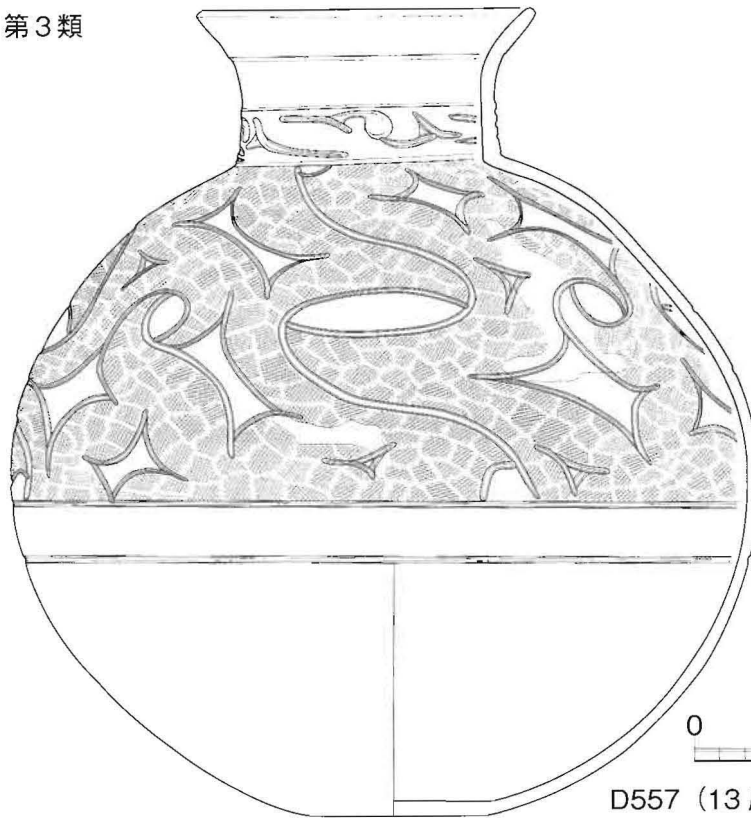
②



拓本・展開図は縮尺不同

第93図 壺第1・2類

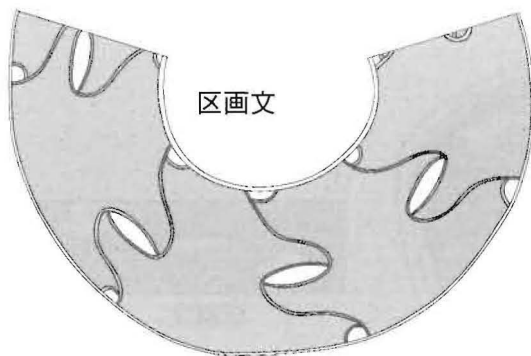
第3類



0 10cm

D557 (13層)

①



区画文

②

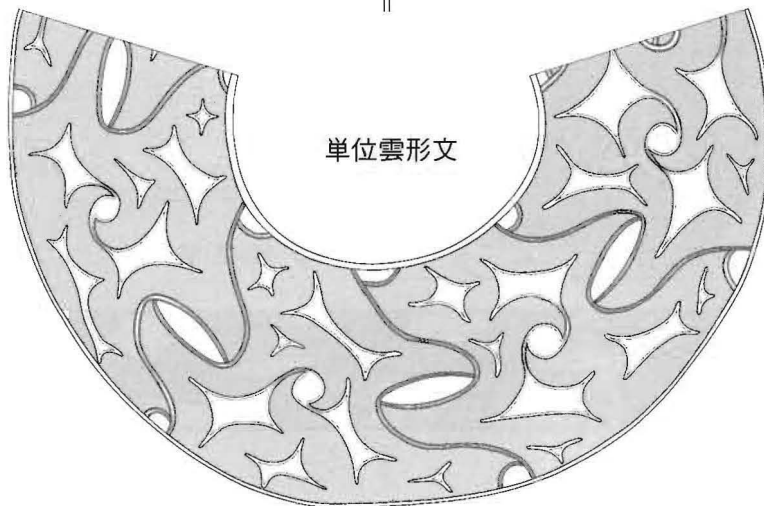


充填文

+

①に②を加えることで  
③が完成する。

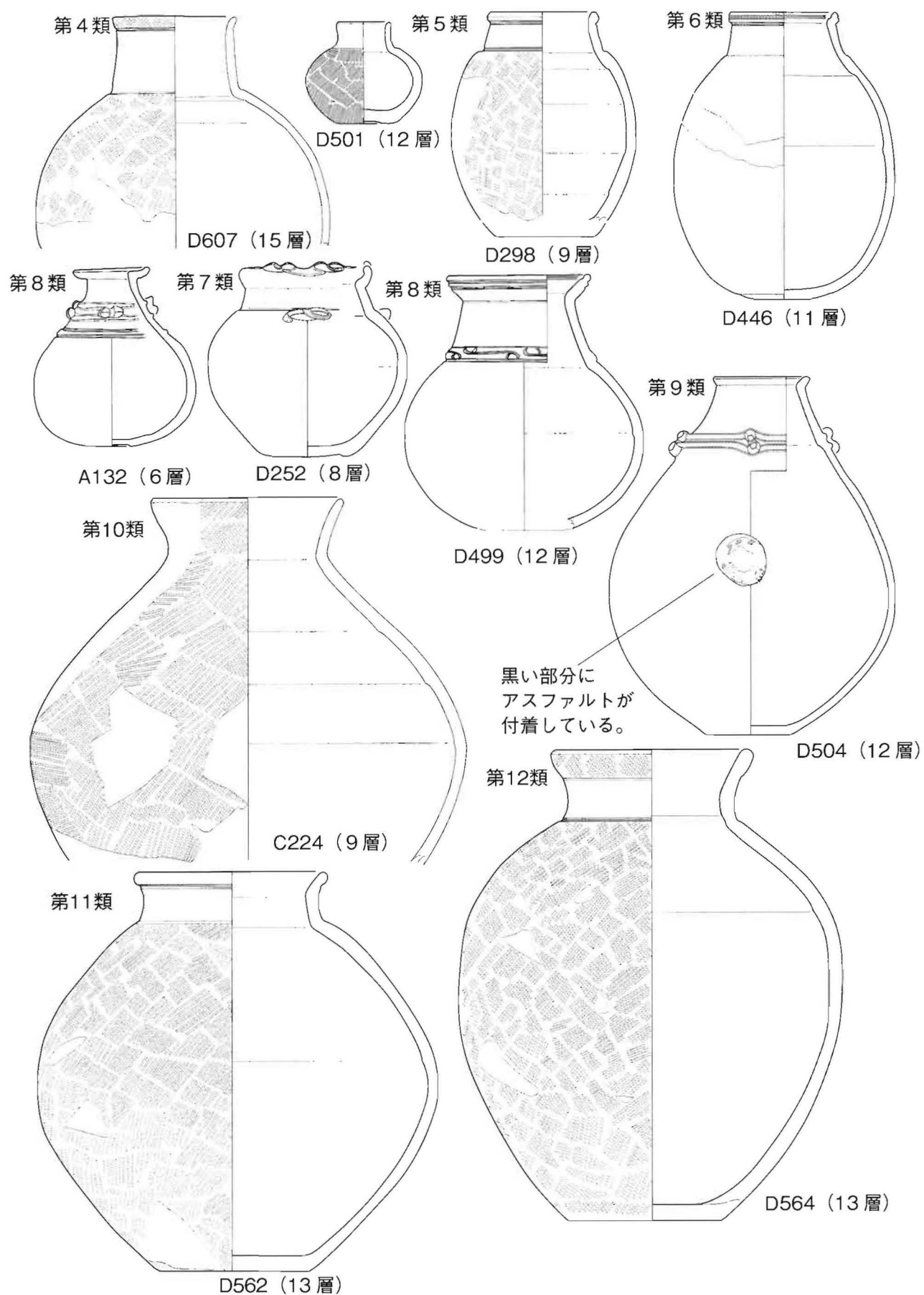
③



単位雲形文

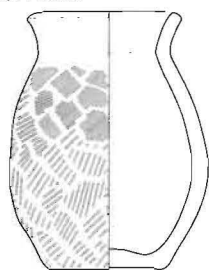
第94図 壺第3類





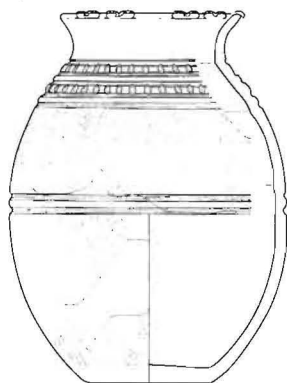
第95図 壺第4～12類

第13類



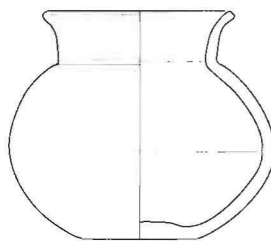
D253 (8層)

第14類



D606 (15層)

第15類



C126 (7層)

第17類



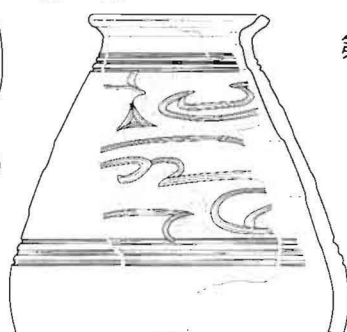
C123 (7層)

第13類



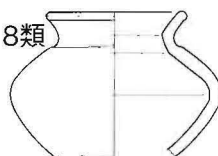
A133 (6層)

第18類



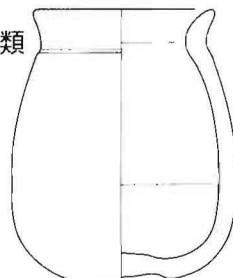
D145 (6層)

第18類



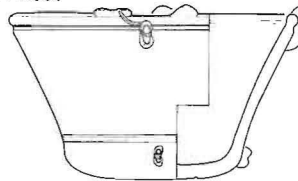
B137 (7層)

第17類



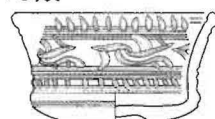
D109 (5層)

第19類



D444 (11層)

第19類



C226 (9層)

① 区画文



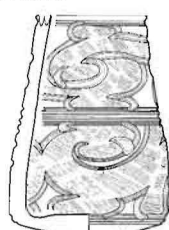
② 羊歯状文



①に列点を加えると②となる。

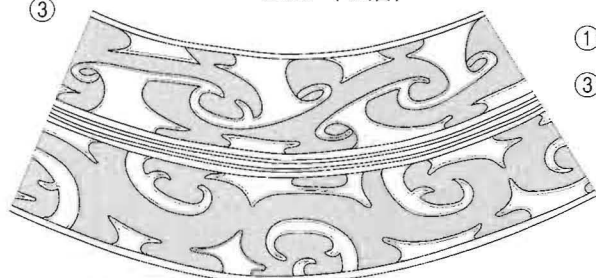
区画文は第1・2・3類の区画文と似たものである。

第18類



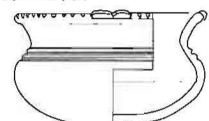
B66 (6層)

③

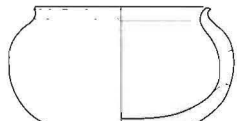


上段：単位雲形文 下段：連続雲形文

第20類



D110 (5層)



B154 (9層)

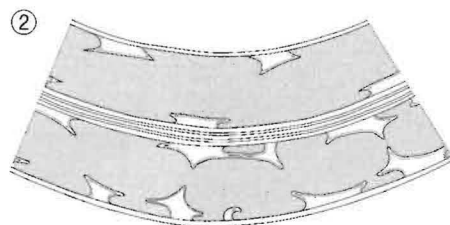


層位不明

①に②を加えると  
③となる。

上段：区画文 下段：配置文

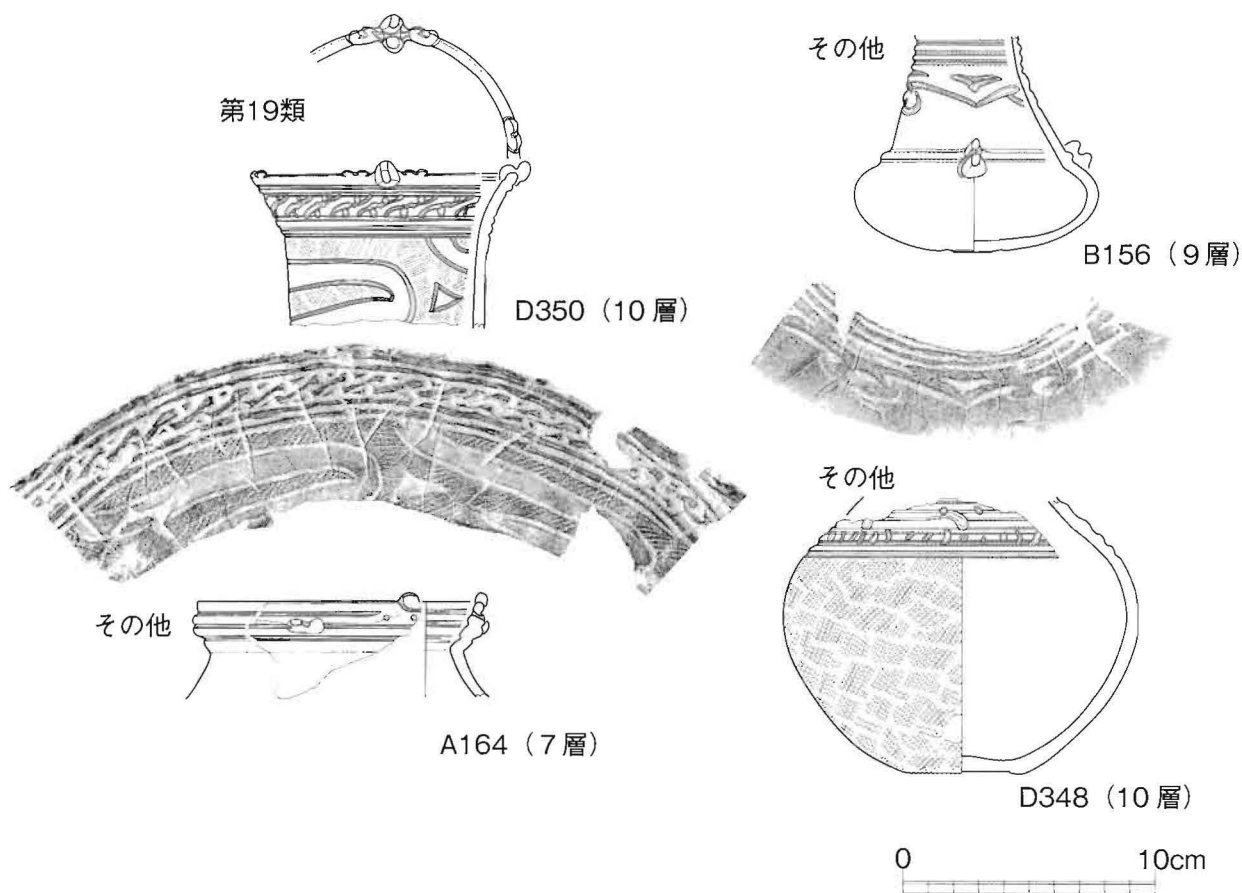
②



充填文

0 10cm

第96図 壺第13～20類



第97図 壺第19類・その他

のものに多い傾向がある。

文様の単位あるいは文様の種類は、(1)磨消縄文による雲形文（郷土館 5.D557）、(2)無地に沈線あるいは凹凸（浮彫風）で描いた雲形文（郷土館 4）、(3)いわゆる羊歯状文（C226.D350）、(4)いわゆる列点文（D606）などがある。

⑤壺 D504の体中央部の少し上の部分が欠損して丸い穴（16×13mm）が開いている。内面を見ると穴の縁が削げており、外側から強い力が加わって穴があいたことが分る。外面をみると穴の周囲が円形（30×35mm）に変色しており、その範囲にアスファルトと思われるものが点々と付着している。このことから破損した穴の部分に円形の土器片あるいは皮のようなものをアスファルトで貼り付けて修理したものであろう。

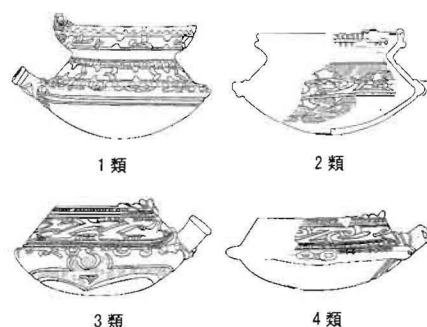
#### (10) 注口について

注口の基本形は、壺のように口あるいは頸部がすぼまり、注口部をもつものである。晩期前葉の注口は注口独特の形態を造り出し、体部は算盤玉形となるものが多い。

注口は40個体（うち郷土館のもの6個体）である。個体数の算定は、個体識別に便利な口縁部を有する破片や形がほぼ分る大型破片を中心としたが、個体を識別できるものは体部破片でも利用した。

##### 1) 注口の細別の基準（第98図）

注口の分類は、全体形が推定できるものを中心に、頸部の形



第98図 注口の細別模式図

状や文様などに注目して行い、4類型に分けた。分類できなかった小破片のものはその他として扱った。

#### 分類の基準(1)－頸部の形状

- I. 口頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁が受口状（外側に開きながら内湾するもの）になるもの。
- II. 口頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁が短く立ち上がるかあるいは内側にやや折れ曲がるもの。
- III. 内傾する体部上半の端部がそのまま口縁となるもの。

#### 分類の基準(2)－文様帯と文様

- a. 口縁部と体部上半に幅の狭い文様帯がめぐるもの。体部下半は注口部直下にのみ文様がある。
- b. 体部上半に幅の狭い文様帯がめぐり、体部下半に体部中央に沿って文様が展開するもの。
- c. 体部上半に幅の狭い文様帯がめぐるもの。体部下半は注口部付近にのみ文様がある。

#### 2) 注口の細別の結果と特徴（例は代表的なものにとどめた）（第99～104図）

第1類（I a）－11個体ある。口頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁が受口状になり、口縁部と体部上半に幅の狭い文様帯がめぐるものである。文様帯の上下には列点をもつ平行沈線がめぐる。文様帯には、沈刻によって形成された両端が渦巻き状になる横C字文（C241の体部上半）、二つ巴文（C239.D259.郷土館2のそれぞれの口縁部）、四葉状のX字文（D259.D612の体部上半）、横長のX字文（D360の口縁部）、横C字文にX字文（C239.D360の体部上半）、横C字文に楕円文（郷土館1の体部上半）、羊歯状文（D611の体部上半）などが施文されている。なお、口縁部の文様帯の正面（注口部のある面）にのみ文様があるもの（C240）がある。

体部下半は注口部直下にのみ簡単な文様がある。器面全体がよく研磨され、光沢をもち、地文は縄文地でなく無地である。

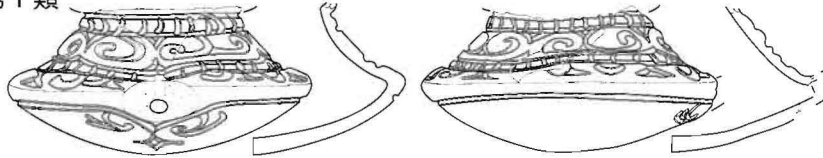
第2類（II b）－2個体ある。口頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁が短く立ち上がるか、あるいは内側にやや折れ曲がるものである。体部上半に幅の狭い主要な文様帯がめぐり、体部下半には体部中央部に沿って4カ所に単位雲形文が描かれている。口頸部が弱く屈曲し、やや「く」の字形に近いものとなる。体部上半には連続雲形文が描かれている（D567）。口縁は平縁が多いが、小波状口縁もある。すべて破片で、全体形が分るものはない。

第3類（III b）－1個体ある（D511）。内傾する体部上半の端部がそのまま口縁となるものである。体部上半に幅の狭い文様帯がめぐり、体部下半には体部中央に沿って文様が展開している。体部上半の文様帯にはZ字形の羊歯状文がめぐり、体部下半は体部中央に沿って簡単な連続雲形文が描かれている。上半部の地文は無地で、下半部の地文は縄文地と無地で、無地の部分はよく研磨されて光沢をもつ。

第4類（III c）－2個体ある。内傾する体部上半の端部がそのまま口縁となるものである。体部上半に幅の狭い文様帯がめぐり、体部下半の注口部付近にのみ簡単な文様がある。体部上半の文様帯には、点対称的に組み合った弧線文が並ぶもの（D509）と連続雲形文が形成されるもの（郷土館3）がある。体部下半の注口部直下の文様はともに単位雲形文である。

その他－個体数を算定するために使用した資料のうち、小破片のため分類が不可能だったものをその他とした。なかには口縁部に透かしをもつものもある（写真41）。

第1類



C241 (11層)



注口部直下の文様



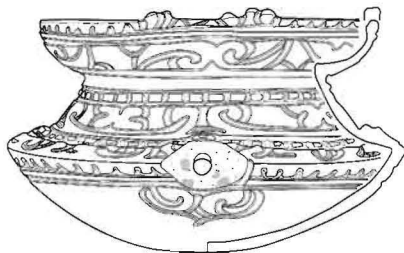
体部拓本



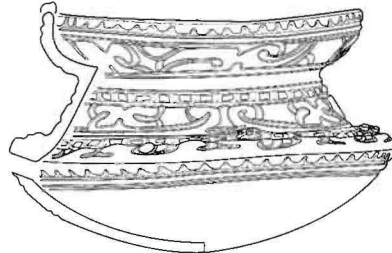
体部展開図

注口部

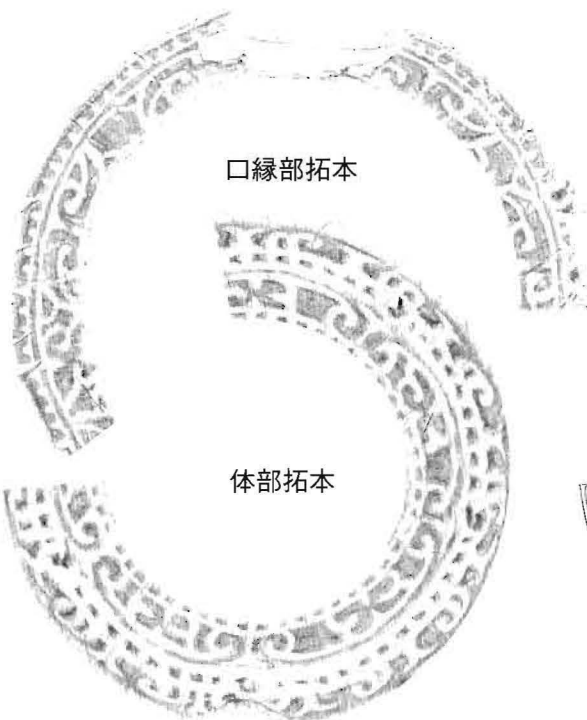
注口部



C239 (11層)



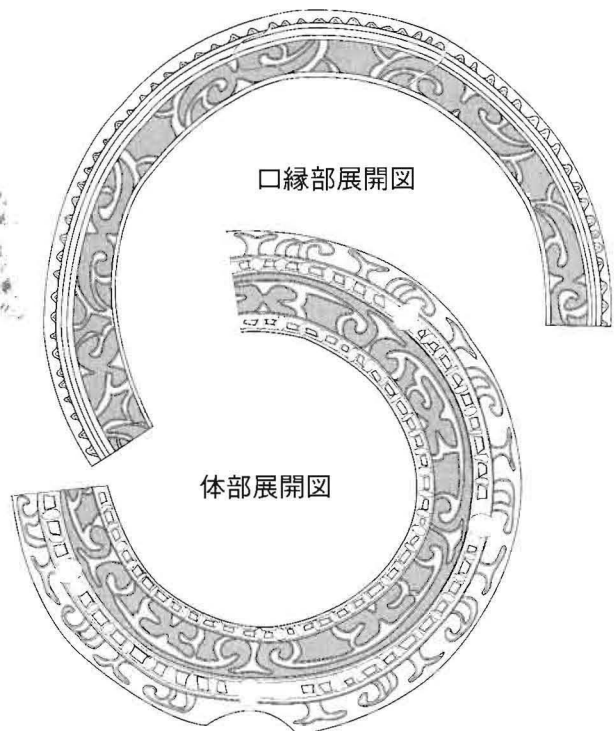
注口部直下の文様



口縁部拓本

体部拓本

注口部



口縁部展開図

体部展開図

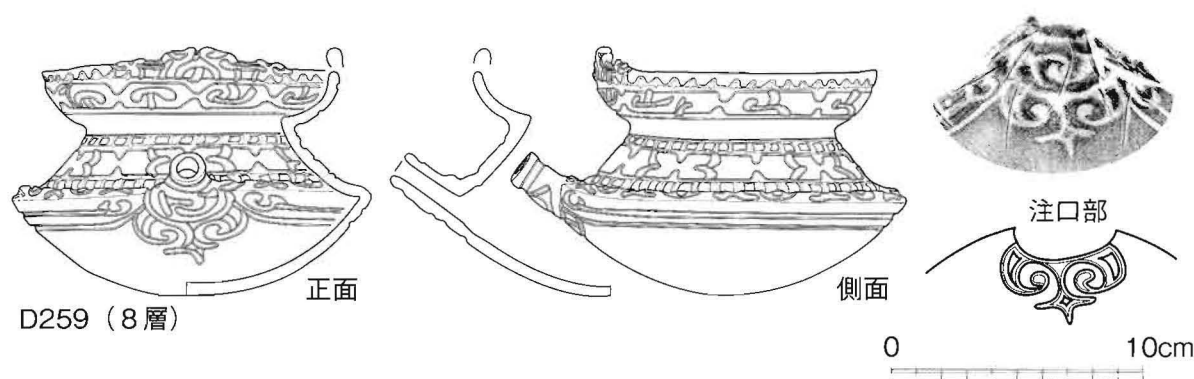
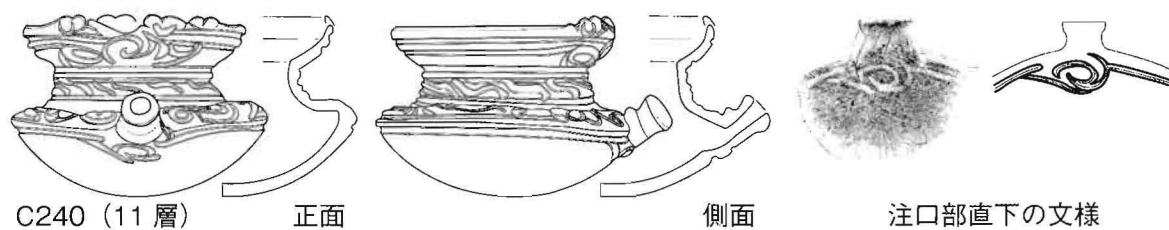
注口部



拓本・展開模式図は縮尺不同

第99図 注口 第1類

第1類



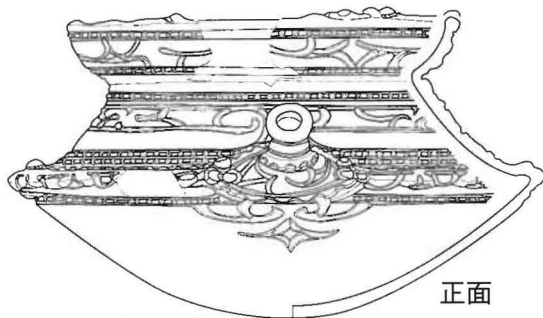
注口部

注口部

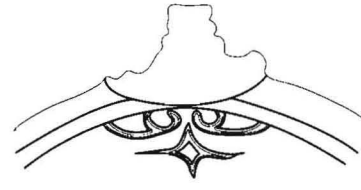
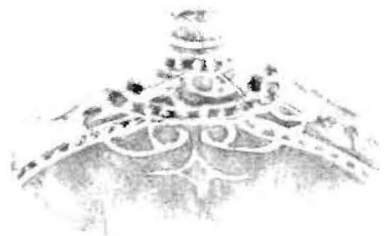
第100図      注口      第1類



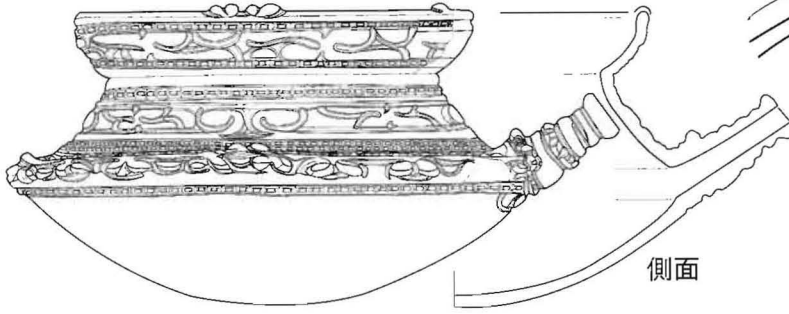
第1類



D360 (10層)



注口部直下の文様



側面

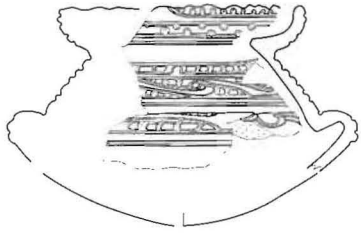


体部拓本

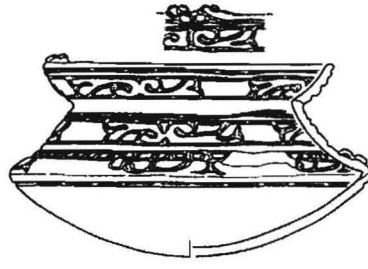
注口部



体部展開図



D611 (15層)

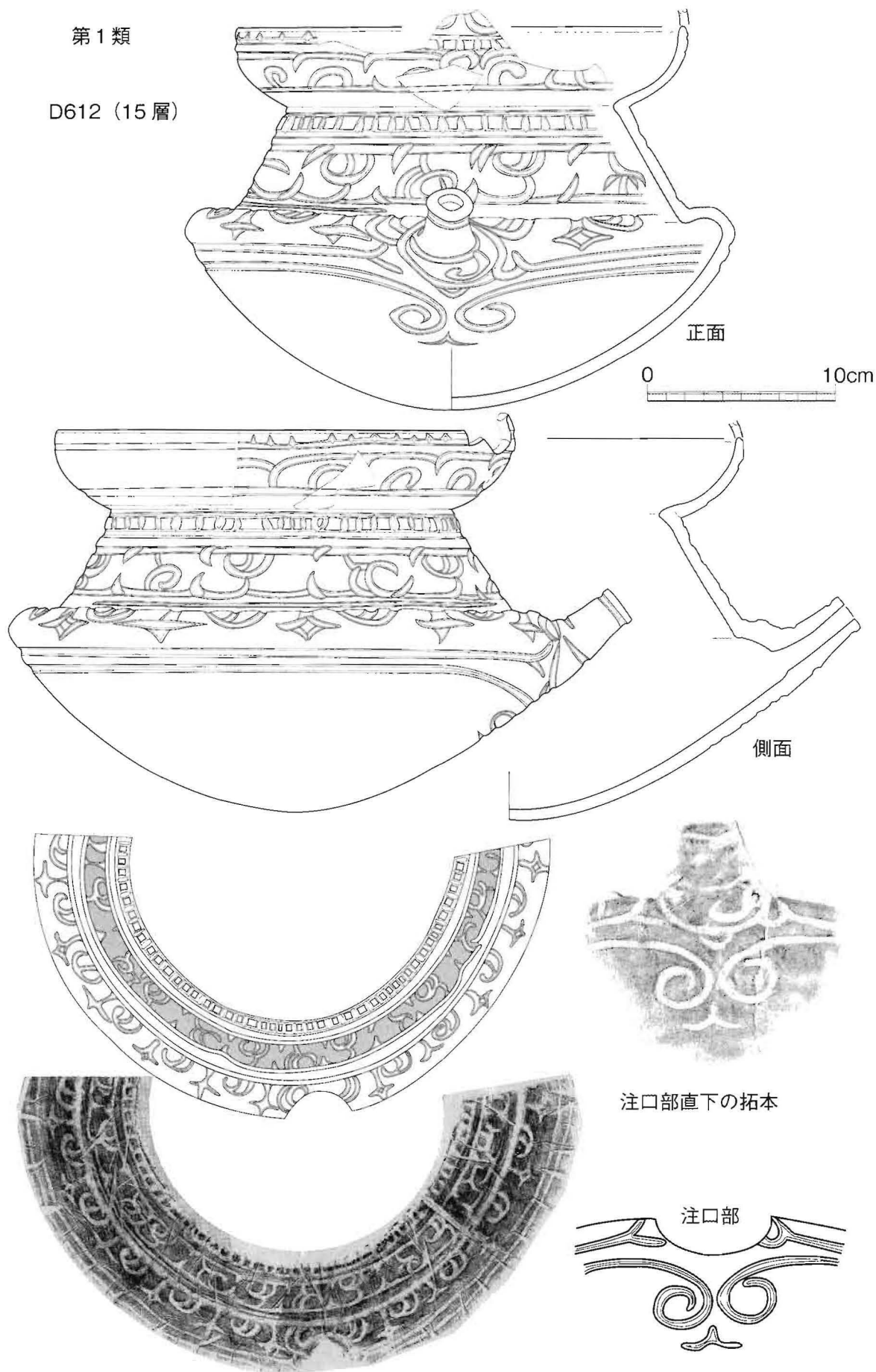


郷土館2 (C-2, V中)



第1類

D612 (15層)

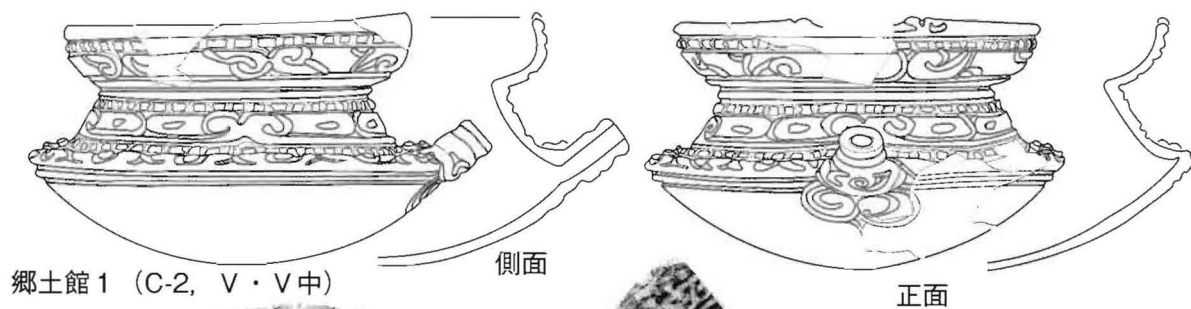


体部拓本・展開図

第102図

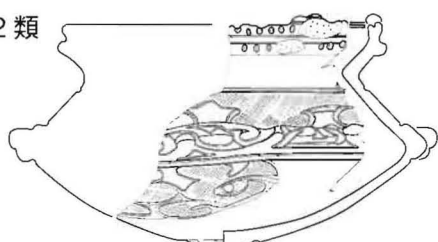
注口 第1類

第1類



郷土館1の注口直下の文様

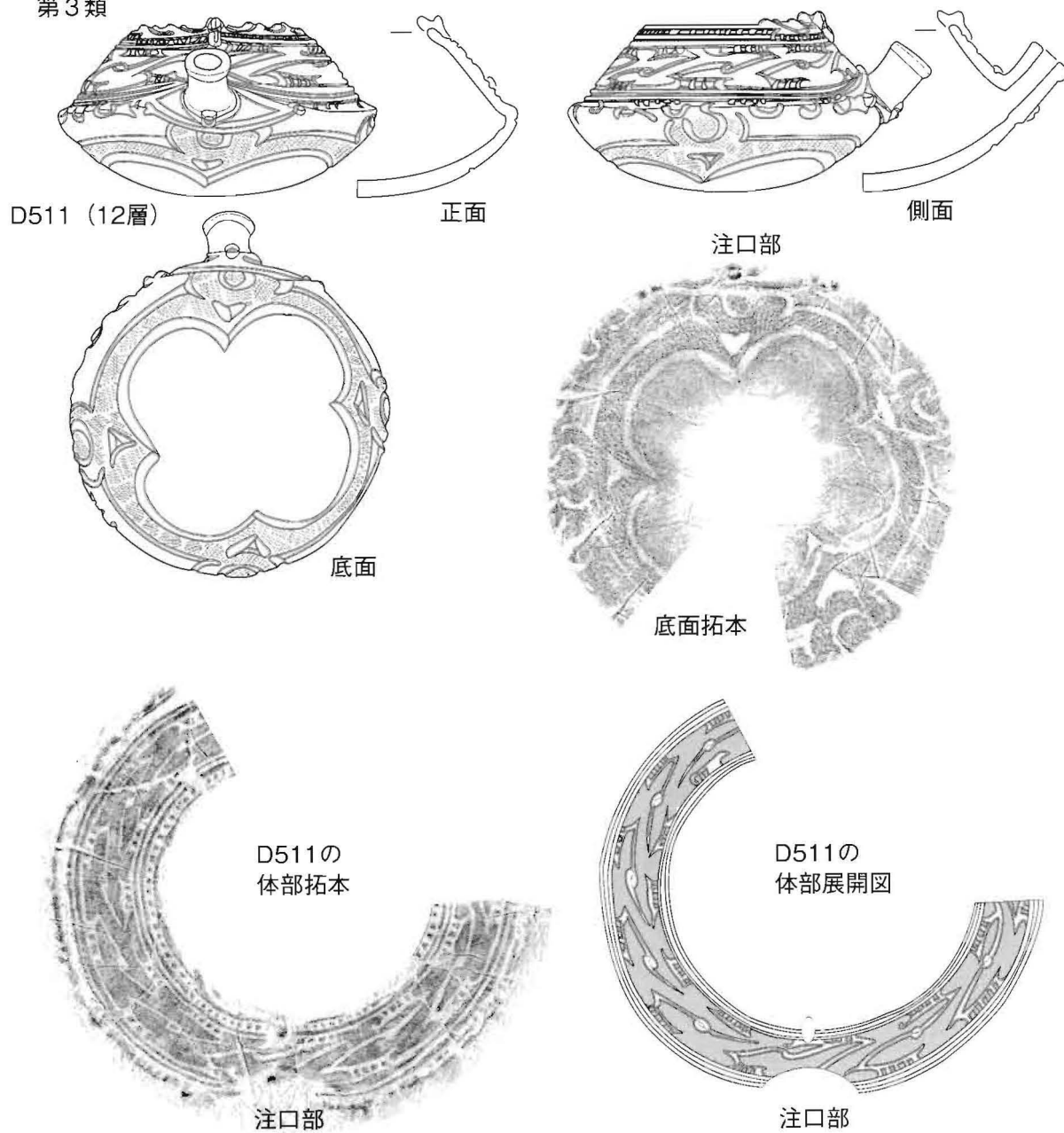
第2類



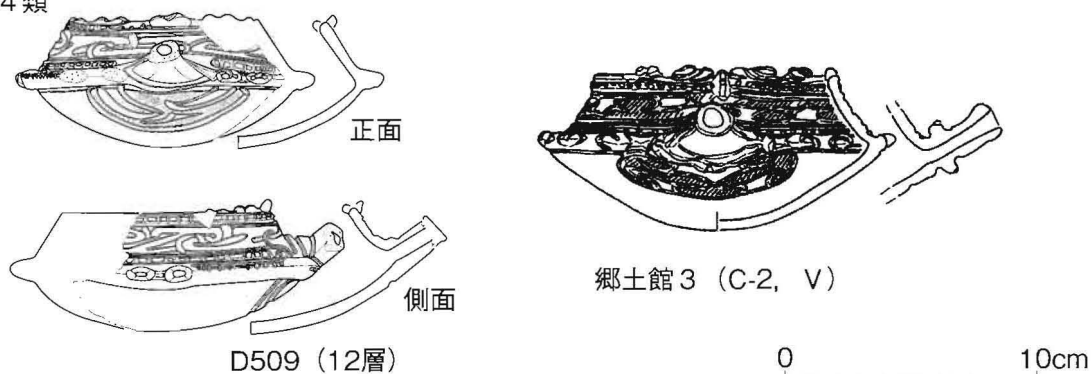
0 10cm

第103図 注口 第1・2類

第3類



第4類



第104図 注口 第3・4類

### 3) 注口のまとめ

①注口の特徴は、すべて文様や突起などで装飾されていることである。ただし、赤彩されたものはなかった。底部は丸みを帯び、両手で持ち上げるのに適した形と大きさをもっている。底がやや小さいものでも片手で底をささえ、片手を添えるようにすれば安定した形で持ち上げることができる。装飾されたものが多いということは、浅鉢や皿などの器種と共通する性格であり、食事の場で使用された可能性を示す。形態から考えて注口は両手で持って中に入れた液体を複数の人々に分け与える、すなわち分配するときに使用したものであろう。

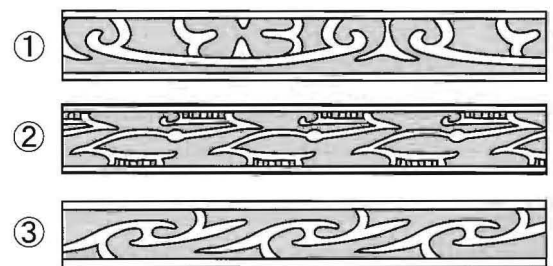
②注口の大きさは、最大のもの（D612）が幅29.6cm、最小のもの（C240）が幅10.4cmである。もっとも多いのは幅17cm前後のものである。なお、最大の幅29.6cm・高さ20.1cm（現高）という大きさは、晩期の注口としては最大クラスに属すると思われる。

③注口部がとれた部分にアスファルトが付着しているもの（C239.写真38）と底部にあいた孔の周囲にアスファルトが付着しているもの（D360.写真39）があった。前者は本体と剥がれた注口部を接合して修理したことを示すものである。後者は体部下半にあいた小さな孔の周囲にアスファルトを塗り、皮や布・土器片などをはりつけて修理した痕跡を示すものである。孔の周囲のアスファルトは内外両面にみられた。

④体部中央の内面を観察すると、体下半部の上端付近に小さな爪痕が一行にならんで一周しているものがある。爪痕はほかにも疎らであるが所々に見られた。爪痕の弧は向って左下になるものが多い。また、ナデ調整の面についている。したがって、体下半部の内部をナデ調整した後で、そして体中央部あるいは体上半部の粘土紐をのせる前に、体下半部の上端を右手の親指で丹念に押さえる作業をした時についたものであろう。なお、注口は、器面に文様があったり、研磨されているものも多く、また内面もナデあるいはミガキ調整が丁寧になされているために、成形時の粘土紐輪積痕を残すものはなかった。

⑤注口部は体部中央に付けられる。注口部の周囲は突起や隆帯で飾られるものが多い。また体部下半に文様がめぐらない場合でも、注口部直下の部分にのみ文様が付くものが多い。平縁のものが多いが、注口部がある面にのみ山形の装飾的な突起がつくことが多い。したがって注口は注口部がつく面が正面として意識されていたのであろう。

⑥主要な文様を大別してみると①沈刻によって横C字文・二つ巴文・X字文などを構成するもの、②沈刻によっていわゆる羊歯状文を構成するもの、③点対称に組み合った弧線文を構成するもの、④磨消縄文の手法などでいわゆる雲形文を構成するものの4つに分けることができる（第105図）。杉沢遺跡においては①の文様が多く見られた。なかでも横C字文とX字文を組み合わせた文様は大洞 C1・C2式の磨



第105図 注口の主要な文様（模式図）

消縄文の手法をとまない、鉢巻形の文様を持つ注口にも引き継がれる要素を持っているものである。そしてこの文様は第1類の受け口状の口縁部を持つ器形に多く施されており、第3類の体部上端がそのまま口縁となる器形に施される割合は少ない。したがって①の文様は第1類の器形にともなう文様であり、第2類の口縁部が短くなる器形に続いていくということが考えられる。②の羊歯状文は第3類の器形に多く施され、第2類の器形にも見られるものである。



深鉢			
第1類	A区183 D区305,306,575	第4類	51,52,53,54,55,56,57,58,59,60,122,123,124,125,126,128,133,134,135,151,152,153,154,155,156,157,158,159,183,185,186,187,188,189,190,191,192,193,194,196,197,198,199,201,202,203,204,266,268,269,270,271,272,273,274,275,276,277,307,309,310,311,312,313,314,315,316,318,319,320,364,365,366,368,370,371,372,373,374,375,376,377,378,379,380,382,383,384,385,386,387,388,389,390,391,462,463,464,466,467,468,469,470,471,473,476,477,478,479,480,481,482,483,484,485,487,514,515,516,517,518,519,520,521,522,523,524,525,527,528,529,530,531,533,573,576,577,578,579,580,582,585,588,
第2類	A区7,14 B区102 C区50 D区22,25,61,265,324,583		
第3類	B区4 C区98 D区184,195,367		
第4類	A区1,2,3,4,5,13,15,16,17,18,19,20,21,22,32,33,34,35,36,37,39,40,42,43,44,45,46,47,48,49,50,51,52,53,54,55,56,57,59,60,61,62,63,65,66,67,68,69,70,71,72,76,79,143,144,145,146,147,148,167,168,171,172,173,174,185,186,187,188,189,190,191,192,194,195,197,198,199,200,201,202,203,204,205,206,207,208,209,210,211,213,214,215,217,218,259,260,261,262,263,265,267,268,269,270,271,272,273,274,275,279,293,295,296,297,301,302 B区6,7,13,15,16,17,18,19,20,21,22,24,25,26,27,28,29,30,31,33,72,73,75,76,77,78,79,81,82,83,84,85,86,87,88,89,91,92,93,94,95,96,97,98,99,100,101,103,104,105,151,159,160,161 C区1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,30,31,32,33,34,35,36,37,38,40,41,42,43,51,52,53,57,58,59,60,61,62,63,65,66,67,68,69,70,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96,97,136,137,138,139,140,141,142,143,144,145,146,147,148,149,150,151,152,153,154,155,156,157,159,160,161,162,163,164,165,167,168,169,170,171,172,174,175,176,177,178,179,180,181,201,233,236,237,242,243,249 D区6,7,18,19,20,21,27,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47,48,49,50,		
		第5類	C区184
		第6類	A区38,41,58,64,73,74,75,77,78,80,169,170,184,193,196,212,219,220,221,264,266,276,277,278,292,298,300,303 B区1,14,23,32,71,74,80,90,158 C区39,64,71,99,135,158,166,173,182,183,185,247,250 D区1,28,29,127,200,205,206,207,208,209,210,211,267,308,317,321,322,323,369,381,392,393,394,395,396,397,398,399,465,472,474,475,486,526,532,534,581,584,586,587 郷土館17
			A区6,81,216,284,299 B区5,9 C区44,203,251
			D区3,8,13,85,89,160,161,212,213,214,232,278,325,326,327,328,400,488,589,
		その他	

鉢			
第1類	B区12,46,47,48,121 C区54,100 D区2,63,65,137,138,164,226,401,402,	第10類	55,73,74,75,76,104,106,108,109,111,112,189,190,192,193,197,198 D区4,64,67,68,69,70,74,75,76,77,81,86,163,215,216,218,219,220,224,225,227,229,230,231,233,234,280,282,283,284,329,333,334,335,406,407,408,409,410,411,412,414,416,419,489,491,492,536,539,541,543,544,548,592,593,
第2類	A区25,82,83,93,94,95,96,224 B区36,40,106,107,110,111,114,164 C区45,77,78,102,105,188 D区11,12,66,72,78,136,171,222,279,403,405,537,538,542,		
第3類	B区50 C区11,191 D区165,221,223,547		
第4類	B区2,112 C区234 D区591		
第5類	A区24,112,151,283,285,286 B区49 C区72,101,110,115,186,195,196 D区10,281,540 郷土館16	第11類	A区23,86,106,107,108,176,225,229,235,236,237,238,239,240,280,282 B区10,43,44,51,113,115,116,119 C区17,18,46,56,103,107,113,114,199,200,202,204,205,206,207 D区73,79,80,82,83,84,87,88,166,167,170,172,217,228,285,286,287,330,331,332,404,413,415,417,418,420,421,422,490,543,545,546,549,550,594,595,596,597,599,
第6類	D区590		
第7類	C区208		
第8類	郷土館9		
第9類	A区281 C区194	第12類	A区105 C区244 郷土館8
第10類	A区8,26,27,84,85,87,88,90,91,92,97,98,99,100,101,102,103,104,149,150,152,175,177,222,223,226,227,228,230,231,232,233,234,294 B区34,35,37,38,39,41,42,52,108,109,117,118,120 C区12,14,15,	第13類	A区89
		第14類	A区9 B区8 C区13,16,19 D区62,71,90
		その他	B区149,150 C区79 D区23,24,139,140,141,162,168,169,598,



浅鉢			
第1類	A区29,30,110,113,114,115,116,117,118,119,120,	第4類	D区173,235,236,237,295,433,437,495,552,553
	153,154,155,241,242,244,245, B区3,53,54,55,56,	第5類	D区436,494
	57,58,123,127,128,129,131,153,165 C区47,80,	第6類	A区129,247 D区241 郷土館12
	116,117,209,210,211,212 D区91,94,95,142,174,	第7類	D区603
	238,239,288,289,290,292,336,337,338,339,342,	第8類	C区214
	423,424,425,426,427,428,431,493,551 郷土館10	第9類	C区213
第2類	B区122,126,130 D区291,432	第10類	D区26
第3類	A区10,28,122,123,124,243,246,305 B区59	第11類	D区98
	C区21,22,81,118,216,252 D区96,97,143,294,	第12類	D区92
	341,430,434,435,600,604,	第13類	A区125 D区9,93
第4類	A区178,304 B区124 C区215,217,245	その他	A区287 D区5,99,344

皿			
第1類	A区159,248 B区60,221 C区23 D区497 郷土館11	第7類	A区131,250,254 B区11,62,63,133,162 C区83,84,163,222,253 D区102,103,104, 105,144,249,250,297,347 郷土館13
第2類	A区251 D区440 郷土館15	第8類	郷土館14
第3類	A区121,249 B区65,135,136 C区82,220 D区242,246,296,346,439,498,556	第9類	D区101
第4類	A区130 B区61,134 C区218 D区106, 107,108	第10類	D区555
第5類	D区345	第11類	C区20
第6類	B区132,152	その他	B区72,D区438

壺			
第1類	郷土館4	第15類	B区155 C区126 D区502,560,561
第2類	郷土館5	第16類	B区137
第3類	D区557	第17類	C区123,124,223 D区109,500
第4類	D区501,607	第18類	B区66 D区145,451
第5類	D区298	第19類	C区226 D区350,444
第6類	D区446	第20類	A区11 B区154 D区16,110,503
第7類	A区163 D区252	その他	A区12,134,135,136,137,138,162,164,179,180,181, 182,255 B区67,68,138,139,140,141,142,156,157b ～i,445 C区26,49,122,127,128,129,130,131,225, 227,228,229,235,246 D区114,115,116,117,118, 119,147,148,176,177,251,255,256, 348,349,351, 352,353,354,355,356,357,358,359,443,445,449, 450,452,453,454,455,456,457,458,505,506,507, 558,559,563,574,605,607,608,609,610 郷土館7
第8類	A区132 D区499		
第9類	D区504		
第10類	C区224		
第11類	D区146,562		
第12類	C区121,125 D区564		
第13類	A区133 D区253		
第14類	D区606		

注口			
第1類	C区239,240,241 D区259,360,611,612 郷土館1,2	第4類	D区509 郷土館3
第2類	D区567 郷土館6	その他	A区139,140,165,289,291 B区69 C区29, 85,230,238 D区179,257,258,299,300, 361,459,460,508,510,565,566,
第3類	D区511		

赤字の数字は完形に近いもの

## 第2節 縄文後期の土器（第106・107図）

縄文後期の土器は、全て多数の晩期の土器に混じって出土したもので、口縁を持つ破片は38個体分ある。3個の注口を除くと、破片は全て小さいものである。層位的にまとまって出土したものはないので、区や層位に関わりなく一括し、特徴のよく現れている破片57点（うち口縁部破片は30点）を拓本で、3個の注口は実測図で紹介することにした。

### （1）後期土器の分類

後期の土器は、破片が小さいため、器種分類が困難であるが、鉢あるいは深鉢が圧倒的に多いようである。次いで壺が多いがこれも注口との区別が困難なものが多い。ここでは特徴のよく現れている破片を文様で大別し、『岩木山』（村越1968）その他を参考にして、想定される型式名を付した。

第1類－重層した縄文帯の所々に縦の短沈線あるいは刺突がみられるものである（1・2）。十腰内Ⅱ式に相当する。

第2類－口縁・体部に刻み目による文様帯の巡るものである（3～6）。十腰内Ⅲ式に相当する。

第3類－口縁部付近や重層した縄文帯・曲線的な縄文帯などに、同じ原体で方向を変えて羽状縄文を施文したものである（7～9）。これも十腰内Ⅲ式に相当する。

第4類－口縁部に山形の大きな突起を持つものである（10）。これも十腰内Ⅲ式に相当する。

第5類－口縁部が大波状口縁を呈するものである（11～16）。十腰内Ⅳ式に相当する。

第6類－原体RLとLRを用いて羽状縄文を施文したものである（17～20）。これも十腰内Ⅳ式に相当する。

第7類－曲線的な縄文帯（21～23）あるいは微隆起線（24）によって入組文が描かれるものである。（24）は彩色されており器種は壺か注口であろう。これも十腰内Ⅳ式に相当する。

第8類－曲線あるいは平行線的な縄文帯（磨消縄文の手法による）の所々に小さな貼瘤を配したものである（25～43）。復元できた注口（60）もこれに含まれる。十腰内Ⅴ式に相当する。

第9類－口頸部に列点による文様帯をもつものである（44・45）。十腰内Ⅵ式に相当する。

第10類－曲線的な入組文をもつものである（46～48）。なかには沈線間に細長い刻み目が並ぶものもある（46・48）。これも十腰内Ⅵ式に相当する。

第11類－口縁部に山形突起をもつものである（49～51）。これも十腰内Ⅵ式に相当する。

第12類－口縁・頸・体部からなる壺形の注口である（58）。無文で底が極めて小さい。十腰内Ⅵ式に相当する。

第13類－小破片のため文様的一部分しか分からないが、曲線的な平行沈線などで階段状に描かれた磨消縄文による文様と推定される（52～56）。十腰内Ⅵ式あるいは大洞B式の一部である可能性がある。

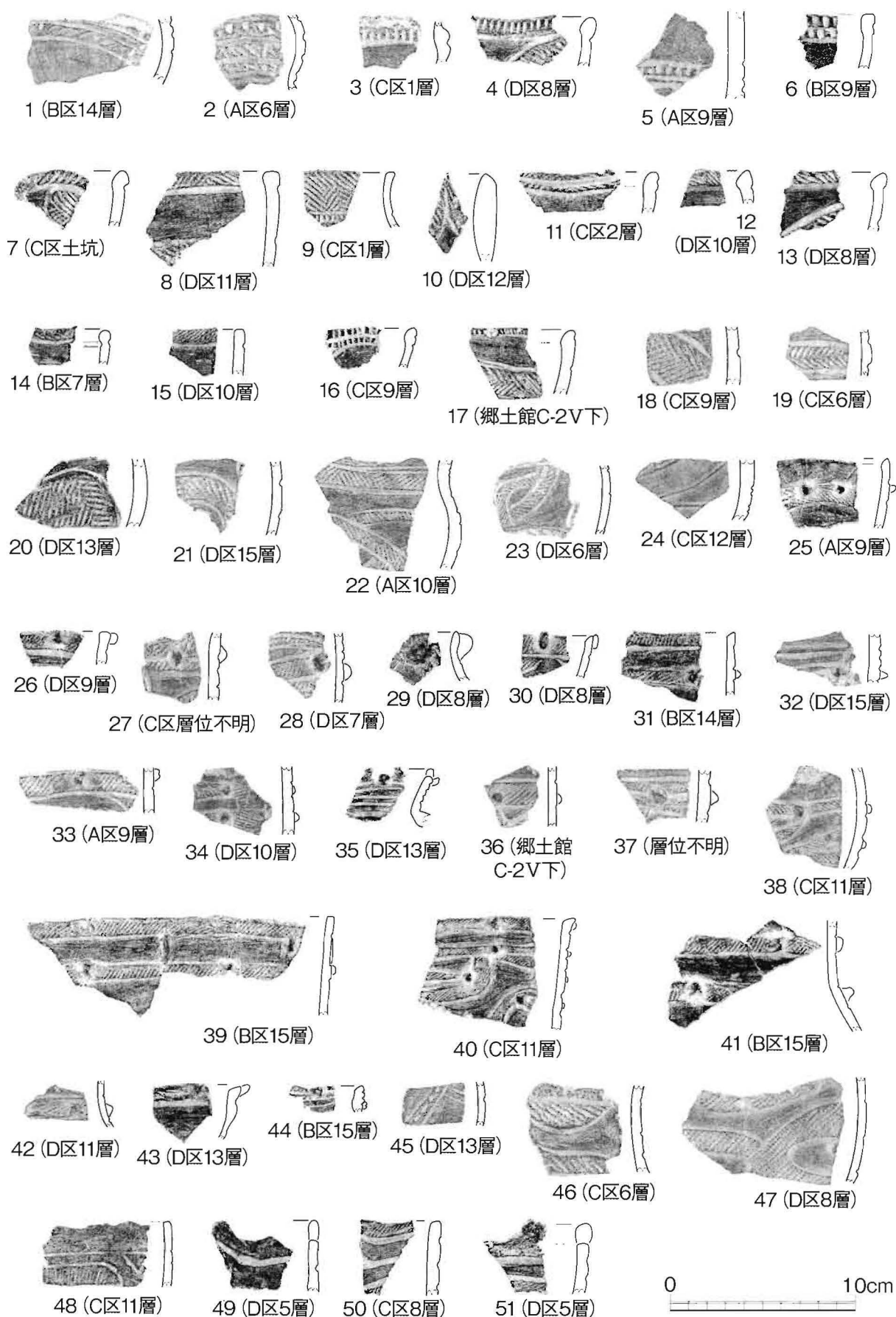
第14類－受け口状の口縁部破片で、口唇に三叉文がみられるもの。器種は注口あるいは壺であろう（57）。十腰内Ⅵ式あるいは大洞B式の一部である可能性がある。

第15類－口縁・頸・体部からなる壺形の注口で波状口縁をもつものである（59）。十腰内Ⅵ式に相当する。

### （2）注口3点について

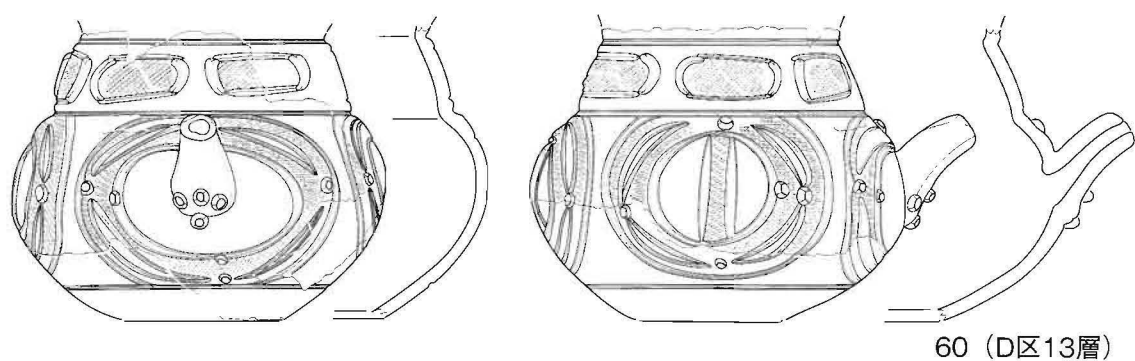
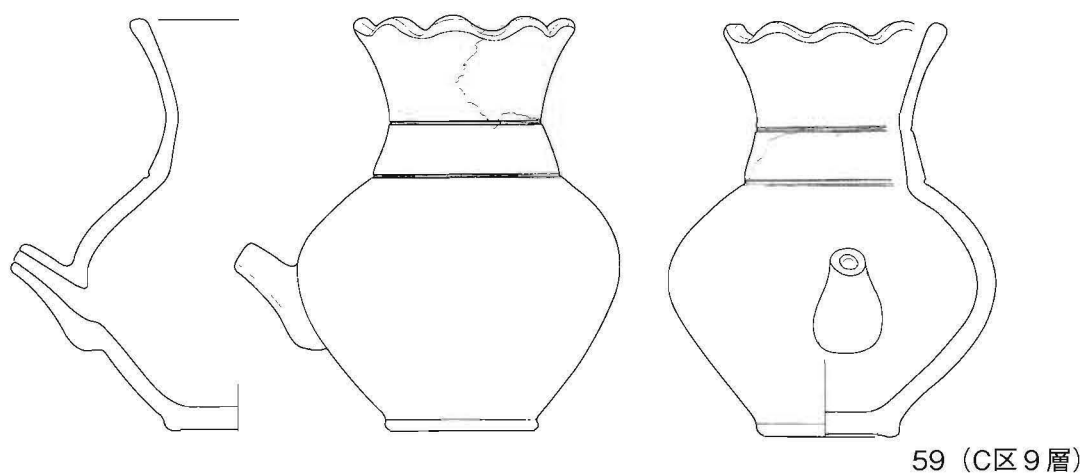
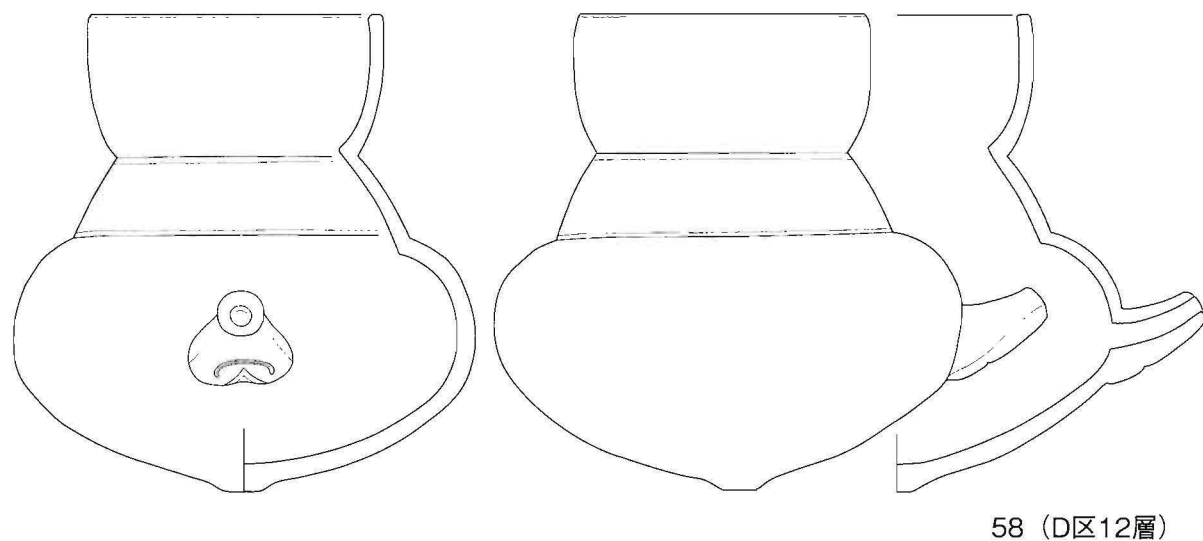
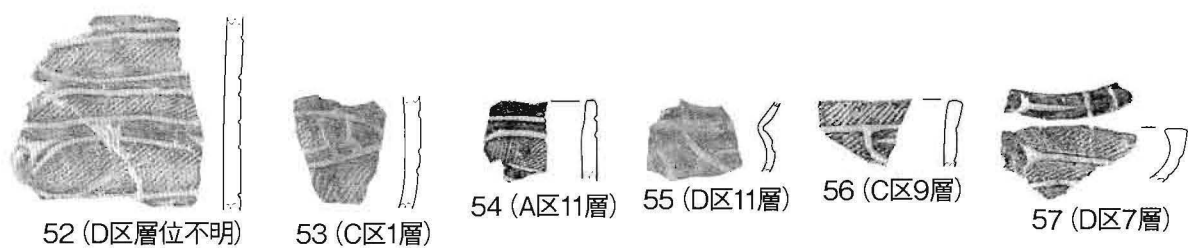
後期の土器は、大部分が小破片であるが、接合して形が分かるようになった注口が3点ある。分類でも取り上げているが、ここでは詳しく特徴を述べてみたい。

58は、第12類で述べたように口縁・頸・体部からなる壺形の注口で、口縁部が大きいのが特徴である。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部は「ハ」の字形、体部は横長の楕円形で、小さなボタン状の底部に向かって直線的にすぼまる。器面は無地で丹念に磨かれ光沢をもつ。全体的に明黄褐色で明るい感じがするが、所々に黒斑がみられる。注口部は体部の中央付近に付く。注口部の下部は半円と三角形の沈線によって鞆丸を表現している。内面は粗いミガキとなっているが、口縁に近い部分は



第106図 後期土器 1

第1類 (1.2) 第2類 (3~6) 第3類 (7~9) 第4類 (10) 第5類 (11~16) 第6類 (17~20)  
 第7類 (21~24) 第8類 (25~43) 第9類 (44.45) 第10類 (46~48) 第11類 (49~51)



第107図 後期土器2

第8類 (60) 第12類 (58) 第13類 (52～56) 第14類 (57) 第15類 (59)

よく磨かれている。十腰内Ⅵ式である。

59は、第15類で述べたように、口縁・頸・体部からなる壺形の注口で、口縁部が大きいのが特徴である。口縁部は直立からやや外反してひろがり、波状口縁となっている（高まりは8単位）。頸部は「ハ」の字形で、体部の上半部に最大径があり、肩が丸みを帯び小さな底部に向かって直線的にすぼまる。底部は丸い板を貼り付けたような平底で中央が浅く窪んでいる。注口部は体部の中央から下にかけて付いている。器面は無地で丹念に磨かれて光沢をもつ。全体的に明黄褐色であるが、一部に黒斑がみられる。内面は粗いミガキとなっているが、口縁に近い部分はよく磨かれている。十腰内Ⅵ式である。

60は、口縁部・頸部・体部からなる壺形の注口で、口縁部は欠損している。頸部は太く「ハ」の字形で、縄文を持つ楕円形の文様が巡る（6単位と推定）。この楕円形は左右両端が鰭状に盛り上がるのが特徴であるがその部分が剥離しているものが多い。体部は丸みを帯びるが、最大径は中央に来て、やや横長の楕円形となる。楕円形を呈する重弧文や円形文・直線文などの組み合わせからなる文様で4単位配される。文様の結節部などに小さな貼瘤が付くのが特徴である。注口部は体部中央のやや上の部分に付く。注口部の下部には小さな貼瘤が4個付いている。底部は剥離した状態から平底であることが分かる。十腰内Ⅴ式である。

### (3) 後期土器のまとめ

①後期の土器は口縁部の破片で数えると38個体である。しかも3個の注口を除けば、みな小さい破片である。すべて多数の晩期の土器に混じって出土したもので後期遺物だけの包含層はない。しかし、杉沢遺跡では、異形の台付土器など完形に近い後期の土器が採集されており（福田・工藤1997・名久井1971）、この遺跡のどこかに後期の集落跡や遺物包含層（捨て場）があることを想定してよいであろう。

②今回出土した後期の土器は、量は少ないが十腰内Ⅱ式から十腰内Ⅵ式（あるいは大洞B式の一部）までであることが分かった。これまで地元民によって採集された後期の土器もこれらの型式群に含まれるものである。

③57点の後期の土器片を観察すると、半数を超える30点にいわゆる海綿（状）骨針が含まれていた。晩期の土器にも含まれており、杉沢遺跡では後期から晩期にかけて海綿（状）骨針を含む海成粘土で作られた土器を使用していたことが分かる。この海成粘土が杉沢遺跡の近くにあるのかは分からないが、半数を超える土器に見られることから、遺跡の近くに存在する可能性が高いであろう。

## 第3節 土製品・石製品・石器（第108～115図）

土製品・石製品・石器は、数多くの晩期前葉（大洞BC～C1式頃）の土器に伴って遺物包含層（捨て場）から出土したものである。後期や晩期後半の土器も少量出土しているが、土製品・石製品・石器の多くは晩期前葉のものであろう。量が少ないので、地区・層位にかかわらず、ここで一括して取り上げることにした。

### (1) 土製品について（第108・109図）

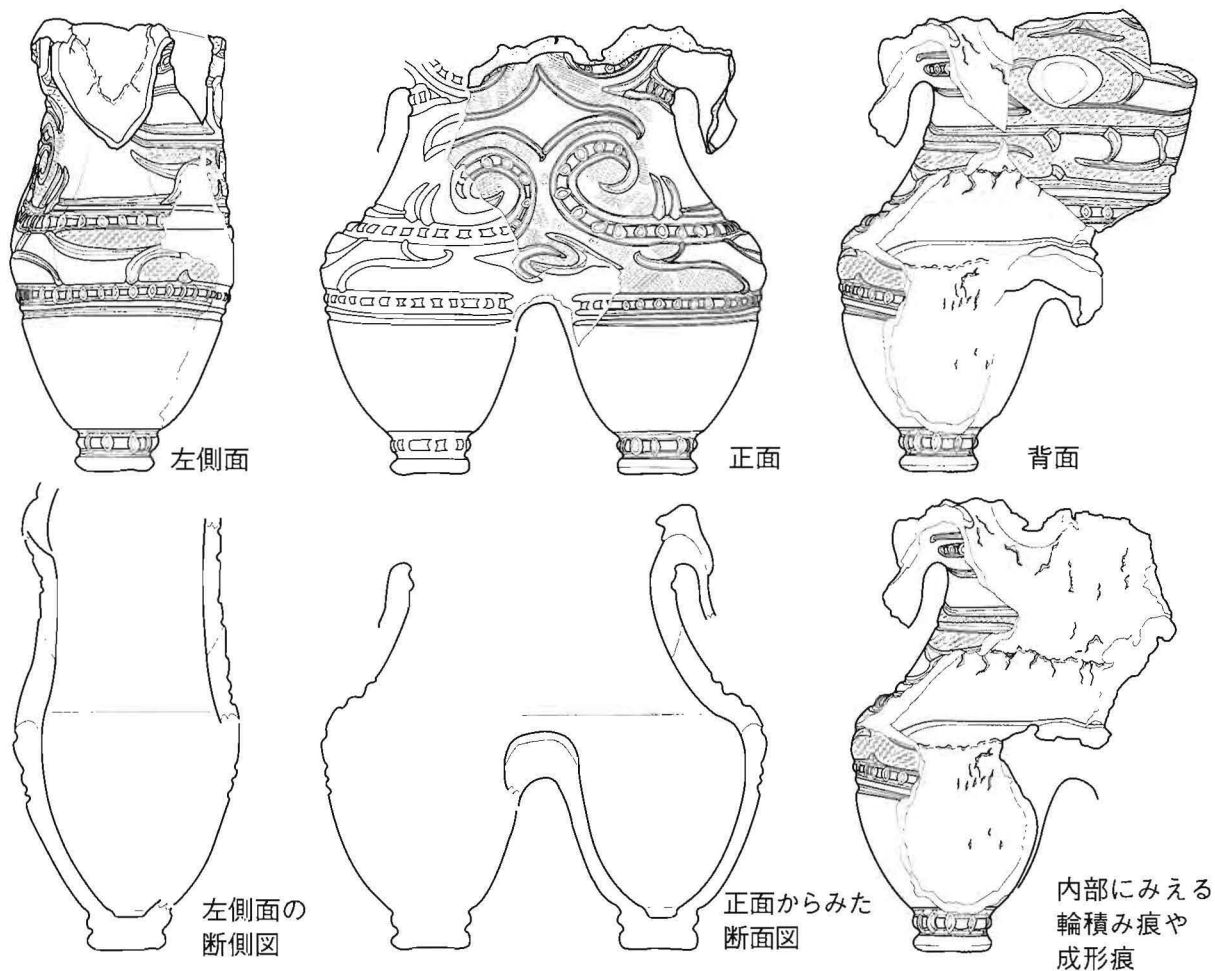
土製品は、27点（郷土館のもの4点）ある。内訳は土偶5点（郷土館のもの1点）、匙形土製品1点、超小型土器11点、円板状土製品7点（郷土館のもの2点）、蓋形土製品1点、不明の破片資料2点（郷土館のもの1点）がある。ここでは弘前大学の発掘資料を中心に取り上げる。

#### 1) 土偶

中空の遮光器土偶が2点、中実土偶が2点ある。

1は、遮光器土偶の体部から脚部にかけての破片である。頭部と胸部・両腕・胴部の一部・右脚などが欠損したものである。体部には磨消縄文による文様が描かれている。正面中央にある菱形文、その下に対になる列点からなる渦巻文が特徴的である。乳房は欠損しているが、それを囲む文様と高ま

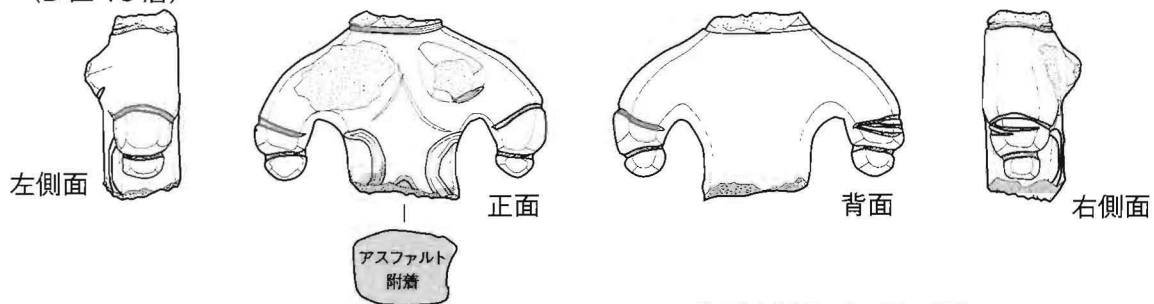
1. 遮光器土偶 (A区7層, C区7・9層)



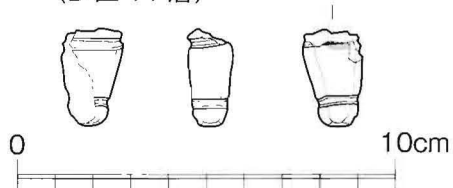
2. 遮光器土偶 (D区7層)



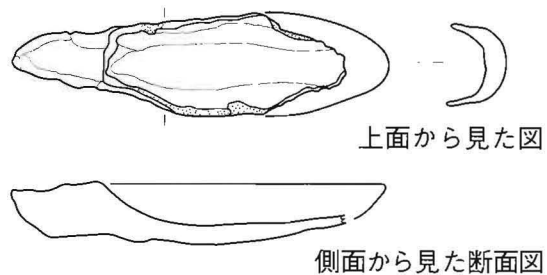
3. 中実土偶 (D区13層)



4. 中実土偶 (D区11層)



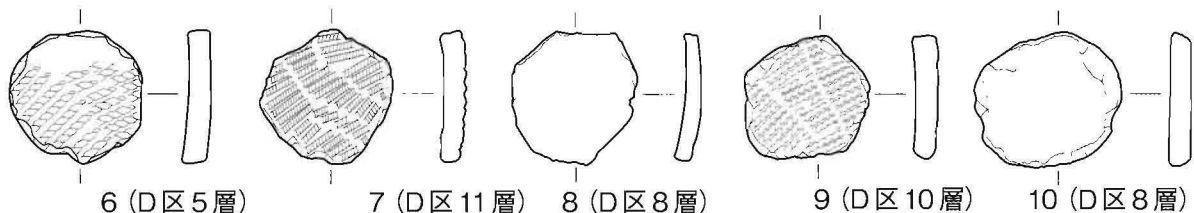
5. 匙形土製品 (A区6層)



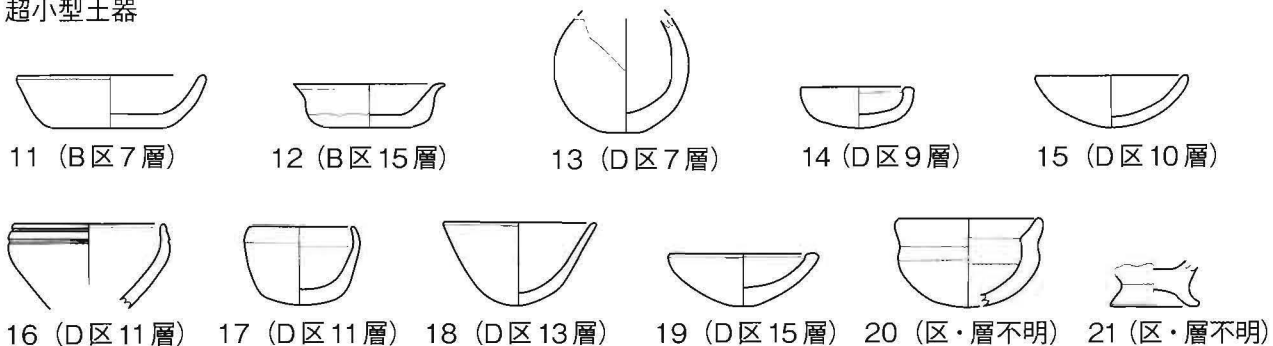
第108図 土製品 (1~5)



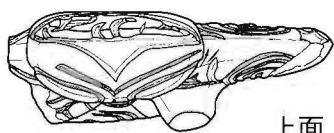
円板状土製品



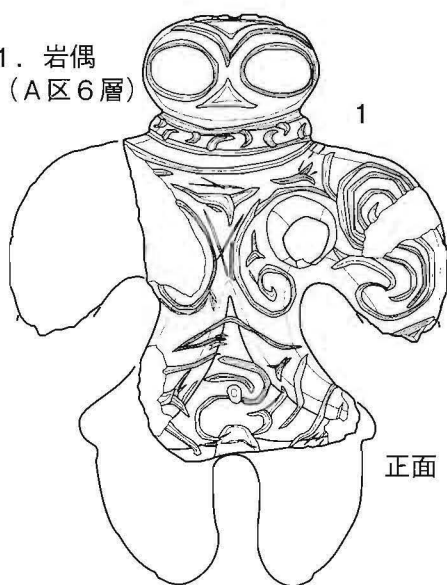
超小型土器



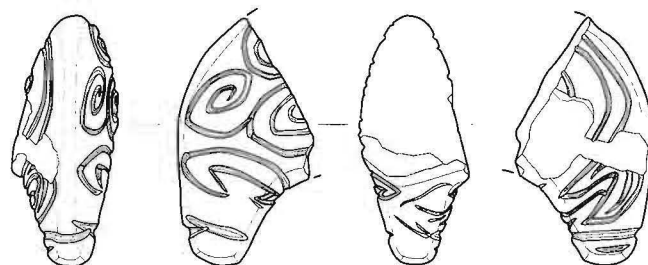
蓋形土器



1. 岩偶  
(A区6層)



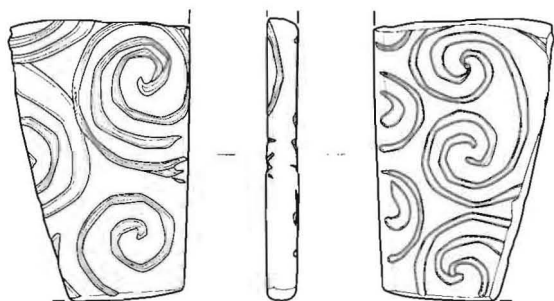
2. 岩偶



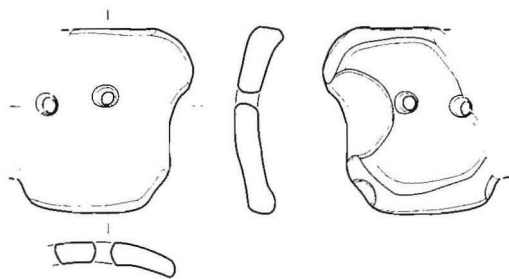
参考資料 (三戸町教育委員会蔵)

第109図      土製品 (6~22) ・石製品 (1・2)

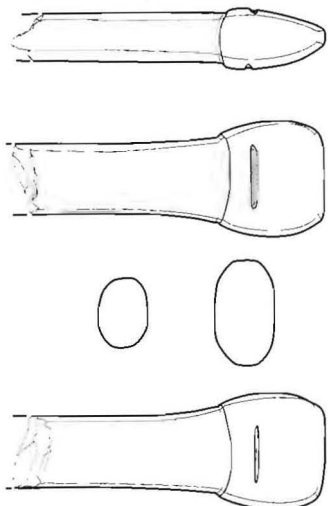
3. 岩版 (D区13層)



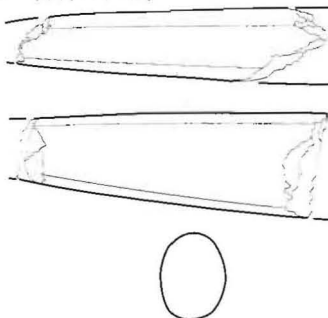
4. ボタン状石製品 (層位不明)



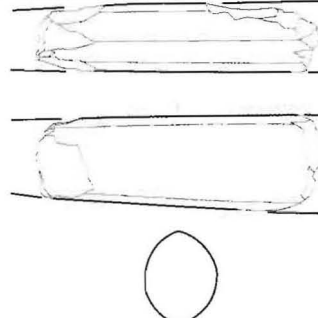
石刀  
5. (層位不明)



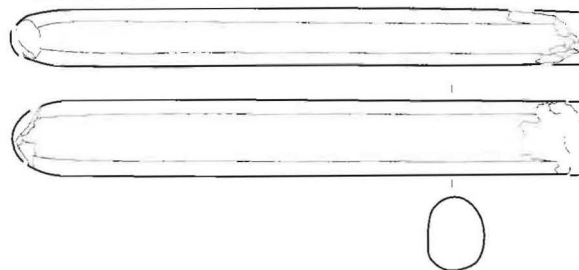
6. (層位不明)



7. (層位不明)

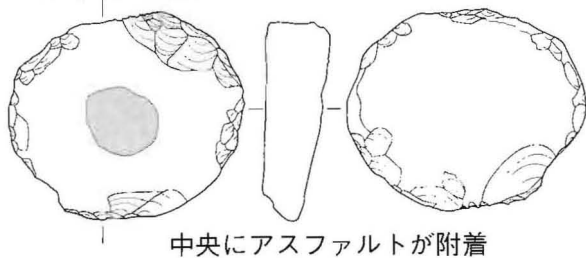


8. (層位不明)



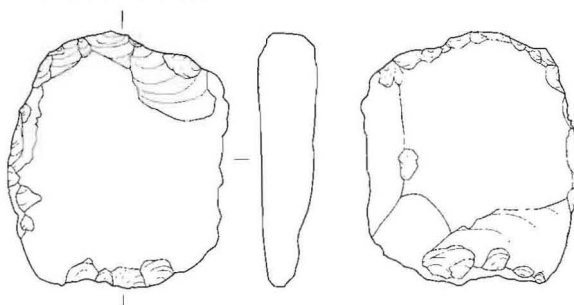
円板状石製品

9 (C区8層)

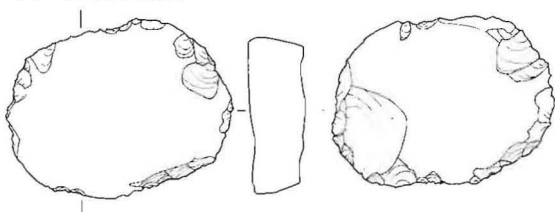


中央にアスファルトが附着

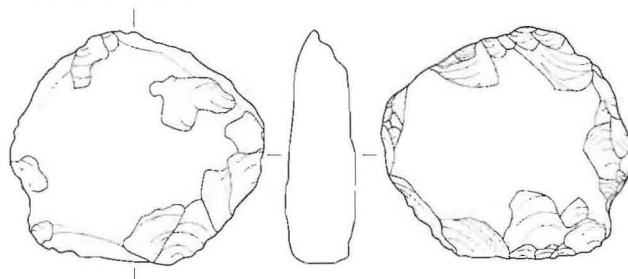
10 (D区12層)



11 (D区10層)

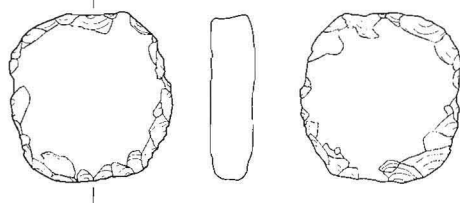


12 (D区14層)

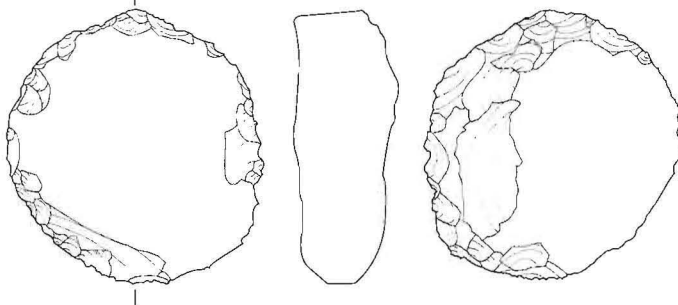


第110図 石製品 (3~12)

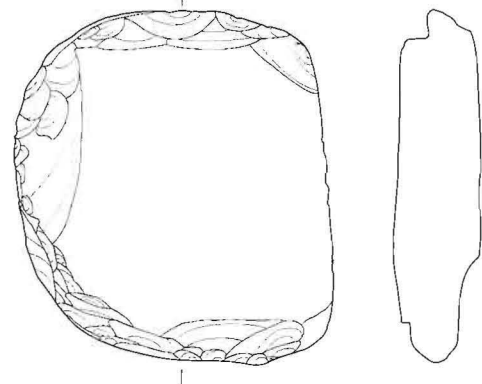
13 (D区13層)



14 (D区10層)

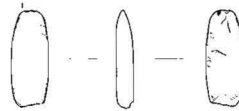


15 (A区10層)



超小型石製品

16 (D区5層)



## 土偶

番号	層位	高さ(cm)	重量(g)
1	C区7~9層 A区7層	(11.4)	135.8
2	D区7層	—	5.5
3	D区13層	(5.0)	71.7
4	D区11層	(3.9)	3.8

## 匙形土製品

番号	層位	長さ(cm)	重量(g)
5	A区6層	(8.8)	17.7

## 円板状土製品

番号	層位	縦幅(cm)	重量(g)
6	D区5層	3.5	9.6
7	D区11層	3.6	8.9
8	D区8層	3.4	6.5
9	D区10層	3.4	8.9
10	D区8層	3.5	9.6

## 超小型土器

番号	層位	器高(cm)	残存率
11	B区7層	1.4	不明
12	B区15層	1.1	1/4
13	D区7層	(3.0)	不明
14	D区9層	1.1	1/4
15	D区10層	(1.4)	1/4
16	D区11層	(2.3)	1/4
17	D区11層	2.1	1/2
18	D区13層	2.2	7/8
19	D区15層	(1.4)	1/4
20	不明	(2.3)	1/8
21	不明	(1.1)	不明

## 蓋形土製品

番号	層位	器高(cm)	残存率
22	D区4層	2.0	1/2

## 岩偶

番号	層位	石材	高さ(cm)	重量(g)
1	A区6層	頁岩(シルト状)	(11.9)	117.3
2	—	頁岩(シルト状)	(6.7)	32.7

## 岩版

番号	層位	石材	高さ(cm)	重量(g)
3	D区13層	頁岩(シルト状)	(7.5)	29.0

## ボタン状石製品

番号	層位	石材	縦幅(cm)	重量(g)
4	不明	頁岩	4.9	27.5

## 石刀・石剣類

番号	層位	石材	長さ(cm)	重量(g)
5	不明	粘板岩	(8.3)	53.3
6	不明	粘板岩	(7.7)	61.9
7	不明	粘板岩	(6.8)	49.5
8	不明	粘板岩	(14.1)	92.1

## 円板状石製品

番号	層位	石材	縦幅(cm)	重量(g)
9	C区8層	安山岩	5.5	103.2
10	D区12層	安山岩	6.8	107.0
11	D区10層	安山岩	4.8	64.6
12	D区14層	安山岩	6.2	113.4
13	D区13層	安山岩	4.5	44.0
14	D区10層	安山岩	7.3	156.9
15	A区10層	粘板岩	9.5	323.6

## 超小型石製品

番号	層位	石材	長さ(mm)	重量(g)
16	D区5層	頁岩・粘板岩か	26.0	2.0

( )は残存

第111図 石製品 (13~16)

りの一部が残っている。背面は弧線が対称的に入り組む文様を中心としている。縄文はLRである。乳房を囲む文様の一部が残り、その部分が凹んでいる。脇の下や股間に部分的に赤彩の痕跡が残る。

体部の内面を観察すると、製作時の粘土紐輪積痕や縦じわ、腕部や脚部の接合痕などが見られる。また乳房の内側が凹んでいる。胴部と腕部の接合部には補強のため粘土塊を貼り付けている。両脚部の間にも補強のための粘土塊の貼り付けがみられ、その部分が厚くなっている。

2は、遮光器土偶の腹部の一部と思われる小破片である。磨消縄文による文様がある。縄文はRLで、赤彩されている。内面はナデ調整で製作時の粘土紐輪積痕がみられる。

3は、体部と両腕部の破片で、中実土偶である。両乳房とも剥離・破損している。正面の胴部に弧線が一对みられる。手首が沈線によって表現されている。背面には文様がない。正面・背面ともよく研磨されている。胴部の欠損面にアスファルト状の付着物が見られる。

4は、中実土偶の脚部と思われる破片である。足首が沈線で表現されている。欠損面にアスファルト状の付着物が見られる。

## 2) 匙形土製品

身は長楕円形の皿形で、先端部付近が欠損している。柄は棒状で短い。手捏ねによる成形で、ナデによって内外面とも粗く調整されている。

## 3) 円板状土製品

土器の破片を打ち欠き、円形にしたものである。縁辺は磨滅しているため、研磨の有無は不明である。大きさはすべて同じで、径が約3.5cmのものばかりである。アスファルトの付着は見られない。

## 4) 超小型土器（ミニチュア土器）

法量が通常の土器にくらべて著しく小さいもので、ミニチュア土器とよばれることがある。通常の小型の土器と区別するために超小型土器と呼ぶことにし、土器ではなく土製品に含めた。土器形土製品といってもよい。超小型土器の大きさの基準は、通常的小型土器と比較し、高さ・幅ともに5cm以下のものとした（第112図参照）。口縁部をもつものが9点、体部破片が1点、台部破片が1点である。成形は、明らかに手捏ねのもの（11.12.14.17.18）が含まれているが、成形痕を観察できないものが多い。形は浅鉢・皿（11.12.14.15.19）が多く、次いで鉢（16～18.20）、壺（13）の順となる。口縁部に2条の沈線がめぐるものが1点あるが、他のものはすべて無文で、無地である。無地の面は、やや粗いナデ調整のもの（12～14.16～19）とよく研磨されているもの（11.15.20）とがある。また赤彩されたものが1点ある（12）が、これは手捏ね成形で器面はナデ調整のままで、指で押さえた痕などもみられる。

## 5) 蓋形土製品

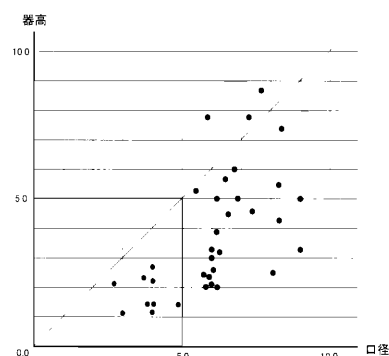
蓋ならば通常の土器に含めるべきであるが、頂部が欠損しているため蓋であると断定できなかった。蓋形の土製品として扱うことにする。2分の1ほどの破片で、頂部が欠損しているため摘みの形状は不明である。身に平行沈線文が見られる。内外面ともに横方向に丁寧に研磨されている。

## (2) 土製品のまとめ

①土製品は、共伴した土器からみてすべて大洞BC～大洞C1式期に相当するものであろう。しかし中実土偶は形態からみて後期のものである可能性がある。

②遮光器土偶（1）は、共伴した土器からみて大洞BC～大洞C1式期に相当するもので、形態・文様からみて矛盾はない。破片の高さは約11.4cmであるが、復元推定の高さは約23～24cmである。

乳房の部分は内部からの凹みによって盛り上がっている。このことは、輪積み成形の段階で、乳房



第112図 超小型土器と小型土器の法量の違い

の位置が確定していたことを示す。また施文前から乳房の膨らみが示されていたことは、体部の文様が、乳房の位置を基準として、描かれた可能性がある。また胴部と腕部の接合部、脚部と脚部の接合部に粘土塊を重ね、その部分が厚くなっているのは、接合部の補強を目的としたものであろう。したがって、製作工程を考えると、1. 二つの脚を作り、接合する。このとき接合部に粘土塊を加え補強する。2. 脚部が倒れないように固定し、その上に粘土紐を輪積みし、腰部・胴部・胸部を作る。肩まで作った段階で両腕を接合させ、やはり接合部に粘土塊をたして補強する。そして3. 最後に頭部を作り上げたのであろう。一部に赤彩の痕跡がみられるが、もとは全体が赤彩されていたのであろう。なお、郷土館の土偶は、中実の遮光器土偶であろう。

③中実の小型の土偶は、二つとも割れた面にアスファルト状のものが付着している。これは土偶が壊れたとき、割れ面に接着材を塗り接合・修理していたことを示すと考えられる。すなわち土偶は壊れると、修理して再び用いられることがあったことを示している。時期は後期後半から晩期前葉のものとしておく。

④円板状土製品の機能は不明である。土器に穴があいたときに、その部分にアスファルトなどで貼り付けるものともいわれるが（甲野1953）、今回の資料にはアスファルトの付着は見られなかった。

### (3) 石製品について（第109～111図）

石製品は、18点（郷土館のもの3点）ある。内訳は岩偶2点（郷土館のもの1点）、岩版2点（郷土館のもの1点）、ボタン状石製品1点、石刀・石剣類4点、円板状石製品8点（郷土館のもの1点）、超小型石製品1点ある。共伴した土器から、石製品はすべて晩期前葉、すなわち大洞BC式～C1式期に属するものと考えられ、型式学的にみても矛盾はない。材質については山口義伸氏の肉眼による鑑定に基づいて記述した。なお、ここでは弘前大学の発掘資料を中心に取り上げる。

#### 1) 岩偶

1は、頭部から腰にかけての大型破片で、右腕・脚部・右乳房を欠損する。現高は11.9cmであるが、全体を復元すると約15cmになると思われる。

頭頂部には沈刻による三叉文と隆帯文が施文されている。顔面には沈線で眉・大きな目・口などが表現されている。楕円形の目には横線がない。口は三角形である。後頭部には点对称に三叉文が描かれ、中央の点は小さな窪みとなっている。頸には襟巻き状の隆帯がめぐり、点对称に配置された「ノ」の字状の文様が並ぶ。胸には大きな乳房が付く。乳房には文様がない。乳房の間には三角形の文様がある。腹部は三角形に盛り上がり、点对称に描かれた弧線文の中心が点となり、窪んでいる。後頭部の文様と似た構図である。窪んだ点は臍を意識したものかもしれない。腕部の文様は平行線による渦巻き状のS字文である。背面の文様は平行線による渦巻き状のS字文、沈刻による三叉文、弧線が点对称に配置された入組文などが表現され、装飾化が著しい印象をうける。赤彩の痕跡はない。

2は参考資料である。昭和46年に三戸高校によって発掘されたもので（名久井1971）、現在、三戸町教育委員会で保管している。今回、新たに実測図を作成した。腕部の小破片で、平坦な面を背面部とすると、左腕に相当すると考えられる。両面とも渦巻き状のS字文が沈線で描かれている。

#### 2) 岩版

岩版は、隅部を含む破片である。背面か正面か、また上下の位置も分らない。両面とも浅黄橙色である。石質は頁岩であるが、きわめてシルトに近い感じである。両面とも平行線による渦巻文やC字文・半円文が描かれている。厚さは0.8cmで比較的薄く、側面には文様がほとんど及んでいない。沈線部の一部に点々とした赤色顔料らしきものがみられる。

#### 3) ボタン状石製品

板状のものであるが、やや湾曲し、外面は凸状に、内面は凹状になる。欠損しているが、貫通孔が

2個ある。一方の孔の壁に赤色の物質が付着しているが、他の部分にはみられない。孔に通した紐に由来するのかもしれない。周辺は一部加工・研磨されているが、内外面は自然のままである。材質は頁岩である。

#### 4) 石刀・石剣類

いわゆる石刀・石剣・小型石棒の類を一括した。敲打ののち研磨されて製作されたもので、すべて材料は粘板岩である。5はいわゆる石刀の柄部の破片である。柄頭の両面に短い直線文がみられる。6と7はいわゆる石刀あるいは石剣の刀身部の破片である。8は小型石棒の先端部の破片であろう。

#### 5) 円板状石製品

偏平な円礫の周囲を打ち欠き、円形に仕上げたものである。径は5～7cm前後、厚さ約1.5cmのものが標準である。また打ち欠いた側面をさらに敲打しているものが多いが、側面を研磨しているものは1点(9)である。重さは約44gから323gまでであるが、100g前後のものが多い(9,10,12)。材質は安山岩が多い(9～14)が、粘板岩のものも1点(15)ある。片面にアスファルトらしきものが丸く付着しているものが1点ある(9)。

#### 6) 超小型石製品(斧形石製品)

縦26mm、幅10mm、厚さ4mmで重さ2gという超小型の石斧である。ノミとしての機能が考えられるが、斧形の石製品にふくめることにした。よく研磨され、色調は黒色で、光沢をもつ。刃部付近は磨耗している。材質は頁岩か粘板岩の仲間と考えられる。

#### (4) 石製品のまとめ

①大型破片の岩偶は、右腕・脚部・右乳房を欠損するが、全体形を推定できる数少ない資料として貴重である。形・文様からみて馬淵川流域に広く分布する岩偶(渡辺1997)の仲間である。共伴した土器から考えて大洞C1式期に属するものと考えられる。

②円板状石製品は、石錘や敲石の一種など実用的な道具に比定されることが多いが、その機能は限定できないのが現状である。各地の晩期の遺跡から少なからず出土しており、普遍的な遺物といつてよい。岩手県一戸町山井遺跡では、大小の円板状石製品が201点出土し、うち11点にアスファルトが付着している。すべて片面にのみ付着しているが、付着部が中心部に集中するものと全体に及ぶものとがあるという(高田・中村1995)。類例は八戸市是川中居遺跡(宇部・村木など2004)、つがる市亀ヶ岡遺跡(佐藤1897)、弘前市十腰内遺跡(斎藤・葛城2001)など多数ある。杉沢遺跡でも片面にアスファルトが付着しているものが1点あるが、何のためにこうしたものがあるのか分らない。2007年に再調査された弘前市大森勝山遺跡の晩期初頭の環状列石では、列石の間に多数の円板状石製品が発見され、注目を集めた(弘前市教育委員会の現地説明会資料)。

#### (5) 石器について(第113～115図)

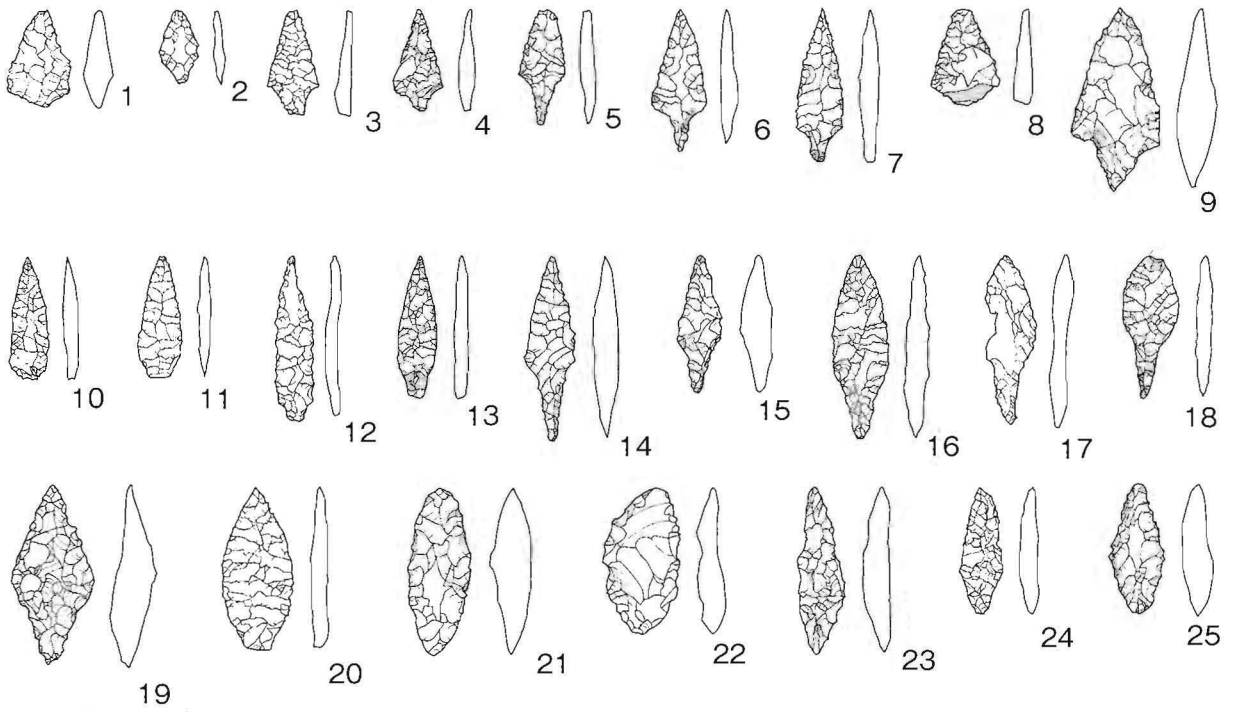
石器は、打製石器である石鏃・石錐・石匙・石筥・異形石器・不定形石器と、磨製石器である石斧、礫石器である石皿・凹石・敲石・磨石などである。

石器の観察法・実測図の作成については青森県埋蔵文化財調査センターの中嶋友文氏と佐々木雅裕氏にご指導を得た。また石材については山口義伸氏に鑑定をお願いした。

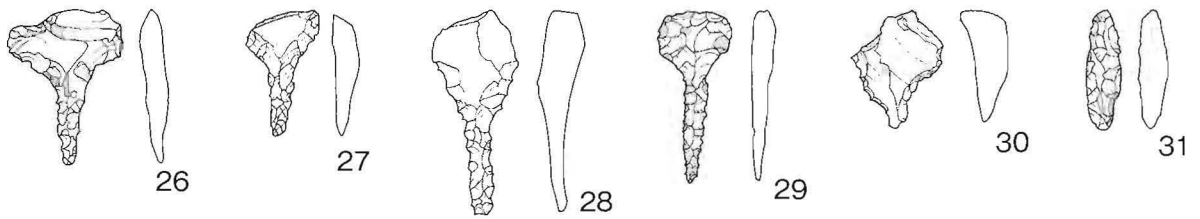
1) 石鏃-30点(うち郷土館のもの2点)ある。身部の形と茎部の形態の違いで4類型に分類することができた。第1類は身部が三角形で、茎部は底辺全体が浅く尖る形になるものである(1)。第2類は細長い三角形の身部に突出する茎部がつくものである。身部と茎部の境が明瞭なもの(2～9)からやや曖昧なもの(10～15,17,19,24)までである。第3類は側辺が丸みを帯びた木の葉形の身部に突出する茎部がつくものである(16,18,20)。第4類は身部と茎部との区別が付きにくいもので、全体の形は棒状のものを基本とするが、太めのものが多い(21～23,25)。



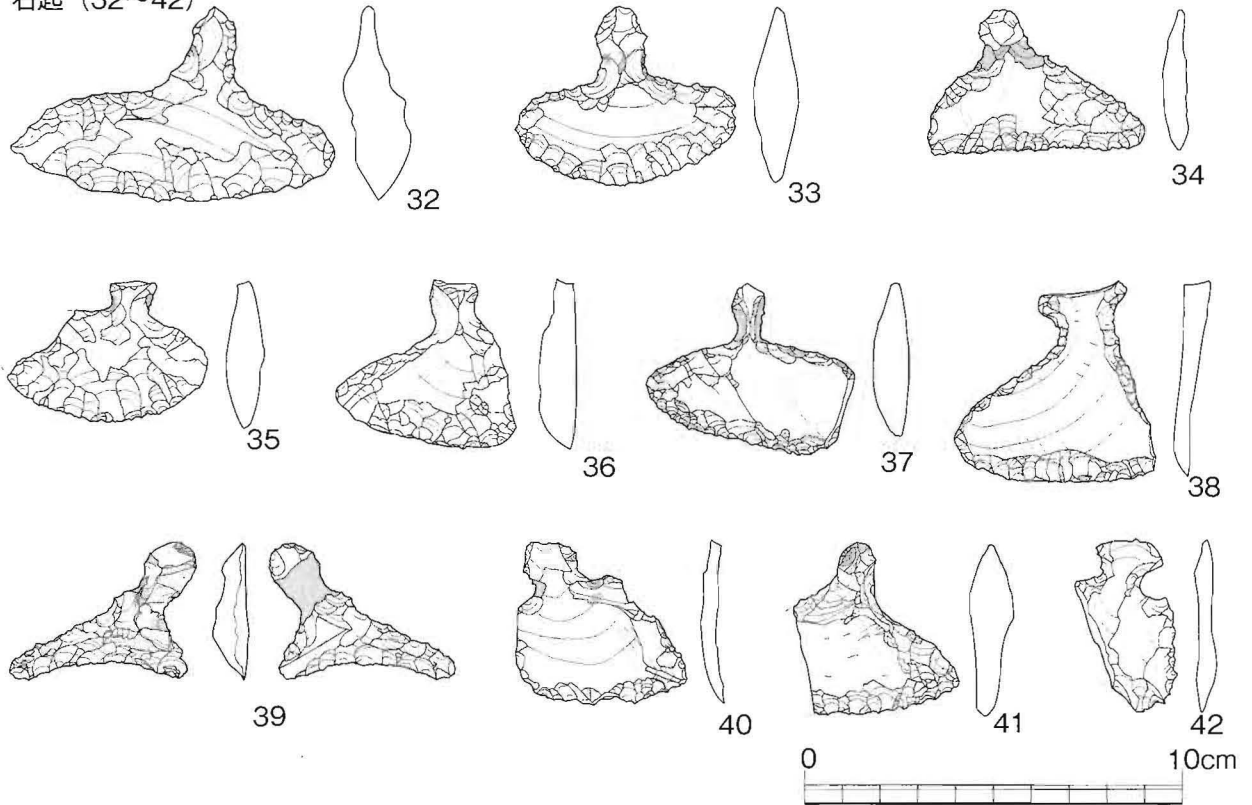
石鏃 (1~25)



石錐 (26~31)

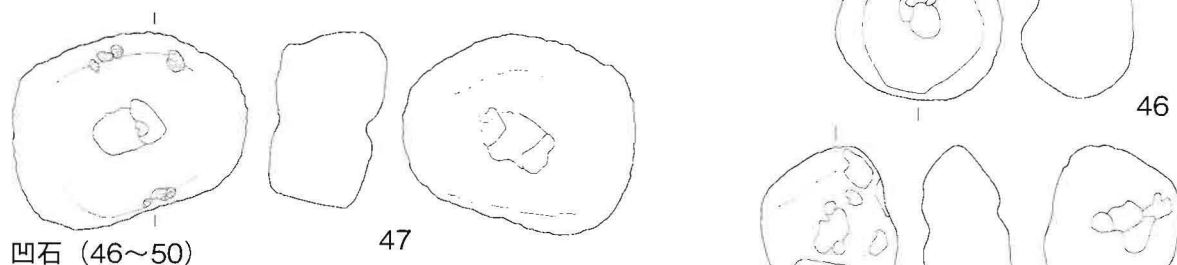
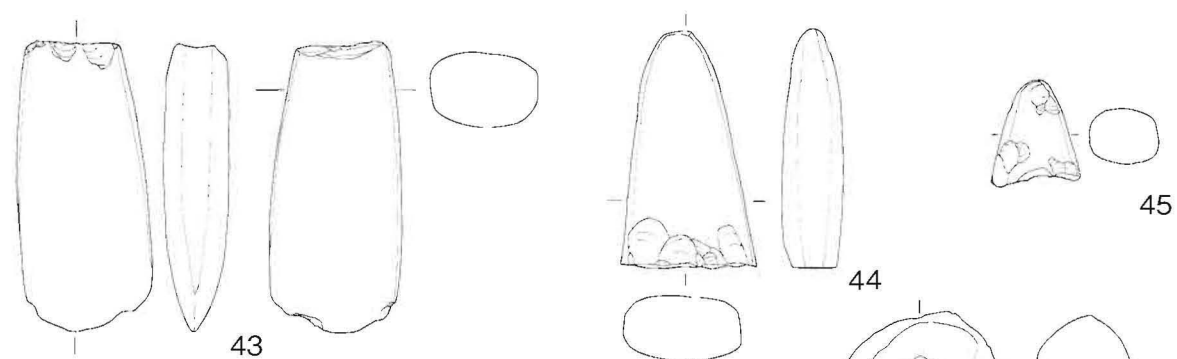


石匙 (32~42)



第113図 杉沢遺跡出土石器 1~42

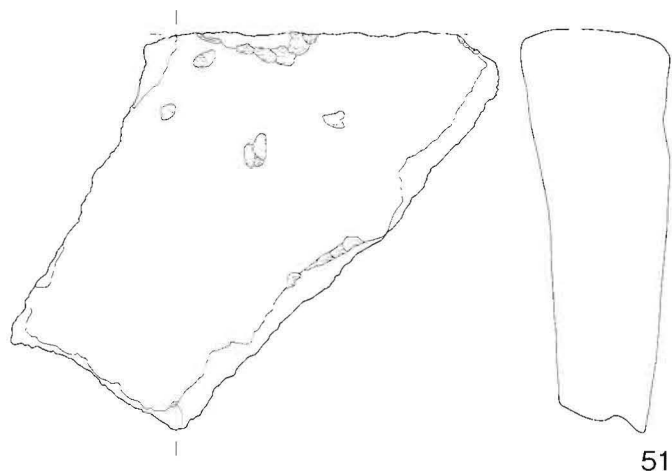
磨製石斧 (43~45)



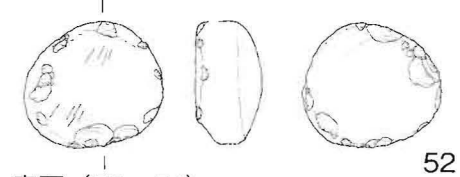
凹石 (46~50)



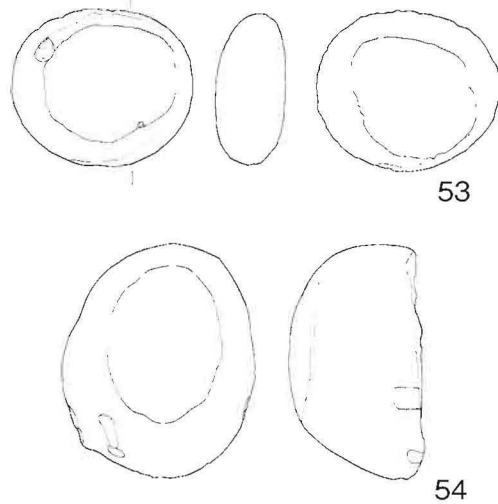
石皿 (51)



敲石 (52)



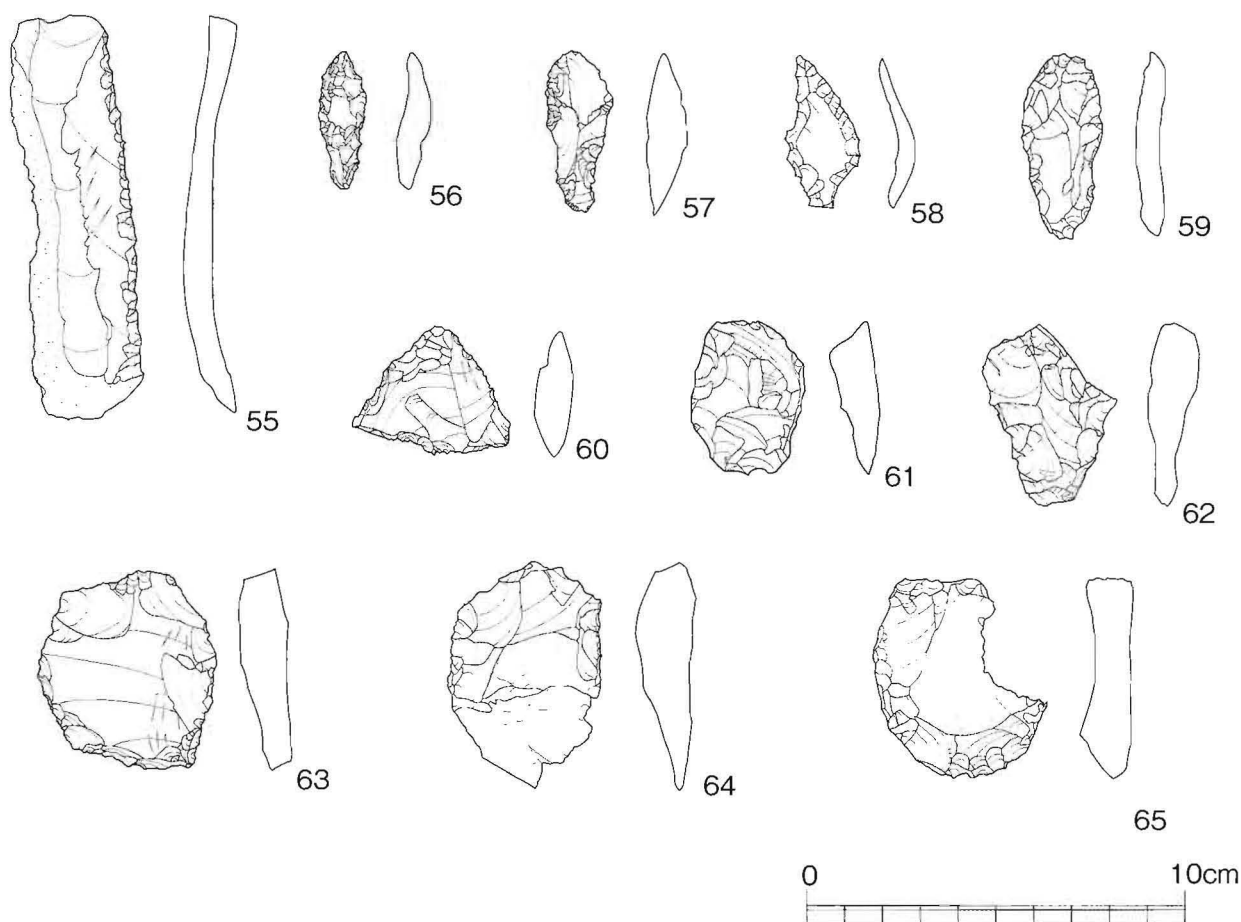
磨石 (53・54)



0 10cm

第114図 杉沢遺跡出土石器43~54

不定形石器 (55~65)



番号	器種	層位	石材	長さ(mm)	重量(g)
1	石鏃	D区8層	玉髄質頁岩	26.0	2.4
2	石鏃	D区9層	頁岩	21.0	0.8
3	石鏃	D区8層	頁岩	28.0	1.3
4	石鏃	B区6層	頁岩	27.0	1.0
5	石鏃	D区12層	頁岩	30.5	1.1
6	石鏃	C区6層	頁岩	38.0	1.6
7	石鏃	不明	頁岩	41.0	1.9
8	石鏃	A区1層	頁岩	25.0	1.3
9	石鏃	A区9層	頁岩	49.0	7.6
10	石鏃	A区12層	頁岩	22.0	13.0
11	石鏃	C区7層	頁岩	33.0	1.5
12	石鏃	D区11層	頁岩	44.0	1.7
13	石鏃	C区9層	頁岩	38.0	1.6
14	石鏃	C区12層	頁岩	49.0	2.6
15	石鏃	C区7層	緑泥片岩	36.0	2.9
16	石鏃	B区7層	頁岩	48.0	3.6
17	石鏃	A区1層	頁岩	46.0	2.6
18	石鏃	C区5層	頁岩	37.5	1.9
19	石鏃	D区10層	頁岩	48.0	6.8
20	石鏃	A区9層	頁岩	44.0	3.5
21	石鏃	D区10層	鉄石英	45.0	7.7
22	石鏃	C区7層	頁岩	39.0	5.8
23	石鏃	A区12層	頁岩	44.0	3.7
24	石鏃	不明	頁岩	34.0	1.7
25	石鏃	A区1層	頁岩	35.0	3.4
26	石鏃	A区7層	頁岩	42.0	6.1
27	石鏃	A区9層	頁岩	34.0	3.2
28	石鏃	B区7層	頁岩	55.0	5.1
29	石鏃	B区6層	頁岩	46.5	4.0
30	石鏃	D区7層	頁岩	30.0	5.2
31	石鏃	D区5層	頁岩	34.0	2.4
32	石匙	D区12層	頁岩	51.5	43.4
33	石匙	D区11層	頁岩	60.0	19.2

番号	器種	層位	石材	長さ(mm)	重量(g)
34	石匙	D区11層	頁岩	39.0	15.2
35	石匙	不明	頁岩	38.5	11.2
36	石匙	D区5層	頁岩	44.0	20.3
37	石匙	A区9層	頁岩	46.0	14.6
38	石匙	C区12層	頁岩	54.0	15.6
39	石匙	B区7層	頁岩	36.5	8.7
40	石匙	D区8層	メノウ	44.0	11.7
41	石匙	不明	頁岩	45.5	16.6
42	石匙	D区9層	頁岩	46.0	6.5
43	磨製石斧	表採	安山岩	118.0	327.6
44	磨製石斧	C区9層	閃緑岩	97.0	200.9
45	磨製石斧	D区13層	安山岩	44.0	45.6
46	凹石	D区15層	安山岩	64.5	217.9
47	凹石	不明	安山岩	81.0	407.7
48	凹石	D区15層	凝灰岩	74.0	122.6
49	凹石	C区2層	安山岩	143.0	667.8
50	凹石	B区6層	硬砂岩	105.0	350.5
51	石皿	A区12層	安山岩	201.0	1786.2
52	敲石	不明	砂岩	52.0	148.7
53	磨石	C区6層	安山岩	65.0	228.7
54	磨石	D区12層	安山岩	95.0	532.4
55	不定形石器	C区7層	頁岩	107.0	50.3
56	不定形石器	B区7層	頁岩	36.0	3.4
57	不定形石器	不明	頁岩	43.0	5.7
58	不定形石器	D区10層	頁岩	42.0	4.5
59	不定形石器	A区6層	頁岩	49.0	9.2
60	不定形石器	不明	頁岩	41.0	14.8
61	不定形石器	C区7層	頁岩	35.0	11.3
62	不定形石器	C区1層	頁岩	48.0	17.0
63	不定形石器	不明	頁岩	53.0	37.9
64	不定形石器	不明	頁岩	61.0	33.0
65	不定形石器	D区13層	頁岩	54.0	25.6

第115図 杉沢遺跡出土石器55~65

観察できた28点（郷土館の2点を除く）のうち、11点の基部（茎部など）にアスファルトが付着していることを確認した。

2) 石錐－9点（うち郷土館のもの3点）ある。摘み部の有無や摘み部・錐部の調整の違いで3類型に分類した。第1類は摘み部があり、摘み部と錐部が丁寧に整形されたもので、軸部も長い（26～29）。第2類は摘み部があり、摘み部や錐部の整形があまり丁寧でないもので、軸部も短い（30）。第3類は摘み部がなく、棒状のものである（31）。

観察できた6点（郷土館の3点を除く）のうち、4点の基部（摘み部など）にアスファルトが付着しているので、石錐は柄をつけて使用することが多かったであろう。

3) 石匙－15点（うち郷土館のもの2点）ある。すべて横型である。身部の形、底辺の刃部の形態などで4類型に分類した。第1類は身部の形が横長の楕円形で、底辺の刃部がやや湾曲するものである（32.33.35）。第2類は身部が三角形で、底辺の刃部が直線的なものである（34.36.38.40）。第3類は身部が台形（？）に近いもので、底辺の刃部は直線的である（37）。第4類は身部が三角形で、底辺の刃部がやや内湾しているものである（39）。

観察できた13点（郷土館の2点を除く）のうち、くびれ部にアスファルトが付着しているものが8点ある。とくに39はくびれ部から摘み部にかけて横縞状にアスファルトが付着しているのが観察され（写真46）、ここに紐状のものが巻かれ、アスファルトで固められていたことが推測された。

4) 石筥－1点ある。郷土館のものであるが、破片資料である。

5) 異形石器－1点ある。郷土館のものである。やや「大」あるいは「X」の字に近い形をしている。上端が欠損しているという。用途は不明である。

6) 磨製石斧－6点ある（うち郷土館のものが2点あるが、図示されているのは1点）。いわゆる定角式石斧と呼ばれるものに相当する。すべて欠損したものであるが、縦に長く、両面および側面が丁寧に研磨されている。刃部は蛤刃となり、使用痕跡（縦方向の磨耗痕）が観察される。身部の断面は各辺がやや膨らんだ長方形となる（43）。頭部は尖り気味のもの（45）と小さな平坦面をもつもの（44）とがある。図示していないものに小破片がある。

7) 凹石－7点（うち郷土館のものが1点）ある。偏平な円礫の両面に窪みがあるのが基本であると思われるが、礫の形、窪みの位置、部分的な研磨痕・敲打痕の位置や有無などで形態はさまざまである。46は厚みのある円礫で膨らみのある面のみ窪みがみられる。48は円礫の両面に窪みがあり、側面には研磨された部分があるようである。49は平面が洋梨形の偏平な円礫で上面に3個、下面に2個（不規則で数えにくい）の窪みがある。50は細長い円礫で両面に2個ずつの窪みがあり、端部には敲打痕も見られる。47は両面および側面が研磨により面取りされ、両面に一個ずつの窪みがある。そのほか細長い円礫を使用し、2個の窪みをもつものがある（図なし）。なお凹石の窪みは敲打によって形成されているため、大きな1個の窪みに見えるものでも、大小の打痕がみられ、複数の窪みからなっている可能性がある。

8) 石皿－2点ある（うち郷土館のものが1点）が、ともに破片である。偏平な大きな礫で、使用によって一面のみが広く窪み、滑沢のある面を形成している（51）。

9) 敲石－2点ある。ひとつは偏平な円礫の周囲に打痕が一面に見られるものであるが、周囲を敲打によって整形した円板状石製品である可能性もある（52）。他の一つは細長い礫の一部に打痕がみられるもので、半分に割れている（図なし）。また凹石と磨石の中には敲石の機能を兼ねたものがある。

10) 磨石－2点ある。すべて丸みの強い円礫を使用したもので、全体あるいは所々が滑沢になっている。凹石（47）は研磨によって面取りされており、磨石としても使用された可能性が高い。

11) 不定形石器・使用痕のある剥片－ここでは定型石器以外の剥片石器を不定形石器とした。素材となる剥片の縁辺のみを浅く加工したものが大部分である。また鋭い縁辺をそのまま刃として使用し、

縁辺に使用痕が残ったものを使用痕のある剥片と見なした。両方あわせると、定型石器よりはるかに数が多い。しかし、すべての不定形石器・使用痕のある剥片などの観察が終了していないので、今回は代表的な不定形石器を図示するにとどめた。

12) 酸化鉄・メノウ・粘板岩などー①酸化鉄はすべて小さく割られている。各区のいろいろな層から出土しており、合計すると約400gとなる。深鉢の破片の内側に赤色顔料が付着しているものが出土しているので、杉沢遺跡でも、酸化鉄を粉末にして、深鉢などで水簸して、顔料を製作したのであろう。②メノウの小さな礫や大きな破片などが出土している。メノウ製の石器や石製品はないので、物珍しさから集落に持ち込まれ捨てられたのであろう。③粘板岩は質の良くない破片なので、石製品を作るさいに捨てられたと考えられる。

#### (6) 石器のまとめ

①石器は、遺物包含層から晩期前半の土器（大洞 BC ～ C1式）に伴って出土したものである。石匙（32）が台付鉢（D492）の中から出土したが（写真51）、それ以外は特殊な出土状況を示すものはない。

②石器の種類と点数は、打製石器が石鏃（30点）・石錐（9点）・石匙（15点）・石篋（1点）・異形石器（1点）・不定形石器と、磨製石器である石斧（6点）、礫石器である石皿（2点）・凹石（7点）・敲石（2点）・磨石（2点）などである。縄文晩期の石器組成として標準的なものと考えてよい。

③石鏃は細長い三角形の身部に突出する茎部がつくものが多い。茎部にはアスファルトが付着している。矢柄に石鏃の茎を差し込み、アスファルトで固定していたことを示している。

④石錐は摘み部があるものが多い。摘み部にはアスファルトが付着しているので、柄をつけて使用することが多かったのであろう。

⑤石匙は、すべて横型で、底辺の刃部がもっとも幅が広い。身部の形は横長の楕円形のものと三角形になるものが多い。くびれ部にアスファルトが付着しているものが多く、なかには紐状のものが巻かれていたことをうかがわせる資料もある。

④磨製石斧は、すべていわゆる定角式石斧と呼ばれるものに相当する。

⑤礫石器の代表である磨石・凹石・敲石は安山岩系の円礫を使用したものである。主要な使用痕から磨石・凹石・敲石などに分類できるが、それぞれに研磨痕・打痕などが部分的に観察され、その分類は便宜的なものにならざるを得なかった。

⑥石皿は数が少ない。木の実の加工・調理などに使用されたのであろう。

⑦小さく割った酸化鉄の塊が少量出土している。深鉢の破片の内側に赤色顔料が付着しているものがあるので、杉沢遺跡でも、酸化鉄を粉末にして、深鉢で水簸して、顔料を製作したことが考えられる。

⑧不定形石器と使用痕のある剥片は、あわせると定型石器よりはるかに数が多い。ものを切ったり、削ったりする作業では、定型石器よりも数多く使用されたのであろう。すべての資料を観察することができなかったので、詳しい研究成果は他日を期することにする。

## 第6章 縄文晩期の土器のまとめと考察

最後に、もっとも多く出土した縄文晩期の土器、とくに大洞 BC 式あるいは大洞 C1式土器に焦点を絞り、まとめと考察を行いたい。

### 第1節 各区の主要な層と出土土器（型式）の関係

晩期の土器は、山内編年に照らし合わせれば、大洞 B 式から大洞 A' 式までである。

大洞 B 式と見なされるものは、三叉文で飾られた深鉢（C184）を除けば、小破片がごく少数あるだけである。ただし、この三叉文をもつ深鉢が、果たして大洞 B 式であるかは問題であろう。

大洞 C2式～大洞 A' 式は、耕作土を除けば、A 区・B 区・D 区の第 3 層～6 層から多数の大洞 BC 式～大洞 C1式土器に混じって少数出土している。大洞 A' 式は完形に近い台付浅鉢が 1 点あるが、大洞 C2式・大洞 A 式はいずれも小破片である。

上記の少数の土器型式（大洞 B 式・大洞 C2式～大洞 A' 式）を除くと、約 2000 個体近くある出土土器のほとんどが大洞 BC 式と大洞 C1式の時期のものに相当するが、両者の区別は難しい。そこで、比較的豊富な土器を出土した層から、形がある程度わかり、文様をもつ特徴的な土器を抽出し、層ごとに並べて、大洞 BC 式期・大洞 C1式期の土器群を検討したい。深鉢の例をあまりあげていないのは、特徴的な形・文様をもつのが少ないためである。

#### (1) 青森県立郷土館の旧トレンチの第 V 層出土の特徴的な土器（第 116 図）

旧トレンチの主な遺物包含層は第 V 層である。「第 V 層の上・中・下層については文様帯をもつ土器を基に検討した結果、だいたい第 V 下層が大洞 BC 式期、第 V 中層が大洞 BC 式～大洞 C1式期、第 V（上）層が大洞 C1式期と考えられるが、同時に器種による差異も少し見られた」という。また接合関係や晩期後半のものと思われる破片が混じっていることから、第 V 層の上・中・下層は安定した層序とはみなしがたいとも述べている（福田・工藤 1997）。しかし、この第 V 層はある程度の厚みもあり、包含される土器の量も多く、層ごとに形がある程度わかり、文様をもつ特徴的な土器を並べてみると、第 V 下層の土器は、雲形文の浅鉢破片（※をつけたもの）をのぞけば、すべて上・中層の土器より古い様相のものと考えてよい。注口は含まれていないので不明である。第 V 中層は鉢の頸部の羊歯状文が下層のものより崩れがやや目立つようである。また雲形文をもつ浅鉢や皿が急増する。注口は「ノ」字文や羊歯状文的な雰囲気をもつもので、第 V 下層の台付鉢や鉢の文様と似ているのが注目される。第 V 上層は文様をもつ土器が少ないが、ほぼ中層と同じ内容のものである。しかし注口は雲形文をもち中層の注口よりは新しい様相をもつ。

層位や形・文様などを総合的に考えるなら、第 V 下層は大洞 BC 式に、第 V 中層と第 V 上層はともに大洞 C1式になるであろう。大洞 C1式土器を細分することはこの二つの層では無理である。中層の完形に近い 2 個の注口も、古い様相をもつが、やはり大洞 C1式に含めるべきであると思う。

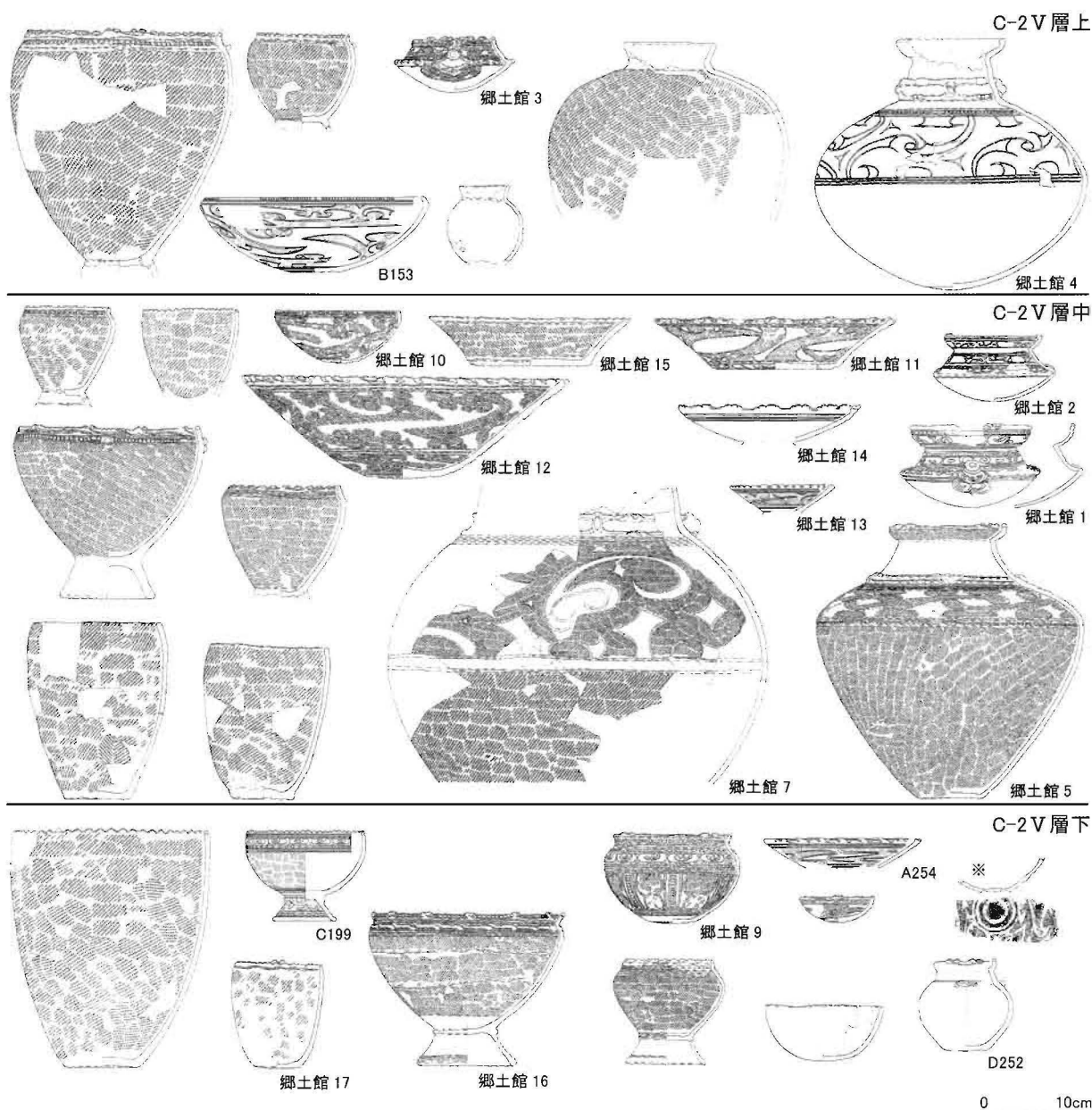
#### (2) A 区の層位と特徴的な土器（第 117 図）

A 区は文様をもつ土器が少ないが、第 6・7・9・10 層の特徴的な土器を層ごとに並べてみた。第 10 層は出土量が少ないので難しいが、大洞 BC 式でよいかもしれない。第 9 層は雲形文をもつ丸底に近い浅鉢や体部上半に広い雲形文をもつ台付鉢があらわれるので、大洞 C1式とみてよいであろう。ただし雲形文をもつ皿（A254）は郷土館の旧トレンチの第 V 下層の破片と接合したので、本来は第 10 層以下のものであろう。第 7 層と 6 層は大洞 C1式でよい。第 6 層の羊歯状文をもつ台付鉢（A86）は古い様相をもつものであるが、完形に近いものであり、出土状況を考慮すれば共伴土器と同じ時期（大洞 C1式）と考えたほうがよい。したがって、皿（A254）を別にすれば、第 9 層～6 層のものはみな大洞 C1式とみなしてよいであろう。

#### (3) B 区の層位と特徴的な土器（第 118 図）

B 区も文様をもつ土器が少ないが、第 6・7・9 層の特徴的な土器を層ごとに並べてみた。これをみ



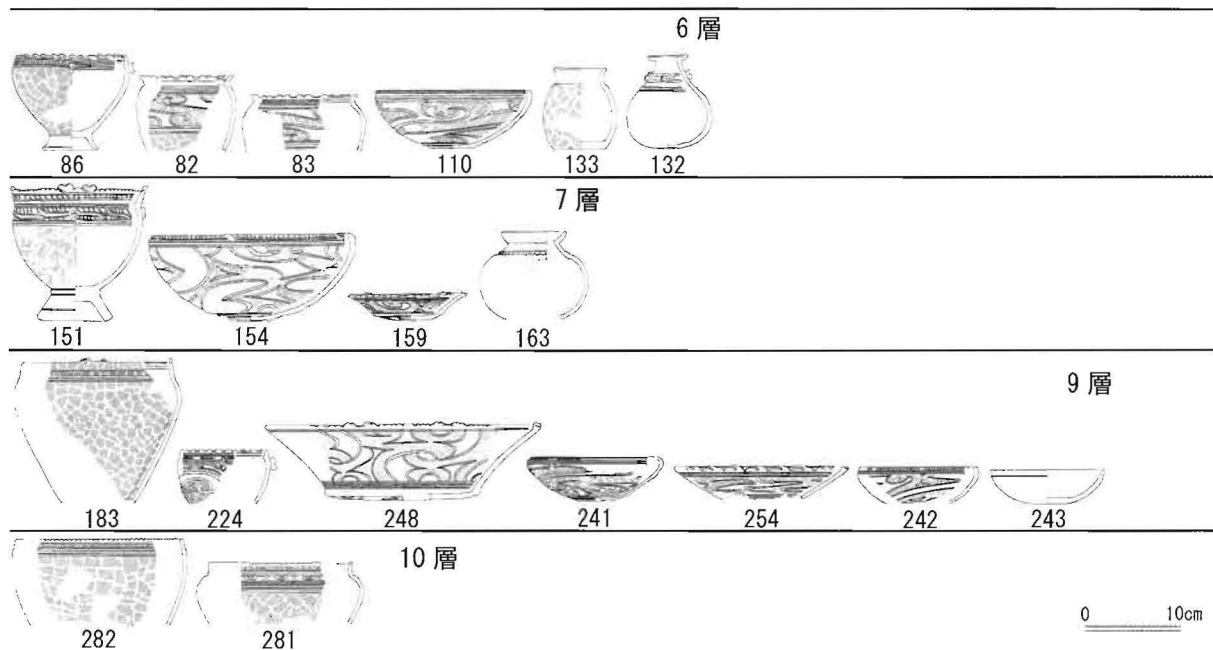


第116図 郷土館旧トレンチの第V層出土の特徴的な土器

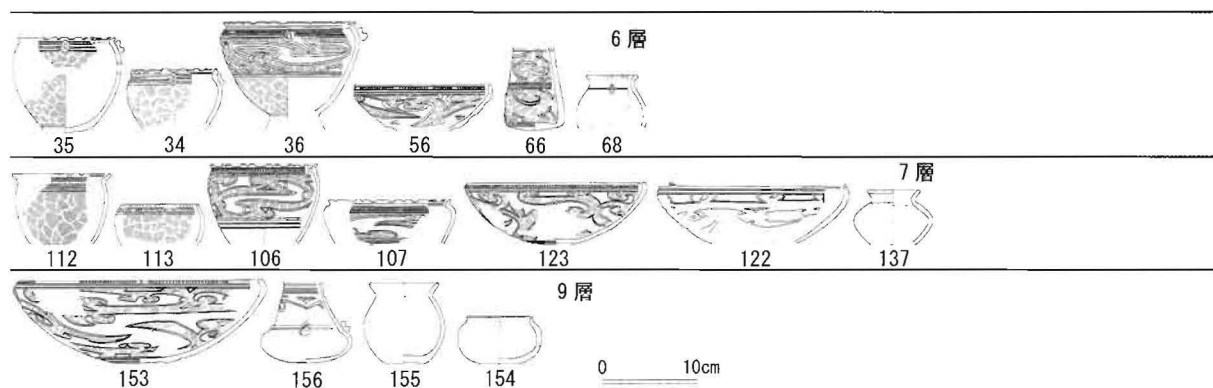
ると古い様相（大洞 BC 式）をもつ土器を含む層はなく、第6・7・9層の土器はすべて大洞 C1式のものと考えてよさそうである。

(4) C区の層位と特徴的な土器（第119図）

C区は郷土館の旧トレンチと重複した地点である。第13・11～9・7・6層の特徴的な土器を層ごとに並べてみたが、土器の量が多いのは第7層と第9層である。第9層の土器は文様からみて古い様相を示すものだけであり、大洞 BC 式と考えられる。三叉文をもつ深鉢（C184）は、より古い様相をもつが、破片がほとんど揃っていた一括土器で、相伴土器と同じ時期（大洞 BC 式）と考えたほうがよい。量は少ないが第13・11・10層の土器も大洞 BC 式と考えて矛盾がないものである。第7層は明瞭な羊歯状文をもつ大型台付鉢（C110）が出土しているが、体部上半に広い雲形文をもつ台付鉢が相伴するので、大洞 C1式の層とみてよいであろう。また旧トレンチの第V中層の大型壺（郷土館7）と同一個体の破片が10片ほど出土しているで、この二つの層は平行関係にあるとみてよい。第6層の土器は少ないが当然大洞 C1式に属する。



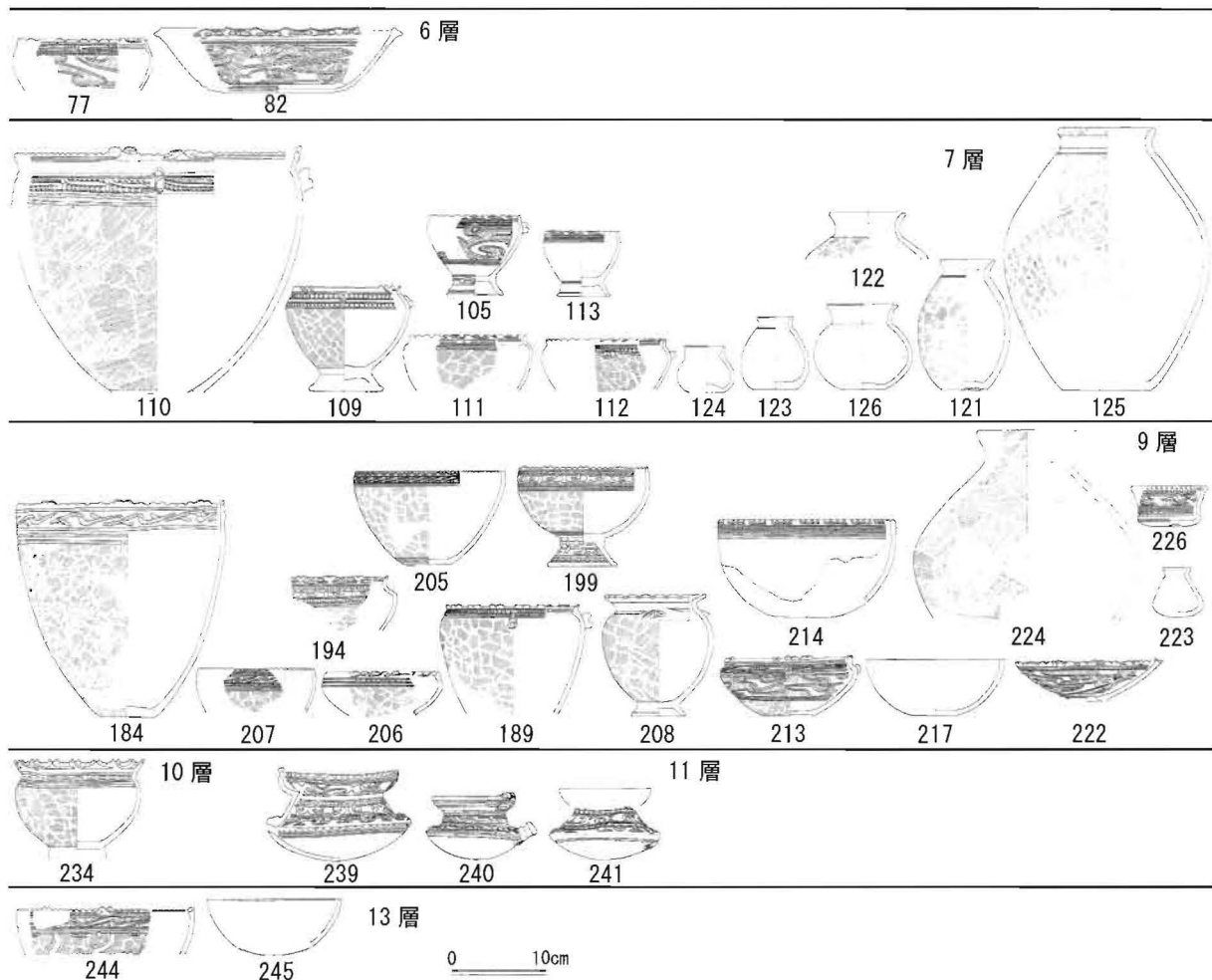
第117図 A区の層位と特徴的な土器



第118図 B区の層位と特徴的な土器

(5)D区の層位と特徴的な土器 (第120図)

D区は出土遺物も多く、層もできるだけ細別して取り上げた地点である。上から一枚ずつ剥ぐように発掘したつもりでいるが、実際には層のつながり・上下関係をとらえるのにまごついたことも少なくない。しかし、層位に発掘による混乱はさほどないと思っている。特徴的な土器は第15・13～8層にみられる。第15層の土器は羊歯状文などがキチンとしており、新しい要素がみられないので、大洞BC式と考える。第13層の土器も15層のものと同じ大洞BC式と思われる。しかし、体部上半に広い雲形文をもつ台付鉢や雲形文の注口は新しいものかもしれない。第12層の土器は難しい。浅鉢(D493)は大洞C1式でよいであろう。内傾する体部上半の端部がそのまま口縁となり、体部に羊歯状文をもつ注口は古い様相を残すようであるが、列点などはやや粗雑であり、体部下半に雲形文をもつところから大洞C1式に属すると考えるのが妥当と思われる。第11層は広い文様帯に雲形文が展開する台付鉢や浅鉢に代表されるように大洞C1式である。したがってそれよりも上層に位置する第10～8層も大洞C1式のものとなるが、比較的古い様相をしめる注口(D259.D360)や深鉢(D305)を含むのは注目される。



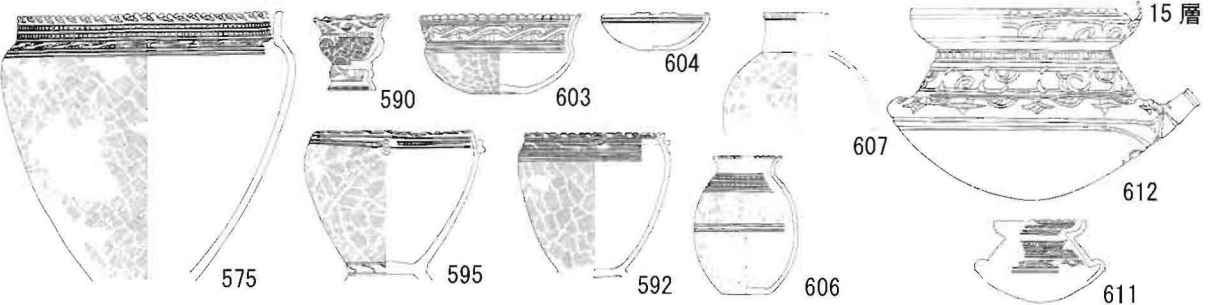
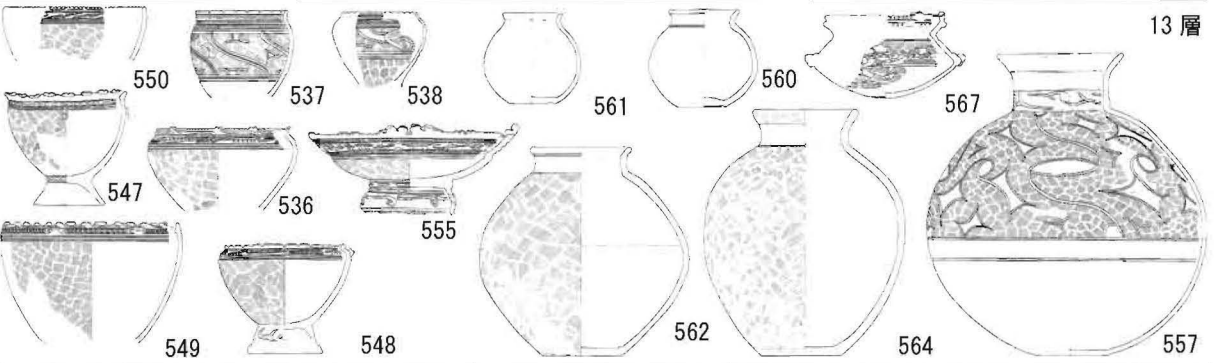
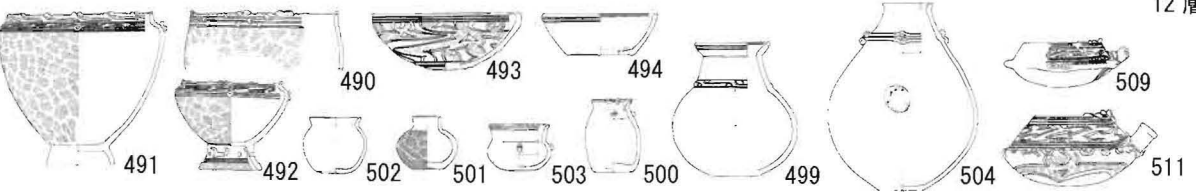
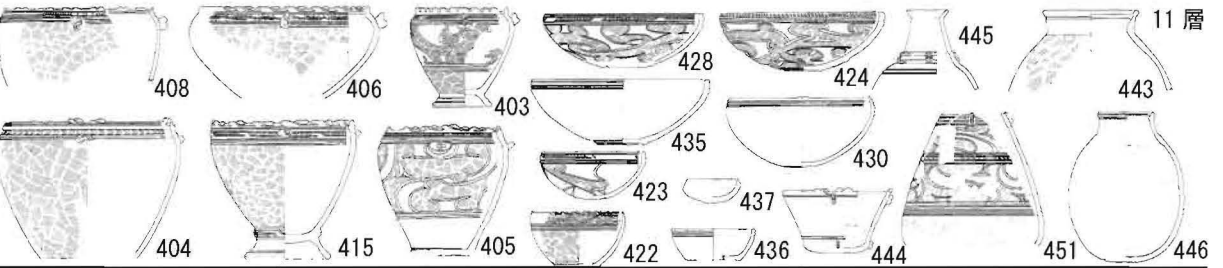
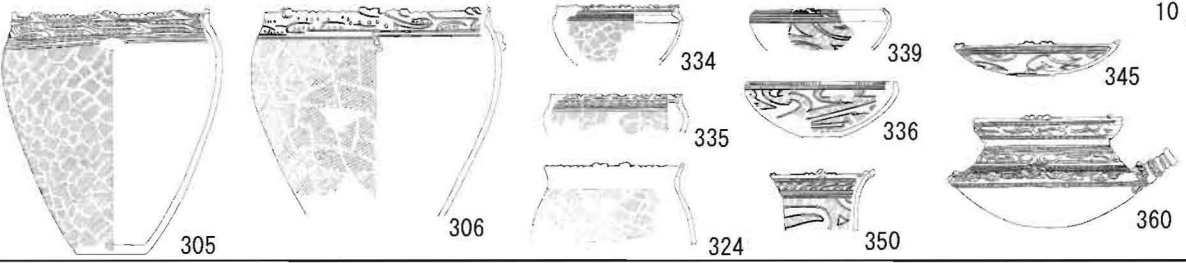
第119図 C区の層位と特徴的な土器

## 第2節 大洞 BC 式土器群と大洞 C1式土器群の設定 (第121・122図)

各区の主要な層位と出土土器の関係で検討したように、やや強引であるが、大洞 BC 式と大洞 C1式は層位で分けることができそうである。大洞 BC 式の層は、旧トレンチの第V下層、A区の第10層、C区の第13・11～9層、D区の第15・13層である。大洞 C1式の層は、旧トレンチの第V中・上層、A区の第9・7・6層、B区の第9・7・6層、C区の第7・6層、D区の第10～8層である。迷ったのはD区の第12層であるが、大洞 C1式の要素の方が強いと判断した。なお、郷土館の報告書では旧トレンチ第V中層を大洞 BC 式と大洞 C1式がともに存在するものと考えている (福田・工藤1997)。

各区の層位 (土器) と型式の関係					
	旧トレンチ	A区	B区	C区	D区
大洞 C1式	第V中・上層	第9・7・6層	第9・7・6層	第7・6層	第12～8層
大洞 BC 式	第V下層	第10層		第13・11～9層	第15・13層

これに基づいて、大洞 BC 式と大洞 C1式の主要な土器組成を集合図で示してみよう (第121・122図)。大洞 BC 式から大洞 C1式への変遷は連続的で、その区別がつけにくい。中間的な型式も設定しにくいようである。第116図～第120図を参照しながら大洞 BC 式土器の組み合わせ (第121図) と大洞 C1式土器の組み合わせ (第122図) を見ると、深鉢は無文で縄文地のものが多く、型式による違いを見いだすのは難しい。頸部の狭い文様帯に羊歯状文がめぐる深鉢・台付深鉢は数は少ないが、大洞 C1式



0 10cm

第120図 D 区の層位と特徴的な土器

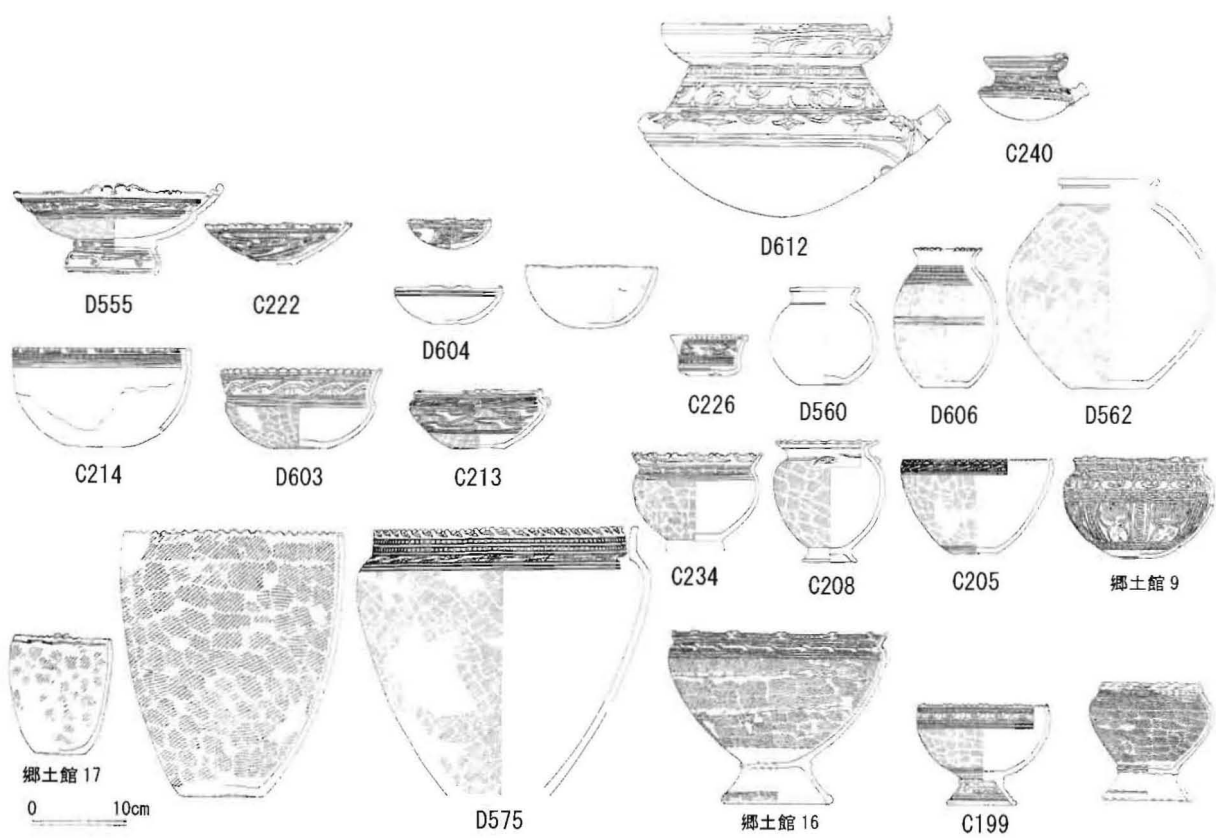
まで残るようである。鉢や台付鉢のうち口頸部の狭い文様帯に羊歯状文がめぐるのは両型式にみられる。この羊歯状文は大洞 BC 式ではキチンとしたものが多く、大洞 C1 式ではくずれたものが多いようであるが、そうでないものも多数あり、その区別は難しいことがある。また体部上半に広い雲形文をもつ台付鉢は大洞 BC 式にはほとんどなく、大洞 C1 式の大きな特徴となっている。浅鉢のうち小さな底部をもち、体部に雲形文を有するものは、大洞 C1 式に多いが、大洞 BC 式にはあまり無い。皿は、台付皿 (D555.A254) が大洞 BC 式と思われるが、他のものはすべて大洞 C1 式であろう。大型壺を除くと文様をもつ特徴的な壺は少ない。大型壺の D557 は大洞 BC 式、他のもの (郷土館 4. 5. 7) は大洞 C1 式であろう。比較的小型の無文 (無地で光沢をもつ) のものは両型式に見られる。徳利形の壺は、雲形文をもつものが多く、みな大洞 C1 式に属する。また受け口状の口縁をもち下膨れの無文の壺 (多くは赤彩、A132 など) は大洞 C1 式の特徴となっている。注口は受け口状の口縁部をもち体部の文様帯に四葉状の X 字文やそれに似た文様をもつものは大洞 BC 式 (D612.C239.C241) と大洞 C1 式 (D259. D360. 郷土館 1. 2) の両方にみられ、その区別は容易でない。このような特色をもつ注口は両型式に存在すると考えたほうがよい。内傾する体部上半の端部がそのまま口縁となるものは、体部の文様が羊歯状文のもの (D509.D511) も雲形文のもの (郷土館 3) も大洞 C1 式に属すると判定した。

以上のことはいろいろと問題を含むであろう。若い研究者には机上で論ずるのではなく、新たな発掘調査を実施して、検討して欲しいものである。

### 第3節 大洞 BC 式・大洞 C1 式土器の器種組成とその割合 (第123図)

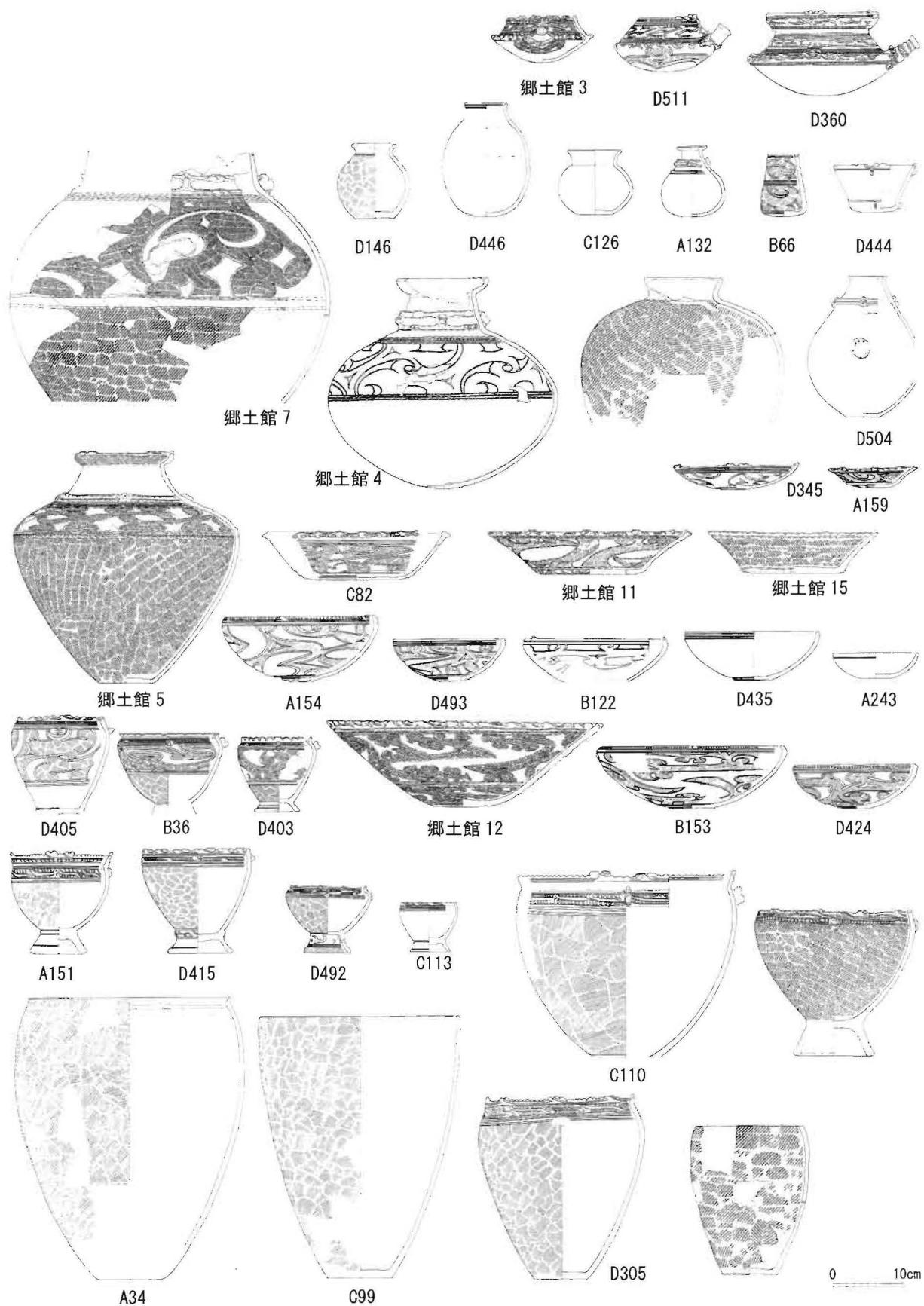
今回の発掘調査で出土した晩期の土器の個体数は1894点 (うち郷土館の旧トレンチでは232点) である。このなかには微量の大洞 B 式・大洞 C2 式～大洞 A' 式が含まれるが、その他はすべて大洞 BC 式と大洞 C1 式に属するものである。そこで1894点すべてを大洞 BC 式と大洞 C1 式とみなし、微量の異型式の混入を無視して、その器種構成やその割合を検討することにする。器種ごとの内訳は、深鉢が1035点 (54.6%)、鉢が414点 (21.9%)、浅鉢が167点 (8.8%)、皿が75点 (4.0%)、壺が163点 (8.6%)、注口が40点 (2.1%) である。深鉢と鉢の数が多いのは、煮沸に利用され、消耗し壊れることが多かったことを示している。郷土館の旧トレンチの第 V 層出土の土器だけで示した器種組成もほぼ同じ割合なので、深鉢が組成の半分以上を占めるのは杉沢遺跡の大きな特徴であろう。同じ時期の野口遺跡の器種組成をみると深鉢が30%で、杉沢遺跡より少ない (野口遺跡の資料が個人の採集品であることに注意)。今津遺跡の大洞 C2 式の捨て場では深鉢が12.4%とさらに低くなるが、逆に鉢が57.3%と増加する。おそらく北東北地方では大洞 C1 式から大洞 C2 式にむかって、食事のための煮沸容器が小型化し、深鉢から鉢 (多くは台付鉢) に移行するのであろう。組成比を出していないが、十和田市明戸遺跡でも大洞 C1 式の炭化物のついた鉢 (台付鉢を含む) が数多く出土している。

最近、岩手県内で縄文晩期遺跡の発掘報告書がいくつか出版されているが、その器種組成には問題があり、比較することができなかった。問題があるにせよ、発掘は包含層や遺構内堆積層をできるだけ細分し、層ごと・遺構ごとに出土遺物を提示して欲しいものである。層ごと・遺構ごとに発掘しても、既知の型式にあてはめて分類するだけでは、型式の実態・内容は深化しないであろう。層位は万能ではないが、層位をわすれた研究者は、歌を忘れたカナリヤよりも惨めであることを知るべきである。

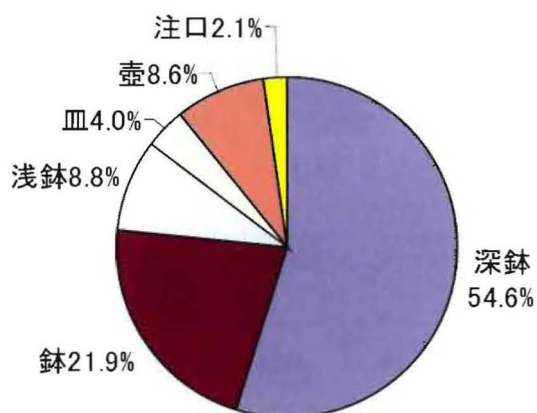


第121図 杉沢遺跡出土の大洞BC式土器の組み合わせ



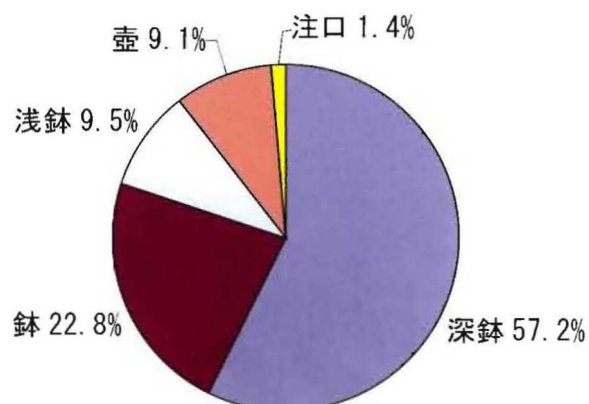


第122図 杉沢遺跡出土の大洞C1式土器の組み合わせ



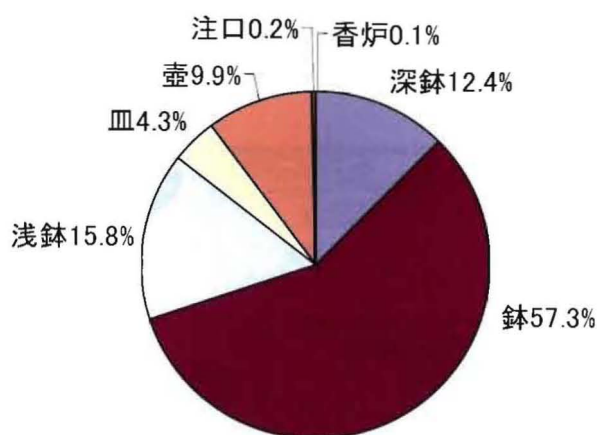
杉沢遺跡（全体）

器種	個体数	割合
深鉢	1035	54.6%
鉢	414	21.9%
浅鉢	167	8.8%
皿	75	4.0%
壺	163	8.6%
注口	40	2.1%
合計	1894	100%



杉沢遺跡（郷土館 C-2V層のみ  
中里・福田・工藤1997より）

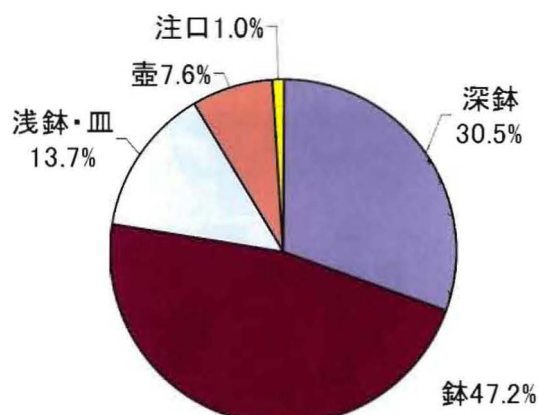
器種	個体数	割合
深鉢	158	57.2%
鉢	63	22.8%
浅鉢	26	9.5%
壺	25	9.1%
注口	4	1.4%
合計	276	100%



今津遺跡（藤沼・関根2005より）

器種	個体数	割合
深鉢	200	12.4%
鉢	923	57.2%
浅鉢	254	15.8%
皿	70	4.3%
壺	160	9.9%
注口	3	0.2%
香炉形	2	0.1%
合計	1612	100%

注）製塩土器 331 点を除いたものである。



野口貝塚（秋山・澤田2006より）

器種	個体数	割合
深鉢	284	30.5%
鉢	440	47.2%
浅鉢・皿	128	13.7%
壺	71	7.6%
注口	10	1.0%
合計	933	100%

第123図 杉沢遺跡・今津遺跡・野口貝塚の器種組成比

## 【引用・参考文献目録】

- 青森県史編さん自然部会編（2001年）『青森県史・自然編・地学』青森県
- 青森県史編さん自然部会編（2003年）『青森県史・自然編・生物』青森県
- 青森県農林部農村計画課編（1998年）『土地分類基本調査－田子・浄法寺』青森県農政部
- 青森県埋蔵文化財調査センター編（1990年）『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③、青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財センター編（1995年）『泉山遺跡調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書190
- 青森県教育委員会編（1998年）『青森県遺跡地図』
- 秋山真吾・澤田恭平ほか（2006年）「三沢市野口貝塚の縄文晩期の土器について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集（2）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 宇部則保・小久保拓也（2001年）『八戸市内遺跡発掘調査報告書15 是川遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書91
- 宇部則保・小久保拓也（2002年）『是川中居遺跡・長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書2
- 工藤竹久（2002年）「縄文後期・晩期の煮炊き用小型土器」『海と考古学とロマン』、同刊行会事務局
- 小井田幸哉（1983年）『田子町史－上巻』田子町
- 甲野 勇（1953年）『縄文土器のはなし』世界社
- 児玉大成（2005年）「亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元」『日本考古学』20、日本考古学協会
- 斎藤 正・葛城和穂など（2001年）『十腰内(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書304
- 佐藤伝蔵（1987年）「本邦石器時代の膠漆的遺物について」東京人類学雑誌138
- 佐原 真（2002年）「器種・器形」『日本考古学事典』三省堂
- 三戸町史編さん委員会編（1997年）『三戸町史－上・中・下巻』三戸町
- 杉山寿栄男（1923年）『原始文様集』工芸美術研究会
- 杉山寿栄男（1928年）『日本原始工芸』工芸美術研究会
- 杉山寿栄男（1928年）『日本原始工芸概説』工芸美術研究会
- 鈴木覺四郎（1941年）『第9回山村経済実態調査報告書・山村経済の構造と解体過程－青森県猿辺村に於ける実例－』全国山林会連合
- 鈴木克彦（1995年）「亀ヶ岡式土器の器形・器形組成から見た地域性」『北海道考古学』31
- 鈴木克彦（2007年）『注口土器の集成研究』雄山閣
- 鈴木道之助（1991年）『図録石器入門辞典〈縄文〉』柏書房
- 高田和徳・中村明央（1995年）『山井遺跡』一戸町文化財調査報告書36。
- 戸沢充則（1994年）『縄文時代研究辞典』東京堂出版。
- 名久井文明（1971年）「杉沢遺跡調査の略報告」青森県立三戸高等学校研究紀要1
- 成田滋彦・中島友文ほか（1995年）『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書181
- 日本考古学協会編（1954年）『登呂－本編』毎日新聞社
- 額賀 巖（1972年）『ものと人間の文化史6 結び』法政大学出版
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修（1988年）『新版標準土色帖』
- 八戸市教育委員会編（2002年）『是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書91
- 八戸市教育委員会編（2004年）『是川中居遺跡3』八戸市埋蔵文化財調査報告書103
- 弘前市出土品調査会編（2005年）『十腰内（2）遺跡出土遺物集』弘前市出土品調査会
- 福田友之・工藤 大（1997年）『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館

- 藤沼邦彦（1981年）「縄文晩期の土器－東北地方－」『縄文土器大成』 4 講談社
- 藤沼邦彦（1983年）「文様の描き方－亀ヶ岡式土器の雲形文の場合－」『縄文文化の研究』 5、雄山閣
- 藤沼邦彦（1989年）「亀ヶ岡式土器の文様の描き方－雲形文を中心に－」『考古学論叢Ⅱ』
- 藤沼邦彦（1989年）「亀ヶ岡式土器文様」『縄文土器大観』 4、小学館
- 藤沼邦彦・蔦川貴祥ほか編（2004年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 1
- 藤沼邦彦・関根達人ほか編（2005年）『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 2
- 藤沼邦彦・小川忠博編（2006年）『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 3、亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦・横山寛剛ほか編（2006年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集（2）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 4、亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦・秋山真吾編（2007年）『亀ヶ岡文化遺物実測図集（3）』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 5、亀ヶ岡文化研究センター
- 藤村東男（1973年）「青森県宇鉄遺跡出土土器の補修孔について」『萌木』13
- 藤村東男（1983年）「縄文土器組成論」『縄文文化の研究』 5、雄山閣
- 保坂三郎編（1972年）『是川遺跡出土遺物報告書』、八戸市教育委員会
- 前田利見（1973年）『八戸藩史料』伊吉書院
- 村越潔ほか編（1968年）『岩木山』、岩木山刊行会
- 村越潔（1983年）『亀ヶ岡式土器』、考古学ライブラリー18ニュー・サイエンス社
- 村越潔（1984年）『亀ヶ岡式遺跡』考古学ライブラリー19ニュー・サイエンス社
- 山内清男（1930年）「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』 1－3、東京考古学会
- 山内清男（1964年）「日本先史時代概説」『日本原始美術』 1、講談社
- 渡辺誠（1985年）「杓子形土製品の研究」『日高見国－菊池啓次郎学兄還暦記念論集』、菊池啓次郎学兄還暦記念会
- 渡辺誠・南博史編（1997年）『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』、古代学研究所研究報告 第5輯





杉沢遺跡の出土品の組成



第1類

D305(10層)



D305の展開写真

写真1 深鉢 第1類





第1類

D306(10層)



D306の展開写真

写真2 深鉢 第1類



第1類

D575(15層)



第1類

A183(9層)



第2類

D324(10層)



第3類

B4(5層)



D184(8層)

写真3

深鉢 第1～3類





第4類

D364(11層)



第4類

D134(6層)



第4類

C176(9層)



第4類

D481(12層)



第4類

A217(9層)



第4類

D463(12層)



第4類

D487(12層)

写真4 深鉢 第4類



第4類

D480(12層)



第4類

A34(6層)



第4類

A295(13層)



第4類

A57(6層)



第4類

D133(6層)



第4類

D529(13層)



第4類

C181(9層)

写真5 深鉢 第4類





第4類

C147(9層)



第4類

C86(7層)



第4類

C236(11層)



第4類

C179(9層)



第4類

C237(11層)



第4類

B72(7層)



第4類

C177(9層)



第4類

D183(7層)

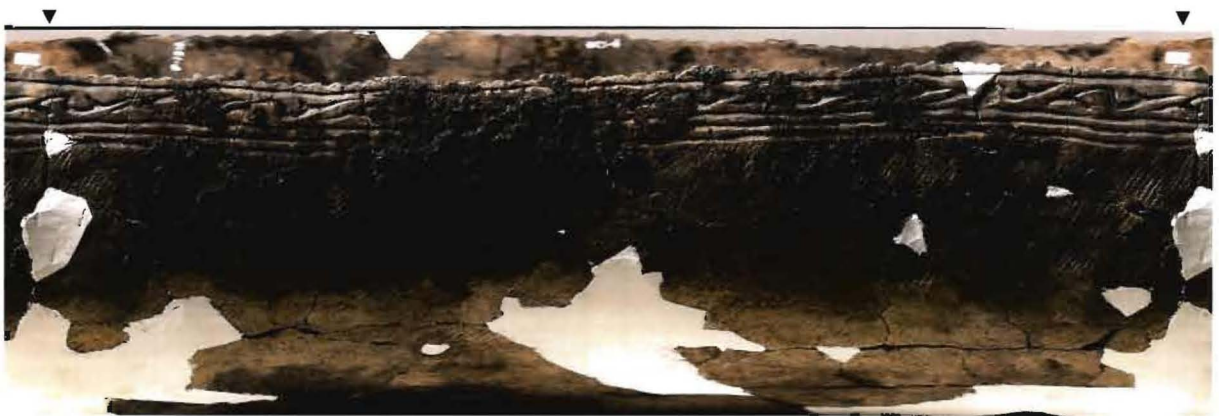
写真6

深鉢 第4類



第5類

C184(9層)



C184の展開写真（炭化物の附着状態に注意）

写真7 深鉢 第5類





第6類

B71(7層)



第6類

C99(7層)



第6類

A303(13層)



第6類

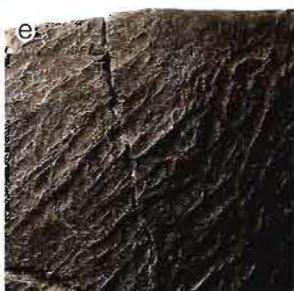
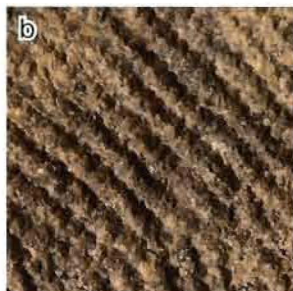
C247(土坑1)

※



内面（下3個）にのみ赤色顔料が附着、外面（上3個）には附着なし。（水簸用に用いたか？）

※



深鉢に見られる地文の例

a : L R単節斜縄文      b : R L単節斜縄文

d : 付加条縄文

f : 撚り戻しによって単節となるもの？

c : a・bによる羽状縄文

e : 撚り戻しによって無節となるもの

g : 条痕文      h : 無地（ケズリ）



内面底部に漆の塊が付着。漆は剥落した部分がある。



外面に炭化物  
付着。内面も  
炭化物付着。

第2類

D405(11層)



D405の展開写真





第2類

D279(9層)



第2類

D403(11層)



第2類

B36(6層)



第2類

B106(7層)



第2類

C105(7層)



第2類

D537(13層)

写真10

鉢 第2類



第1類 B46(6層)



第1類 (体部) B121(7層)



第2類 A83(6層)



第2類 D538(13層)



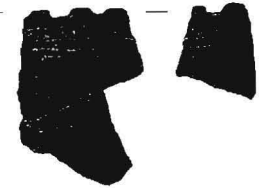
第2類 D136(6層)



第2類 A82(6層)



第2類 A224(9層)



第2類 C77(6層)



第2類 B107(7層)

第2類、層位不明、内面にアスファルト付着。

※



外面



内面



第2類の  
体部破片で  
金雲母が  
混入しているもの。



第3類

D547(13層)



第3類

D165(7層)

写真11 鉢 第1～3類など





第4類 B112(7層)



第4類 D591(15層)



第4類

C234(10層)



第5類

D281(9層)



第5類

A151(7層)



第5類

C110(7層)



第6類

D590(15層)



第7類

C208(9層)



第9類 A281(10層)



第9類 C194(9層)



第10類 D334(10層)



第10類 A85(6層)



第10類 A149(7層)



第10類 C111(7層)



第10類 D407(11層)



第10類 D335(10層)



第10類 D539(13層)



第10類 A84(6層)



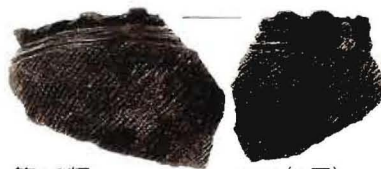
第10類 D218(8層)



第10類 C112(7層)



第10類 郷土館18  
(C-2V)



第10類 B34(6層)



第10類 D408(11層)



第10類

D280(9層)



第10類 B108(7層)

写真13

鉢 第6・7・9・10類





第10類

D215(8層)



第10類

D491(12層)



第10類

C189(9層)



第10類

D592(15層)



第10類

D548(13層)



第10類

C109(7層)

写真14

鉢 第10類



第10類

D406(11層)



第10類

A87(6層)



第10類

D536(13層)



第10類

D492(12層)



第11類

D595(15層)



第11類

D415(11層)

写真15 鉢 第10・11類





第11類

D549(13層)



第11類

D404(11層)



第11類

A86(6層)



第11類

C113(7層)



第11類

C204(9層)



第11類

C200(9層)



第11類

A282(10層)



第11類

D490(12層)



第11類

A229(9層)

写真16

鉢 第11類



第11類

C199(9層)



C199の展開写真



第11類

C205(9層)



第11類

D422(11層)

写真17 鉢 第11類

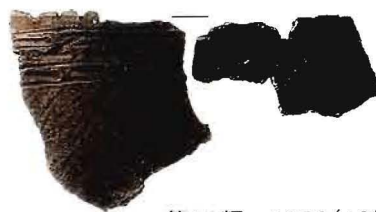




第11類 A225(9層)



第11類 B113(7層)



第11類 A280(10層)



第11類 D79(5層)



第11類 C206(9層)



第11類 D550(13層)



第11類 C207(9層)



第12類

C244(13層)



第12類

郷土館8(C-2V下)



C区1層



第13類

A89(6層)



第14類 D90(5層)



第14類 C19(1層)



第14類 D71(5層)



第14類 D62(5層)





第1類

B153(9層)



B153の展開写真



B153の拓本

写真19 浅鉢 第1類







第1類

B123(7層)



第1類

D493(12層)



第9類

C213(9層)



第1類

D336(10層)



第1類

A241(9層)



第1類

D423(11層)



第1類

A110(6層)



第1類

D91(5層)



第1類

D428(11層)



第1類

A154(7層)



第1類

D288(9層)



第1類

B56(6層)



第2類

B122(7層)



第3類

D430(11層)



第3類

D435(11層)

写真22 浅鉢 第1～3類





第3類

D604(15層)



第3類

A243(9層)



第3類

A28(5層)



第4類

C217(9層)



第4類

D552(13層)



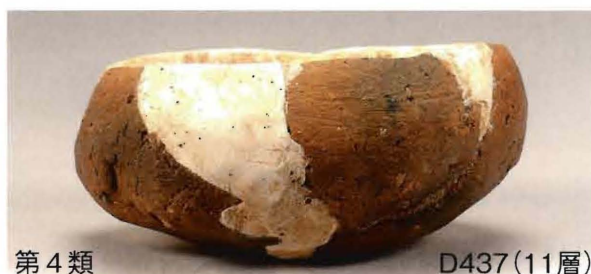
第8類

C214(9層)



第12類

D92(5層)



第4類

D437(11層)



第7類

D603(15層)





郷土館12

(底部から見た写真)



第6類

郷土館12(C-2V、C-2V下)と  
弘前大学発掘C区6層のものが接合

写真24 浅鉢 第6類



郷土館12の拓本

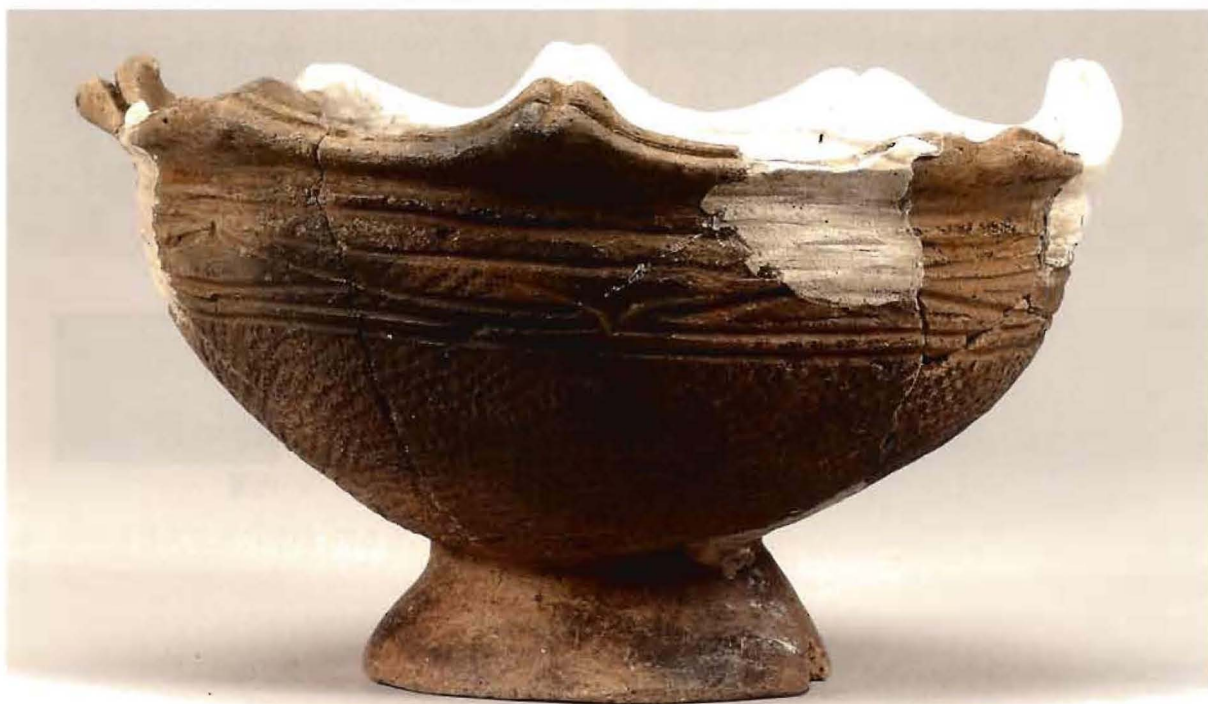


郷土館12の展開写真



郷土館12の区画文を拡大したもの





第11類 D98(5層)



第1類 C80(6層)



第1類 D174(7層)



第1類 D142(6層)



第1類 D339(10層)



第1類 B165(試掘)



第1類 D338(10層)



第1類 C210(9層)



第2類 B126(7層)



第5類 D494(12層)



第6類

A129(6層)



第6類 D241(8層)



第13類 D9(2層)



第13類 A125(6層)



第13類 D9(2層)

写真26 浅鉢 第1～7・11・13類



第1類

A248(9層)



第3類

C82(6層)



第4類

D108(5層)



C82の外面



内面

補修孔を撮影したもの。臼形の孔があげられている。



第7類

C222(9層)



第8類

郷土館14(C-2V上、C-2V下)



第5類

D345(10層)



第1類

A159(7層)



D345の底部写真



A159の底部写真





D555の展開写真

※



海綿状骨針が胎土に混入している。



D105の範囲を拡大。



第1類 郷土館19(C-2V上)



写真28 皿 第1～4・7・9～11類



浅鉢・皿の底部・台部



D240(8層)



D441(11層)



D248(8層)



B144(7層)



D121(5層)



A166(7層)



C28(1層)



D304(9層)



D262(8層)



C132(7層)



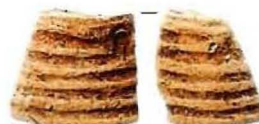
B146  
(7層)



A142  
(6層)



B145  
(7層)



D150(6層)



D513(12層)

※第7類

アスファルトの附いた壺の体部破片



C222(9層)

底部からの写真



1  
D区(9層)



2  
A区(14層)



3  
C区(7層)

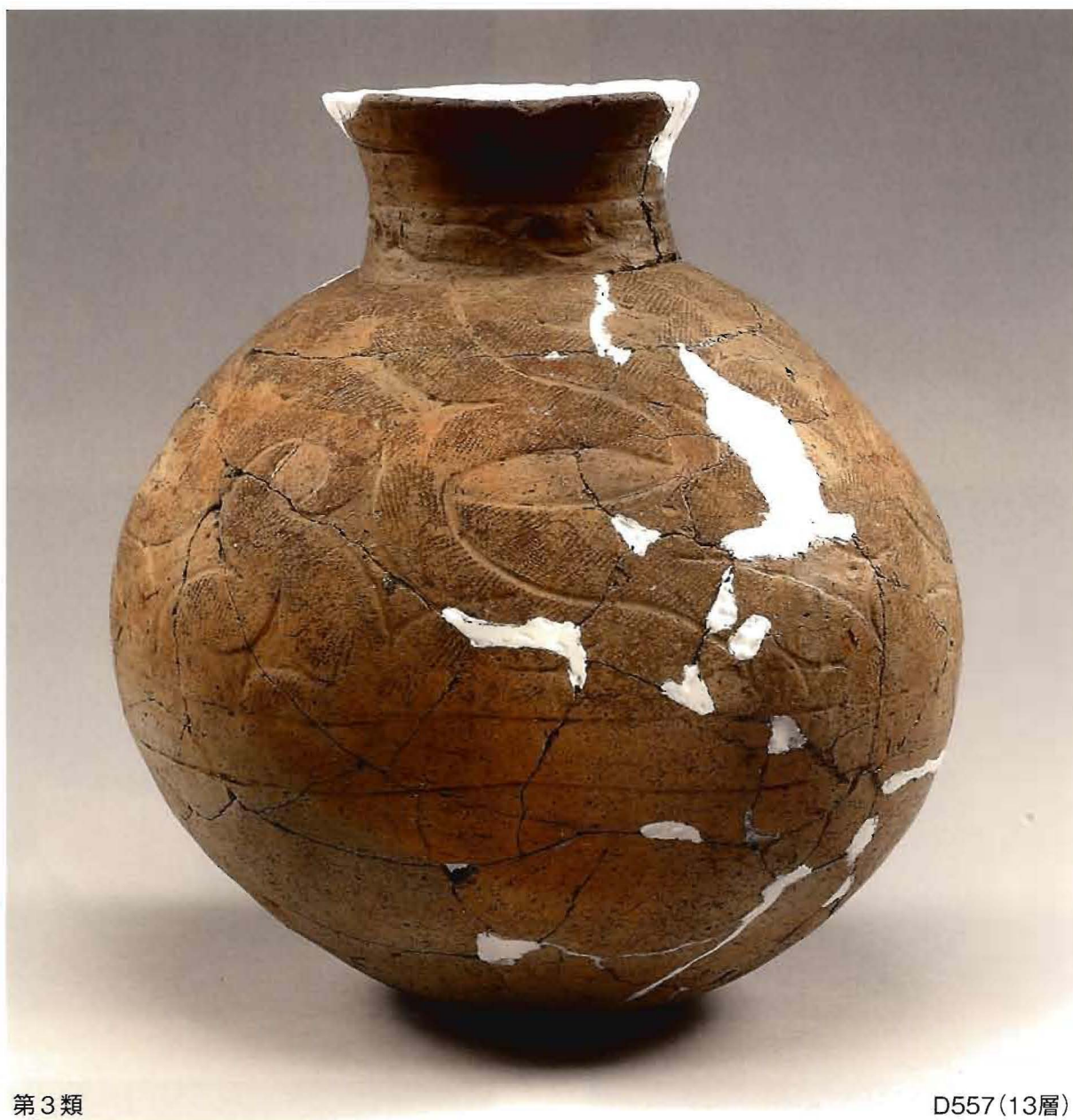


4  
D区(5層)



5  
C区(15層)

割れ目の上にアスファルトを塗布したもの。  
(2は断面にまでしみ込んでいる。)



第3類

D557(13層)



D557の展開写真

写真30 壺 第3類





第4類

D607(15層)



第4類

D501(12層)



第5類

D298(9層)



第8類

D499(12層)



第7類

A163(7層)



第7類

D252(8層)



第8類

A132(6層)



第8類?

D574(14層)



第8類?

D445(11層)



第9類

D504(12層)



D504の欠損部(穴)の周囲にアスファルト付着



第10類

C224(9層)



第11類

D146(6層)

写真32 壺 第8～11類





写真33 壺 第12・15・17類





第17類

D109(5層)



第15類

B155(9層)



第17類

C123(7層)



第17類

C223(9層)



第18類

D451(11層)



第19類

D444(11層)



第19類

C226(9層)



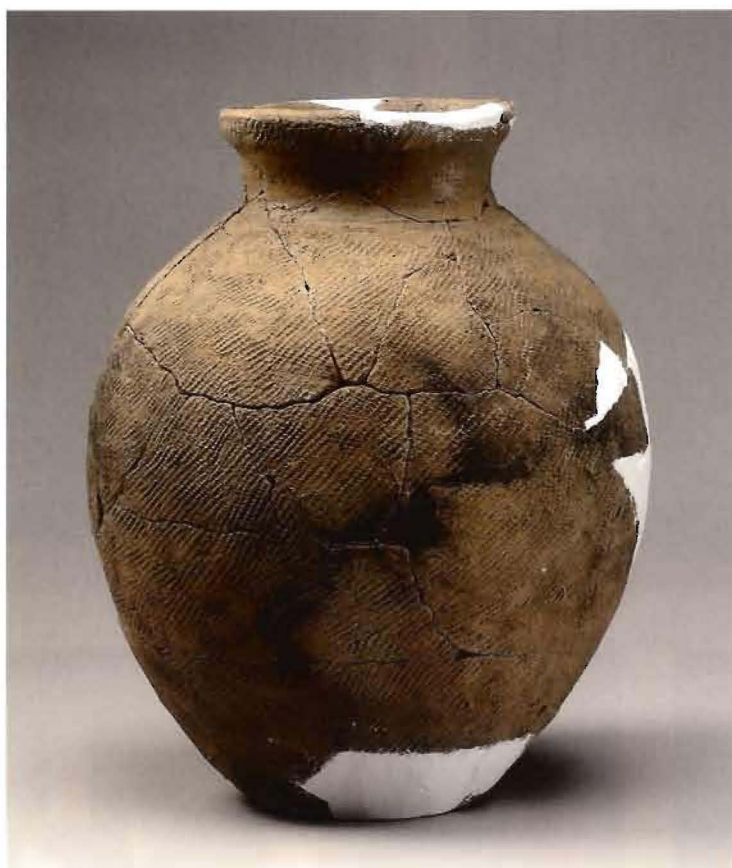
(体部)

D348(10層)



第18類

B66(6層)



第12類

D564(13層)



第11類

D562(13層)

写真35 壺 第11・12類





第13類

D253(8層)



第12類

C121(7層)



第13類

A133(6層)



第14類

D606(15層)



第17類

D500(12層)

写真36

壺 第12～14・17類



第19類 D350(10層)



第20類 A11(1層)



第20類 B154(9層)



第20類 D110(5層)



第20類 D503(12層)



その他 B156(9層)



第20類 層位不明



A164(7層)



D352(10層)



D453(11層)



D114(5層)



第18類 D145(6層)



第18類? D区6層



D455(11層)



D450(11層)



D456(11層)



D454(11層)

その他 (A164・B157・D114・  
D129・D352・D450・  
D453~456・D458)



D129(7層)



D458(11層)



B157(9層)



写真37 壺 第18・20類、その他





第1類

C240(11層)



第1類

C241(11層)



第1類

C239(11層)



注口部が剥離している部分にアスファルトが  
付着している。



C239の展開写真





第1類

D259(8層)



D259の展開写真



第1類

D360(10層)



底部に穴があり、その両面にアスファルトが付着している。



D360の展開写真



成形時の爪痕がはっきりと残されている。





D511の展開写真



写真41 注口 第1～3類・その他



60(B区7層、D区12・13層)



59(C区1・7・9層)



58(C区2・8・9層、D区12層)

写真42 後期の注口土器





遮光器土偶  
1(A区7層、C区7・9層)

(正面)



(背面)



内面に粘土紐積み上げ痕が見られる。(内面)



3(D区13層)

(正面)



(背面)



中実土偶  
割れ目にアスファルトが  
附着している。



匙形土製品

5(A区6層)



超小型土器



蓋形土製品

22(D区4層)



円板状土製品



1(A区6層)

(正面)

(背面)

岩偶





(正面)

3(D区13層)  
岩版



(背面)



超小型石製品  
16(D区5層)



4(層位不明)

ボタン状石製品



5(層位不明)

石刀の柄部



14(D区10層)



11(D区10層)



12(D区14層)

円板状石製品



9(C区8層)

中央にアスファルト状  
の付着物が見られる



52 敲石(層位不明)



44(C区9層)

磨製石斧



43(表採)



47 凹石兼磨石(層位不明)



50(B区6層)

凹石



46(D区15層)

写真45

石製品・石器



29(B区6層)



26(A区7層)



27(A区9層)



28(B区7層)



30(D区7層)

石錐 (26~31)



31(D区5層)



32(D区12層)

石匙 (32~42)



36(D区5層)



34(D区11層)



35(層位不明)



33(D区11層)



37(A区9層)



38(C区12層)



41(層位不明)



39(B区7層)



40(D区8層)



42(D区9層)



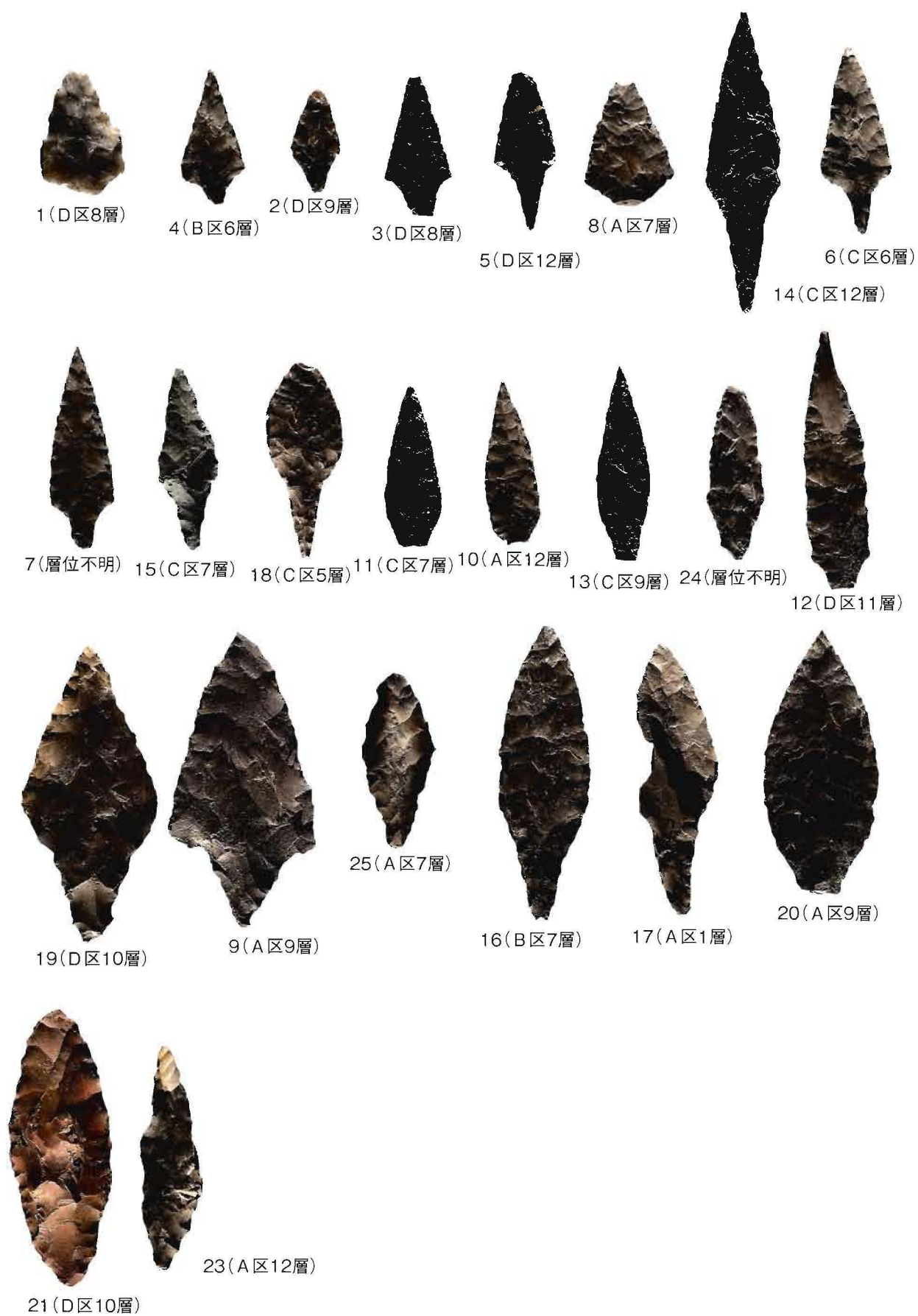


写真47 石器（石鏃）



杉沢遺跡の遠影（三戸町教育委員会提供）



遺跡付近に立つクリの木



猿辺川にかかる杉東橋



遺跡の南西、蒼前神社



猿辺川上流付近





調査区発掘前（北東から）



C区発掘風景（C区東側から）



B区5層発掘状況（東側から）



B区 南壁（北側から）



C126(C区7層) 出土状況



C区7層土器出土



C区7～9層土器出土（C109・199の台など）



C区9～11層土器出土（C184・241など）





C区7～11層東側土器出土（C124・240など）



C区7～11層東壁付近土器出土



C区東壁セクション図作成風景



C区11層土器出土（C239など）



B・C区南壁



A区6～7層土器出土（A132・159など）



A区6層岩偶出土





D区11層台付鉢出土 (D405)



D区15層赤彩壺出土 (D607)



D区12・13層西壁付近土器出土 (D504・557)



D557赤彩大型壺出土



D区13層南壁付近土器出土 (D560・548)



D区12層台付鉢・石匙出土 (D492・石器32)



D区14層南西角土器出土 (D555・574)



D区15層大型注口と撮影 (D612)





A区東壁



D区発掘風景（北西から）



D区11層東壁付近土器出土（D424）



D区6・7層西壁付近土器出土



D区15層南側台付鉢出土（D590）



D区10層西壁付近土器出土（D360）



D区10層西壁土器出土



D区11層東壁付近土器出土（D405）





D区南壁



D区8層壺出土状況 (D253)



D区8層注口出土 (D259)



D区10層発掘風景 (D345)



D区東壁



D区西壁

写真53 発掘風景と遺物の出土状況

## 編集後記

杉沢遺跡の発掘は面白かった。学生はみな発掘は初めてである。最初はどんな小さな土器片であっても、見つけるたびに歓声をあげていた。しかし、次第に沢山の遺物が出土するようになると、完形に近い土器にしか喜びの声を上げなくなった。もう初々しさは失われたのである。調査区のなかに青森県立郷土館の旧トレンチが完全に重複し、その埋め土を排除するのに2日ほどかかった。しかし、その周辺から晩期前葉の土器が多数出土し、調査の目的は達成することができた。発掘が終り、大学にもどると、さっそく遺物を乾燥させ、洗浄し、接合・復元を始めた。以来、報告書が完成するまで、考古学ゼミの藤沼も学生も休日というものがなくなった。旧トレンチの埋め土や新たに発掘した部分からの土器片が、郷土館の発掘品と接合し、完形品となったことも面白かったことの一つである。休日がなくなった埋めあわせに、今年度は大勢であっちこっちに出かけた。お花見も何回もした。函館博物館に著保内野遺跡の土偶を見に行ったときは集中豪雨で3時間も車中に閉じ込められた。山梨・長野の中央線沿いの遺跡や博物館を見に行くときは、やはり集中豪雨にぶつかり、予定していた東京行きの寝台列車が動かず、あわてて新幹線を利用した。こうした不運にも見舞われたこともなんとなく面白かった。でも校舎の修理で、資料を広げて作業する実習室が小さな2つの部屋（総合教育棟4階と教育学部3階）に分かれたことは痛手であった。

遺跡を発掘したら報告書を出すのは研究者に課せられた責務である。完璧なものとはとてもいえないが、学生と一緒にあって、定年前に報告書を作成できたことは大変嬉しい。

（藤沼 邦彦）

平成18年8月14日 D トレンチ内にて





杉沢遺跡の報告書抄録			
書 名	あおりけんさんのへぐんさんのへまちすぎさわいせきはくつちょうさほうこくしょ		
	青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書		
副 書 名	馬淵川流域における亀ヶ岡文化の遺跡		
巻 次			
シリーズ名	弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告		
シリーズ番号	6		
編 集 者	藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美・宮本明日香		
執 筆 者	藤沼邦彦・秋山真吾・澤田恭平・赤坂朋美・若松 徹・槻木孝則・宮本明日香・		
	須藤真由美・丸川優多・佐藤信人・立花晃一・佐藤千絵・五十嵐 愛		
編 集 機 関	弘前大学人文学部日本考古学研究室		
所 在 地	〒 036-8560 青森県弘前市文京町 1 番地 電話 0172-39-3273		
発行年月日	2008 年 3 月 31 日		
所収遺跡名	あおりけんさんのへぐんさんのへまちおおあざかいもりあざすぎさわ		
	青森県三戸郡三戸町大字貝森字杉沢		
コ ー ド	市町村 02441	遺跡番号 58001	
緯度・経度	北緯 40° 23′ 00″ 。 東経 141° 05′ 30″ 。		
調 査 期 間	2006 年 8 月 5 日～ 2006 年 8 月 15 日		
調 査 面 積	51 m <sup>2</sup>		
調 査 原 因	学術調査（亀ヶ岡文化研究のため）		
杉 沢 遺 跡	種 別	集落跡の捨て場	
	時 代	縄文時代後期～晩期	
	遺 構	捨て場（遺物包含層）	
	出土遺物	主要な遺物は縄文時代晩期（大洞 BC 式～大洞 A' 式）であるが、大洞 BC 式と大洞 C1 式が大部分を占める。	
		漆入容器（台付鉢）	
		遮光器土偶・超小型土器・匙形土製品・円板状土製品・蓋形土製品	
		岩偶・岩版・ボタン状石製品・超小型石製品・円板状石製品・石刀	
		石鏃・石錐・石匙・石斧・凹石・磨石・石皿・敲石	
		赤鉄鉱（赤色顔料の原料）	
特記事項	大洞 C1 式土器の土器組成などが明らかになった。		

**青森県三戸郡三戸町  
杉沢遺跡発掘調査報告書**

(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告6)

2008年3月31日発行

編集 藤沼邦彦・秋山真吾・赤坂朋美・宮本明日香

発行 弘前大学人文学部日本考古学研究室

弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番

電話 0172-36-2111(代表)

印刷 川口印刷工業(株) 青森営業所

〒030-0802 青森市本町4-9-15 2階

TEL 017-721-6520



頑張れ！亀ヶ岡文化